

博 士 論 文

説明理論としての質料形相論

文景楠

博 士 論 文

説明理論としての質料形相論

ムン キョンナミ
文 景 楠

東京大学 大学院総合文化研究科
超域文化科学専攻（比較文学比較文化）

指導教員：野矢茂樹 教授

2015 年度

Explaining Hylomorphism

By

MOON Kyungnam

A dissertation submitted in partial fulfillment
of the requirements for the degree of
Doctor of Philosophy

Department of Comparative Literature and Culture
Interdisciplinary Cultural Studies
Graduate School of Arts and Sciences
The University of Tokyo

Spring 2016

凡 例

1. 本論文で参照したアリストテレスの著作名と対応する略号は以下の通りである。なお、著作の配列の順序はベッカー版アリストテレス全集 (Bekker 1831) に従う。

『カテゴリー論』 (Categoriae, Κατηγορίαι)	<i>Cat.</i>
『命題論』 (De interpretatione, Περὶ ἐρμηνείας)	<i>DI</i>
『分析論後書』 (Analytica posteriora, Ἀναλυτικὰ ὕστερα)	<i>APo.</i>
『トポス論』 (Topica, Τοπικά)	<i>Top.</i>
『ソフィスト的論駁について』 (De sophisticis elenchis, Περὶ σοφιστικῶν ἐλέγχων)	<i>SE</i>
『自然学』 (Physica, Φυσικῆς ἀκροάσεις)	<i>Phys.</i>
『天界について』 (De caelo, Περὶ οὐρανοῦ)	<i>DC</i>
『生成と消滅について』 (De generatione et corruptione, Περὶ γενέσεως καὶ φθορᾶς)	<i>GC</i>
『気象論』 (Meteorologica, Μετεωρολογικά)	<i>Meteor.</i>
『デ・アニマ』 (De anima, Περὶ ψυχῆς)	<i>DA</i>
『感覚と感覚対象について』 (De sensu et sensibilibus, Περὶ αἰσθήσεως καὶ αἰσθητῶν)	<i>SS</i>
『睡眠と覚醒について』 (De somno et vigilia, Περὶ ὕπνου καὶ ἐγρηγόρσεως)	<i>Somn.</i>
『夢について』 (De insomniis, Περὶ ἐνυπνίων)	<i>Insom.</i>
『動物誌』 (Historia animalium, Περὶ τὰ ζῶα ἱστορίαι)	<i>HA</i>
『動物の諸部分について』 (De partibus animalium, Περὶ ζῶων μορίων)	<i>PA</i>
『動物の運動について』 (De motu animalium, Περὶ ζῶων κινήσεως)	<i>MA</i>
『動物の発生について』 (De generatione animalium, Περὶ ζῶων γενέσεως)	<i>GA</i>
『形而上学』 (Metaphysica, Τὰ μετὰ τὰ φυσικά)	<i>Metaph.</i>
『ニコマコス倫理学』 (Ethica Nicomachea, Ἠθικά Νικομάχεια)	<i>EN</i>
『政治学』 (Politica, Πολιτικά)	<i>Pol.</i>

『詩学』(De arte poetica, Περὶ ποιητικῆς)

Poet.

2. 上の著作からの引用には、著作名(本文中においては日本語題目、括弧内や注においては上に記した著作の略号)、巻数と章数、ベッカー版アリストテレス全集による頁数と行数を付した(例えば、注における『デ・アニマ』第二巻第一章のベッカー版全集 412 頁左欄 21 行目から 22 行目に該当する箇所の引用は DA II.1, 412a21-2 となる。a と b はそれぞれベッカー版全集における同一頁内の左欄と右欄を指す)。
3. 上の著作の校訂版に関しては基本的に文献目録に挙げたものを参照し、最終的に引用者の採用した読みは、必要に応じて本文中または注に明記した。
4. アリストテレスまたはその他の著作の日本語訳は、すべて引用者によって原典から直接訳出されたものである。翻訳に際しては、文献目録に挙げられた諸訳を参考した。なお、本文と訳文で採用された訳語の多くを、2015 年現在未だ刊行中の新版アリストテレス全集(内山+神崎+中畑 2013-)に負っていることを記しておく。
5. アリストテレスの著作の訳文における〔 〕内の補いや文意を明確にするための番号・記号、傍点による強調などは、すべて引用者による。
6. アリストテレスの著作以外の文献からの引用は、基本的に Chicago Style に従う(Turabian 2013)。

目次

凡例	i
目次	iii
序論	1
第1節 心的なものをめぐる問題	1
第2節 心の哲学と質料形相論	3
第3節 質料形相論の文脈	7
第4節 論文の構成	11
第1章 現代の心の哲学からのアプローチ	18
第1節 導入	18
第2節 機能主義からのアリストテレス解釈	19
第3節 機能主義以後とソーマの概念	25
第4節 心とプシューケー	31
第5節 プシューケー-ソーマ論から質料形相論へ	35
第2章 質料的説明の理論	38
第1節 導入	39
第2節 質料における関係性と無規定性	41
第3節 エレア派の懐疑と「二通り」の述べ方	44
第4節 自体的質料をめぐって	56
第5節 エレア派への応答と生成変化の学の成立	66
第6節 質料と説明	74
第3章 質料的説明の射程	80
第1節 導入	80
第2節 質料の探求と同名異義原理	82
第3節 機能的質料と非機能的質料	87
第4節 質料における遠近	91

目次

第5節	質料的説明の現場	96
第6節	質料の基準の多様性と奥行き	100
第4章	説明の修正と柔軟性	106
第1節	導入	107
第2節	分離可能性と説明力	110
第3節	『動物の諸部分について』第一巻第一章における三つの分類	116
第4節	生成の必然性の目的論的説明	121
第5節	自体的な付帯性と「何であるか」の探求	128
第6節	説明の修正と柔軟な学としての質料形相論	133
第5章	感覚される形相の受容をめぐる	137
第1節	導入	137
第2節	形相の受容をめぐる対立	140
第3節	『デ・アニマ』第二巻第十二章	142
第4節	感覚対象の形相と「質料を伴わず」	149
第5節	質料を伴って作用を受けること	151
第6節	第三の立場と形相の位置づけ	158
第6章	形相的説明と生成変化	163
第1節	導入	164
第2節	説明規定としての形相	167
第3節	諸学における形相	173
第4節	形相の知り方	177
第5節	自然学の対象としての生成変化	184
第7章	存在における離存性と質料抜き形相	189
第1節	導入	190
第2節	形相的説明の多様性	194
第3節	付帯的な形相と存在における離存性	198
第4節	質料抜き形相	202
第5節	存在論抜き形相理解	206

結び	209
第1節 説明理論としての質料形相論	209
第2節 心身問題と質料形相論	212
第3節 実在と説明の間	217
文献目録	221
訳語対応表	235
一般索引	238
引用索引	241

序論

第1節 心的なものをめぐる問題

古代から現代にいたるまで、生物の心——特に人間の心——とそれに密接に関連すると思われる対象に、それ以外のものとは異なる特別な地位を与えようとする試みは絶えることなく行われてきた¹。それらがもつ特別さの内実を、腐敗したり散逸したりするものに対する永遠性に求めるにせよ、数値化することのできない質的な特性に求めるにせよ、あるいは例外を認めない自然法則的な因果性と対比される理由の秩序としての規範性に求めるにせよ、この世界に何か根本的に特別なものとそうでないものとの区別があるという発想自体は、今も哲学はもちろん日常の多くの場面において容易に見いだされるものである。

発想そのものはありふれたものといえるが、何か特別なもの（以下では、これを心的 mental なものと呼ぶ）があるという直観からさらに一步踏み込んでこれを理解しようとした場合、すぐに様々な困難が立ちはだかる。とりあえず心的なものに関連するものとして、機械や元素には認められない思考と感情を取り上げることによりしてみよう。その場合、まず、様々な仕方で互いに異なっている思考と感情を、等しく心的なものとしてまとめ上げている特質を明確にすることが必要となるだろう。さらに、この「心的なものの内包」をめぐる問題に加え、思考と感情を理解しただけでは心的なものすべてを網羅したことにはならないかもしれないという「心的なものの外延」に関する懸念に答えることも必要となると思われる。

まず最初の問題に関して、心的なものを取りあえず物的 (physical) ではないものとして捉えてみよう。現代科学の発展を目の当たりにしている我々は、物的なものに関しては比較的まとまった見解をもっているように見えるので²、このように心的なものを捉えることは、それを正しく理解するための一つの道筋を示してくれるように思われる。しかし、物的でなければ心的、といった判定が常に成り立つものなのかは疑わしい。数や図形といった数学的对象は明らかに物的なものではないように思われる。例えば、数を五感やその延長としての電子顕微鏡などで観察することはできない。また、それはどこかの時点で消滅

¹心という言葉の意味は非常に多義的かつ難解である。序論で問題としている「心」は、基本的には現代の心の哲学が扱うような「心」である。しかし、「心」とは何かを定義することはまさに心の哲学の中心問題であり、(死後にも残る靈魂といったものを除くことで)現代の心の哲学が主に扱うような事柄に議論の範囲を絞ったとしても、心の定義をまず与えてから出発することはできない。

²実際には、物的とは何かという問題に対しても合意は存在しない (Montero 2009)。

するものにも見えない。さらに、数学的演算が従う規則を物的なものが従う自然法則的因果の一種と考えることは不自然に響く。しかし、こういった数学的对象と物的なものとの違いがいかに強調されようとも、数学的对象を思考や感情と同じような意味で心的なものの中に数え入れることには抵抗を感じる人がいるだろう。思考や感情が第一に個々人に帰属するものに思われるのに対して、数を個人もしくは社会に帰されるべきものとして理解するという主張は奇妙に響く³。このように、心的なもの（または、物的ではないもの）と思われる事柄に共通する特性を取り出すことと、何が心的なものに属するのかという問いに対して答えを与えることは、どちらも非常に大きな困難を抱える作業である。

心的なものの内包と外延をめぐる上記の問いを前に、曖昧な直観的区別をとりあえず受け入れるとしても、今度は心的なものとの物的なものとの関係がどうなっているのかという点が問題になる。人間は明らかに物質から構成されているように思われるが、同時に心的なものである思考や感情によって動かされているようにも見える。心的なものを、物的ではないものとして仮に理解するならば、物的でないものがいかにして物的なものである身体に働きかけうるのかを説明することが必要となる（例えば、思考や感情と同じく物的でないものである数が、私の身体や目の前の椅子を動かすということはあるにない）。それは、死後にも残るとされる靈魂のイメージが往々にしてそうであるように、物質とは無関係なものではあるがそれでも同じ時空上に存在し、何らかの超自然的な力で物的なものを動かすのだろうか。あるいは、心的なものとは物的なものが特定の構成をなしたときに現れる（形や重さといった）性質のようなものにすぎないのだろうか。しかし、後者の場合には、結局心的なものはその基盤となっている物的なものに追従するだけということになり、規範性や自由といった我々が普段それに帰している特別さは、実は幻想であったということになってしまうのではないだろうか。

心的なものの内包と外延や、それと物的なものとの関係をめぐる議論は、現代では脳科学的な知見を織り込みながら、「心の哲学」という括りの中で展開されてきた。しかし、心的なものを理解しようとする試みが、現代科学とそれに寄り添ってなされてきた哲学の占有物であったわけではない。「心の哲学」の問題に答えることを目指した研究者の一部は、古代ギリシアの哲学者アリストテレスの著作がこれらの問いに対して大事な示唆を与えると考えた。彼らは、アリストテレスにとって心的なものとはなんであったのか、またアリストテレスにおける心的なものとの物的なものとの関係は、一元論や二元論、またはその中

³ 数学的对象の存在をどのように理解するかという点に関しては、プラトンから現代に至るまで、様々な立場が現れている。

間に位置するもののどれに値するのかを明らかにするために論争を繰り広げてきた。

本論文は、このような議論の蓄積を背景にしてアリストテレスを解釈することを目指すものである。しかし、本論文の目的は、これらの論争をめぐって今まで提起されてきた選択肢のうちのどれかに与し、それを擁護することではない。本論文で私がまず取り組むのは、アリストテレスの心の哲学の核心をなすものとして非常に重視されてきた質料形相論 (hylomorphism)⁴の内実を問いなおし、それが何のための理論であったのかを再考察するという、心の哲学をめぐり問いのさらに手前にある課題である。私は、これを終えることによってのみ、初めてアリストテレスのプシューケー-ソーマ論と現代の心の哲学との距離を考える準備が整うと考える。序論の以下の部分では、本論文の問題意識と道筋をより詳細に述べることで、論文全体の見取り図を示すことを目指す。

まず次節においては、アリストテレスの質料形相論を現代の心の哲学と関連して理解する試みがどのような困難に直面したのかを簡略に確認し、本論文が質料形相論を読みなおす際の方向性の輪郭を示す(第二節)。続いて、質料 (ύλη) と形相 (εἶδος) をめぐって、第一質料や神を代表とする、それ自体としてアイデンティティをもつものとして両者を理解する立場と、あくまで特定の対象と関連づけられる限りにおいて捉えうるものとして両者を理解する二つの立場からなる対立軸があるということを示し⁵、まず後者の観点から出発して質料形相論を再解釈することを目指すという方針を打ち出す(第三節)。最後の節においては、章立てにそった本論文の概略を示す(第四節)。

第2節 心の哲学と質料形相論

アリストテレスの哲学において、生物は特別な位置を占める。生物は、最もすぐれた意味で「あるもの」と呼ばれる「実体」(οὐσία)とは何かを問う際に、まず筆頭に挙がる「自

⁴本論では、質料と形相を軸とする理論を指すために「質料形相論」という言葉を用いる。しかし、本序論第三節で後ほど述べられるように、質料と形相という概念は基本的には生成変化の四つのアイディアに含まれるものとして登場しているものであり、質料と形相のみを特別視するような「質料形相論」という言葉自体がアリストテレスの著作にはないということに留意しなければならない。「質料形相論」という言葉の歴史に関しては、Manning 2013などを参照。

⁵例えば神は、それ自体のアイデンティティを保つために他の何かの存在を必要としない。神は、例えば神以外のすべての存在者が消えてしまった世界においても、依然として神であり続けることができるだろう。これと対比されるものとしては、例えば主人と奴隷を挙げることができる。何かが主人であるためには必ず奴隷の存在が必要であり、奴隷とは何かを知ること抜きには主人とは何かを知ることできない。その意味において、主人や奴隷はそれ自体でアイデンティティをもつものではない。なお、第一質料をそれ自体としてアイデンティティをもつものとするのは、一見奇妙に思われるかも知れない。この問題は結局第一質料をどのように解釈するかに関わるが、もしすべての事物を構成しうる何らかの物質(現代における素粒子に類比的なもの)として第一質料を捉えた場合、第一質料は何も構成していかなくともそれ自体でありうるため、やはり主人や奴隷とは区別される。

然的なもの」に属する (DA II.1, 412a11-2; *Metaph. Z.2*, 1028b8-13)。生物は、現代では主に「身体」と訳されるソーマ ($\sigma\acute{\omega}\mu\alpha$) をその質料とし、「靈魂」、「魂」、「心」(英語では soul や mind など) といった様々な仕方で訳されるプシューケー ($\psi\upsilon\chi\eta$) をその形相とする結合体であるが、アリストテレスは特にプシューケーの探求を、知ることのなかでも最も高貴なものとしている (DA I.1, 402a1-4)。このソーマとプシューケーからなる枠組みと、その基盤となる質料形相論をもとにアリストテレスは、栄養摂取や感覚、思惟といった生物の活動に関わる様々な事柄を分析してゆく。ここからすでに明らかであるように、彼の分析の対象には、現代的な意味での心的な事柄が含まれている。

生物をめぐるアリストテレスの思索に心的なものに関連する箇所がはっきりと見て取れるということを出発点に、アリストテレスの哲学を現代的な心の哲学の一種として読みなおす試みが、特に二十世紀後半の英米圏において盛んに行われた。論者たちは、まさにプシューケーそのものを主題とする『デ・アニマ』⁶や、関連するその他の動物学的著作を参照することによって、現代の心の哲学の一つの立場である機能主義に類似した主張をアリストテレスに認めることができると考えた。以前は非常に盛んに論じられたこの機能主義的解釈だが、近年ではあまり有力な解釈ではなくなっている。

機能主義からアリストテレスを理解しようとする試みは、(一時期に機能主義者だったが後にその立場を撤回した) ヒラリー・パトナムといった必ずしもアリストテレス研究者とはいえない現代の代表的哲学者をも巻き込みながら展開された。機能主義それ自体は様々なバリエーションをもつ立場であるが、その主張の要点は、心を何らかの基盤において実現されるプログラムに類するものとして理解するところにある。この理解に従えば、心とはある特定のインプットに対して対応するアウトプットを返す仕組みのことを指す。アリストテレスが心の哲学における機能主義者であると考えられた理由は、彼の著作から明確に読み取ることができる質料と形相の反二元論的關係や (DA II.1, 412b6-8)⁷、心的な現象と思われる「怒り」といったプシューケーのパトス ($\acute{\pi}\acute{\alpha}\theta\omicron\varsigma$) を (インプットとアウトプットに対応すると解釈される) 原因と目的との関連から説明する彼の記述が (DA I.1, 403a26-7) 現代の機能主義に非常に親和的に映ったという点にある。

⁶ 『デ・アニマ』 (*De anima*) は古典ギリシア語の題目である 『ペリ・プシューケー』 (*Περὶ ψυχῆς*) のラテン語訳である。

⁷ 後に本論文第一章で確認するように、質料から離存する形相と理解される能動知性 ($\nu\omicron\upsilon\varsigma$ ποιητικός) の問題をどう処理するかという点は大きな問題として残る。なお、能動知性に相当するものを述べている記述は DA III.5 に見られるが、「能動知性」という呼称自体は後世の学者によるものである。この問題に関する本論の立場は、第七章において明らかになる。

しかし現在においては、アリストテレス哲学に対する機能主義的解釈は失敗であるとする評価が定着したと思われる⁸。そこで問題となった論点の具体的な検討は本論文第一章での課題となるが、失敗の最も大きな理由は、心の哲学に関連する主張をそこから読み取ることができると思われた質料形相論と、現代的な心と身体という枠組みとの間に、看過することのできない溝があったという点にある。現代的な心の哲学が（それを擁護するにせよ、あるいは乗り越えるにせよ）自らの議論の出発点としている心と身体という区別からなる枠組みに対して、質料形相論は何か決定的に異質なものを提示している可能性があるという点が、様々な研究者によって指摘された（例として、Burnyeat 1992 や Code and Moravcsik 1992、Hamlyn 1993、Charles 2009 など）。

質料形相論と現代的な心身の枠組みに何らかの距離があるという指摘は、アリストテレスと現代的な心の哲学との関係を理解するに際して、おおまかには次のような選択肢がありうるということを示唆する。

1. 質料形相論を心身の枠組みに相当するものとして理解することでアリストテレスにおける現代的な心の哲学の存在を認めた上で、その整合性も肯定する立場
2. 質料形相論を心身の枠組みに相当するものとして理解することでアリストテレスにおける現代的な心の哲学の存在を認めるが、その整合性は否定する立場
3. 質料形相論を心身の枠組みに相当するものとして理解することはできないと考えることで、アリストテレスにおける現代的な心の哲学の存在そのものを否定する立場
4. アリストテレス哲学に何らかの心身の枠組みや現代的な心の哲学として理解できるものがあるということを認めるが、質料形相論とそれらとの間には何らかの距離があると考える立場

それぞれの選択肢の内実を具体的にどう理解するかは、心身の枠組みや心の哲学とは何か、及び、何をもちいてその整合性を判定するかといった困難な課題に大きく左右される。これらの点に配慮しながらアリストテレスの著作がもつ心の哲学としての価値を検討する作業は、質料形相論の再解釈という課題をこなした後に、本論文の結びにおいてなされることになる。以下では、本論文の基本的な方向性のみを示す。

上で述べた機能主義的解釈は、基本的には1の選択肢に属するものであるといえる。これに対して、2の選択肢は、アリストテレスに何らかの現代的な心身の枠組みとそれに基づ

⁸心の哲学における機能主義そのものに対しても、その後多彩な批判が繰り広げられてきた。機能主義の現状については、Van Gulick 2009 など。

いた心の哲学があることを認めるという点においては1とその出発点を同じくする。しかし、2の選択肢は、1とは違って、アリストテレスが展開している心の哲学には深刻な矛盾が内在していると考える。例えば、アリストテレスは、生物の形相であるプシューケーと質料であるソーマは一つであると主張する一方、プシューケーに恐らく属すると思われる知性(νοῦς)に関しては、それがソーマから離存する可能性を示唆している。これは、現代的に言えば、両立することのない心身の一元論と二元論を同時に擁護するような発言に聞こえるものであり、アリストテレスを整合的に理解することを非常に難しくする。2の選択肢に従えば、質料形相論及びそれにもとづいたプシューケー-ソーマ論から何らかの心の哲学を汲み取ることは不可能ではないが、そこから描き出されるものはまったくもって魅力的なものではないということになる。このような批判に対しては、まず矛盾する発言の一方を他方に回収することで矛盾を解消し1の選択肢へと戻るという手段がありうるが、これ以外に、アリストテレスの質料形相論と現代の心身の枠組みとの関連性を否定し、そこから現代的な心の哲学の存在そのものの否定を導くという3の選択肢を取ることもできる。3の選択肢を選ぶ論者は、アリストテレスの質料形相論から導き出されるものは、整合的な心身の枠組みでも矛盾した心身の枠組みでもないので、何らかの心身の枠組みを前提せざるを得ない「心の哲学」はアリストテレスにはまったく存在しない、と主張する⁹。

私は、3の選択肢の前半部において指摘された、質料形相論と現代の心身の枠組みとの間に、両者の端的な同一視を拒むような距離があるという可能性を真剣に受け止めることから出発したい。しかし、アリストテレスが感覚や思惟といった心的と思われる事柄を(無生物的なものから明確に区別して)そのテキストにおいて論じており、そこに質料と形相という言葉を見出すことができる以上、たとえ質料形相論が現代的な心身の枠組みに直接対応するものではないということが判明したとしても、それがいかなる意味でも心的なものとの関連をもたないと思えることは不自然に思われる。

整合的な、または矛盾している心身の枠組みから、心身の枠組みとは完全に無関係な何か——質料形相論を理解するに際して与えられた1から3の選択肢が提示するこのような幅広い可能性のいずれにも与しない本論文が目指すのは、アリストテレスに何らかの心

⁹ある論者が質料形相論と心身の枠組みの間に何らかの距離を認めるからといって、その論者が必ず1や2ではなく3の立場に与するというにはならない。この論者は、自らは、質料形相論を解釈することによって現代的な心身の枠組みに関する、しかし従来のものを修正するような新たな理解を提示している、と主張することができる。その場合、この論者は実質的には1(場合によっては2)の選択肢に与しているということになるだろう。上で提示された3の選択肢における質料形相論と心身の枠組みとの間の距離は、このような論者が主張しているものよりも遠いものとして想定されている。

身の枠組みや心の哲学の可能性を認め、質料形相論がそれらと関連をもちうるものであることを肯定しながらも、質料形相論にそれらと同一視されないような独自の位置を与えるという(4の選択肢に分類される)困難な試みである。この立場を明確にするためには、まず心的なものが論じられる場面をいったん離れ、より広い観点から質料形相論をめぐる議論の文脈を抑える必要がある。

第3節 質料形相論の文脈

アリストテレスがもたらした様々な哲学的語彙の中でも、質料と形相が彼の哲学においてもつ役割の多様性は特筆に値する。質料形相論による事物の分析の教科書的な例は、青銅の球を、質料である青銅と形相である球形からなるものとして理解する例である(*Metaph.* Z.8)。しかし、アリストテレスが質料形相論を用いる場面は実際にははるかに多様である。形相と質料の対概念がアリストテレス全集において最初に導入される箇所では、アリストテレスは変化する性質(例えば、肌の色)と性質の獲得と喪失を受け止める基体(例えば、人間)を指すものとして形相と質料を用いる(*Phys.* I.7)。生物を規定する『*デ・アニマ*』の一節においては、ソーマをその質料として、ソーマにおいて実現されている生命活動の能力であるプシューケーをその形相として理解することで生物を説明する(*DA* II.1)。何かを定義するために類と種差からなる枠組みを持ち出す時に、種差の役割を形相に与えたかと思えば(*Metaph.* Z.12, 1038a25-6)、さらには、^{ヌー}知性や神といった永遠なるものも、質料形相論と何らかの仕方に関連した形で論じられることになる(*DA* III.5; *Metaph.* Λ.6-10)。

このように幅広い事柄を質料形相論が対象にしているという事実は、質料形相論と心身の枠組みとの間に簡単には乗り越えることができない距離があるとする、前節で私が重要と考えた論点をほぼトリヴィアルな形で擁護すると同時に、では質料形相論はいったい何のためのものだったのかという点がわからなくなってしまうという問題をも引き起こす。近年の研究では、『*形而上学*』における形相の用法だけでも20以上があるという主張がなされており(Studtmann 2008)、それらはもはやかなり漠然とした類似性以外のものは共有していないのではないかという印象すら与える。

仮にすべての用例を対象とするような整合的な解釈を与えるといった(不可能に見える)目的を放棄し、心的な現象に関連する場面だけに焦点を絞ったとしても、困難の度合いが劇的に軽減されるわけではない。質料形相論によって分析される対象は、依然として非常に多様である。例えば質料形相論は、プシューケーとソーマの結合体として生物を理解する

際にも、感覚や思惟といった活動の対象となるものが実際にある活動を引き起こすといった事柄を論じる際にも等しく用いられる。これらにおいてアリストテレスは、形相という言葉に、心的な事柄に関わる能力と個々の知覚・思考の内容という複数の意味合いを込めているように見える。一見単なる混乱にしか映らないこのような事態は、質料形相論をそれぞれの文脈でまったく異なる意味をもつものとして理解することを余儀なくしているようにも思われる。

視点を少し遠ざけてみると、今度は質料形相論がアリストテレス的世界像と呼ばれてきたようなものと密接に関連して理解されてきたということが見えてくる¹⁰。アリストテレス的世界像といわれてまず思い浮かぶのは、純粹形相であるとされる不動の動者・神・能動知性^{ヌース}といったものを「あるもの」のヒエラルキーの頂点に置き、それ自体としてはいかなるものでもないが、いかなるものにもなれる純粹な可能態として解釈されてきた第一質料をその根底に置き、中間に存在する生物といったものを質料と形相の結合体として理解する構図だろう。これは、質料形相論を軸にアリストテレスの形而上学と自然学を図式的に解説したものとして非常に明快なものである。しかし、構図としての明瞭さとは裏腹に、そこでの形相や質料が具体的に何を意味しているのかは必ずしも明らかではない。現代においては、純粹形相としての神や第一質料といったものの存在を疑うことが可能であるし、そもそもそれらの内実が整合的に理解されうるようなものなのかを問うことも可能である¹¹。

神や死後に残る靈魂は形相である、あるいは、いかなるものにもなりうる特殊な何か（すなわち、第一質料）は質料である、といった難解な主張は、アリストテレスの質料形相論を真剣に受け取るに際して非常に大きな足かせとなる。これらにもとづく世界像は、一時はヨーロッパの学術の中心となっていたのかも知れないが、現代の我々にはもはや神秘的な廃墟のような印象しか与えないからである。これらの存在を理解し受け入れることがまさに質料形相論を理解するために必須であるならば、質料形相論を受け入れることができる人はもはやそれほど多くはないのではないか。

このような壮大かつ図式的な質料形相論に対して、質料と形相の対がまさに初めて明確に示されているといえる『自然学』第一巻で論じられる質料形相論は非常に異なった印象

¹⁰このような世界像（Aristotelian scale of being と呼ばれる）に関する言及として、Lewis 2009, 169-71。なお、ルイス自身が留保的な態度をとっていることから分かるように、このような理解は、現代では必ずしもアリストテレス自身のものとして認められているわけではない。本論での私の立場もまた、最終的にはこのような世界像が本当にアリストテレスの質料形相論と密接な関係をもつのかに対して疑問を呈するものである。

¹¹これらを現代人に馴染みのあるものに置き換えようとする試みももちろん行われている。例えば、第一質料を延長とみなす解釈や（Sokolowski 1970; Suppes 1974 も参照）純粹形相をキリスト教的な神と考える主張など。

を与える。そこでは、神秘的な知性^{ヌース}や神、第一質料と関連してではなく、生成変化という身近な事柄の成立を確保するために質料と形相の対概念が導入されている。人間の肌の色が変わるといふ変化の可能性を確保するために、獲得されたり失われたりする色という性質と、それらを受け止める基体としての人間を分けるという発想は、死後にも残る靈魂や第一質料といったものの存在を信じることは違って、直観に照らして受け入れやすいものに見える。

この場面における質料や形相を理解する際に重要となるのは、それが「アイティアー」(*aitia*)として導入されているという点である¹²。アイティアーは通常「原因」(英語では、*cause*)と訳されるが、この訳語には大きな問題がある。それは、アリストテレスが(一種ではなく)四種のアイティアーの存在を認めているという点に起因する。出来事の連鎖として因果を理解する現代的な立場からすれば、原因とは時間的に先行する特定の出来事のことである。アリストテレスの四種のアイティアーのうち、始動因は恐らくこれに類似したものと理解されうるように思われるが¹³、残りの三つのアイティアー、特に目的因のようなものは、現代的な意味では真正な原因として認めることが非常に難しい。とすれば、四種のアイティアーをすべて等しく原因として認めるアリストテレスは、理解不能か、よくて間違っているということになる。———このような批判を前にして、アリストテレス解釈者たちは、アリストテレスがアイティアーという概念を用いるときに念頭においているのは現代的な意味での原因ではなくむしろ説明であり、目的因は個別の出来事と同じ意味で原因として理解することはできないが、ある事柄を説明する方式としては問題なく受け入れることができる、といった擁護を行った。例えば、なぜ散歩をしたのかという問いに対して、健康になるためという目的をそれを行ったことの原因、すなわちその行為の説明として挙げることはまったくもって自然に思われる。その点では、アリストテレスのアイティアー論は日常的な説明の理論として説得力を持っている¹⁴。

説明という観点から質料と形相を含むアイティアーを理解するアプローチは、何かを質料や形相として語るときに、議論の主題となっている事柄に対してそれらがどのような説

¹²アイティアーとしての役割が特に問題になる場合は、単なる「質料」や「形相」ではなく、「質料因」及び「形相因」という言葉が用いられることがある。しかし、アリストテレスのテキストにおいて両者が明確に区別されているわけではない。本論では、テキストに質料と形相に対応する語が見られる場合、それらを一貫して「質料」及び「形相」と訳す。本論文のアイティアー理解に関しては、さらに本論文第二章注9及び22を参照。

¹³このような解釈も決して自明ではない。アリストテレスは、形相と始動因を同一視することがある(*DA* II.4, 415b8-10; *Metaph.* B.2, 996b6-7)。

¹⁴このような目的論的な説明が、人間の行為以外のもの(例えば、降雨といった自然現象)をもその対象とするのかに関しては論争が生じている。これに関しては、Sedley 1991 や Charles 2012 を参照。

明を与えるのかということに注意を向けるよう促す。質料が説明としてのアイティアーであり、説明が必ず何かの説明でなければならない以上、例えば青銅は、それが質料であるところのものを特定の仕方では説明するときのみ質料と呼ばれるのであり、いかなる説明も与えないときには、それは質料ではない。このような理解に立てば、何か質料や形相であるということは、何らかの対象に対してそれがどのような説明を与えているのかという点から切り離して理解すべき事柄ではないということになる。

このような立場は、神や靈魂を形相の、青銅や第一質料を質料の代表例とみなし、まさに神や青銅であるというその点にもとづいてそれらを形相もしくは質料のどちらかに振り分ける図式的な質料形相論理解とは大きく隔たっているように見える。説明論的なアプローチにおいては、ある F が質料であるか否かは F そのものの特性からは判定不可能であり、それが説明するとされる G との関連が明らかになった場合のみ判定可能となるからである。例えば人間は、(それ自体のアイデンティティとしての)人間であるという点のみにもとづいて質料であるか否かが判定されるようなものではなく、問題となる生成変化(白くなること)との関連のもとでのみ質料であるもしくはないということが判定されるということになる。同様に、図式的なアプローチのもとでは端的に質料に分類されることがありうるもの、例えば青銅も、もしある世界においてそれから作られるものが何もなく、それがいかなる対象をも説明しない場合は、(たとえその世界の青銅がこの世界のそれと完全に同じ構成をもっていたとしても)もはや質料とは分類されないということになる。

しかし、図式的なアプローチと説明論的なアプローチの距離は、決して自明ではない(河谷 1998)。問題は、説明が必ず(出来事などとして特定される)原因と関わるという点にある。我々は、ある現象を説明するとき、その原因とは何かを説明することを求めるし、正しい説明は原因を特定していなければならないとも述べる。仮に、「斧が生成したことは斧の質料である青銅の存在によって説明される」と説明論的なアプローチをとる論者が主張しているとしてみよう。説明が原因を特定するためのものであるなら、ここでその論者が主張しているのは、まさに「斧の質料としての原因は青銅である」という主張であると考えることができる。問題はここからである。青銅がすなわち「斧の質料としての原因」であるならば、「斧の質料としての原因」を知ることは、青銅を知ることと少なくとも外延的には同じということになるだろう。その場合、ここで何か斧の質料であるか否かが判定される基準は、実質的にはそれが青銅であるか否かという点に求められることもできるということになる。これは、直ちに上で述べた世界像としての図式的アプローチに立ち戻るこ

とを要求するものではない。しかし、このような事態は、少なくとも主題となっている事柄が明らかにされている場面においては、図式的なアプローチが再度入り込む余地を与えるものであるように思われる。斧の質料であるということが青銅であるということと同じであるのなら、結果的に我々は、斧とその質料に関して、(それ自体のアイデンティティにもとづいて事物を形相と質料に分類する) 図式的なアプローチを与えるだろうものと同じものを手にすることになるからである。さらに、このような分析をそれが適用されうるすべての事柄に対して行い、そこから得られた図式をすべてつなぎ合わせれば、我々は、まさに上で述べた世界像のようなものを手にすることすらできるかもしれない。このような帰結は、説明論的アプローチを採用することによって得られるものが、せいぜいのところ、明確な図式をより効率的に探求することに関わる単なる便宜上の利点だったのではないかという印象を与える¹⁵。

前節において私は、心の哲学とアリストテレス哲学との関係を解明するに際して、まず形相と質料の内実を問いなおす必要があると述べた。質料と形相(広くはアイティアー)をどのように理解するかに関する上記のような問題設定を背景に、本論文はまず説明理論として質料形相論を理解するという方針をとることから出発し、実際に何かの質料や形相を探求するという地道な作業において、アリストテレスがどのような説明を与えているのかを確認することを行う。説明と原因をめぐる対立や、心の哲学とアリストテレス哲学の関係をめぐり前節での議論に立ち戻ることは、その行程を歩み終えた後の課題となる。

第4節 論文の構成

以上から明らかであるように、本論文は、アリストテレスの質料形相論は現代の心の哲学におけるどの立場に相当するののかといった問いへと直接進むのではなく、その手前で問題となる、そもそも質料形相論を心の哲学として解釈することは可能なのか、可能であるといえる場合、それはどのような意味で可能であるといえるのかといった点を考察することをまず目指す。プシューケー-ソーマ論、より正確にはその基盤となっている質料形相論の理解そのものをめぐって論争が続いている以上、まさに質料形相論そのものを再考察することこそが、アリストテレスの心の哲学の可能性を論じるために必要となるからである。

¹⁵アイティアーを説明と理解する解釈が必ずしもすべての論者によって支持されなかった理由の一端は、こういった点を明瞭にすることができなかったことにもあると思われる。説明論的なアプローチが登場した以後も、原因という訳語は広く用いられている。なお、説明と原因の関係をめぐり本論の立場は、結びにおいてさらに論じられる。

序論と結びを除いて全七章からなる本論文は、全体としては上で述べた大きな問題意識に応えることを最終的な目標とするが、それぞれの章においては、アリストテレスの質料形相論を解釈する上で今まで広く論じられてきた難問を定式化し、それに応答するというより伝統的なアリストテレス研究の体裁をとる。それぞれの章で扱われる問題とその解決は、同時に説明理論としての質料形相論の輪郭を明らかにするために役立つものとなるはずである。以下ではその概略を章立てに従って示す。

第一章では、現代の心の哲学とアリストテレス哲学の関係をめぐる先行研究を検討し、本論文の出発点を明確にすることを目標とする。より具体的には、まず従来の研究において主流となっていた機能主義的解釈と、それに触発されて提起された解釈上の諸問題をまとめる。序論で簡略に述べられたアリストテレスの心の哲学に対する現代的なアプローチがより詳細に検討され、様々な論点がどのように質料形相論の再検討という本論文の中心的課題へとたどり着くのかについての道筋が示される。

第二章から第四章においては、まず質料概念の再解釈を目指す。その出発点として第二章でまず問題となるのは、質料にアリストテレスが帰している、関係性と無規定性という特質をどう解釈するかという点である。アリストテレスによれば、奴隷と主人といった関係的なものは、両者が同時に知られるという点にその特徴の一つがある。しかし、例えば斧を知らないものが（その質料であるとされる）青銅を知ることはいくらでも可能であり、その意味では、質料は形相に対して（アリストテレス的な意味での）関係性をもたないように思われてしまう。また、実際に斧を構成する、もしくはしうる青銅について、その重量においても形においても、特にそれを無規定と考えなければならないような理由は見当たらないように思われる。

これらの特質を適切に理解するためには、エレア派の懐疑に答えるためにそれが導入されたという、質料と形相の対が登場する際に問題となった文脈へと立ち返る必要がある。生成変化を否定するエレア派に対して、アリストテレスが基に措定されたものとしての質料概念を導入することで解決を与えたという記述は思想史としては標準的なものであるが、その具体的な内実には解釈上の論争となっている。懐疑とそれに対するアリストテレスの応答の詳細は第二章での課題となるが、本論文の主張の一つは、この文脈において質料概念がもつ最大の意義は、生成変化の可能性を形而上学的・存在論的な仕方確保したという点にではなく、生成変化を学問的に説明することを可能にしたという点に求められなければならないというものである。この点と関連して本論は、アリストテレスが質料を含むアイ

ティアーに対して導入した自体的説明と付帯的説明の区別に関して、どちらか一方のみを重視する従来の解釈から離れ、十全な学問的説明を可能にするために、両者がともに必須かつ固有の役割をもつとする解釈を展開する。端的に述べれば、自体的な質料的説明（「家になれるものが家の質料である」）は懷疑不可能な論理的関係性を確保する役割を担い、付帯的な質料的説明は、全体としての質料的説明が論理的関連性のみをもつ空疎なものに終わらないよう、実用的な情報（「硬いものが家の質料である」、「煉瓦が家の質料である」）を与えるという役割を担う。

アリストテレスの質料概念がもつ意義を、このように二種の説明の組み合わせからなる生成変化の説明の理論の成立として理解すれば、質料に帰される関係性と無規定性は次のように説明されることになる。関係性は自体的な質料的説明が担う懷疑不可能な論理的関連から、無規定性は付帯的な質料的説明がもつ不確定性（「硬いもの」や「煉瓦」は常に家の質料的説明として間違っている可能性をもつ）から必然的に帰結する特質である。斧と関係性をもつようには思えない青銅を斧の質料と述べることができる理由は、それが付帯的説明だからであり、付帯的説明である限りにおいて、そこには無規定性が認められる。

続いて第三章では、アリストテレス自身が度々言及する同名異義原理をもとに、質料概念を、まったくもって説明力をもたないか、もしくは支離滅裂なものであるとみなす批判に反駁することで、第二章で概要を示した質料的説明の理論がもつ性格をさらに明らかにする。同名異義原理からは、「Gの機能を実現していないFはGの質料ではない（アリストテレスの例では、死体の手や描かれた手は人間の質料ではない）」ということが帰結する。これに従えば、例えば家の質料に関しては、現に家になっている煉瓦のみが家の質料であり、家になっていない煉瓦は家の質料ではないということが導かれる。しかし、家になっていない煉瓦を家の質料として認めないのなら、家はいったい何から生じるということになるのだろうか？家は、家になっていない煉瓦から生じるしかないのであり、その場合、我々は家になっていない煉瓦を、まさに家の質料と呼ぶべきではないだろうか？家になっていない煉瓦が家の質料であるということを否定する主張は、大工が家になっていない煉瓦から家を作るという直観的に把握される事実を無視するものに見える。だとすれば、アリストテレスの質料概念は、間違っているか理解不能なのではないか。

このような批判に対して、質料を二種に分けるという解決法が度々提案されてきた。しかし、このような解決に対しては、今度はこの二種の質料の関係をどう理解するかという点が問題になるといった再批判が寄せられている。本論は、質料的説明にはその適切さに

において遠近があり、その遠近を具体的に説明する術をアリストテレスがもっていたということ、さらに、文脈によって質料的説明に要求される適切さの内実が異なる（同名異義原理で提示されるような厳しいものを含めた、様々な基準が状況に応じて採用されうる）ということを示すことで、二種の質料に適切な位置づけを与えることを試みる。結果的に、あるものを他の何かの質料として述べるということが、どのような射程をもつ試みであるのかが明らかになるだろう。

第四章では、「間違った説明の修正」という作業がアリストテレスの質料形相論においていかになされるのかを検討することで、質料形相論の説明理論としての柔軟性を示す。出発点となるのは、「プシューケーのパトス」の一例である、怒りの形相と質料の解釈をめぐる一つの論争である（Charles 2009 と Caston 2009）。そこで争点となったものの一つは、アリストテレスにおける質料と形相の関係が、論理的なものなのか、それとも経験的な探求によって知られるものなのかという問題である。この論争を辿ることから私は、アリストテレスが果たして間違った質料的説明を修正するような手段を有していたのかということ明らかにしなければならないという課題を引き受ける。この点を明らかにするために私は、『動物の諸部分について』第一巻第一章における、動物が特定の部分（質料）を伴って生成することの必然性を示すためのアリストテレスの議論を新たな仕方で解釈することを試みる。そこで明らかになるのは、アリストテレスがある説明の妥当性を確保するための「理由」を提示することの重要性を十分認識していたということであり、この点をもとに私は、説明の修正の可能性がアリストテレスにおいてははっきり認められていると論じる。さらに私は、『デ・アニマ』第一巻第一章においてアリストテレスが与えている、自体的な付帯性と「何であるか」の探求の関係に関する言及を検討することで、このような説明の修正の可能性が、質料に関してだけでなく、形相に関しても認められていたという点を確認し、アリストテレスによる質料形相論を用いた自然の探求が、非常に柔軟な性格をもつものであったと主張する。

ここまでの議論の過程で示されるのは、自体的説明と付帯的説明を組み合わせながら、その詳細や適切さにおいて様々な度合いをもつ多様な説明を（その修正可能性をも残した形で）を与えることを可能にする学問的説明の理論として質料形相論を、特にその質料概念を解釈するという質料形相論理解である。この理論においては、何かの質料（例えば、「斧になれるもの」）であることは、ある奥行きのもとでのみ理解可能な事柄であり、それ自体でアイデンティティをもつ何らかの G（「青銅」）であることには還元不可能な事柄とされ

る。また、Gを何らかの対象の質料とする主張は、その理由(「硬い」)にもとづいてのみ正当化されるので、Gがその理由に適合しない(もしくは、その理由が間違っていた)ことが示された場合は、別の何かを質料として指すことができるという修正可能性が常に担保される。このような質料形相論理解は、肉であること、もしくは青銅であることが、すなわち肉や青銅が質料であるということを保証すると考える図式的な理解からはっきり区別される。青銅は、それが何を可能にしているのか、また、どのような意味でその対象を可能にしているのかが明確になっている限りにおいて、確かに何かの質料と呼ばれうる。しかし、青銅が質料であるという説明は、その対象の質料に対してなされうる説明の一例(付帯的な説明)にすぎず、青銅であることにその対象の質料であることを還元することはできない。質料形相論は、図式化することができない反還元主義的な説明理論なのである。

上で述べたものが私の理解する質料形相論の、特に質料概念の概略であるが、形相に関しては、第四章の後半部で説明の修正という観点から言及がなされたものの、それが具体的にどのような説明をどのような仕方で可能にするのかといった点がまだ十分に明らかになったわけではない。また、質料のみに明確に帰されていた関係性や無規定性と対比される形で、(特に神や知性^{ヌース}といったものが問題となる文脈において)形相に特有な仕方で帰される「存在における離存性」や「質料抜き」といった限定は、そもそも質料と同じ仕方で、ある対象を説明するものとして形相を理解することが本当に可能なのかに対する深刻な疑問を提起する。

第五章から第七章は、上で述べた形相概念の理解をめぐる問題を扱うためのものである。その導入として私は、第五章において、形相の位置づけを理解するに際して重要な意味をもつと思われる一つの解釈論争に踏み込む。具体的には、近年問題になったアリストテレスの感覚論をめぐるリテラリストとスピリチュアリストの対立がそれである。私が目指すのは、これら二つの立場のどちらとも異なるものとして提示されている第三の立場を、今までその立場に沿った解釈が十分に展開されてこなかった『デ・アニマ』第二巻第十二章のテキスト分析をもとに擁護することである。その過程で明らかになるのは、従来の二つの立場と私が理解する第三の立場との間の対立が、形相の位置づけに関して見解を異にする立場間の対立でもあるという点である。従来の二つの立場は、どちらも形相をそれぞれ単独で何らかの生成変化を引き起こしうるものとして捉える。これに対して第三の立場は、形相をそもそもそれぞれ単独で把握できるものとは考えない。

従来の二つの立場に共通するような、形相を質料から切り離す解釈は、形相を何かを説

明するためのものとして理解することを目指す本論の基本的な方向性にとって大きな脅威となる。私が第五章で擁護した第三の立場は、まさに形相を質料から切り離すことを拒否するものである。しかし、これだけではまだ形相を「何かを説明するもの」として理解することの妥当性が示されたことにはならない。私は、本論文全体において採用されている枠組みにもとづいて、何かを説明するものとして形相を解釈するという主張の内実をより明確に示し、そこで提示される解釈と第五章での私の立場の関係を明らかにする必要がある。この課題を遂行することを目指す第六章で私は、まず形相にそれ単独で何らかの生成変化を引き起こす力を帰する解釈が実際には大きな困難を伴うものであることを改めて確認し、形相を、あるものの何であるかを示す「本質の説明規定」とみなすことから出発することで、説明理論としての形相解釈に内実を与える。Gの本質の説明規定として形相を解釈した場合、それがもつ第一の役割は、Gの何であるかを説明するものとして理解されることができる。問題となるのは、アリストテレスは形相と質料を等しく生成変化のアイティアーとして規定しているが、本質の説明規定として形相を理解した場合、それがどのように生成変化の説明を与えうるのかが明らかではないという点である。Gの本質の説明規定は、Gとは何であるかに答えを与えてはくれるが、GでないものがGになるといった生成変化に関しては、(質料とは違って)有意義な説明を与えようには思えない。アリストテレスが生成変化と関連づけて形相を導入しているという事実を、説明理論を構成するアイティアーとして形相を理解する立場がうまく処理できないのなら、やはり形相はそれ自体で何かを引き起こしうるものとして理解するほうがよいということになるのではないか。———このような批判に対して私は、形相的説明が具体的にどのような仕方で用いられているのかを確認することで、生成変化を説明するものとして形相を理解することができることを主張する。その過程で、生成変化しないものを扱う数学や(神などをその対象とする)第一哲学と、生成変化するものを扱う自然学者の探求の関係などが論じられる。さらに、ここで論じられた事柄をもとに、第五章で問題となった感覚論における形相が、私が提示する第三の立場にもとづけばどのように理解されるのかが明らかになる。

形相を説明理論を構成するものとして理解するという主張の内実はこのような仕方で示されたが、この主張に対しては、依然としていくつかの深刻な批判がありうる。第七章では、これらに応答することで説明理論を構成するものとしての形相理解を擁護することを目指す。アリストテレスは(特に神や知性^{ヌース}といったものを対象に)形相を論じる際に、それに「存在における離存性」や「質料抜き」といった特質を帰することがある。これらは、い

かなるものも説明しなくても何かが形相でありうるということを示唆するものに読めるので、説明理論を構成するものとして形相を理解する解釈に対する反論となりうる。この問題に対して本論は、「存在における離存性」や「質料抜き」という限定が形相に対して認められる文脈を確認することから、それらが非常に限定的な仕方でのみ認められており、結果的に説明理論としての質料形相論理解を破壊するようなものではないと主張する。

以上のように理解された質料形相論は、世界像に関する図式的なアプローチなどをその一例とする、アリストテレスの存在論の核心をなすものではもはやない。それは、正確には何らかの存在論的枠組みを用いながら事物を説明するための理論であり、その意味で存在論と当然関連をもつが、同時に一定の距離をももつ。結びでは、このように理解された説明理論としての質料形相論が、心の哲学とアリストテレス哲学の関係という序論で提起された問題に対してどのような解釈の方向を示すのかを論じる。そこでは、質料形相論が直接的にある存在論的な主張を含意するものではない以上、それ自体として一元論や二元論といった心的なものや物的なものをめぐる存在論的な問題に決着をつけることもないという点が述べられる。質料形相論はむしろ、そのいずれの立場を取ろうとも必要となる探求の道具として理解されなければならない。最後に私は、このように存在論、実在論へのコミットメントを薄めた説明理論が本当に世界を探求するに際して役に立つのかという批判に対して、一定の展望を述べることで本論文を結ぶ。

第1章 現代の心の哲学からのアプローチ

本章の目的は、現代の心の哲学に比肩するものとしてアリストテレス哲学を読み解こうとした試みがどのような困難に逢着したのかを、一時期非常に盛んだった機能主義的解釈とそれに対して提起された批判に注目しながら確認すること、そして、そこで明らかになる事柄をもとに、次章以降で論じられるべき課題を設定することである¹。

第1節 導入

序論でも述べたように、心をめぐる問いは古くて新しい問いである。それが古いと言われる理由は、その問いがアリストテレスなどの哲学の古典においてすでに何らかの形で問われていたからであり、新しいと言える理由は、現代の心の哲学が自然科学の成果を背景に古典的な哲学書とは異なった視点からこの問いを活発に論じているからである。

文献学的成果をもとにしたテキストの厳密な読解作業を重視するアリストテレス研究と、科学的な知見を背景に経験可能な現象の分析に重点をおく現代の心の哲学は、一見直接的な関連をもたないようにみえるかもしれない。しかし、アリストテレスの哲学を現代の心の哲学と関連する何らかの立場として読解する試みは、一時期非常に盛んに行われた。その代表的な例としては、質料形相論という枠組みにもとづくアリストテレスの哲学を、現代の心の哲学における機能主義と親和的なものとして捉え、アリストテレスの哲学が機能主義を擁護または補完すると考える立場を挙げることができる。このような主張は、テキストの解釈をめぐって激しい論争を巻き起こした。その結果、論者たちはそもそもアリストテレスの哲学に心や意識といった問題を認めることができるのかといった根本的な論点へと立ち返らざるを得なくなり、議論は難航することになった²。

本章で私は、このような複雑な状況に対して一定の見通しを与えることをまず目指す。そのために私は、アリストテレス哲学を現代的な心の哲学として見直す試みとして最も強い影響力をもった、機能主義的解釈を検討することから議論を始める。この解釈はその後様々な批判に晒され、最終的には却下されることになったが、本論にとって大事なものは、機

¹本章の一部は文^ム2011をもとにしている。

²アリストテレスにおける現代的な意味での心や意識の問題の不在を論じたものとして Hamlyn 1993, xiii-xv など(ただし、本章注 29 も参照)。ギリシアには存在しなかったとされる現代的な「心」の形成をめぐっては、Rorty 1979, 38-61(特に 50)などを参照せよ。

機能主義的解釈とその批判から触発された種々の論点が、アリストテレスを現代的な心の哲学として理解する試みを最終的にどのような地点へと導いていったのかを見届けることにある³。この点を明らかにし次章からの課題を定めることが、本章の最終的な目標となる。

第2節 機能主義からのアリストテレス解釈

アリストテレスを現代的な心の哲学として理解することの魁となったのは、それが試みられた当時の最も先端的な心の哲学の理論であった、機能主義としてアリストテレスを解釈する試みである。その出現は、早くはヌスバウム (Nussbaum 1978) による『動物の運動について』のコメンタリーと同書に載せられた諸論文などに認められるが、ここでは機能主義者としてのアリストテレス像を明瞭で簡潔に打ち出したシールズ (Shields 1990) を参照することにする。シールズによれば、心的状態に関するある立場が機能主義的であるためには、その立場が以下の二つの前提にもとづくものである必要がある (20-1)。

1. 心的状態は多重実現可能性を受け入れる。すなわち、心的状態を実現している存在者は構成的柔軟性をもつ。
2. 心的状態は、それがインプット、アウトプットおよび他の心的状態に対してもつ因果的な関係によって定義可能である。

シールズは、2を機能主義にコミットするための最低限の条件として、1をそこから帰結するものとして考えている。彼は、まずアリストテレスが何らかの仕方で機能の多重実現可能性を受け入れていることを確認するために『気象論』の一節を引用する(以下、シールズが引用する箇所訳は、すべて彼の英訳からではなく原典から私が訳したものである)。

これらのすべてのものは働きによって定義される。というのは、眼が見ている場合に〔真に眼である〕ように、自らの働きをなしうるものが真にそれぞれのものであるのに対して、〔自らの働きを〕なしえないものは、死んでいる〔眼〕または石像の〔眼〕のように、同名異義的にのみ〔それぞれのものだからである〕。木製の鋸もまた〔真に鋸であるのでは〕なく、むしろ〔鋸の〕似像ようなものである。

(*Meteor.* IV.12, 390a10-3)⁴

³本章で私が素描することを目指すのは議論の論理的な進展であり、歴史的な流れを正確に反映することを意図したものではない。

⁴ἅπαντα δ' ἐστὶν ὠρισμένα τῶν ἔργων· τὰ μὲν γὰρ δυνάμενα ποιεῖν τὸ αὐτῶν ἔργον ἀληθῶς ἐστὶν ἕκαστον, οἷον ὀφθαλμὸς εἰ ὄρα, τὸ δὲ μὴ δυνάμενον ὁμωνύμως, οἷον ὁ τεθνεὼς ἢ ὁ λίθινος· οὐδὲ γὰρ

この引用を解釈する際の要点となるのは、「働き」(^{エルゴン} ἔργον) の理解である。シールズはこれを、あるインプットから対応するアウトプットを導く関数としての役割をもつ、機能主義における「機能」に相当するものとみなす。ある活動の結果物をも意味しうる「働き」が機能主義における機能と端的に同一視されうるのかに関しては異論がありうるが(EN I.1, 1094a4-6) 以下ではシールズにとりあえず寄り添って働きを機能に置き換えて理解した上で議論を進める。

上記の引用においては、ある事物が眼や鋸に分類されるか否かは、それが眼や鋸の機能を担えるか否かによって決まるということが述べられている。例えば、眼は見ること(眼の機能)を実行しうるか否かでその眼であるか否かが決定される。機能主義にとって重要なのは、眼であることが特定の機能をもつこととは密接な関係にあるが、特定の物質から構成されていることとは直接的な関係をもたない、という点である。「老人が云々のような眼を手に入れることができたなら、若者のように見ることができるだろう」(DA I.4, 408b21-2) という記述からシールズは、アリストテレスは機能を特定の物質に直接結びつけられたものとしてではなく、その機能を実現しているような特定の構成に関連するものとして扱っていると主張する。「云々のような眼」に属することを保証する特定の構成さえ備わっていれば、老人は本来の自分の眼をなしていた物質とは全く異なるものを用いても、見ることができるのである。こうした機能主義的な立場をアリストテレスが採用していることのさらなる論拠は、『形而上学』Z巻第十一章に求められる。そこでアリストテレスは、今のところ人間の形相は肉や骨のみに現れているが、だからといって肉や骨が形相の部分なしているのかは疑わしいという疑問を提起する(Metaph. Z.11, 1036a31-b7)。シールズはこの箇所を、上の眼の例と同じく、何かを人間として成り立たせる人間の形相(眼を眼として成り立たせる眼の機能との類比)を、肉や骨といった特定の物質から切り離し、肉や骨以外の様々な物質からも成立しうる特定の構成において実現されるだろう機能として理解する機能主義的な考え方に、アリストテレスがコミットしていることの明白な証拠として捉える。

続いてシールズは、心的状態の多重実現可能性に関する前提1だけでなく、それをインプットとアウトプットとの関係によって定義されるものとみなす前提2にもアリストテレスがコミットしていることを示す作業に移る。彼によれば、その最も強力な証拠は、アリス

πρίων ὁ ξύλινος, ἀλλ' ἢ ὡς εἰκῶν.

Shields 1990, 21 では、眼と同じく動物の部分である肉に関する言及をも含めるために 390a15 までの部分が引用されているが、ここでは内容上の区切りに従って 390a13 までにとどめた。なお、Meteor. IV に関しては、古来から偽作の可能性が指摘されているが、近年の論者にはこれを真作とみなすものが多い(三浦 2015, 337-41)。

⁵εἰ γὰρ λάβοι ὁ πρεσβύτης ὄμμα τοιονδί, βλέποι ἂν ὡσπερ καὶ ὁ νέος.

トテレスによる「プシューケーのパトス」の定義にある。『デ・アニマ』におけるプシューケーの探究を始めて間もないところでアリストテレスは、「プシューケーのパトス」を論じる際には「これこれによるこれこれのための、このようなソーマの、あるいはその部分ないし能力の、なんらかの^{キネーシス}運動変化 (κίνησις)」(DA I.1, 403a26-7)⁶という形でそれを扱う必要があると述べる。このことを具体的に示すためにアリストテレスは、プシューケーのパトスの例として「怒り」を挙げ、それをさらに「復讐への欲求」と「血液もしくは熱いものの沸騰」が結びついたものとして説明する。シールズは、プシューケーのパトスとその例である怒りの説明の前半部(「これこれによるこれこれのための」、「復讐への欲求」)を原因と目的に、後半部(「このようなソーマの、あるいはその部分ないし能力の、なんらかの^{キネーシス}運動変化」、「血液もしくは熱いものの沸騰」)を物質的な基盤と変化に言及するものとして解釈し、特に説明の前半部の解釈をもとに、アリストテレスは心的状態をそのインプット(原因)とアウトプット(目的)における因果的關係として定義しているという主張を導き出す。

機能主義的なアリストテレス解釈の概要は上記のような仕方で示された。これに対する想定される反論としてシールズは、次の二つを挙げる。

1. アリストテレスは機能を実現する純粋な構成だけでなく、特定の物質とそれにもとづく状態(「血液もしくは熱いものの沸騰」)に結びつけて「怒り」を説明しており、これは構成以外のものを考慮する必要はないとする、多重実現可能性という機能主義のテーゼに反する。
2. アリストテレスは心的状態を定義するのにしばしば他の心的タームを用いているように思われるが(「怒り」を「復讐への欲求」として定義するなど)、これは、一切の心的なタームを最終的にはインプットとアウトプットのみからなる純粋な因果的關係に還元して、それらのみから心的状態を定義することを目指すという機能主義のプログラムに、アリストテレスが本当にコミットしているのかを疑わしくする⁷。

第一の批判に対してシールズは、ある心的状態を説明するに際して、特定の物質やそれがもつ状態をアリストテレスが取り上げる箇所はあるが、そのことから、ある心的状態が

⁶κίνησις τις τοῦ τοιοῦδι σώματος ἢ μέρους ἢ δυνάμεως ὑπὸ τοῦδε ἔνεκα τοῦδε.

⁷この第二の批判を考慮すれば、本節の冒頭で挙げた前提2(「心的状態はそれがインプット、アウトプットおよび他の心的状態に対してもつ因果的な関係によって定義可能である」)に他の心的状態に関する言及(「および他の心的状態」)が見られる理由は、それが最終的にはインプットとアウトプットの因果的な関係に還元されると想定されているからである、と理解すべきである。

その物質によってのみ実現されることをもアリストテレスが主張していたことにはならないと反論する。第二の批判は、心的状態は純粋にインプットとアウトプットの因果的関係のみにもとづいて定義されなければならないという機能主義の方針にアリストテレスがコミットしないかも知れないという危惧である。「のみ」という限定を外した「心的状態はインプットとアウトプットの因果的関係に言及する形で定義される」というより緩い主張は、機能主義以外の立場をとる論者も賛同しうるようなものであり⁸、その意味では、いわば弱い機能主義と呼ぶべきものである。これに対して、心の哲学としての機能主義が目指すところの、いわば強い機能主義が必要とするのは、「心的状態はまさにインプットとアウトプットの因果的関係のみによって定義される（心的状態を定義するためにそれ以外の要素を持ち込んでではない）」という主張に対するコミットメントである（以下では、特に注記しない場合、「機能主義」という言葉でこの強い機能主義を指すことにする）。「怒り」という心的状態を定義するためにインプットとアウトプットの因果的関係に還元されていない「欲求」という別の心的タームをアリストテレスが持ち込んでいることが確認できる以上、強い機能主義へのコミットメントをアリストテレスに認めることは勇み足に思われる。

これに対してシールズは、アリストテレスがある心的状態を説明するために、インプットとアウトプットの因果的関係に還元されていない別の心的タームをもち出す箇所があることを認めながらも、心的状態に関する最も一般化された説明（ブシューケーのパトスの定義）においては他の心的状態に対する言及が見当たらないということから、（心的状態について言及しているすべての箇所において機能主義的な定義を与えることに意識的であるわけではないにせよ）アリストテレスが最終的にはすべての心的状態をインプットとアウトプットの因果的関係で定義し、強い機能主義にもコミットするだろうと主張する。

本当にアリストテレスがシールズが述べるように機能主義のプログラムに合致する議論を展開していたのかに関しては、ブシューケーのパトスの定義を含めた様々なテキストの解釈を巻き込んですでに多彩な批判がなされた。ここでは、シールズが自らの議論を展開するために引用した箇所を取り上げながら、上で論じられた二つの想定される反論に対する彼の再反論が有効なものなのかを改めて検討し、それらがどのような仕方でアリストテレス哲学と心の哲学の関係をめぐるより根源的な問いへの橋渡しとなっているのかを簡潔

⁸ 欲求といった心的状態を理解するに際して、それが特定のインプット（刺戟）に対応する形で特定のアウトプット（行動）へと動物を動かすという機能的側面は中心的な役割をもつ。しかし、それが欲求を理解する際に必要となる事柄のすべてであるかについては、意見がわかれる。複雑化している機能主義の分類に関しては、Van Gulick Van Gulick 2009（特に、131-8）を参照。

にまとめる。

上の議論で彼が引用した箇所は以下の三種に分類される。

1. 感覚の多重実現可能性 (*Meteor.* IV.12, 390a10-3; *DA* I.4, 408b21-2)
2. 人間の形相の多重実現可能性 (*Metaph.* Z.11, 1036a31-b7)
3. プシューケーのパトスの定義 (*DA* I.1, 403a26-7)

まず多重実現可能性に関して、一番目に分類される引用は確かに心的状態である感覚について何らかの意味でそれを擁護するものとして読める。しかし、ここで認められている多重実現可能性が、機能主義が要求するほど柔軟なものであるかは異論の余地がある。機能主義者によれば、通常は感覚と全く関係をもたない物質も、それを感覚能力をもつものと同じとみなすことを可能にするような特定の構成を実現することができる。しかし、上でアリストテレスが様々な仕方で感覚を実現しようと認めている対象は、実はそれほど幅広くない。眼に関する引用で新たに機能するものとして言及されていたのは恐らく若者の眼だが、これはすでに視覚を担うと認定されているような限定された物質からなるものを指しているのであり、金属からなる機械が人間の眼と同じ活動を担うことをも許容するような多重実現可能性にアリストテレスがコミットしているかどうかは、ここからは明らかにならない。

二番目の引用に関しては、やや内実の曖昧な人間の形相を感覚といったものと関連をもつものとしてとりあえず理解した場合⁹、感覚が肉や骨以外のものとの関係づけられる可能性が論じられていると考えることができるので、ここでは機能主義が要求するような、物質的な制限から離れた心的状態の多重実現可能性が認められているように思われる。しかし、アリストテレスが本当に肉や骨と無関係なものとして人間の形相を理解することができるという想定にコミットするかどうかは再考の余地を残すものである。形相と質料の関係をめぐる錯綜したアリストテレスのテキストには、そのような想定を許さないと読める箇所もあり、可能性に言及する仮定的な議論を与えるものでしかない第二の引用だけでは、シールズの主張を受け入れるにはまだ不十分であると言わざるをえない¹⁰。三番目のプシュー

⁹感覚能力を含むプシューケーを人間の物質として解釈しているように見えるアリストテレスの記述は存在する (*Metaph.* H.3, 1043b2-4)

¹⁰Code and Moravcsik 1992, 134 では、人間の形相が肉と骨以外にも実現可能なのではないかという発言について、アリストテレスはアポリアに関する仮定としてこれらを述べているのであり、この発言をそのまま彼の立場を反映するものとみなすことはできないという指摘がなされている。人間の形相に骨や肉が含まれるのかという問題に対する私の立場に関しては、本論文第六章を参照。

ケーのパトスの定義に関しても、怒りの質料としてすでに明確に身体の一部である血液といったものをもち出している以上、それが機能主義が要求するような多重実現可能性を保証すると考える必然性はないといえる。すなわち、アリストテレスは何らかの仕方で多重実現可能性を認めるかもしれないが、そこで認められているものは機能主義者が考えているよりもはるかに物質による制限を強く受けるものである可能性がある。

機能主義が要求するもうひとつの前提である、アウトプットとインプットの因果的関係のみから心的状態を定義することにアリストテレスがコミットしているのかという論点はどうか。まず一番目と二番目の引用においては、その論点を支持するような手がかりは与えられていない。最後の三番目の引用については、ここでアリストテレスは確かに感情という心的状態を論じており、インプットとアウトプットに言及するような仕方でそれを定義しようとしているように思われる。しかし、「これこれによるこれこれのための、このようなソーマの、あるいはその部分ないし能力の、なんらかの^{キネーシス}運動変化」といった仕方で規定が、本当にシールズが要求するような強い機能主義をそこに読み込むことを許すものであるかは疑わしい。シールズがいうとおり、確かに「これこれによるこれこれのための」という規定には、他の心的状態に言及するものであると必ず考えなければならないような要素は見当たらない。しかし、この曖昧な一節は、他の心的状態に関する言及が禁止されていると考える根拠を与えるようなものにも読めないのである。アリストテレスが心的状態をどのように考えていたのかを明らかにするためには、この箇所¹¹に依拠するだけでは不十分であるといわざるをえない。

心的状態の多重実現可能性とインプットとアウトプットのみからなる定義を要とする機能主義的解釈は、その後も上で問題となった論点に関して、十分な応答を展開することはできなかった¹¹。しかし、機能主義的解釈の失敗は、単に現代の心の哲学における様々な選択肢のうちの一つの失敗として収斂したわけではない。未解決のまま残された論点、すなわち、機能を実現している質料とはいったいどのようなものなのか、また、アリストテレスが心的状態の何であるかを正確に規定している箇所はあるのかといった問題は、アリストテレス哲学と現代の心の哲学との関係が、想定していたよりもはるかに複雑なものなのではないかという認識へと研究者たちを導くことになる。

¹¹機能主義的解釈に対する批判の簡潔なまとめとして、Caston 2006, 321-2 を挙げることができる。また、Nelson 1990 も参照すべし。

第3節 機能主義以後とソーマの概念

前節において、私はシールズが提示した機能主義的なアリストテレス解釈の概要をまとめ、それがどのような困難に逢着したのかを確認した。機能主義という当時の最先端であった心の哲学の一つの立場をアリストテレスに帰することはほぼ失敗に終わったが、では次に進むべきはいったいどこなのか。アリストテレス研究者たちがこの問題にどのように取り組んだのかを確認し、そこから何が帰結したのかを明らかにするのが、本節と次節の課題となる。

機能主義やそれと類似した物質主義的な心の哲学としてアリストテレスを理解する可能性を否定する論者と肯定する論者のどちらも、プシューケー-ソーマ¹²の関係と心身(mind-body)問題という表現を度々併置する¹³。特にヌスバウムとパトナムは「アリストテレスが出発しているところから出発することは、まさになぜアリストテレスが心身問題(あるいはむしろ、この問題の最も近い類似物であるプシューケー-身体問題)が素通りされるべきであり、浮き上がってきてはいけなかったのかを知ることの助けになる」(Nussbaum and Putnam 1992, 31)と述べ、明確に両者の関連性を強調している。アリストテレスの心の哲学の内実の理解において相異なる立場をとる論者たちがこの点に関しては一致しているということは、機能主義的解釈を放棄しても、プシューケーとソーマの関係などを探求することで、アリストテレスに何か別の心の哲学の理論を帰する可能性が依然として残されているのではないかという希望的観測を与える。

プシューケー-ソーマ論と心身問題を併置することの妥当性を検討するための準備として、まず機能主義を含む、広い意味での物質主義的な心の哲学をアリストテレスに読み込む解釈に対して、どのような批判が提起されたのかを検討してみよう。特に大きな論争を巻き起こしたのは次の三点である。

1. 生物の質料であるとされるソーマを現代的な身体として理解できるのか(現代的身体概念の有無)
2. アリストテレスのアイステーシス感覚(αἴσθησις)論に身体的な変化は伴っているのか(感覚に

¹²古典ギリシア語のソーマは生物の質料としての身体と単なる物質の両方を指すことのできる概念である。本論では、注記されない限り「ソーマ」という表現で生物の質料であるソーマのみを指す。この点は、後ほど本文でも改めて言及する。

¹³このような併置を用いるもののうち、機能主義を含む物質主義的な心の哲学をアリストテレスに帰することを否定する論者としてはHeinaman 1990やBurnyeat 1992, 16を、肯定する論者としては、Shields 1990, 19やNussbaum and Putnam 1992などを挙げることができる。

おける物的変化の有無)

3. 知性 ($\nu\omicron\upsilon\varsigma$) はソーマとの関係をもたないとするアリストテレスの記述をどう理解するか (知性の二元論)

まず1と2の論点は、一九九二年に公刊されアリストテレスの心の哲学の可能性に関する大きな議論を呼んだバーニエトの論文 (Burnyeat 1992) において中心的に提起されたものである。上の3の論点が知性というプシューケーの側に属する問題を指摘するものであるのに対して、バーニエトはソーマのほうにも (機能主義を含む物質主義的な傾向をもつ) 現代的な心の哲学を求める論者を拒む要素があるということを示そうとする (Burnyeat 1992, 16)。1と2の論点をバーニエトの論文に沿って改めて定式化すれば、以下のようになるだろう。

1. ソーマはプシューケーとともにあるときにのみソーマであるとアリストテレスは述べているが、この主張に従うならば、我々は生物において心や意識から切り離された身体というものを想定することができなくなる。しかし、このような帰結は現代の身体理解からは容認できない。
2. アリストテレスの感覚論においては、感覚する際に物的な変化が身体に生じることが拒否されているが、これは心的変化に対応する神経的变化などを認める現代的な心の哲学のほとんどの立場にとって容認できないものである。

ソーマと現代的な身体の整合性問題という1の論点は、以前アクリル (Ackrill 1972-3) によって定式化された、質料形相論を生物の事例に適用する際に生じる困難を、特に現代の心身問題に関連づけて捉えなおしたものである。現代の我々にとって、身体は心と区別して把握されうるものである。例えば我々は、移植直前の網膜を、それは今実際に見てはいないので心的なものに関わっていないにもかかわらず、生きた身体の一部として何かを見ている、または見ることのできる網膜と同等のものとして想定することができる。この時、「移植直前の網膜と同じ状態にある」と言われているときの生きた身体の一部である網膜は、純粹にその物理的状态のみにもとづいて同定されたものとして、いわば心抜き身体として把握されていると言える。しかし、アリストテレスにならって、ソーマがプシューケーから切り離された場合にはそのソーマとしてのアイデンティティが失われると考える場合、生きる身体の一部として視覚という形相と関わっている網膜と、移植直前の、視覚を実現していないのでまだ形相と関わっていない網膜は、両者の物理的状态の同一性がどう

であろうと、ソーマとしては同一ではないと理解されなければならない。前者はソーマだが、後者はソーマではないのである。現代の我々の考える身体が（形相の実現と無関係な仕方）物理的状态のみにもとづいて同定されることができるものであるとすれば、プシューケーから切り離されると同時にそれ自体としてのアイデンティティをも失うとされるソーマは、非常に異質なものに響く¹⁴。

2の論点に関するバーニエトの見解は、現代の心の哲学がほとんどの場合前提する「感覚=心的な変化」に対応する「物的な変化」がアリストテレスにおいては否定されているというものである。その見解によれば、感覚対象の形相の受容として感覚を説明するアリストテレスの感覚論においては、感覚が可能になるための前提条件として感覚器官が必要であるという常識的な主張と、実際に感覚する際には身体の側における物質的变化がまったく生じないという奇妙な主張がともに認められる。よって、全体としては現代科学が到底容認することのできない議論がそこで与えられているということになる¹⁵。——バーニエトは、これら二点の読解にもとづいて、アリストテレスの身体概念は、本質的に心を内包する身体というおよそ理解し難いものであり、さらに感覚が生じる際に必ず伴われると現代では考えられている視神経の興奮といった身体的変化をまったく許容しないという点でも、もはや現代人には無意味なものであると断定する。

続く3の論点は、^{ヌース}知性はソーマとの関連をもたないというアリストテレスの記述をどのように解釈するかという問題に関わる。^{ヌース}知性の活動がどのようなものであるにせよ、それが人間の活動であるならば、二元論以外の立場をとる論者にとって^{ヌース}知性は^{ヌース}感覚^{アイステーシス}と同様に身体と関連をもつはずである。しかしアリストテレスは、^{ヌース}知性には対応する器官がないと述べる（*DA* III.4, 429a24-5）。機能主義といった現代科学と親和的なものにみえる心の哲学をアリストテレスが支持しているという主張の強力な根拠となる、プシューケー-ソーマ論の大部分において認めることのできた非常に緊密なソーマとプシューケーの対応関係が、^{ヌース}知性に関しては認められていないだけでなく、むしろそこでは（物質主義的傾向が強い現代の心の哲学では否定的な評価を受けている）二元論的な主張が明白に表れているのではないかという批判が、これをもとになされた。

¹⁴プシューケーとソーマ、さらには形相と質料の関係に関するアリストテレスの主張をいかに理解するかは、彼の哲学の根本に関わる問題の一つであり、多くの研究者によって様々な角度から論じられてきた。ここで素描された問題をより厳密に規定した上でそれに対する解釈を与えるためには、第二章以降の議論をまたなければならない。その一環としてアクリルの提起した困難を説明論的な文脈で改めて定式化し検討する作業は、本論文第三章で主に行われる。

¹⁵この問題に対する本論の立場は、第五章で明らかになる。

この問題に関しては、二元論的解釈を拒否する論者によって、主にこの主張の適用範囲を限定し知性^{ヌース}の働きを何らかの仕方で身体的なものへと関係づけるという解決法が模索されている。しかし、いずれの解釈も（知性^{ヌース}の一部であるとされることが多い）能動知性^{ヌース}にアリストテレスが付与した不死性と永遠性（*DA* III.5）をいかに処理するかという問題には明快な答えを与えることに成功していない¹⁶。この点に関して、質料と形相の結合を前提とする枠組みから離れた生物の活動を認めることができない機能主義者（及び、同じく二元論を拒否する物質主義的な心の哲学の立場を擁護する論者）は、沈黙あるいは困惑、もしくは問題からの回避という反応を示している¹⁷。

物質主義的な心の哲学をアリストテレスに帰する試みを主な標的として提起された上記の三つの論点は、いずれも多くの論争を巻き起こし、心の哲学としての可能性の探求に必ずしも限られない仕方で、アリストテレス研究を押し進める起爆剤となってきた。しかし、これらの批判を経た結果として、アリストテレスにどのような心の哲学を帰するべきかという点に関して何らかの合意が得られたのかと問われれば、これは簡単に答えられる事柄ではない。まず3の論点に関しては、これを心の哲学における二元論をアリストテレスが擁護するという可能性を指摘するものとして理解することができるように思われる。デカルト的なそれとの差異化が図られることは多くあるが、（実体的）二元論は心の哲学の一つの選択肢として未だ真剣に論じられているものであり、その一種としてアリストテレス哲学が理解される可能性は、確かに残されている。また、このような立場に立てば、2で問題となった感覚における心的変化と物的変化の並行関係に関しても、それを必要としない心の哲学をアリストテレスに認める余地が残されるだろう。その意味では、2と3の批判は、アリストテレスの心の哲学の物質主義的解釈に対する代案として、二元論を新たに打ち出したものとして理解することができるように思われる。

2と3の論点に注目する限り、対立は物質主義的解釈と二元論の間で生じているのであり、解決すべきは、これらのうちのどちらにアリストテレス哲学を位置づけるべきかとい

¹⁶シスコ（Sisko 2001）はゾーマとの関連をもたないように思われるという知性^{ヌース}の特異性を解消する試みとして、Wedin 1988とCaston 1999を挙げている。しかし、前者による、*DA* III.5における能動知性^{ヌース}の議論も実は自然主義的に理解できるという解釈（シスコによれば、収縮的解釈）については、シスコはそれを不整合な解釈として退けている。また、後者による、アリストテレスは能動知性^{ヌース}を論じる際に心理学や生物学ではない神学に脱線しているのだ、という一種の回避的な解釈についても、不自然だと評価している（Castonと類似した解釈として、近年ではBurnyeat 2008を挙げることができる）。この他に、知性^{ヌース}を公共的・文化的なものとして理解しようとする見解（Kahn 1992; 土橋 1993）もある。

¹⁷例えば、Wilkes 1992, 125-7や（アリストテレスを機能主義的に解釈することの是非に関してはやや留保的だが）Cohen 1992, 60n8にこのような反応が見られる。

う問題のみであるように見える。私は、このような構図を素直に受け入れる前に、2や3とは方向性を異にする1の批判をより真剣に考察する必要があると考える。これは、2や3の批判のようにプシューケーとソーマとの並行関係を認めない、もしくはプシューケーをソーマから完全に切り離すといった仕方で、機能主義を含む物質主義的な心の哲学から二元論に方向転換することを要求するものではない。ここで問題となるのは、逆にソーマとプシューケーとの距離が近すぎるといふ点である。バーニェトは、感覚に関する2の論点の解釈に加え、ソーマがプシューケーから切り離された場合、ソーマとしてのアイデンティティを失ってしまうという難点を考察した結果として、アリストテレスのソーマは本質的に意識を内包している不可解な身体であると述べ、そこからアリストテレスの心の哲学を現代人には理解不可能な、信頼に値しないものとして投げ捨てるべきだと主張する。この極端な評価の妥当性を検証するためには、バーニェトが述べるところの信頼に値しない心の哲学が、正確にはどのような心の哲学であり、どう信頼に値しないのかをより明らかにすることが必要となるだろう。しかし、私が本論文で問題にしたいのはこの点ではない。私が検討したいのは、アリストテレスのソーマを現代における身体として理解する際に困難が生じるという事態が、バーニェトが導き出す「特殊な身体概念をアリストテレスがもっている」という結論を必ず含意するのかという点である。

ソーマと身体の違いをもう一度検討しておきたい。1の批判を上で論じたときに確認されたのは、アリストテレスのソーマ理解に従えば、それ自体としては物理的に完全に同一なものが、状況によってソーマであったりまたはなかったりすることが生じる、という点である。今生きている人間の身体を構成している網膜と、死亡直後の網膜はそれ自体としては完全に同じ物理的構成をもつことがありうる。にもかかわらずアリストテレスは、両者の一方は生物の質料であるソーマとして認めるが、他方は認めないという仕方でこれらを明確に区別するだろう。我々もまた生きた身体と死んだ身体を区別するので、その意味では、プシューケーが離れ去ったソーマをもはやソーマと呼ばないということは、特筆すべきことではないように見えるかも知れない¹⁸。しかし、生きた身体と死んだ身体の区別を我々が用いているということは、ソーマを身体と同一視することを許すようなものではない。「生きた身体」と「死んだ身体」という言葉がまったく自然に響くのに対して、「生きたソーマ」というのは冗語であり、「死んだソーマ」というものは語義矛盾に響く。生物のソーマである限り、それはプシューケーを伴っている、つまり生きていなければならず、

¹⁸ここでの「身体」は死体と対比されるような意味で用いられているのではなく、「死者の身体」といった言い方を容認するような意味で用いられている。

プシューケーが離れた場合、それは死んだソーマになるのではなく、ソーマではなくなるのである。

この点をもとに私は、アリストテレスにおける質料としてのソーマと、現代の身体の間には何か概念的なずれがあると考えたい。すなわち私は、ソーマは、赤い林檎と比べて半透明な林檎を特殊と述べるときのような仕方で、普通の身体と比べて特殊な身体である、と述べられるべきではないと主張したい。もしこのように単純な比較を拒むような概念的なずれをもつ仕方で身体とソーマが異なっているのなら、アリストテレスのプシューケー-ソーマ論にもとづいた議論を、(身体と心に関する)二元論なのか物質主義なのか、それともその中間に位置する何かであるのかという問いと突き合わせることに対しては、細心の注意が払われる必要があるということになる。これらの選択肢は、基本的にはプシューケーとソーマの関係が現代の心身の関係に(たとえ特殊な仕方であっても)対応するということが保証された場合にのみ意味をなすものだからである¹⁹。

身体とソーマの間に解釈者を不安にさせる何かがあるという問題に真剣に向き合った論者たちは、これを解消する試みとして、現代の身体概念に相当するようなものもアリストテレスの質料概念に見出すことができるということを示そうとした。私はこのような試みが彼の質料概念を理解するために非常に大きな貢献をなすと考えるが、それがプシューケー-ソーマという対概念でアリストテレスが論じていることを現代の心身問題と同一視することを可能にするとは考えない。現代の身体概念に親和的なものを導入したとしても、それによって上で述べた質料概念を理解することの困難さが消え去るわけではないからである。なぜアリストテレスが自らのアイデンティティを持たないものをも質料としてのソーマと呼ぶのかという問題は、依然として残される。

¹⁹身体とソーマが端的な比較を許さないようなものであるとしたら、両者の関係を理解するために、アリストテレスのソーマと現代の身体をそれぞれ body と BODY に訳し分けるといった試みは混乱を与えるものにすぎないように思われる(この表記は Williams 1986 にもとづいている)。これは、アリストテレスのソーマを現代的な(しかし、それ自体としてアイデンティティをもたないという点で特殊な)身体の種類として理解してもよいのかのような印象を与えかねない。この試みの奇妙さは、例えばあるものが主人との関係においてのみそれと呼ばれるような「奴隷」としても理解されるし、主人との関係抜きにそれと呼ばれるようなもの(例えば、「人間」としても理解されるという点から、slave と SLAVE という二つの述語を導入しなければならない、と主張することの奇妙さに例えることができる。このような表記を与えて、人間を新たな種類の奴隷として理解すべきだと述べることは、(特殊な人間理解を有する人々以外には)奇妙に響くだろう。SLAVE が人間というそれ自体でアイデンティティをもつ実体を(いささか奇妙な形ではあるが)指すのに対して、slave はその人間がもちうる身分の一つを指すに過ぎない。両者は同一線上で比較できるようなものではなく、SLAVE はもう一つの slave ではない。なお、Williams 1986 では、body と BODY からなる枠組みをもとに、質料形相論は二元論と物質主義のどちらにも解釈できる要素を多分に秘めている難解なものであるという結論が下されている。すでに述べたように、本論は現代的な身体(または、BODY)とアリストテレスのソーマ(または、body)を同一線上で比較しようとする問題設定そのものに疑問を呈する。

ソーマと身体の距離、より一般的に捉えなおせば、アリストテレスの質料概念と現代的な物質概念の距離をどう査定するかという問題は、本論文の以後の章で形を変えて繰り返し論じられることになる非常にやっかいなものである。本章で明確にしておきたかったのは、ソーマの概念を現代の身体に一応対応するものとして理解した上で、「奇妙な身体概念をアリストテレスは有しており、それにもとづいた彼の心の哲学もまた奇妙なものである」という批判を与える見解は、そもそも質料としてのソーマを現代の身体と並列できない可能性がある以上、必ずしも妥当ではないかも知れないという点である。ソーマ概念の不可解さは、機能主義的解釈の失敗から、端的に二元論といった別の心の哲学の選択肢へと方向転換することを躊躇させるのである。

第4節 心とプシューケー

前節では、ソーマと身体のずれを指摘することから、心身問題とプシューケー-ソーマ論を併置することへの違和感が述べられた。本節においては、今度はプシューケーと心の距離を確認する。

『デ・アニマ』の主題となる概念の一つであるプシューケーは、後にヨーロッパの諸言語において心的なものを広く表す語となったものであるが、アリストテレスにおいてもそれが心的なものに相当するものを意味するために用いられているかは定かではない。なによりもまずプシューケーは、それを有しているものを「生きているもの」として成り立たせる活動を可能にする能力であるとされる。具体的にアリストテレスがプシューケーに帰している能力は多様である。栄養摂取、感覚、思惟の三分類を代表として、それに想像パンタシア (φαντασία)、キネーシス運動変化、欲求などが加えられることがある。

アリストテレスがプシューケーをどのように捉えているのかをさらに理解するために、『デ・アニマ』第二巻第一章におけるプシューケーの規定を検討することにしよう。アリストテレスは、議論の進展にしたがって以下のように段階的な仕方でプシューケーとは何かを説明してゆく。

1. 可能的に生命をもつ自然的ソーマの形相としての実体 (DA II.1, 412a19-21)²⁰
2. 可能的に生命をもつ自然的ソーマの第一現実態 (DA II.1, 412a27-8)²¹

²⁰ ἀναγκαῖον ἄρα τὴν ψυχὴν οὐσίαν εἶναι ὡς εἶδος σώματος φυσικοῦ δυνάμει ζωὴν ἔχοντος

²¹ ἐντελέχεια ἢ πρώτη σώματος φυσικοῦ δυνάμει ζωὴν ἔχοντος

3. 器官的な自然的ソーマの第一現実態 (DA II.1, 412b5-6)²²

ここでは自然的ソーマという表現が用いられているが、これと前節まで用いてきたソーマとの関係については注記が必要となる。古典ギリシア語のソーマは、英語の body と同様に、生物の身体のみならず物質全般を指すことができる言葉である。アリストテレスがここで自然的ソーマという表現を用いるのは、このような広い意味、すなわち物質全般を指すような意味で用いられたソーマから、人工物以外のものを区別するためであると思われる。上では、「可能的に生命をもつ自然的ソーマ」という、さらなる限定が付された表現が用いられているが、私はこの限定を、生物の質料としてのソーマとそれ以外の自然物を区別するためのものとして理解する。その場合、前節まで論じられた「ソーマ」は、この「可能的に生命をもつ自然的ソーマ」に相当するものであったということになる。以後も、「ソーマ」という表現で、直接生物の質料としてのソーマ（すなわち、可能的に生命をもつ自然的ソーマ）を指すことにする。

二つ目の定義は、形相が現実態であるという点と、現実態がさらに二種に区分されるという点にもとづいて最初の定義を発展させたものである。現実態の二種の区別とは、一方（第一現実態）を「知識〔の所有〕」や「睡眠」で説明されるものとして、他方（第二現実態）を「知識を行使すること」や「覚醒」という言葉で説明されるものとして分けることである。この二種の現実態の中で、プシューケーは特に前者に相当するとされる。これに対して、三つ目の定義はやや異なった角度から与えられたものである。これは前に述べられた二つの定義における「可能的に生命をもつ」を「器官的な」に言い直したものであるが、このような言い直しは「可能的に生命をもつ」ということが「器官となって何らかの働きをなしえる」ということに直結しているというアリストテレスの理解を示すものとして考えることができるだろう²³。

ここまで述べられたことから、プシューケーに関して少なくとも以下の数点を確認することができる。

- プシューケーが管轄するものには、栄養摂取といった心的でないものも含まれる。
- プシューケーは能力的なものであり、それは睡眠時においてもある。

²² ἐντελέχεια ἢ πρώτη σώματος φυσικοῦ ὀργανικοῦ

²³ 「器官的な自然的ソーマ」に関しては、「器官的」を「自らが器官である」と「自身以外のものを器官として有する」のどちらに理解するか、「自然的ソーマ」を生物の質料全体またはその個々の部分のどちらとして理解するかといった点をめぐって論争がある (Barnes 1999)。

プシューケーと心を併置する際にまず感じることになる困難は、プシューケーと関連づけられるものに、栄養摂取といった現代では心的なものに分類されないものが含まれているという点である²⁴。しかし、プシューケーと心や意識という概念の差異は単にそこに含まれるものの範囲の違いだけではない。現代では心的なもの代表として扱われる意識が上の分類では主に第二現実態に対応するものであるのに対して、プシューケーは明確に第一現実態に分類されている。人間は、睡眠や気絶状態において、心や意識を失い得る²⁵。眠っている人は、恐らく可能的に心をもっている人とはいえるかもしれないが、現実的にいえば心をもっていない。これに対して、プシューケーは睡眠において一時的に失われうるようなものではない²⁶。心や意識が失われた人がプシューケーを有することはできるということは、両者の間に何か深刻な違いがあるということの意味しているように思われる。

第一現実態、すなわち能力であるプシューケーと心を併置することへの違和感は、すでに井上 1980, 279-80 でも指摘されている。井上は「これ〔= 第一現実態〕に対して、第二次の現実態、つまり身〔= ソーマと第一現実態としてのプシューケーの結合体〕の現実態こそは「こころ」なのではあるまいか」と述べ、「現代風な心身論」をアリストテレスに求めるためには第二現実態を論じる必要があるだろうと述べる。この主張は、第一現実態に関する記述を現代的な意味での心と関連づけることができるのかを疑うという点で私の読解方向と大体一致する。しかし、ならば第二現実態の考察は心を対象としたものになるのかという点に関して私は、第一現実態としてのプシューケーの場合と同じく、第二現実態も^{キーンネーシス}運動変化や栄養摂取といった「心的なもの」以外のものをも対象とすることになるので、それを心的なものと同様に同一視することはできないと考える。なお、現実的に感覚または思惟されている内容を心的なものと考えれば、それに対応するアリストテレスの用語

²⁴ 栄養摂取以外にも、「吸い込まれた空気が、これらの部分〔= 喉や肺、心臓周辺の場所〕におけるプシューケーによって、いわゆる気管を打つことが声なのである」(ὥστε ἡ πλῆγῃ τοῦ ἀναπνεομένου ἀέρος ὑπὸ τῆς ἐν τούτοις τοῖς μορίοις ψυχῆς πρὸς τὴν καλουμένην ἀρτηρίαν φωνὴ ἐστίν.; DA II.8, 420b27-9) といった記述など、プシューケーという言葉で身体の働きと関連するもののみを指しているとはか思えない箇所がある。現代の我々は、このような働きを心的なものとは認めないだろう。

²⁵ 意識をもっている状態と失っている状態の線引は、実際には非常に曖昧である(下條 1996 及び 1999 など)。本章での議論にとって大事なのは、「意識を失っている」という表現がとりあえず適用されうるという点であり、その詳細に関しては問わない。

²⁶ アリストテレスは「プシューケーをもつものがプシューケーをもたないものから区別されるのは生きるということにおいてである」(διωρίσθαι τὸ ἔμψυχον τοῦ ἀψύχου τῷ ζῆν; DA II.2, 413a21-2) と述べ、プシューケーの有無を、まず何よりも生きているものを死んでいるものから区別する基準とみなしている。「いずれにせよ、〔プシューケーが〕去ってしまえば、〔ソーマは〕霧散し腐敗する」(ἐξελθούσης γοῦν διαπνέεται καὶ σήπεται.; DA I.5, 411b8-9) といった記述も、このような解釈を支持する。ただし、アリストテレスにおける生命の概念が現代のそれと対応するのは別に問われなければならない問題として残る。アリストテレスの生命論は、天界や神をも射程にいれるものだからである(DC II.3, 286a7-12)。

は、能力を指すプシューケーや依然として適用範囲が広すぎる第二現実態ではなく、むしろ感覚内容 (*αἴσθημα*) や思惟内容 (*νόημα*) といったものに求められるべきであるようにも思われる。しかし、これらの言葉をアリストテレスが用いる回数は極度に少なく、それが本当に心的な事柄を指しているのかという最も根本的な点に関してすら、合意は得られていない²⁷。

アリストテレス哲学における第一現実態や第二現実態、またはそれ以外の何らかの概念が現代的な心と対応するのかまたはしないのかという問題は、現代の我々が心という言葉で何を意味しているのかという問題と表裏をなす。心に関して機能主義的解釈をとるか、それとも現象的意識をそれとして理解するのかといった点に、この問いの答えは大きく左右されることになるからである。しかし、現代の我々が心という言葉で何を意味しているのかがかりに明らかになったとしても、それをもとにアリストテレスのプシューケー概念の理解を進めるためには、どのような心の理解をとる論者も困惑するだろう次の難問とまず向かい合う必要がある。

上で段階的に示されたプシューケーの三つの規定は、どれも「ソーマの」という限定が付されたものであった。その意味ではプシューケーは、そこでは必ずソーマとの関連のもとでのみ理解されるものとして規定されていたといえる。しかし、これに真っ向から反対するような例が、前節においてアリストテレスの心の哲学の物質主義的理解の可能性を批判するために出された三つの論点の一つに認められる。第三の論点において、ソーマと関連をもたない知性^{ヌース}の存在が指摘されていたのである。このような、知性^{ヌース}に関する二元論を擁護する解釈を行うシスコ (Sisko 2001) へのコメントにおいて、パカラックはプシューケー論を解釈する論者が直面することになる矛盾を以下のように定式化する (Pakaluk 2001, 199)。

(1) いかなる生物もプシューケーとソーマの結合体として分析される。その際、それを受け入れるに適した質料と結合している (enmattered) 形相がその質料に対してもつような関係を、プシューケーはソーマに対してもつ。

(2) (プラトンに反して) 質料と結合している形相はその形相に適した質料から離存してあることはできない。

しかし、

(3) 人間のプシューケー、より正確には、思惟するための能力はソーマから離存

²⁷ 心的なものに関連するものとしてこれらを理解する可能性は、Matson 1966, 101 などにおいて与えられている。特に感覚内容をこのように解釈することに対する批判的検討としては、Wedin 1988, 18-22, 35-9 を挙げることができる。

してあることができる。

このような定式化に従えば、アリストテレスはすべての生物の形相は質料から離存することができないという主張と、ある生物の形相の一部(思惟能力)は離存しうるという主張を同時に認めており、全体として矛盾しているということになる。これは次のことを意味する。第一現実態であれ、第二現実態であれ、アリストテレスがプシューケーという概念で論じていることを何らかの仕方です心に該当すると理解した場合、人は自動的に心に関する二つの矛盾する主張を同時に受け入れることを余儀なくされる。一つは、必ずソーマとの関連のもとで理解されるような心であり、もう一つは、ソーマとの関連を抜きにして理解される心である。前者が一元論を、後者が二元論を意味しているとするならば、アリストテレスは心に関して、両立し得ない二つの主張を同時に述べているということになる。これは、端的に二元論を主張する論者とは異なる意味で現代人にとって(恐らく古代人にとっても)理解し難いものであるといわざるをえない。

私が目指すのは、これを額面どおり受け取って、アリストテレスはまさに心について二つの互いに不整合な主張を同時に行っていたのだと考えることでも、どちらかの主張を他方に解消することでもない²⁸。私の目標は、プシューケーは(一元論的なものであれ二元論的なものであれ)端的に心と同一視できるようなものではなく、むしろこのような二つの主張が同時になされることを可能にするような何かであったとする理解を打ち立てることである。この課題は、説明理論として質料形相論を理解するという方針のもと、主に本論文第五章以降で遂行されることになるだろう。本節では、ソーマと身体の関係論じた時と同様に、プシューケーと心との関係を考察するに際しても、簡単には乗り越えることができない溝が存在するという点を確認できたということに満足することにしよう。

第5節 プシューケー-ソーマ論から質料形相論へ

本章で私は、当時の最先端であった機能主義を擁護または補完するものとしてそれを解釈することから始まった、アリストテレス哲学と現代の心の哲学との関係をめぐる探求が、結局どこまで後退しなればならなかったのかを辿った。一時期非常に多くの賛同者をえた機能主義的解釈は、心的状態の多重実現可能性やインプットとアウトプットのみからなる純粋な定義といった機能主義的な発想をアリストテレスに帰することができるのかとい

²⁸このような試みの問題点に関しては、本章注16を参照。

う、解釈の要となる点が疑問視されることによって、結果的には否定されることになった。問題は、機能主義の否定が、それ以外の何らかの心の哲学の立場を肯定することに直ちにつながらなかったという点である。機能主義的解釈から触発された論争で明らかになったのは、アリストテレスの心の哲学は二元論もしくは機能主義以外の何らかの物質主義的な理論のどちらかであるといった結論ではなく、むしろ、そもそもアリストテレスのソーマやプシューケーの概念は心の哲学としての可能性を論じる際に前提される身体と心に対応しない可能性があり、このような問題設定自体が無意味なものであるかもしれない、という混乱した状況であった。

ソーマとプシューケーが「奇妙な身体」と「奇妙な心」なのではなく、そもそも身体と心に対応しないものであるかもしれないという事態は、アリストテレスには心の哲学と呼べるものがまったく存在しないということの意味するのだろうか。この点を吟味するためにまず確かめておくべきは、身体や心に正確に対応する概念がないからといって、アリストテレスが（現代においてそういわれるところの）心的なものに対していかなる言及もしていない、ということにはならないという点である。アリストテレスは、（心身の関係に対応するものではないかも知れないが）プシューケー-ソーマ論にもとづいて感覚や思惟といった、心的なもの代表ともいえる事柄に関する考察を展開しており、その意味では、彼の哲学にいかなる意味でも心的なものを扱う学問がないと考えることは不当である²⁹。

私は、心的や物的と端的に対応するわけではないが、それらを対象とする議論が行われる場面と何らかの関連をもっているようにはみえるという、プシューケー-ソーマ論のなんとも曖昧な立ち位置を明らかにするためには、プシューケー-ソーマ論の理論的な基盤である形相と質料の理解へと立ち戻ることが必要であると考え。ソーマとプシューケーを理解するに際して上で指摘された困難は、必ずしもプシューケーとソーマのみに限られるものではなく、形相と質料という概念を理解する際に一般的に生じる困難でもあるからである。プシューケー抜きでソーマを想定することができないという問題は、そのまま質料と形相の一性をどのように理解するかという論点とつながる。プシューケーがソーマと関係したり、しなかったりする問題は、プシューケー論以外の場面でも難問となっている形相の離存性をいかに理解するかという問いと実質的には同じである。よって、次章が

²⁹ アリストテレスに人格や意識といった現代的な問題設定を認めない Hamlyn 1993, xv でも、彼が何らかの仕方でも心的なものに言及しているという点は認められており、その意味でアリストテレスは（ゆるい意味での）心の哲学の創始者と評価されている。私はこのような立場に賛同するが、その場合も、この立場が正確にはどのようなものなのかを明らかにするという課題は残される。この点に関しては、本論文の結びにおいて立ち戻ることになるだろう。

ら私は、プシューケーとソーマを論じる場面からいったん離れ、形相と質料の内実を直接捉え直すことを目指すことになる。そこでは、本章でプシューケーとソーマを心と身体と対比する際に浮き彫りになった様々な「ずれ」が、異なった形で改めて問題となるだろう。質料と形相の読み直しによって得られた成果をもとにプシューケーとソーマの解釈という作業へと立ち戻るには、本論文の結論部を待たなければならない。

第2章 質料的説明の理論

前章において私は、現代的な心の哲学としてアリストテレスを読み解こうとする試みが、どのような困難を抱えることになったのかを述べた。そこで私が描いたのは、当時の最先端であった機能主義的解釈の失敗が、何らかの他の心の哲学の理論をアリストテレスに帰属させることではなく、そもそも彼に心の哲学と呼べるようなものが本当にあるのかという問いへとつながってしまったという流れであった。その際に特に問題となったのは、プシューケーとソーマという概念と現代的な心及び身体との距離であった。これに関して私は、両者の距離を理解するためには、生物のプシューケーとソーマが形相及び質料として導入されているという点を改めて解釈し直す必要があると主張し、質料形相論へと立ち戻るという方針を明らかにした。

本章から第四章までは、主に質料概念を再考察することを目指す。特に本章では、質料に帰される関係性と無規定性という特質をどう理解するかを切り口に、アリストテレスの質料概念を説明理論を構成するものとして捉え直すことが主題となる。質料概念を理解することを非常に難しくするこれら二つの特質を適切に位置づけるためには、生成変化の可能性を確保する役割を担うというその出自から質料概念を見直すことが必要とされる。生成変化の可能性の確保がその重要な課題の一つとなっている『自然学』の議論を読み直し、二つの特質を理解可能な形で質料概念に帰属する解釈を提出する過程で、説明理論を与えるものとして質料を理解するという本論文の立場がどのようなものであるかが示されるだろう。

第1節 導入

アリストテレスは、『形而上学』Z巻第三章において、最も優れた意味で「ある」と言われる「実体」の候補に質料¹と形相を挙げる²。質料と形相、または両者からなる結合体のうちのどれが実体なのかは難しい問題だが³、何がこれら三種のものにそれぞれ分類されるのかに関しては、一見明確な基準があるように見える。アリストテレスが与える例によれば、肉や青銅、煉瓦は質料に、ブシューケーやその他の本質は形相に、生物や家といったものは結合体に分類される。こういった例を観察する限りにおいては、特に質料に関して、アリストテレスは何かがある特定の種類（kind、青銅や煉瓦）に属するか否かという基準から、その質料であるか否かを決めているように思われる。家の質料は木材や煉瓦であり、何がこれらの種類に分類されるということは、すなわちそれが家の質料であることを意味する⁴。以降、特定の種類に属することを重視するこのような質料解釈を、「種類語による質料同定解釈」と呼ぶ⁵。

¹議論へと入る前に、質料の理解に関して混乱を招く要因の一つ押さえておく必要がある。まず、生物の部分である手や肉などが質料として述べられるとき、質料は、同じく実体の候補となる結合体がそれからなるところのものとして理解されている。しかし、本章で主に論じる *Phys. I* では、上の意味での質料から生成する結合体そのものが、さらに人間が白い人間になるといった変化の質料として述べられている (*Phys. I.7*, 190b24-5)。質料から生成したはずのものが再度質料と名づけられているという点に関して、本論ではとりあえず以下の立場を取る。本論は、アリストテレスが基本的には生成と変化の両方の「基に指定されたもの」(*ὑποκείμενον*) という、上の二つの事例をすべて含むような広い意味で質料という概念を用いていたと理解するが、実体論が問題となるような文脈においては、狭い意味で（結合体がそこから生成するところのものとして）質料という概念を用いることもあると考える。以下の議論で私は、「質料」という言葉でもっぱら広い意味でのそれを指すことにする。なお、実体論が問題となる *Metaph.* の中心巻 (*Z, H, Θ*) においても、広い意味でのそれを指すものとして質料という語が用いられる場合があるという点に関しては、*Metaph. H.1*, 1042a32-b8 など (*Metaph. Λ.2*, 1069b7-15 も参照)、「基に指定されたもの」という訳語に関しては、本章注 6 を参照せよ。

²正確には、アリストテレスは実体の候補としてまず本質、普遍、類、そして「基に指定されたもの」の四つを挙げている。質料と形相は、さらに「基に指定されたもの」の候補として言及されている。

³質料に関しては、*Metaph. Z.3* においてはそれを実体の候補から外すような議論が与えられているように思われる。しかし、その議論の内実や、これがアリストテレスの最終的な見解であるか否かについては論争がある。質料形相論と実体論・存在論の関係は、本論文第七章及び結びにおいて改めて論じられる。

⁴種類語を重視する理解を採用する場合も、何かの質料であることが、具体的にどの種類に関連づけられるかは文脈に相対的でありうる。木製の箱の質料を論じている場面では、木材であるということが木製の箱の質料であるということと同義になるだろう。これに対して、木材の質料を論じる場面では、さらに木材を構成するある種の元素であることが質料であるということの意味することになる (*Metaph. Θ.7*, 1049a18-25)。何が質料であるかに対する答えはどの結合体の質料を問題にしているかによって変わるが、それが特定の種類に属するもの（木材、または木材を構成する元素）を指すということは変わらない。その意味では、種類語は依然として質料であるか否かを判定するための基準となっているといえる。

⁵この名称に関してはいくつかの補足が必要となる。「種類語による質料同定解釈」における「種類」は、何らかの強い形而上学的・存在論的な内実を伴うと解釈される、アリストテレス的な類 (*γένος*) や種・形相 (*εἶδος*) を指すものとしては意図されていない。よって、私はこの名称によってアリストテレス的な類や種・形相が特定の個物の質料であると述べているわけではない。ここでの「種類」は特定の事物（例えば、人間、動物、青銅、金属など）の集合を指す名前にすぎない。

本章において私は、まず質料概念をこのように理解した場合、アリストテレスが質料に帰している二つの特質、すなわち、質料の関係性と無規定性をうまく説明することができないという問題を確認することから議論を始める。私は、種類語による質料同定解釈に代わるものを示すためには、『自然学』第一巻で質料概念が導入された当初の経緯に注目する必要があると考える。標準的な解釈によれば、アリストテレスは質料を実体の生成や性質の変化を通じて持続する「基に指定されたもの」(*ὑποκείμενον*)⁶として導入することで、生成変化⁷を否定するエレア派に対抗しその可能性を確保したとされる(例えば、Ross 1936, 19-24)。しかし、エレア派による生成変化の否定がどのようなものであったか、また、アリストテレスによる質料概念の導入がそれを具体的にどのような仕方で解決したのか(またはできなかったのか)は現在も論争となっている⁸。この点に関して私は、生成変化の可能性を確保することを、単に「何か生成変化を可能にするようなものがある」ということを主張することだけでなく、それを可能にするものとは何かを正しく述べるための学問的記述の様式を構築することをも必要とする企てとして理解した場合、従来なされてきたような、主に『自然学』第一巻第七章にもとづく議論では、アリストテレスの応答の内実を汲み尽くすためには不十分であると考え。学問的記述の様式の構築も含めて生成変化の可能性を確保するためには、生成変化に関する日常言語的な分析を行う『自然学』第一巻第七章だけでなく、生成変化の正しい述べ方を模索する第一巻第八章を同時に考慮する必要がある。

しかし、『自然学』第一巻第八章の議論は極めて圧縮されており、そこでアリストテレスが与えたと私が考える生成変化の正しい述べ方が具体的にどのようなものであるのかを知るためには、『自然学』第二巻第三章といった関連するテキストを参照する必要がある。詳細は本文において述べられるが、私は、アリストテレスによる生成変化を述べるための学問的記述の体系が、自体的なそれと付帯的なそれからなる二種類の説明によって構築され

⁶*ὑποκείμενον* は従来「基体」または「主語」に訳し分けられてきた。本論文では、中畑 2013 に従って「基に指定されたもの」というより原文に忠実で一貫した訳を採用する。この訳語を採用することになった経緯に関しては、中畑 2013, 90-1 及び 2015, 241-5 を参照。

⁷「生成変化する」は *γίγνεσθαι* の訳語である。*γίγνεσθαι* は実体の生成と性質における変化を同時に意味しうる言葉であり、本論文では今後文脈によって「(A が B から)生成する」や「(A が B へと)変化する」といった表現を使い分けるが、ギリシア語原文にはその区別がないことに留意されたい。両者をともに指す場合は、その主語に生成変化がそこに生じたものがくる場合は「(A が B へと)生成変化する」を、生成変化の結果生じたものが主語にくる場合は「(A が B から)生じる」を使い分ける。

⁸近年も多くの研究者が、エレア派の懐疑とそれに対するアリストテレスの応答の解釈を試みた(Loux 1993, 2012; Kelsey 2006, 2008, 2010; Anagnostopoulos 2010, 2013 など)。論点は多岐にわたり、詳細において異なっている。よって本章での先行研究への言及は、関連する点のみに留める。

ており、かつ自体的な質料的説明⁹に言及する限りにおいては、「青銅」といった種類を指す語をそこで用いることは禁じられていると考える。そこで必要とされるのは、懐疑の可能性を根本的に封じるような、生成される結果物に対する論理的なつながりを示す説明である。しかし、論理的なつながりをその要とする自体的質料のみから作られる説明は、循環的かつトリヴィアルなものに留まらざるをえない。これに対して、例えば「硬いもの」や「青銅」といった仕方で述べられる付帯的な質料的説明は、懐疑の可能性を封じるようなものではないが、説明を実用的なものにするという役割を担う。生成変化を正しく述べるための質料的説明の理論は、いわば自体的な質料的説明と付帯的な質料的説明を組み合わせることで、エレア派の懐疑に打ち負かされない強固な論理的関係性を備えると同時に、トリヴィアルで循環的な説明に終わらないような内実をもつものである。

以上の考察を踏まえて、私は質料の無規定性と関係性の解釈へと立ち戻る。さらに、無規定性と関係性という特質、及び自体的と付帯的の区別をそこに認めることができるということにもとづき、質料を説明理論を構成するものとして理解する解釈を明確に打ち出すことで、本章の目的は果たされることになる。

第2節 質料における関係性と無規定性

種類語による質料同定解釈は、アリストテレスが実際に「斧の質料は青銅である」といった発言を度々している以上、非常に自然な選択肢に思われる。しかし、アリストテレスは、同時にこのような解釈にもとづく限り理解しがたい二つの特質を質料に帰してもいる。

数学や第一哲学との違いを探ることから自然学者の探求の内実を明らかにすることを目指す『自然学』第二巻第二章において、アリストテレスは形相と質料をともに認識することが自然学の仕事であるという見解を示し、質料と形相の両方を対象とするという点で類似した学問の例として技術（医術や建築学など）を挙げた上で（*Phys.* II.2, 194a21-7）、さらに「質料は関係的なものに属する。なぜなら、異なる形相には異なる質料があるからで

⁹本論文で用いられる、「Gの質料的説明（もしくは、Gの形相的、始動因的、目的論的説明）」という表現は、「Gでありうるもの（Gの質料）とは何か（もしくは、Gの「何であるか」（すなわち、Gの形相）とは何か、Gにするもの（Gの始動因）とは何か、Gは何のため（Gの目的）にあるのか）」といった問いに対する答えを示す一連の文を指す。本来説明はすべて文の形を取るべきだと思われるが、以降で私は、例えば治療行為の始動因的説明である「治療行為を行う者は医者である」という文の縮約形として「医者」を用い、「治療行為の始動因的説明は、医者（＝「治療行為を行う者は医者である」）である」といった表現を用いることを認める。「医者が治療行為の始動因的説明を与える」といった表現も、同様に認められる。なお、これらの説明の形式的な分析は、本論文第四章及び第六章でより詳しくなされる。

ある」(*Phys.* II.2, 194b8-9)¹⁰と付け加える。質料が関係的なものに属するという発言を、まさに関係的なものとは何かを主題とする『カテゴリー論』第七章にもとづいて理解するならば、質料もまた「「他のもの〔A〕の〔あるいは、他のもの〔A〕より〕」という仕方ですれ〔B〕がまさにそう呼ばれるようなもの〔B〕、あるいは、他の何らかの仕方、他のものとの関係において〔そう呼ばれるようなもの〕」(*Cat.* 7, 6a36-7)¹¹に属するということになる。これは、『カテゴリー論』第七章において論じられた、主人に対して奴隷が持つような関係（奴隷は、まさに主人の奴隷でなければならず、主人が消えたら奴隷もなくなる）を、質料が形相に対してもつということを意味する。何かが関係的なものに属するか否かを判断する際に考慮すべき点は様々だが¹²、アリストテレスがここで与えている条件の一つは、「ある者が、関係的なもののうちの任意のもの〔A〕を確定的に知ったならば、それ〔A〕との関係において語られるところのもの〔B〕もまた〔その者に対して〕確定的に知られることになる」(*Cat.* 7, 8a35-7)¹³というものである。これに従えば、主人の何であるかを知っているものは必ず奴隷の何であるかも知っているということになり、その対偶として、奴隷の何であるかを知らないものは、主人の何であるかも知らないということが帰結する。この理解を質料と形相の事例に適用すれば、質料の何であるかは対応する形相の何であるかを知ることなしには明らかにならないということになる。両者のこのような関係は、両者がまさに一つの学問に属するものであるということを示す¹⁴。よって自然学者は両者とともに探求しなければならない——このようにアリストテレスは述べているということになる¹⁵。

上記のように理解された関係性は、種類語による質料同定解釈に対して次のような仕方です疑問を突きつける。『カテゴリー論』において例として挙げられた主人と奴隷とは違っ

¹⁰ ἔτι τῶν πρὸς τι ἢ ὕλη· ἄλλω γὰρ εἶδει ἄλλη ὕλη.

¹¹ πρὸς τι δὲ τὰ τοιαῦτα λέγεται, ὅσα αὐτὰ ἄπερ ἐστὶν ἐτέρων εἶναι λέγεται ἢ ὅπως οὖν ἄλλως πρὸς ἕτερον.

¹² 例えば、互いに関係的である二つの項の関係は、単なる所有のようなものとして理解されてはならない（例えば、動物には頭をもたないものもいるので「動物と頭」は関係的なものの例にはならない。これに対して、「有頭のもの」と「頭」は互いに関係的なものであるといえる）。また、両者が時間的に同時に存在しているということも重要ではない（例えば、「感覚と感覚対象」）。なお、アリストテレスが「関係的なもの」に属することの条件として、最終的にどのようなものを想定していたのかに関しては論争が続いている（現状については、中畑 2013, 99-101）。

¹³ ἐκ δὲ τούτων δηλόν ἐστιν ὅτι εἴαν τις εἰδῆ τι ὠρισμένως τῶν πρὸς τι, κακείνῳ πρὸς ὃ λέγεται ὠρισμένως εἴσεται.

¹⁴ 関係的なものが一つの学問に属するという点は、*PA* I.1, 641b1-4 においても述べられている。

¹⁵ 自然学や建築学の対象となるような質料が形相に対して関係的なものであるということはテキストから読み取れる通りだが、このことから、すべての質料が形相に対して関係的なものであるということ、また、形相も質料に対して関係的なものであるということが導かれるかは明らかでない（形相が質料に対して何らかの非対称性を有する可能性は、本論文第六章と第七章において論じられる）。本章では、とりあえず自然学が対象とするような質料が関係的なものに属するという点のみが重要となる。

て、木材については知っているが家については何も知らない人を想像することはまったく可能であるように思われる。実にアリストテレス自身も、木材は关系的なものに属しないと述べている (*Cat.* 7, 8a23)。だとすれば、青銅や木材を質料とする発言と、質料を关系的なものに属するとする発言は、端的に矛盾しているということになってしまうのではないか。かりに後者に目をつぶり木材を家の質料として認めた場合、今度は別の問題が生じる。木材には家になれないものがあり、家には木材を用いていないものがある。すると、木材と家の関係はよくて偶然的なものに見えてくる。だとすれば、今度はなぜ両者が一つの学に属するといえるのかが問題になる。主人の学が奴隷の学なくしてはありえない、すなわち両者の学が厳密な意味で一つの学であるのに対して、木材の学と家の学との関係は、単に偶然的なものに見えてしまうのである。質料と形相が一つの学に属するということを主張するために質料が形相に対して関係性をもつということが言われたのだとすれば、木材といった仕方で質料を規定することは、この目的に照らして非常に不適切に思われる¹⁶。

種類語による質料同定解釈にとって問題となるものとして、さらに質料の無規定性を挙げることができる (*Metaph.* Z.11, 1037a27)。「無規定」(*ἀόριστον*)はアリストテレスによって様々な文脈で使われる言葉である。ベッドや像といったものにまだなっていない青銅を、何になるかがまだ規定されていない(決まっていない)という意味において無規定と呼ぶことは特に不自然に思われなくてもいいかもしれない。しかし、アリストテレスは、すでにある結合体を構成している質料、すなわち、現に箱を構成している木材のようなものを無規定と述べることもあり (*Metaph.* Θ.7, 1049b1-2)。そこでの無規定性は容易には理解できない。種類語による質料同定解釈にとって問題となるのは、特定の種類語によって同定されるような質料には、もはや無規定と呼べるような要素がほとんど残らなくなってしまうという点である。すでに結合体を構成している質料を特定の種類語で規定した上でその無規定性を解釈している例として、メイキン (Makin 2006, 177-80) を挙げることができる。彼は、像を構成している青銅のような質料は、数えられないという点で無規定であるとい

¹⁶このような批判に対して、青銅や木材の理解には、すでに材料として(たとえ明示的ではなくても)何かの構成物になるということが含まれており、その意味ではそれが構成するところの物を想定すること抜きに青銅や木材を理解することはできず、青銅の理解と青銅からなるものの理解は一つの学問に属する、とする反論が可能かも知れない。このような反論に対してまず問題になるのは、そこでなされた提案に従った場合も、正確に言えば木材と一つの学の対象をなすのは「木材からなるもの」であるので、依然として「家」と「木材」の緊密な関係は確保されないという点である。さらに、青銅や木材が常に何かの材料としてのみ考えられているのかも問題である。そもそもアリストテレスは、何かの構成物になるということが、それを理解する際に必ずしも要求されない対象、例えば、水や空気 (*GC* I.5, 320b11-2) または甘いものや油っぽいもの (*Metaph.* H.4, 1044a17-25) に対しても、等しくそれらを質料と述べている。

う解釈を提示した¹⁷。しかし、同じく質料であるとされる煉瓦や顔、足、または種子といったものはすべて数えることができるものであり、このような無規定性を質料全般に対して適用されるものとして理解することはできない。科学者が水を構成する原子の正確な数を数え、それらの特質や位置関係などを確定的に説明できるのと同じ仕方で、家の煉瓦はその色や場所といった点において、まったくもって無規定的ではないように思われる。種類語で規定できるようなものがなぜ無規定でありうるのかという点に関して、説得力のある解決を得られる見込みは今のところ与えられていない。

第3節 エレア派の懐疑と「二通り」の述べ方

私は、質料の関係性や無規定性を理解するためには、種類語による質料同定解釈とは異なる質料理解が必要となると考える。そしてそのためには、アリストテレスが質料概念を導入した文脈を確認しなおすことから始める必要がある。なぜなら、青銅といったものが像に対して関係的なものであるとする見解をもっともラディカルな仕方で疑問視する立場とアリストテレスとの応酬が、そこに残されているからである。

アリストテレス全集において初めて質料と形相からなる枠組みをもとに事物が分析される『自然学』第一巻第七章において、アリストテレスは質料と形相（及びその欠如態）を、生成変化がどのように語られるのかを分析するために導入している¹⁸。例えば、ある人間が白い人間になるという変化は、質料（ある人間）が形相（白さ）と結合される、という仕方で記述される。従来の解釈によれば、これがエレア派の懐疑に対して意味することは次の

¹⁷メイキンはその注釈書において問題となっている特定の節（*Metaph.* $\Theta.7$, 1049b1-2）を対象に議論しており、その意味では彼の提案は無規定性の全面的な解釈を目指したものではないと思われる。メイキンのもの以外には、以下のような解釈がありうる。

（1）形における無規定性：一般的にあって、斧を構成する青銅や家を構成する煉瓦であるために決まった形をもつことは必要とされない。その点では、これらは確かに形において無規定といえる。しかし、足や顔といったものは特定の形態を有している必要があるので、この特性は限定的にしか認めることができない。

（2）「ある・これなるもの」（*τὸδε τι*）ではないという意味での無規定性（Beere 2009, 282）：「ある・これなるもの」（ピアにおいては、*a certain this*）という言葉が正確に理解することの難しさは措くとしても（この点を論じたものとして Smith 1921 を、近年の見解をまとめたものとして中畑 2013, 98-9 を挙げる）特定の家を構成している煉瓦を、なぜ家そのものと同じ仕方で「ある・これなるもの」として理解できないのかが明確でないという問題が残る。家を構成する煉瓦は、それを数えることも、指差すことも、誰かに言われた通りの分量を指定された部分から取り外したりすることもできる。

（3）第一質料に帰されるような、一切の規定をもたないこととしての無規定性（Ross 1924, 2:205）：第一質料に関しては、このような意味での無規定性を帰することが確かに可能かもしれない。しかし、少なくともここで論じられている *Metaph.* $Z.11$ と $\Theta.7$ に第一質料の問題を読み込むのは文脈的に不自然である。このような解釈は、Frede and Patzig 1988, 2:218 ですでに批判されている。

¹⁸実際には、*Phys.* $I.7$ においては質料という言葉は殆ど見られず、本章注6でも言及した「基に指定されたもの」という言葉のほうが用いられる。これと質料の関係については本章注1を参照。

とおりである。ある人間が白い人間になるという変化においては、人間という質料が、変化の基に措定されたものとして、変化の過程を通して持続しており、それが持続しているということから「何かは何かに変化した」と述べることの妥当性が確保される。すなわち、ここでアリストテレスがしていることは、変化の基に持続する質料を措定することによって、エレア派の懐疑を解決することなのである。——少し突き詰めて考えてみると、なぜそもそも何かは持続していると信じる必要があるのか、また、問題となっている生成変化と持続するとされる何かは具体的にどう関連しているのかといった点について、すぐに疑問が湧いてくる（これに関しては、後ほど改めて論じることになる）。にもかかわらず、ある生成変化の過程において持続するものがあるという主張は、生成変化が成立しているということを擁護するための自然で説得力のある説明に思われる。

例えば「人間」と呼ばれる特定の対象が変化の基に措定されている質料である、という主張がアリストテレスの真意だとすれば、これは種類語による質料同定解釈を支持するように見える。「青銅」や「人間」は、変化の基に措定された質料であると考えられている、「変化の前後において持続する何か」をうまく捉えていると思われるからである。しかし、このような仕方で、質料を持続する対象として理解し、それが種類語によって同定されると考える解釈は、いくつかの事例においてうまくいかない。『自然学』第一巻第七章においてアリストテレスは、変化の基に措定されたものとしての質料が、以下の生成変化の可能性を等しく確保すると考えている。

1. 人間が白い人間になる
2. 青銅から像が生じる
3. 種子から植物が生じる

持続するものとしての質料を種類語を用いて同定するという戦略は、1の事例においては明確に成功しているように見える。これは、「人間」が「白い人間」になるという言語表現の連続性からも支持される。2の事例は、1ほど明確にこの戦略を支持するようにはみえない。アリストテレス本人が青銅は生成を通して持続すると述べてはいるものの（*Phys.* I.7, 190a24-6）、1の事例とは違って、「青銅」から「像」が生じると述べる場合、両者に共通する言語表現は観察されないため、なぜそのように言えるのかの根拠が1の場合ほど明らかではないからである。これに対しては、青銅から作られた斧を「青銅製の斧」と呼ぶことができるということから（*Metaph.* Z.7, 1033a5-23; Θ.7, 1049a18-23）、言語的なつな

がりを見出すという擁護を行うことができる。しかし、このような仕方での擁護は、次の3の事例においては完全に無効である（「種子製の植物」は異様に響くか、少なくとも斧の例における「青銅製の」とは別の意味をもつように思われる）。3の事例においては、何かが続いているということを示すような言語表現上の証拠は存在せず、成長した植物において、植物がそこから生じたと思われるところの種子を（例えば肉眼で）物理的に観察することもできない。種子が続くものとなつてそこから植物が生じたとする説明を信じる確たる根拠は見当たらないのである¹⁹。

3の事例が示す困難は、生成変化と持続の関係を再考するよう読者を促す。ここで与えられているのは、一種のジレンマであるように思われる。ある時点 t_1 において（白くない）人間が、続く時点 t_2 において白い人間が観察されたとしてみよう。これをどのように理解するかに関しては次の二つの立場がありうるが、どちらも困難を抱えている。

1. 持続を認める： t_1 と t_2 を通じて、人間が同一な仕方でも持続しているとしよう。この立場をとった場合の問題は、白い人間が生じなくなるという点である。人間が、完全に同一な仕方でも持続する場合、当然人間はいかなる仕方でも変化してはならない。にもかかわらず白い人間が観察されるということを通すためには、（いかに奇妙に響こうと）その白さの登場を t_1 から持続している人間とは関係のない「無からの生成」として処理し、「白い人間」が生じたのではなく、持続する「人間」と新たに登場した「白さ」が観察されているのだ、と主張するか²⁰、厳密な持続を放棄する次の立場へと転向するしかない。

2. 持続を認めない：上の立場を棄却し、 t_1 において特定されていた人間を t_2 において観察することは、厳密に言えばできないということを確認してみよう。その場合、 t_1 と t_2 において観察されるものは異なるということになるので、種子の事例と同様に、何かが続くものがあると考えられる根拠はなくなってしまふ。とすれば、何か

¹⁹これに対して、種子を指すものと理解されてきた *σπέρμα* が実際は血液のようなものを指すと考えることで、消え去らず持続するものを確保する試みとして、O'Connor 2015 を挙げることができる。しかし、このような解釈は、本文の次の段落で述べる懐疑に対しては答えを与えることができない。特に実体の生成に関して、持続する対象として質料を理解することをそもそも放棄する解釈としては Jones 1974 などを、これに対する反論としては Code 1976 などを挙げることができる。

²⁰その場合、このようなものをそもそも生成変化と呼ぶことができるかが問題になるだろう。何かの持続を認めた場合に、変化によって生じるとされるものの位置づけに不安定さが残るという点は、Waterlow 1982, 19-20 においてすでに指摘されている。本論とは異なる視点からこれに回答する試みとしては、渡辺 2012, 147-84 など。

何かに変化したということも、言えなくなってしまうのではないか²¹。

上のようなジレンマは、一読する限りあまりにも直観に反するものであるように思われる。我々の多くは、子どもが大人に成長することを疑わないし、種子から植物が生じることを、青い林檎が赤い林檎になるということを当然のこととして信じる。こういった信念は、実践的にも大きな意味をもっているので、これらを抜きにしてはそもそも生きていくことすら不可能である。それにもかかわらず、上のジレンマに対して何らかの理論的な答えを返すことができないということは、アリストテレスにとって致命的であると私は考える。それは、アリストテレスが生成変化を述べることを「自然に関する学」(*Phys. I.1, 184a14-5*)の営みとして考えており、その学にとって生成変化の説明^{アイテア}²²を知ることが必須である限り、免れることができない帰結であるように思われる。上のジレンマをもちだすことで誰かが生成変化を否定した場合、ただ「生成変化はある。直観的にそう思われるし、実践的にもなくては困るのだ」と述べるだけでは、生成変化の説明^{アイテア}を求める学が成立したことにはならない。「生成変化がある」という主張が説得力を備えたものであるためには、生成変化はなぜ生じたのかに対する説明を与えることが可能でなければならないからである。このような説明は、なぜこの人間が白い人間になったと考えることができるのかといった個別的な生成変化の問いに対しても与えられるような精度をもちうるものでな

²¹このような批判に対して、 t_2 での白い人間と t_1 での人間は、人間であるという点においては同じなので、両者は持続しているといえる、という反論がありうるかも知れない。しかし、この反論は十分ではない。世界中の人はすべて人間であるという点においては同じだが、かといってここで問題となっているような意味で同一であるとはいえない。

²²本論では *αἰτία* を基本的に「説明」として理解し、特に *αἰτία* の訳語としてそれが使われていることを明確にする必要がある場合には、「説明」という表記を用いる。ただし、特定の解釈を含まない形で *αἰτία* に言及する必要がある場合は、単に「アイテア」と音訳する(よって、いわゆる四原因は「四種の説明^{アイテア}」または「四種のアイテア」になる)。また、関連する語に、中性形の名詞(または形容詞)である *αἰτιον* があるが、これは「説明するもの」と訳す。本論で私は、文からなるアイテアに登場する項として理解できる形相・質料・始動因・目的因を指すものとして説明するものを、これらの項が登場する文からなる形相的説明や質料的説明といったものを指すものとしてアイテアを用いる(これに関しては、Frede 1980 や Leunissen 2010, 180-2 などを参照せよ)。なお、項と文の違いにもかかわらず、本論では「ポリュクレイトスは像の始動因的説明である」や「ポリュクレイトスは像の始動因的説明を与える」といった表現が用いられることがあるが、これに関しては本章注9を参照されたい。項としての形相と文からなる形相的説明の関係をどう理解するかといった問題は、本論文第六章で改めて論じられる。

アイテアを説明と理解することにおいては、本論は Moravcsik 1974, Hocutt 1974, Barnes 1994, 226-7 などに従っている。このような理解の妥当性やその含意は、より伝統的な訳語である「原因」(cause)との対比から長く議論されてきた。説明としてアイテアを理解することの曖昧さや問題点については、Freeland 1991 や Stein 2011b が簡潔なまとめを与えている。本論は説明と原因の優劣を直接論じることを目指すものではないが、特定の出来事や個体(やその集合)を指示することが多いと思われる「原因」に対して、「説明」は文の形をとった記述として理解されることが多いという点から、説明という理解を(本論のアイテア解釈により親和的なものとして)採用する。文からなる推論としての説明と、そこで言及される項としての対象の関係についても、本論文第六章でより詳しく検討する。

ければならないだろう (*Phys.* II.3, 195b25-7)。

これまでの議論で示したことの一つは、『自然学』第一巻第七章で与えられたような日常言語の分析にもとづいた議論では、エレア派の懐疑に答えたことにはならず²³、よって学の成立という目標を達成したことにもならないということである。アリストテレスは、生成変化の学、すなわち生成変化の正しい述べ方を明らかにするような、何か別の議論を用意する必要がある。そして実際に、『自然学』第一巻第八章において、アリストテレスは前章での議論を補強するような論点をさらに導入しているのである。「ただこのようにして〔=*Phys.* I.7 で述べられたような仕方によって〕のみ先人たちの難問が解決されるということ、次に我々は述べよう」(*Phys.* I.8, 191a23-4)²⁴という発言の後に、アリストテレスは生成変化を否定するエレア派のジレンマを改めて定式化しなおす。

- 「あるもの」から「あるもの」は生じない²⁵
- 「あらぬもの」から「あるもの」は生じない

このジレンマをいかに理解するかという問題は長い論争を引き起こしている²⁶。まず「あるもの」と「あらぬもの」に関して、それは端的な有と無なのか、それとも「(すでに何かで)あるもの」と「(何かで)あらぬもの」なのか、また、もし後者だとしたら、何かであるまたはあらぬといわれるところの「何か」を具体的にどう理解するのかといった点が問題になる。「あるもの」と「あらぬもの」をいかに理解するかを決めた後も、ジレンマの二つの文がそれぞれどのような意味で生成変化の否定になっているのか、また、それぞれの仕方で理解された二つの生成変化の否定が合わさった時に、きちんと生成変化の全体が否

²³Kelsey 2010, 115-6 では、基に指定されたものとしての質料を導入することではエレア派の懐疑を解決することはできないし、そもそもアリストテレスがこれを持ちだした理由は懐疑に応答するためではなかったとする解釈が展開されている(この点と関連して *Phys.* I.7 と I.8 を Kelsey がどう理解しているのかについては、Kelsey 2006 と 2008 も参照)。私は、*Phys.* I.7 の議論が懐疑の解決として不十分であるという点には同意するが、懐疑に全面的に応答することを彼はそもそも目指していなかったとする主張には従えない。これは、*Phys.* I.8, 191b30-3 などにおけるアリストテレスのエレア派に対する勝利宣言からすると奇妙な解釈に見えるからである(Kelsey 2006 ではアリストテレスが *Phys.* I.8 で何らかのアポリアに対して答えを与えているということが認められているが、ケルシーがそこで問題となっていると主張するアポリアは非常に限定された仕方で理解されたものであり、よってそこで見出される解決もまたエレア派の懐疑に全面的に応答する力をもつものではない)。これらの点に関する本論の立場は、以下の本文でさらに明らかになるだろう。

²⁴ὄτι δὲ μοναχῶς οὕτω λύεται καὶ ἡ τῶν ἀρχαίων ἀπορία, λέγωμεν μετὰ ταῦτα.

²⁵本論文では、この「あるもの」の事例は論じず、あらぬものからあるものが生じることは可能か否かの分析に集中する。「あるもの」の事例を詳細に検討するためには、*Phys.* I.8 の後半部で挙げられる「犬が馬から生成する」といった難解な例の分析が必要となるが、私は、「あらぬもの」の事例を題材に以下で論じる *Phys.* I.8 での「二通り」の述べ方にもとづく議論が、「あるもの」の事例に対しても基本的に有効だと考える。

²⁶ジレンマの内実の解釈の見取り図は、Kelsey 2006 や Anagnostopoulos 2013 に与えられている(Loux 1993 も参照)。本章での私のジレンマ理解は、主に Anagnostopoulos 2013 に従ったものである。

定されるようになっているのか、といった論点が続く。以下では、私の採用する理解を簡潔に述べるに留める。

まず私は、「あるもの」と「あらぬもの」を、それぞれ「すでに何らかのもの(G)であるもの」及び「Gではないもの」として考える。特に「あらぬもの」に関して、かりにそれを端的な無として理解するならば、そこで否定されている生成変化はいわゆる「無からの生成」であるということになる。しかし、このような理解を採用した場合、(後ほど詳しく検討するが)ある意味では「あらぬもの」から「あるもの」が生じるということ認め、それに対しても「基に指定されたものとしての質料を導入して生成変化の可能性を確保する」という解決を有効と考えているアリストテレスは、(無からの生成を彼が認めていたということを示さないかぎり)理解不能になってしまう(Anagnostopoulos 2013, 247)。このように「Gであるもの」と「Gであらぬもの」として「あるもの」と「あらぬもの」を理解すれば、一番目の「あるもの」から「あるもの」は生じない」という文は、「GであるものはすでにGであるので、これからGであるものが(新たに)生じることはできない」という仕方で解釈できる。問題は、ジレンマを構成するもう一つの文である。「Gであらぬもの」から「Gであるもの」は生じない」という主張は、まだ像でない青銅から像が生成するという事例を想定すれば、端的に間違っただけのものに思われるからである。

この文がどうやって生成変化の否定になっているのかを正當に理解するためには、種子から植物が生成するという事例に対して上で述べられた懐疑を思い出す必要がある。そこで問題となっていたのは、種子に関して、その持続を肯定した場合も否定した場合も、「何かは何かから生成した」という語り方をすることが不可能になってしまうという点であった。それにもとづけば、ここで問われているものもまた、「Gであらぬもの」がそれとして持続する場合は「Gであるもの」は生じないし、「Gであらぬもの」が「Gであらぬもの」ではないものへと変化する場合は、「Gであらぬもの」が「Gであるもの」へと生成変化したと述べることの妥当性がなくなってしまう、という問題にほかならない。この袋小路から抜け出す方法を見つけ出すまでは、「Gであらぬもの」から「Gであるもの」は生じない」という主張を、端的に間違っているとして棄却することはできない。かつ、世界は「Gであるもの」と「Gであらぬもの」に分けることができるので、上で与えられた二種の生成変化の否定は、すべての生成変化の否定を意味する(以下では、「あるもの」という表現で「すでにGであるもの」を、「あらぬもの」で「Gであらぬもの」を指す)。

生成変化の可能性を確保するためにアリストテレスは、まずジレンマの二つの文を以下

で示された対比にもとづいて具体的な例を用いて理解することを提案する。

- 「あるもの」または「あらぬもの」が何かをなす、〔何かを〕なされる、または、何らかの「これ〔=例えば、像や植物〕」²⁷になる (*Phys. I.8, 191a35-6*)²⁸
- 医者がある何かをなす、〔何かを〕なされる、何かが医者からである²⁹、または、〔医者が何かに〕なる (*Phys. I.8, 191b1-2*)³⁰

アリストテレスは、後者の「医者が」で始まる文は実は「二通り」に解釈されうると述べ、それを「あるもの」や「あらぬもの」の事例に適用すれば、ジレンマから抜け出すことができると考えている。「医者が」で始まる文が二通りに理解されることを示すためにアリストテレスが与えるのは、以下に挙げた様々な文の羅列である (*Phys. I.8, 191b4-6*)³¹。さらにアリストテレスは、これらのそれぞれに対して、そのような言い方が適切か否かに関する評価も与えている³²。

A1： 医者が医者として建築する（言えない）

A2： 医者が建築家として建築する（言える）

B1： 医者が医者として白いものになる（言えない）

B2： 医者が黒いものとして白いものになる（言える）

C： 医者が医者として治療したり、医学に無知なものになる（言える）

この様々な文がジレンマを構成する二つの文と異なるのは、「として (ἢ)」句が挿入されているという点である。しかし、この羅列が具体的にどのような二通りの理解の仕方を提示しているのかは、この点だけからは直観的に理解できない。一つの区別は、「医者が医者として」述べられているもの (A1, B1, C) と、「医者が医者ではない他の何かとして」述べられているもの (A2, B2) との間に認めることができる。これは、言い直せば「XがYと

²⁷ 「これ」は *τόδε* を訳したものである。この表現は、「ある・これなるもの」(*τόδε τι*)との関連のもとで理解される必要がある。この点に関しては、中畑 2013, 98-9 を参照せよ。

²⁸ ἢ τὸ μὴ ὄν ἢ τὸ ὄν ποιεῖν τι ἢ πάσχειν ἢ ὅτι οὖν τόδε γίνεσθαι

²⁹ 「何かが医者からである」という表現が正確に何を意味しているのかは不明である。同様の表現が「あるもの」と「あらぬもの」からなる対句には見られず、同章で他にこれに相当するものが確認される *Phys. I.8, 191b23-4* ではこれが「なる」と同じ意味で使われているので、ここでも「なる」を単に言い換えたものとみなす。

³⁰ τὸ τὸν ἰατρὸν ποιεῖν τι ἢ πάσχειν ἢ ἐξ ἰατροῦ εἶναι τι ἢ γίνεσθαι

³¹ οἰκοδομεῖ μὲν οὖν ὁ ἰατρὸς οὐχ ἢ ἰατρὸς ἀλλ' ἢ οἰκοδόμος, καὶ λευκὸς γίνεται οὐχ ἢ ἰατρὸς ἀλλ' ἢ μέλας· ἰατρεῖε δὲ καὶ ἀνίατρος γίνεται ἢ ἰατρός.

³² ここでの適切な文とそうでない文の区別は、文法的な観点からなされたものではない。ここでの区別の基準は、「生成変化がそこから生じたものを述べた文として適切か否か」であるが、この点に関しては続く本文でより詳しく述べる。

して」における Y が X の何であるかにもとづいている場合 (X を自体的 *καθ' αὐτό* に述べる場合) と、そうでない場合 (X を付帶的 *κατὰ συμβεβηκός* に述べる場合) との区別であると理解することができる。生成変化に関するある言及 (医者が建築する、医者が白いものになる) は、医者が医者として述べられていない場合には認められるが、医者が医者として自体的に述べられている場合には認められない。別の言及 (医者が治療する、または医学に無知なものになる) は、逆に医者が医者として述べられている場合に最も的確に述べられるとされる。医者が自体的に述べられる後者の場合においては、そこで生じるとされる生成変化は、まさに医者であることと関係をもつようなものでなければならない。これに対して、医者が付帶的に述べられる前者の場合では、それがなすとされる活動は、まさに医者であることと関係づけて述べられる必要はないということになる。

医者を自体的に述べることと付帶的に述べることの区別は、エレア派のジレンマに対して果たしてどのような意味をもつのだろうか。これらの文章を羅列した上でアリストテレスは、「あらぬもの」から「あるもの」は生じない」という生成変化の否定が正しいのは、「あらぬものとしてのあらぬもの」からは、「あるもの」は生じない」とそれが理解された場合であると述べる。上で論じられた二通りの述べ方の分類にもとづけば、ここでは「あらぬもの」から「あるもの」が生じるということに関して二つの述べ方が想定され、片方は否定、他方は肯定されているということになる。

D1 「あらぬもの」が自体的に述べられる場合 : 「あらぬもの」としての「あらぬもの」から、「あるもの」が生じる (言えない)

D2 「あらぬもの」が付帶的に述べられる場合 : 「あらぬもの」ではないものとしての「あらぬもの」から、「あるもの」が生じる (言える)³³

アリストテレスは、上の文を端的 (すなわち、自体的) な意味での「あらぬもの」からの生

³³D2 における「あらぬもの」ではないものを「あるもの」の二重否定と理解し、全体として「あるもの」としての「あらぬもの」から、「あるもの」が生じる」と理解することもできなくはない。私がこの解釈を採らない理由は以下のとおりである。まず、エレア派に従って事物を「あるもの」もしくは「あらぬもの」に分ける場合、「あらぬもの」は「あるもの」ではありえないので、それを「あるもの」として理解することは端的に不可能ということになる (さらにいうと、アリストテレスによれば彼らは二通りの語り方の存在を理解していないので、そもそも「～として」の挿入をすることができない)。また、アリストテレスが採用したと後ほど本論文で主張される、事物を「あるもの」と「あらぬもの」に二分しない立場からすれば、「あらぬもの」ではないものを端的に「あるもの」と同一視することは論点先取になる。なお、いずれにせよ *Phys.* I.8 のテキストで明確に現れているのは、D1 の「あらぬもの」としての「あらぬもの」からの生成の否定だけであり、問題となっている D2 に関しては特定の解釈を支持する直接の証拠はない。本章では、ここで述べられたような理由に照らして「あらぬもの」ではないもの」という解釈を採用する。

成変化に言及したものと捉え、下の文を付帯的な意味での「あらぬもの」におけるそれに言及したものと捉えた上で、前者は棄却し後者は認める (*Phys.* I.8, 191b13-5)。

それではこの区別をもとに、生成変化の質料の解釈の問題に戻ることにしよう。上で与えられた五つの例のうち、始動因に関するものではなく、『自然学』第一巻第七章において問題となった質料と形相の枠組みに対応するものは、以下の二つである。

B1: 医者が医者として白いものになる (言えない)

B2: 医者が黒いものとして白いものになる (言える)

「あるもの」と「あらぬもの」という述べ方に合わせて、「医者」を「(白いもので)あらぬもの」に、「白いもの」を「(白いもので)あるもの」に修正すれば、B1の文は以下のようなものになる。

B1': 「(白いもので)あらぬもの」が「(白いもので)あらぬもの」として「(白いもので)あるもの」になる (言えない)

問題は、B2の文をいかに変換するかである。「黒いもの」を「医者」と同じ仕方で「(白いもので)あらぬもの」に変換した場合、両者は区別がつかなくなり、アリストテレスがB1は言えないがB2は言えると述べたことが理解不可能になる。また、「医者」と「黒いもの」を同一視してしまった場合、XをXとして述べないことで生成変化を確保するという戦略そのものが、根本的に崩れてしまうことにもなる。よって、ここでの、B2はD2に従って以下のように変換されるべきである。

B2': 「(白いもので)あらぬもの」が「(白いもので)あらぬもの」ではないものとして「(白いもので)あるもの」になる (言える)

B1'は「あらぬもの」を自体的に述べた場合の生成変化に関するものであり、白いものであらぬものが、まさに白いものであらぬものという資格において白いものであるものになる、ということを述べている。しかし、「白いものであらぬもの」であるということには、「白いものであるもの」ではないということが含まれており、その意味では、白いものであらぬものという資格にもとづいてそれが述べられている限り、それは「白いものであるもの」であってはならない³⁴。アリストテレスがあらぬものを自体的に述べた場合の生成変

³⁴始動因の例だが、A1が不適切とされていたことも、同様の仕方で説明される。

化を拒否する理由が、実際に上のようなものであったかは議論の余地があるが、ここでより問題になるのは、彼が可能であると認めている、あらぬものを付带的に述べた場合の生成変化をどう理解するかという点である。

B2：医者が黒いものとして白いものになる（言える）

B2'：「(白いもので)あらぬもの」が「(白いもので)あらぬもの」ではないものとして「(白いもので)あるもの」になる（言える）

B2'における「あらぬもの」は付带的に述べられており、よってここでは「あらぬもの」がまさに「あらぬもの」であるという資格において「あるもの」へと生成変化するということが主張されているわけではないので、B1'のように端的に拒否される必要はない。すなわち、ここで「あらぬもの」を付带的に述べることの意義は、「あらぬもの」であるという性格から離れることを可能にする（「あらぬもの」ではないものになる）ことにあり、「あらぬもの」としての性格をもつことを免れたものについては、「あるもの」になる可能性を拒否することの必然性はなくなる。

しかし、「拒否することの必然性はなくなる」という消極的な主張は、「生成変化が確保された」ということを直ちに保証するわけではない。次に待ち受けているのは、積極的な否定は免れたD2（及び、B2とB2'）の妥当性をどのように擁護できるのかという課題である。これに関する手がかりを得るためには、質料の例からいったん離れ、上で与えられた五つの例文のうちの始動因の例に戻る必要がある。A2の「医者が建築家として建築する」は、医者が医者として述べられていないので付帯的な例に属すが、同じく付帯的な例に属する「黒いものとして白いものになる」(B2)とは何か異なっているように思われる。何が違うのかを理解するために、建築家として建築するという事例を題材にして、上ではぬけ出すことができなかつた持続と変化のジレンマを改めて考察することにしてみよう³⁵。

1. 持続を認める： t_1 と t_2 を通じて、建築家が同一な仕方で持続しているとしよう。そして、建築家が完全に同一な仕方で持続しているので、建築活動が行われなかったとしよう。その場合、そもそも彼を建築家と呼ぶことはできるのだろうか？「一生涯まったく建築しない建築家」は、特殊な場合を除き語義矛盾であるように思われる。このようなものがありえないとすれば、建築家が実際の建築活動を始める

³⁵結果的に我々は、「二通り」の語り方の区別とそれを理解するために与えられた様々な例文の検討を経て、持続と変化のジレンマに立ち戻ってきたということになる。

ということは、彼が建築家であるために必ず必要であるということになる。 t_1 で建築家と言われたものは、必ず t_2 において建築活動を行わなければならないのである。すなわち、「建築家が建築を一切しないで持続する」という言い方そのものが、そもそも許されない。 t_1 における建築家の存在を認めることは、 t_2 において建築活動が行われることをすでに含意する。

2. 持続を認めない：今度は建築家が何らかの仕方に変化していると考えてみよう。すなわち、 t_1 において特定されていた建築家は、(彼は動き出さなければならないので)そのままでは t_2 においては観察することができなくなる、としてみよう。では、 t_1 での建築家と t_2 の建築家はまったく関係をもたない別のものである、と述べることはできるのだろうか？ そうは言えない。そもそも t_1 で存在していたものが建築家であると認められたとき、すでに t_2 においてその建築家が建築活動をするということが含意されていたのである。 t_2 における建築活動と切り離される場合、 t_1 において観察されたものは、そもそも建築家ではなかったということになるので、「 t_1 での建築家と t_2 での建築家は無関係である」と述べることはできなくなる。 t_2 において見られる建築活動をしている建築家と、 t_1 において見られる建築家が完全に同一な仕方では存在しているわけではないからといって、 t_2 における建築家と t_1 における建築家を無関係とすることはできない。

黒いものが、「白いものになること」という変化を経ることなしにも黒いものでありうるのに対して、建築家は建築することなしにはそもそも建築家ではありえない。建築家であることをこのような仕方では理解した場合、ある医者が建築家でもあるなら、建築家としてのその医者が建築するという生成変化 (A1) は、疑いえないことであるように思われる。建築家とは「建築すること」を含意してのみ理解されうるものなのである³⁶。しかし、A1 の妥当性を確保するためには、今度は別の点が問題になる。「X が Y として Z する」の後半

³⁶ではなぜアリストテレスは *Phys. I.8* において A2 と B2 を、等しくそう述べるものが許されるものとして併置するのだろうか。これは、当該箇所ではアリストテレスがこれらを羅列した第一の目的が、「あるもの」と「あらぬもの」の二分法にもとづいて「X が Y として Z する」という生成変化の述べ方を分析する際に、「あらぬもの」が「あらぬもの」として述べられる事例 (A1 と B1) と、「あらぬもの」が「あらぬものではないもの」として述べられる事例 (A2 と B2) を分け、後者の生成変化の可能性を (前者ほど端的に否定される必要はないということを示すという、消極的な仕方) でまず確保することにあつたからである。これは、X と Y の関係における自体的・付帯的の区別に関するものであり、本文でこれからより積極的な仕方では生成変化を認めるために論じられる、Y と「Z すること」の関係における「建築家と建築すること (自体的、A2)」と「黒いものと白くなること (付帯的、B2)」との区別とは異なる。また、本章注 58 も参照せよ。

部を「Yであれば必ずそれをし、それをしなければYであるといえないような活動Zを、Yとして行う」として理解することで、YとZの間に懐疑を差し挟むことを封じるとしても、なぜXがYとして理解されるのかという疑問は依然として残るからである。すべての医者、同時に建築家であるわけでもないし、医者でないものから建築がなされる可能性もある。医者を「建築家として」理解することは、本当に許されることなのだろうか。もしここに懐疑が入り込む余地があるとすれば、結局エレア派は、「として」句を導入してもその妥当性を否定しうるのではないか。

これらの疑問は、別の仕方では以下のように述べることができる。アリストテレスが『自然学』第一巻第八章で与えた解決が、何かが自体的に述べられた場合における生成変化を否定し付帯的に述べられた場合の生成変化のみを認めるというものであった場合、それに相当するA2やB2、D2といった、XをXではないものとして述べることによってなりたつ付帯的な生成変化は(A1、B1、D1のように端的に否定されることはないが)依然として疑いものである。結局彼はエレア派の懐疑に打ち勝つことに失敗したということになるのではないか。私は、このような疑問に答える鍵が、実は上で列挙された五つの文においてすでに与えられていたと考える。それは、次のものである(以下では、Cにおける「医者が医者として治療したり、医学に無知なものになる」の選言うち、「治療する」のみをC1としてまず扱う。「医学に無知なものになる」(C2)との関係をいかに理解するかは、次節で論じる)。

C1: 医者が医者として治療する(言える)

私は、A1とB1、D1においては否定されていた「何かが自体的に述べられた場合での生成変化」が、ここでは肯定されていると考える³⁷。だとすれば、C1の「何かが自体的に述べられた場合の生成変化」は、同じ章で明確に拒否されている、「あるものがあるものとし

³⁷ *Phys.* I.8において付帯的な変化がいかに保証されるかを主に論じる Anagnostopoulos 2013 は、アリストテレスが付帯的な説明だけでなく自体的な説明をも必要としていたという点を理解しているが、それが具体的にどのように保証されるのかに関して、*Phys.* I.7に短く言及する以上の明確な議論を与えていない(Anagnostopoulos 2013, 260; Loux 2012, 397n24も参照)。私は、*Phys.* I.8においても自体的な説明を理解するために必要な要素は示唆的にすべて含まれており、これから本文で論じる *Phys.* II.3やIII.1といった関連する箇所を確認することで、その詳細を明らかにすることができると思う。この点と関連して、Anagnostopoulos 2010, 69-70及び2013, 271では、本文で後ほど示される私の解釈とは違って、自体的な質料的説明を理解するために「可能的な存在」を *Phys.* Iの文脈に読み込む試みが否定されている。しかし、I.8を含む *Phys.* I全般において、可能的なものに対する言及は度々行われている(I.2, 186a3; I.8, 191b27-9; I.9, 192a27-8; Kelsey 2006, 347-50)。よって、可能的な存在を積極的に排除すべき理由は見当たらない。なお、後ほど本文で言及される *Metaph.* Λ.2, 1069b15-20も参照せよ。

であるものになる」や「あらぬものがあらぬものとしてあるものになる」といった事例に分類されるものであってはならない。ここから導き出されるのは、この何かが自体的に述べられた場合での生成変化は、「あるもの」と「あらぬもの」の二分法では語り尽くされない何かを想定した上でのみ可能になるということである。私は、この「あるもの」と「あらぬもの」の二分法では捉えることのできない何かを明らかにすることが、付帯的な述べ方にもとづいたこれまでの生成変化の擁護の限界を乗り越え、エレア派の懐疑に積極的に対抗し、生成変化の学を構築するための一つの鍵となると考える。しかし、この主張の内実を明確にするためには、いくつもの点をさらに明らかにしなければならない。

まず、「あるもの」と「あらぬもの」のどちらにも分類されない新たなものをアリストテレスが確かに導入していたということを示し、その内実を、本章の主題である生成変化の質料との関連から明らかにする必要がある。また、この新たな何かによって確保されるだろう、あるものが自体的に述べられた場合の生成変化が、『自然学』第一巻第八章で二通りの述べ方を区別することによって認められた、A2 や B2 のような、あるものが付帯的に述べられた場合の生成変化とどのような関係にあるのかを明らかにすることも必要となる。これらの課題を遂行し、アリストテレスのエレア派への応答を十全に理解するために、私はまず（*Phys.* I.8 では部分的な解明で終わっている）生成変化の述べ方の理論を形式的な仕方では提示している、『自然学』第二巻第三章へと進むことにする。

第4節 自体的質料をめぐる

『自然学』第二巻第三章においてアリストテレスは、質料・形相・始動因・目的因からなる四種の説明^{アイティアー}³⁸を区別した後に、それぞれの説明^{アイティアー}が述べられる様式の多様性にさらに注目する。そこでは、例えば像の生成の始動因の説明として、付帯的な説明である「ポリュクレイトス」と自体的なそれである「彫刻家」が区別される（*Phys.* II.3, 195a32-5; *Metaph.* Δ.2; E.2）。アリストテレス本人が与えたこのような例にもとづいて、多くの先行研究は説明における自体的と付帯的の区別を理解するために始動因の例にまず注目してきた。実際は、アリストテレスは自体的と付帯的の区別を、始動因の説明以外の質料的説明などにも等しく適用されるものとして考えている（*Phys.* II.3, 195a26-b6; *Metaph.* Δ.2, 1014a15-20）。特にエレア派のジレンマとの関連から質料概念を理解することを目指す我々にとって問題

³⁸アイティアーを説明と理解することの内実及び説明という言葉の用法に関しては、本章注9及び22を参照せよ。

となるのは、アリストテレスが、質料的説明における自体的と付帯的の区別を明らかにするような例を与えていないという点である³⁹。

よって、我々もまた始動因的説明の事例にもとづいて質料的説明を理解するという戦略を採らざるをえない。まずは、像の生成における自体的な始動因的説明と付帯的なそれとの違いを確認しよう。「彫刻家」は、その存在が認められたときには彫像活動の成立が必ず含意されるという点において像の生成と自体的な関係をもつものであり、よって像の生成を自体的に説明するものであるといえる。しかし、「ポリュクレイトス」の場合はそうではない。ポリュクレイトスが像の生成に関わることはありうるが、それはいわば彫刻家であることに付帯するものとしてであり、ポリュクレイトスは、ポリュクレイトスであるという点において像の生成を可能にしているわけではないので、ポリュクレイトスと像の生成の関係もまた付帯的なものでしかない。ではこの区別は、何かが白いものになるといった生成変化における質料を説明する事例に対しては、どのように適用できるのだろうか。この事例における質料を自体的に説明するものの候補として、アリストテレスが明確に否定しなければならないのは「白いものであらぬもの」である (*Phys.* I.8, 191b25-6)。それ以外のより可能性のある候補としては、「人間」や「白くない(または、黒い)人間」、あるいは、同じく『自然学』第一巻第八章で与えられていた以下の文に認められる「黒いもの」をまず想定することができる。

B2: 医者が黒いものとして白いものになる(言える)

しかし、「黒いもの」、「人間」、「白くない(または、黒い)人間」といったものを、建築することにおける建築家に相当するものと考えすることはできない。建築家は建築活動を行うという点を含意してのみそれとして理解されるが、人間は「白いものになる」という変化を含意してのみそれとして理解されるわけではない。さらに、やや遠回りになるが、次のテキストからも、アリストテレスがこれらを、何かが白いものになるという生成変化における質料を自体的に説明したものとしては認めないだろうという点を読み取ることができる。

³⁹質料形相論と自体的・付帯的の区別に関してこのような状況が生じた原因の一端は、この関係を明らかにするようなものに限らず、そもそも四種のアイディアの内実を明確にしてくれるような例をアリストテレス本人が与えていなかったという点にある (Sprague 1968; Barnes 1969, 129-31; Hocutt 1974, 388-9; Todd 1976)。自体的と付帯的の区別を明確に意識しながら質料と形相を考察している論者すらも、明瞭な例を与えることに成功していない(例えば、Moravcsik 1974, 14-6)。なお、形相における自体的と付帯的の区別は、本論文第七章で論じられる。

「可能的に何かであるもの」の現実態⁴⁰が^{キネーシス}運動変化である。しかし、それは〔「可能的に何かであるもの」が〕、それ自身〔＝例えば、青銅〕としてではなく、^{キネーシス}「運動変化しうるもの」として⁴¹現実的にあり現実に活動しているときにそうなのである。ここで私は「として」を次の意味で述べている。すなわち、青銅は可能的に像であるが、青銅としての青銅の現実態は、^{キネーシス}運動変化〔＝彫像活動を被ること〕ではない。というのは、「青銅であること」と「可能的に何かであること」とは同じことではないからである。もしもこれらが端的にその説明規定において同じであったなら、青銅としての青銅の現実態も^{キネーシス}運動変化であったかもしれない。しかし、いま述べたように、両者は同じではないのである。

(*Phys.* III.1, 201a27-34)⁴²

冒頭の一文から明らかであるように、この引用でアリストテレスが論じているのは、「彫像活動を被ること」がその例として挙げられている^{キネーシス}「運動変化」をいかに定義するかという問題である。多くの論者によって議論されてきたこの問題に立ち入る余裕は本論文ではないが、この引用に見られる以下の区別は、自体的な質料の探求においても重要な示唆を与える。

● 可能的⁴³に像であるもの

⁴⁰本論文では一貫して「現実態」と訳したが、この *ἐντελέχεια* (*ἐνέργεια* と言い換えられることも多い) をどう訳すかは、^{キネーシス}運動変化の規定の循環性とも相まって論争になっている (Anagnostopoulos 2010)。他に、「現実化」や「活動」といった訳語が与えられる場合もあるが、本論の目的は^{キネーシス}運動変化の規定を明らかにすることではないので、この問題には立ち入らない。

⁴¹ここでの「として」句の役割に関して、この限定が加わることによって「可能的に像であるものの現実態」が指すものを、結果物である「像という対象」から、結果物へと至るための過程である「彫像活動を被るという変化」へと変更することができると思う立場がある (Kosman 1969 など)。それに従えば、可能的に像であるものの現実態は以下の二つに分けられる (以下で^{キネーシス}「運動変化しうるもの」と「可能的に像であるもの」を同一視しているという点については、本文で後ほど述べる)。

1. 可能的に像であるものの現実態：像という対象

2. 可能的に像であるものの、可能的に像であるものとしての、現実態：彫像活動を被るという変化

本論は、ここでの「として」句が「可能的に像であるものの現実態」の内実を「像という対象」から「彫像活動を被るという変化」へと変える役割をもつという上の解釈は採らず、Anagnostopoulos 2010, 45-59 (及び 64-7) に従って、ここでの「として」句は、(*Phys.* I.8 で論じられたように)「可能的に像であるもの」が自体的に述べられているということを明らかにする役割のみをもつ、と理解する。

⁴²*ἡ δὲ τοῦ δυνάμει ὄντος (ἐντελέχεια), ὅταν ἐντελεχέαι ὄν ἐνεργῆ οὐχ ἡ αὐτὸ ἀλλ' ἡ κινητόν, κίνησις ἐστίν. λέγω δὲ τὸ ἡ ὡδί. ἔστι γὰρ ὁ χαλκὸς δυνάμει ἀνδριάς, ἀλλ' ὅμως οὐχ ἡ τοῦ χαλκοῦ ἐντελέχεια, ἡ χαλκός, κίνησις ἐστίν· οὐ γὰρ τὸ αὐτὸ τὸ χαλκῶ εἶναι καὶ δυνάμει τινί [κινητῶ], ἐπεὶ εἰ ταῦτόν ἦν ἀπλῶς καὶ κατὰ τὸν λόγον, ἦν ἂν ἡ τοῦ χαλκοῦ, ἡ χαλκός, ἐντελέχεια κίνησις· οὐκ ἔστιν δὲ ταῦτόν, ὡς εἴρηται.*

⁴³*δύναμις* とその派生語をいかに訳すかは難しい問題である。近年の解釈者たちは、potentiality、possibility や capacity といったものを束ねるアナロジー的な概念としてこれを理解することを提案した (Makin 2006, xxii-xxvii; Makin 2012; Anagnostopoulos 2011 も参照)。私もそのような提案に賛成だが、この点についてはこれ以上追求し

- 像へと運動変化しうるもの（すなわち、彫像活動を被りうるもの）
- 青銅

まず問題になるのは、「可能的に何かであるもの」と「運動変化しうるもの」の関係である。上の引用でアリストテレスは、「可能的に何かであるものの、運動変化しうるものとしての、現実態」が運動変化であると述べている。『自然学』第三巻第一章において、「可能的に何かであるもの」は度々運動変化の一種である性質変化や増大・減少といったものを被りうるものに置換されており（*Phys.* III.1, 201a10-5）後ほど改めて述べられる運動変化の規定もまた「運動変化しうるもの、運動変化しうるものとしての、現実態」（*Phys.* VIII.1, 251a9-10）⁴⁴というものになっているので、私は「可能的に何かであるもの」と「運動変化しうるもの」がここでは同じことを意味していると考え。よって、最初の二つは置換可能である。

次に問題となるのは、青銅と「可能的に像であるもの=像へと運動変化しうるもの」の関係である。幾人かの注釈者は、これらは実際には同じ一つのものを指しており、単に「その説明規定において」のみ異なると考えている⁴⁵。しかし、両者の関係に関しては、実際には二つの異なる解釈の可能性が与えられているように思われる。（恐らくこれらの注釈者がコミットしていると思われる）一つの解釈は、青銅と「像へと運動変化しうるもの」は、その説明規定は異なれど数においては必然的に一つである、とする理解である。しかし、青銅と「像へと運動変化しうるもの」の関係は、それらが指すものが常に外延を等しくするような二つのもの、例えば凹線と凸線（*EN* I.13, 1102a30-1）の関係とは決定的に異なるように思われる。凹線と凸線が数における一対一対応を必然的な仕方でもつものに対して、青銅は像へと運動変化しうる唯一のものではなく、青銅ならばすべて像へと運動変化しうるというわけでもないからである（*Metaph.* Θ.7, 1049a8-11）。さらには、青銅が存在するにもかかわらずいかなる青銅も像へと運動変化しえないような世界を想定することすら可能である。例えば、加工が不可能な程度に極めて少量の青銅しか存在しない世界においては、それが像へと運動変化することはないだろう⁴⁶。その意味では、上の引用での「青銅は可能

ない。同じ問題は、*ἐνέργεια* 等にも当てはまる。

⁴⁴ *φαιμέν δὴ τὴν κίνησιν εἶναι ἐνέργειαν τοῦ κινητοῦ ἢ κινητόν.*

⁴⁵ 例えば、Simplicius 1882, 422-3 (2002, 40-3)、Themistius 1900, 70-1 (2012, 82-3) や Hussey 1983, 61-2 など。

⁴⁶ 引用に続く箇所において、アリストテレスは「青銅」と「像へと運動変化しうるもの」の関係を説明するために、類比的な例を挙げている。その一つである、「色であること」と「可視的であること」の関係は、一見凹線と凸線の関係に類似したものに見えるかも知れない。しかし、アリストテレスにとって色は白と黒の特定の比によっ

的に像であるが」というアリストテレスの発言は、青銅と「可能的に像であるもの」が凹線と凸線のような関係をもつということを示唆するものとしてではなく、「ここで論じられているような、実際に像への^{キーンネーシス}運動変化が生じたということが前提されているような場面においては、青銅は「像へと^{キーンネーシス}運動変化しうるもの」として措定されるが」という発言として理解されるべきであると思われる（*Top.* I.5, 102a7-17 も参照）。結果的に、「青銅」と「像へと^{キーンネーシス}運動変化しうるもの」は置換可能ではないということが示されたことになる⁴⁷。

「像へと^{キーンネーシス}運動変化しうるもの」と青銅が置換可能でないということは、質料の自体的説明と付帯的説明を求めるに際してどのような意味をもつのだろうか。この点を理解するためには、彫刻家とポリュクレイトスの事例を考察することが再度役に立つ。ポリュクレイトスは彫刻家になれるが、しかし、彼が彫刻術を失ったからといって、彼がポリュクレイトスでなくなるわけではない。ポリュクレイトスが像の生成をその始動因として説明することはありえないことではないが、彼が像の生成を説明しうるのは、彼が彫刻家としてある限りにおいてである⁴⁸。かつ、彫刻家になれるのはポリュクレイトスだけではないので、ある像は別の彫刻家によっても作られうる。このことから、なぜ単に「ポリュクレイトス」と述べるのが像の始動因的説明を与える際に付帯的な意味しかもたないのかが明らかになる。端的に言えば、像とポリュクレイトスがもつ関係は、像と彫刻家がもつ関係とはまったく異なるのである。像が生成した場合、それは必ず彫刻家によって作られている必要が

て成立するものを指す概念であり、それらの比は場合によっては可視的でないことがありうる。面積が小さすぎる場合（*SS* 6, 445b29-6a7）や極端な比によって眼が麻痺したり、破壊されたりする場合（*DA* II.12, 424a28-32）がそれである。よって、「色であること」と「可視的であること」は、その外延を異にする。

もう一つの例である、「健康でありうるもの」と「病気でありうるもの」に関しては、これらの外延は厳密に一致するように思われる。しかし私は、この両者は「青銅」と「像へと^{キーンネーシス}運動変化しうるもの」の事例と厳密に対応するものとして出されたものではなく、「青銅」と「像へと^{キーンネーシス}運動変化しうるもの」のそれぞれの現実態の意味が異なるという点を特に示すために用意されたものと考える。

⁴⁷特に *APo.* II.2 における「として」句を外延という観点から理解することを試みる解釈として、Ferejohn 2013, 84-90 を挙げることができる。フェアジョンは、このような外延的読解が *Phys.* での「として」句にも同様に適用できるかに関して留保的だが（86）、私は、II.3 及び *Phys.* III.1, 201a27-34 をもとにした I.8 の「として」句の理解に関しては、外延の問題とこれらの箇所を関連づけることが有益だと考える。

⁴⁸Anagnostopoulos 2010, 2013 では、自体的説明を示すものとしての「として」句が、生じるものと生じさせるものとの関係を因果的・説明的に有意な仕方では表すものでなければならないという指摘がなされている（しかし、自体的な説明が具体的にどのような仕方ではそれを表すようなものになっているのかに関しては、彼は明白な解釈を与えていない）。私は、自体的な説明項とその被説明項に対して単なる外延的な関連以上のことを要求するような指摘に基本的には賛成だが、「として」句、自体的、外延における一致、因果的・説明的な関連性といった様々な要素の関係を完全に明らかにすることは本論ではできない。ここでは、「何かが Y として Z になる」という説明における Y と「Z になること」が本文で述べたような外延的な関係をもつことは、その説明が自体的な説明であるための必要条件ではあると指摘するに留める（Ferejohn 2013, 86, 86n49）。なお本論は、因果的・説明的に有意な述べ方が具体的にどのようにして可能になるのかに関して、自体的説明のみにその役割を負わせるのではなく、自体的と付帯的な説明がともに用いられることによって有意な説明が可能になる、とする立場をとる。両者の役割については、本章第五節において論じる。

あるが、それが必ずポリュクレイトスによって作られている必要はない。

像の自体的な始動因的説明（彫刻家）が、像が生成したならば必ずそれによって像が生成していなければならないようなものを明らかにするものであったならば、像の自体的な質料的説明もまた、像が生成したならば必ずそれから像が生成していなければならないようなものを明らかにするものである必要がある⁴⁹。それでは、青銅は、像が生成したならば必ずそれから生成していなければならないようなものなのだろうか。上の引用を論じる際になされた、「像へと運動変化しうるもの」と青銅が置換可能ではないという考察にもとづけば、そうではないということは明らかである。何かが像になるためには、それは「像へと運動変化しうるもの」である必要があるが、すべての青銅が「像へと運動変化しうるもの」である必然性も、「像へと運動変化しうるもの」がすべて青銅である必然性もないのである。同じ理由によって、「人間」や「白くない（または、黒い）人間」、「黒いもの」もまた、白いものの生成における質料の自体的説明にはなりえない⁵⁰。

それでは「像へと運動変化しうるもの」が自体的な質料的説明を与えるのだろうか。残念ながら、これも否定されなければならない。『自然学』第三巻第一章の後半部においてアリストテレスは、「建築活動を被りうるもの〔＝家へと運動変化しうるもの〕」の現実態は、建築活動または家のどちらかだが、すでに家が存在しているときは、もはや「建築活動を被りうるもの」はない」（*Phys.* III.1, 201b10-2）⁵¹と述べている。像が生成したときには、像にこれからなるところの、像へと運動変化することのできる対象はもはや存在しないので、「像へと運動変化しうるもの」は消滅している。問題は、『自然学』第一巻第九章でアリストテレスが与える質料の規定においては、質料が、それから生じた各々の事物に内属するものとされているという点である（*Phys.* I.9, 192a31-2）。何かが生じたときには消滅してしまっている「像へと運動変化しうるもの」は、明らかにこの規定に当てはまらない。

ここで注目すべきは、「可能的にあるもの」として何かを規定することが、必ずしも運動変化を論じる場面においてのみ行われているわけではないという点である。可能態と現実態が様々な仕方で理解されるということが述べられる『形而上学』Θ巻第六章において、アリストテレスは「すべてのものに定義を求めるべきではなく、そこに見出すべきはアナロジーである」（*Metaph.* Θ.6, 1048a36-7）⁵²という可能態と現実態を理解する際の指針

⁴⁹ 自体的な説明項と被説明項の関係に関しては、*APo.* II.17 及び Barnes 1994, 252-7 を参照せよ。

⁵⁰ 青銅や人間が像の生成や白いものの生成の自体的な質料ではありえないという点に関しては、Anagnostopoulos 2010, 52-3 も参照せよ。

⁵¹ ἡ γὰρ οἰκοδόμησις ἢ ἐνέργεια τοῦ οἰκοδομητοῦ ἢ ἡ οἰκία· ἀλλ' ὅταν οἰκία ᾖ, οὐκέτ' οἰκοδομητὸν ἔστω·

⁵² καὶ οὐ δέῃ παντὸς ὄρον ζητεῖν ἀλλὰ καὶ τῷ ἀνάλογον συνορᾶν,

を明らかにした上で、アナロジーで理解されるそれらの例をいくつか挙げる。本論にとって大事なのは、そこで質料と「質料から形作られたもの」の関係が^{キーンネーシス}運動変化における可能態・現実態の例と並列されているという点である。このことは、「^{キーンネーシス}運動変化しうるもの」と同一視することはできない「質料」もまた「可能的に何かであるもの」として理解されうるということを意味する。

結果的に「可能的に G であるもの」は、以下のように、異なる二つの仕方で用いられているということになる⁵³。

1. G へと^{キーンネーシス}運動変化しうるもの (G が生成した後は消滅する): 『自然学』第三巻での^{キーンネーシス}運動変化の分析における「可能的に G であるもの」
2. G の質料 (G が生成した後も G に内属する): 『自然学』第一巻で論じられるような生成変化と質料形相論の枠組みにおける「可能的に G であるもの」

2 の「可能的に G であるもの」は、「^{キーンネーシス}運動変化しうるもの」と同義で使われた 1 の「可能的に G であるもの」とは異なる。どちらも可能態と現実態という枠組みにもとづいたものであり、その意味でまさに可能態という言葉がともに用いられているが、両者は G が生成した後も存続するかしないかにおいて外延を異にする。しかし、これらが等しく可能態として知られるのはアナロジーによってであるとはいえ、両者は単に偶然的な関係しかもたないわけではない。2 の「可能的に G であるもの」があるということは、1 のそれがあるということを含意するからである。像が何かから生じたとき、像になっているだろうその何かは、必ず彫像活動を被っていた必要がある⁵⁴。

ここから導き出されるのは、像の質料を自体的に説明するものは、「青銅」でも「像へと^{キーンネーシス}運動変化しうるもの」(及び、それと同義で使われる 1 の「可能的に像であるもの」)でもな

⁵³ 以下で私が採用する、^{キーンネーシス}運動変化を論じる場面での「可能的にあること」を、質料から生成した結果物を論じる場面でのそれから切り離す解釈は、すでに Ross 1936, 536 などに見出すことができる。その場合、^{キーンネーシス}運動変化を論じる場面における可能態は (それ以外の可能態と現実態を用いた枠組みで論じられる事物との関連から切り離されるため)「^{キーンネーシス}運動変化の可能態」という仕方ではしか説明できないものであり、その現実態もまた^{キーンネーシス}運動変化としてのみ説明できるということが帰結する。このような解釈をとると、^{キーンネーシス}運動変化の規定が「^{キーンネーシス}運動変化しうるものの現実態」すなわち「^{キーンネーシス}運動変化しうるものの^{キーンネーシス}運動変化」といったものになり、循環してしまうという問題が生じる。これに関して私は、循環を不可避なものとする Heiman 1994 に従う。可能態・現実態を用いた分析における定義の循環は、^{キーンネーシス}運動変化のみにおける問題ではなく、質料とその結果物の事例にも等しく見られる。循環的でありながらも有意義な説明を探ることが、本章の第五節及び本論文第三章の目的となる。

⁵⁴ PA II.1, 646b2-3 においてアリストテレスは、建築作業の定義は家の定義を含むが、家の定義は建築作業の定義を含まないと述べる。このように家と建築作業が論理的な関係にあるとすれば、家になりうるものと建築作業を被りうるものに対しても、何らかの論理的な関係を認めることができるだろう。

い、2の(生成した像に内属するものをも含む意味での)「可能的に像であるもの」である、ということである。『自然学』第二巻第三章で与えられていた、始動因の事例における像の自体的説明である「彫刻家」に対応するものは、質料においては、2の「可能的にGであるもの」にほかならない⁵⁵。このような自体的質料の理解は、同じく「あるもの」と「あらぬもの」の区別から質料が理解される『形而上学』Λ巻第二章においてより克明に見て取ることができる。アリストテレスは、生成消滅や性質変化^{アロイオーシス}といった様々な転化⁵⁶の基に措定されるものとして質料を規定した後に、次のように述べる。

「あるもの」は二通りの仕方であり、すべてのものは「可能的にあるもの」から「現実的にあるもの」に転化する(例えば、「可能的に白くあるもの」から「現実的に白くあるもの」に〔転化するし〕、増大と減少においても、同じ仕方です〔転化する〕)。従って、「あらぬもの」から付帯的に生じることのみが可能であるのではなく、すべてのものは、「あるもの」からも(ただし、「可能的にあるもの」からであり、「現実的にはあらぬもの」からである)生じるのである。

⁵⁵次の一節は、自体的質料を「青銅」といったものではなく「可能的にGであるもの」、すなわち「(Gで)ありうるもの」として理解する解釈に対する反例になるように思われるかも知れない。

説明するものはおおよそこれほどに異なった仕方ですられる。^{アイテイオーシス}説明が多様な仕方ではないということから、同じ対象に関して、説明するものが複数あるということが、しかも付帯的ではない仕方であるということが生じる(例えば、他の何かとしてではないまさに像としての像を、彫刻術と青銅が〔説明する〕)。ところで、これらは同じ仕方によってそうするのではなく、片方は質料として、他方はそこから運動変化が生じるものとして〔像を説明するのである〕)。
 τὰ μὲν οὖν αἴτια σχεδὸν τοσαυταχῶς λέγεται, συμβαίνει δὲ πολλαχῶς λεγομένων τῶν αἰτίων καὶ πολλὰ τοῦ αὐτοῦ αἴτια εἶναι οὐ κατὰ συμβεβηκός (οἷον τοῦ ἀνδριάντος καὶ ἡ ἀνδριαντοποιητικὴ καὶ ὁ χαλκὸς οὐ καθ' ἕτερόν τι ἀλλ' ἢ ἀνδρίας· ἀλλ' οὐ τὸν αὐτὸν τρόπον ἀλλὰ τὸ μὲν ὡς ὕλη τὸ δ' ὡς ὄθεν ἢ κίνησις).

(Phys. II.3, 195a3-8; また、Metaph. Δ.2, 1013b3-9も参照せよ)

この箇所は、一見する限りでは、アリストテレスが自体的質料として考えていたのが、「ありうるもの」ではなく「青銅」であったということを示しているようにも見える。これについては、まず、上の引用で述べられている「付帯的ではない仕方」が何を具体的に意味しているのかを考察する必要がある。私の理解によれば、この一節において、アリストテレスは彫刻術と青銅のそれぞれを個別的に像の付帯的ではない説明(すなわち、自体的な説明)として提示しているわけではない。ここで付帯的でないといわれるのは、ある二つの説明が提示されたときの、その二つの説明の関係である。例えば、「彫刻家」と「ポリュクレイトス」という二つの説明は、どちらも始動因的な説明であり(「同じ仕方」)、一方が他方に付帯する。これに対して、「彫刻家」と「青銅」という二つの説明においては、質料である青銅は始動因である彫刻家とは別の種類の説明を与えるものなので、これを「彫刻家」に付帯する説明ととらえることはできない。このように、二つの説明の関係に対する注記として「付帯的でない仕方」を理解すれば、青銅を自体的な質料と理解する必要はなくなる。

⁵⁶転化(μεταβολή)は、色における性質変化^{アロイオーシス}や場所の移動などを限定的に指すことがある運動変化^{キネーシス}と、これらとは区別される実体の生成消滅をすべて含むものとして理解される(Phys. V.1)。本論文においては、生成変化と同義である。

(Metaph. Λ.2, 1069b15-20)⁵⁷

ここでアリストテレスは、「あるもの」のあり方を現実態と可能態の区別に従って二種類に分けた上で、この区別をもとに、「あらぬもの」と「あるもの」による生成変化の説明を試みている。まず、『自然学』第一巻第八章でも論じられたように、「あらぬものからあるものが生じる」ことが付带的には可能であることが認められるが、ここで認められるのはそれだけではない。より重要とみなされているのは、「あるもの」のあり方の一つである「可能的にあるもの(すなわち、ありうるもの)」から「あるもの」が生じるということである⁵⁸。「あるもの」と「あらぬもの」の二分法が問題とされていた『自然学』第一巻第八章で批判されたのは、「ありうるもの」というあり方を認めないような、両者の語り方だったのである⁵⁹。

このように自体的な質料が理解された今、『自然学』第一巻第八章で模索されていた、二通りの述べ方の区別を考慮にいれたエレア派への応答を吟味する作業へと戻る準備が整った。しかし、この課題へと移る前に、一つ補足しておくべき点がある。それは、像の生成とポリュクレイトスとの間には付带的な関係しかないが、それと彫刻家との間には自体的な関係があるという対比が、『自然学』第一巻第八章で与えられていた以下の例によって崩

⁵⁷ ἐπεὶ δὲ διπτὸν τὸ ὄν, μεταβάλλει πᾶν ἐκ τοῦ δυνάμει ὄντος εἰς τὸ ἐνεργείᾳ ὄν (οἷον ἐκ λευκοῦ δυνάμει εἰς τὸ ἐνεργείᾳ λευκόν, ὁμοίως δὲ καὶ ἐπ' αὐξήσεως καὶ φθίσεως), ὥστε οὐ μόνον κατὰ συμβεβηκὸς ἐνδέχεται γίγνεσθαι ἐκ μὴ ὄντος, ἀλλὰ καὶ ἐξ ὄντος γίγνεται πάντα, δυνάμει μέντοι ὄντος, ἐκ μὴ ὄντος δὲ ἐνεργείᾳ.

⁵⁸ 結果的に、ここで引用された Metaph. Λ.2 の一節で述べられていることは、Phys. II.3 における四種の説明論及び Phys. III.1 における運動変化論を検討することによって明らかになった「ありうるもの」としての自体的説明という論点を、Phys. I.8 の分析で私が注目した二通りの語り方の区別に付け加えたものであるということになる。ただし、「ありうるもの」に関する言及が、Phys. I.8 にまったく見られないわけではない。アリストテレスは、「あるもの」と「あらぬもの」を付带的に語るという解決法を述べた後に、手短ではあるが可能態と現実態の区別についても言及している (Phys. I.8, 191b27-9)。

Metaph. Λ.2, 1069b15-20 では二つの解決を足したようなものが述べられているのに対して、Phys. I.8 では両者が別々に言及されているという点については、次のように理解することができる。まず、Phys. I.8 の前半部でなされたのは、Phys. II.3 でなされたような、生成変化の適切な説明を求めるという仕方では懐疑を解決することではない。そこでは、「あらぬもの」を「あらぬもの」として語らないということで、これらを自体的に語ることから帰結する生成変化の不可能性を回避するということがまず目指されていたのである。「あるもの」と「あらぬもの」の二分法を堅持する立場と比べれば、これは大きな前進といえる。すなわち、第一の応答(「あるもの」または「あらぬもの」を付带的に語ること)と第二の応答(可能態の概念を導入し、生成変化の適切な説明を求めること)は、本来は一つとなって完成するものであるが、二分法から抜け出すということが主に目指されていた Phys. I.8 の前半部では、まず第一の応答のみが考慮されていた、ということになる。

⁵⁹ なお、このことは、Phys. I.8, 191b26-7 における「しかし、我々は「すべては「ある」または「あらぬ」のどちらかである」ということを無視しているわけではない(ἐτι δὲ καὶ τὸ εἶναι ἅπαν ἢ μὴ εἶναι οὐκ ἀναρροῦμεν) という発言と矛盾するものではない。本文で確認した Metaph. Λ.2, 1069b15-20 において、「ありうるもの」は「あるもの」のあり方の一つとされていたからである。また、「ありうるもの」は付带的には「あらぬもの」にも分類されうるだろう。

れてしまうのではないかという疑問である。

C： 医者が医者として治療したり、医学に無知なものになる（言える）

これは、さらに以下の二つの文に分けられる。

C1： 医者が医者として治療する（言える）

C2： 医者が医者として医学に無知なものになる（言える）

上の例は、医者と治療行為との結びつきが、必然的なものではないかも知れないという可能性を示唆する。医者が医者としてなすことには、治療行為もあるが医学に無知なものになるというものもあるとされているのである。だとすれば、治療行為とその自体的な始動因的説明と思われた「医者」の関係は、像とポリュクレイトスの関係のように、成立したりしなかったりするものにすぎないのではないか。その場合、上で述べたような自体的と付帯的の区別は、厳密には維持できないということになってしまうだろう。

これに答えるためには、まず医者が医者として医学に無知なものになるということがどうやって可能になるのかという点を確認する必要がある。その際には、問題の例が含まれている『自然学』第一巻第八章の後半でもアリストテレスが導入している、可能態と現実態の区別が役立つ。現実態における医者である「現に治療行為をなしている者」が医学に無知なものになれるとは考え難いが、C2での医者を「治療行為をなしうる者」として理解すれば、その医者は（現実態においてそう述べられるところの医者となり）治療行為を行うことも可能だが、同時に治療行為を行う能力を失い医学に無知なものになることも可能であるということになる。

医者が医者として医学に無知なものになることが可能である場合、ポリュクレイトスもまた治療行為を行ったり医学に無知なものになったりすることがありうるので、「医者として」と「ポリュクレイトスとして」の区別がつかなくなってしまう、という批判に対しては、以下のように答えることができる。ポリュクレイトスは、確かに治療行為を行ったり医学に無知なものになったりすることがありうる。しかし、依然として医者とポリュクレイトスは同じではない。なぜなら、治療行為を行う、もしくは医学に無知なものになる場合のいずれにおいても、その行為は必ず可能的に医者であるものによって試みられていなければならないが、その行為が必ずポリュクレイトスによって試みられている必要はないからである。この点において、依然として両者は明確な違いを有している。可能的に医者

であるものは、確かに医学に無知なものになりうる。しかし、可能的に医者であるもの以外のものが医学に無知なものになることはない。可能態の概念を導入することによってやや複雑なものにはなるが、治療行為や医学に無知なものになることと医者との関係は、依然としてそれらとポリュクレイトスの間に成立するものとは異なるのである。

第5節 エレア派への応答と生成変化の学の成立

生成変化の質料を説明する際に、そこに自体的な説明と付帯的な説明の区別があるということ、及びGの自体的な質料的説明が「Gでありうもの」であることが明らかになった今、これがどのように『自然学』第一巻第八章での議論とつながり、エレア派の懐疑に応答することを可能にするのかを検討する作業へと戻ることができる。「XがYとしてZになる（または、Zする）」という枠組みのもとで、Xを自体的に、または付帯的に述べる場合を区別して生成変化の成否を論じる『自然学』第一巻第八章では、自体性と付帯性は、XをYとして述べるときに、そのYがXと同一であるか否か（結果的に「XがXとして」述べられているか否か）にもとづいて区別されていた。

[自体的・付帯的の区別1：XとYの関係 (Phys. I.8)]

「XがYとしてZになる」において、XとYが一致する場合、Xは自体的に述べられており、一致しない場合、Xは付帯的に述べられている。

これに対して、（例えば、質料的説明に関しては）「XがZになる」という枠組みのもとで、Xが「Zになる」という生成変化の自体的な質料的説明であるか否かが問題になっている『自然学』第二巻第三章では、XとYの関係ではなく、XとZの関係にもとづいて自体性・付帯性が区別されていた。

[自体的・付帯的の区別2：Xと「Zになること」の関係 (Phys. II.3)]

「XがZになる」において、Xが「Zになること」を自体的に説明する場合、Xは「Zになること」の自体的な説明^{アイティアー}であり、そうでない場合、Xは「Zになること」の付帯的な説明^{アイティアー}である。

両者の区別が、異なる二項の関係を問題にしているという点からすれば、二つの章での自体的・付帯的の使い方は、直接的なつながりを欠くように思われるかも知れない。しかし、次のアリストテレスの言葉は、彼が両者を明確に関係づけていたということを示している。

我々が「医者が何かをなす、または〔何かを〕なされる」あるいは「〔医者が〕医者から〔何かに〕生成変化する」と最も適切に述べているのは、〔医者が〕医者としてこれらをなす、なされる、または〔何かに〕生成変化するときである。

(*Phys.* I.8, 191b6-8)⁶⁰

ここでアリストテレスは、「XがZになる」が最も適切に述べられるのは、「XがXとしてZになる」という事態が成立している場合であると主張している。これに従えば、自体的・付帯的の区別2において自体的なものに分類される「XがZになる」という文（「彫刻家が像を作る」）は、いわば区別1の基準においても自体的であると認められる文の縮約形であるということになる。像の自体的な始動因的説明である「彫刻家が像を作る」は、正確には「彫刻家としての彫刻家が像を作る」を意味するのである。これは、『自然学』第二巻第三章での自体的説明が、『自然学』第一巻第八章におけるC1に相当するものであることを示している。

では、区別2において付帯的説明を与えると判定された文（「ポリュクレイトスが像を作る」）は、区別1においてはどのような位置に置かれるのだろうか。まず、これが「ポリュクレイトスとしてのポリュクレイトスが像を作る」に直されることはできないということは明らかである。この文は、『自然学』第一巻第八章で論じられたところによれば、A1やB1に相当する不適切な表現だからである。「ポリュクレイトスが像を作る」は付帯的な始動因的説明ではあるが、述べることができない不適切なものではない。よって、これに該当するものはむしろ「ポリュクレイトスが彫刻家として像を作る」といったものであると思われる。

ここからは、以下の表をもとに『自然学』第一巻第八章と第二巻第三章における自体的・付帯的の区別の関係を確認することにしよう。

⁶⁰ ἐπεὶ δὲ μάλιστα λέγομεν κυρίως τὸν ἰατρὸν ποιεῖν τι ἢ πάσχειν ἢ γίνεσθαι ἐξ ἰατροῦ, ἐὰν ἢ ἰατρὸς ταῦτα πάσχη ἢ ποιῇ ἢ γίνηται.

XがYとしてZする	XとY	XとZ	YとZ	適切性	<i>Phys.</i> I.8での 例文との対応
1 医者が建築家として建築する	付帯的	付帯的	自体的	言える	A2
2 医者が黒いものとして白いものになる	付帯的	付帯的	付帯的	言える	B2
3 医者が医者として建築する	自体的	付帯的	付帯的	言えない	A1, B1
4 医者が医者として治療する	自体的	自体的	自体的	言える	C1

不適切とされる3を除いて、4は区別1と2のどちらにおいても自体的と分類されるもの、1はどちらにおいても付帯的と分類されるものである。曖昧なのは2であるが、これは『自然学』第二巻第三章において認められている、付帯的な説明が二つ組み合わさったものとして考えることができるので(*Phys.* II.3, 195b15) 結果的には両者においてともに付帯的と分類されるものと考えられることができるだろう。このような考察にもとづけば、区別1と2は統合的に捉えることのできるものであったということになる。

次に問題となるのは、4のような自体的な生成変化の説明が、1や2のような付帯的なそれに対してどのような関係にあるのかを明らかにすることである。本章第三節の末尾で、『自然学』第一巻第八章における二通りの区別の内実を示す例文を解釈した後に提起された疑問は、「あらぬもの」と「あるもの」の二分法を前提した上でなされた、何かを付帯的に述べた場合での生成変化を認めるという解決が、懐疑を払拭するほどの力をもたないのではという懸念であった。(『自然学』第一巻第八章のC1においても示唆されていたが)『自然学』第二巻第三章や第三巻第一章などを考察することで私が確認したのは、アリストテレスが決して何かを付帯的に述べた場合の生成変化のみを可能なものとして認めていたのではなく、「あらぬもの」と「あるもの」の二分法を前提しない適切な仕方であれば、何かを自体的に述べた場合の生成変化があることをも認めていたという点である。この後者の生成変化は、付帯的なそれとは違って疑いえない。その意味では、アリストテレスはエレア派の懐疑に対抗するために、付帯的な生成変化を認めることとは異なるより強い何かを手にしていたと言える。

問題は、このような仕方確保された、疑い得ない自体的な生成変化の説明が、ほとんどの場合我々が実用的だと考えるようなものではないという点である。我々が通常述べる必要があると考える生成変化は、「医者が白くなる」や「種子から植物が生じる」といったものであり、「白いものでありうるものが白いものでありうるものとして白いものになる」

といったものではない。このことは、逆に生成変化の説明として疑う余地のないものである。「ありうるものがありうるものとしてあるものになる」の空疎さを際立たせる。「像でありうるもの」が像になるということはトリヴィアルなので、その説明はこのままでは実用性を欠いたものであり、ほぼ情報量をもたないからである⁶¹。「医者 that 白くなる」と述べるような生成変化の説明は疑いうるし、「白いものでありうるものが白くなる」と述べるような生成変化の説明は空疎であるという事態は、両者を何らかの仕方 with 結合する必要があるということを示す。その結果出てくるものがまさに、「医者 that、白いものでありうるものとして、白くなる」という上の表における 1 に相当するものであるということになるだろう (2 の「医者 that 黒いものとして白いものになる」に関しては、「黒いものとしての医者」を「白いものでありうるもの」とみなすような、さらなる「として」句が前提されている、と考えるべきである)。「医者 that 白いものでありうるものとして白くなる」においては、「白いものでありうるものとして」句がまさに「医者 that 白くなる」と述べることの妥当性を確保しているものであり、それは「白いものでありうるもの」が白くなることと自体的な関係をもっていることから可能になっているのである。

しかし、本章第三節の末尾でもその可能性が指摘されたように、エレア派がこのように自体的な生成変化を用いて付帯的な生成変化の妥当性を確保するような 1 の文を素直に受け入れないだろうということは、十分予想できる。エレア派は、まずなぜ医者 that 「白いものでありうるもの」であると信じる必要があるのかを問うだろう。医者 that 「白いものでありうるもの」の間には、なんら必然的な関係が見当たらないからである。このような同一視を拒否すれば、「医者 that 白いものになる」という生成変化は依然として保証されていないことになってしまう。この点に対するアリストテレスの応答を考えるためには、以下の引用などが手がかりを与えてくれる。

斧で何かを分割する必要がある場合は、硬いものであることが必然的であり、硬いものであるためには、青銅製か鉄製であることが必然的である。

(*PA* I.1, 642a9-11;⁶² また、*Metaph.* H.4, 1044a27-9 も参照)

⁶¹モリエールは、眠り薬が人を眠らせる理由を「眠らせる力」(virtus dormitiva) に訴えて説明することの無意味さを揶揄した (Molière 2010, 713)。まさにこのような無意味な説明を与えるものとしてアリストテレスを批判する解釈に、Bechler 1995 を挙げることができる。また、本論とは異なる立場からこれに対するアリストテレスの擁護を試みたものとしては、Johansen 2012, 89-92 を挙げるができる。

⁶²ὡσπερ γὰρ ἐπεὶ δεῖ σχίζειν τῷ πελέκει, ἀνάγκη σκληρὸν εἶναι, εἰ δὲ σκληρὸν, χαλοῦν ἢ σιδηροῦν,

上の引用においてアリストテレスは、なぜ青銅が何かの質料として妥当なのかについて述べている。それが妥当である理由は、それが特定の種類語で同定されるものに該当するという点にではなく、それが何かを可能にするものが持っているべき性質（ここでは、硬さ）をもっているという点に求められる⁶³。ある対象を像の質料とみなすべき理由が、「青銅である」といった点ではなく「硬い」という性質に求められているということから、あるものの質料であるために必要な条件を、関連する特定の性質を有することという仕方で一般化することができるだろう。このことは、なぜ医者が「白いものでありうるもの」であると考える必要があるのかという問いに対して、まだアリストテレスに語るべきものが残っているということの意味する。それを示す想定問答を、以下に与えてみよう。

1. 医者が白いものになるという変化の質料の探求

Q1：いかにして医者が白いものになるという変化は可能になるのか？

A1：(質料的説明)それが白いものに変化するところのものである質料(白いものでありうるもの)の存在と、医者がその質料であるということによって可能になる。

Q2：その質料とは具体的には何か？それはどのようにその変化を可能にするのか？医者がその質料であるとしてどうして言えるのか？

A2：白いものへの変化を可能にすることに関連する、特定の状態の肌をもつといった性質 (*Phys.* I.5, 188a36-b1; I.8, 191b5)をもつものが、この変化の質料である。これに該当するものとしては、まだ白くない肌をもった医者などを挙げることができる。この点からすれば「医者が白いものになれるものとして白いものになる」または「医者が黒いものとして白いものになる」と述べることは妥当である。

2. 像の生成の質料の探求

⁶³質料を理解することにおける性質の重要性は *PA* I.1, 640b17-29 などにおいても認められる。アリストテレスはそこで、ベッドを理解するためには、その材料の何であるかよりも、それがどのような性質をもつかが重要であると述べている。また、Simplicius 1882, 422-3 (2002, 40-3) や Lewis 2008 及び 2009, 172 などに、質料であることを特定の性質をもつことと関係づける解釈を見出すことができる(特にルイスは、「第二層の機能的性質 a second-level functional property」という表現を用いている)。Charles 2004, 151-69 においては、第一質料に関して、それであるために重要となるのは特定の役割を担うことができるという点であり、特定の種類の事物に分類されることではないという主張がなされている(この見解に対する批判としては、Cohen 2012, 221-2)。最終的にチャールズは、第一質料は論理的もしくは抽象的対象であるとする見解を述べる(158)。私は、これらの解釈はすべて特定の種類語によって質料を同定することができるという見解に対する批判として理解することができる。これらの先行研究と本論の立場の整合性を検討する作業はここでは行わないが、私の見解はここで提示された発想を発展させたものとして理解することができるだろう。

Q1：いかにして像の生成は可能になるのか？

A1：(質料的説明) そこから像が生成するところのものである質料(像でありうるもの)の存在と、青銅がその質料であるということによって可能になる。

Q2：ではその質料とは具体的には何か？ それはどのように像を可能にするのか？ 青銅がその質料であるとはどうして言えるのか？

A2：像を可能にすることに関連する硬さといった性質 (PA I.1, 642a9-11; *Metaph.* H.4, 1044a27-9) をもつものが像の生成の質料である。これに該当するものとしては、(往々にしてそのような性質をもつことの多い) 青銅などを挙げることができる。この点を考慮すれば「像がそこから生成するものとしての青銅から像が生じる」または「硬いものとしての青銅から像が生じる」と述べることは妥当である。

再構築されたこれらの問答は、どちらも以下の共通する段階を踏んでなされている。

1. ある生成変化について、まず「それを可能にするもの」があるという前提を立てる。
2. 何が「それを可能にするもの」であるのかを知るために、いくつかの関連する性質に言及する。
3. その性質をもつものとして、具体的に把握できる青銅や医者といったものを挙げる。

以上のように理解された質料的説明は、自体的質料の存在の措定、自体的質料であるために必要な性質の解明、それらの性質を有する具体的な対象の探求、という手順からなる。ここで注意すべき点は二つある。まず一つは、(運動変化の規定を論じる際の「青銅」と「可能的に像であるもの(すなわち、像でありうるもの)」の対比からもわかるように)「青銅」のように、問題となっている生成変化が生じることを含意せず理解しうるもの、すなわち、それ自体のアイデンティティを問題となっている生成変化との関連なしに保持するようなものは、自体的質料にはなりえないという点である。もう一つは、問題となっている生成変化と関連する性質として挙げられる「硬いもの」や「黒い肌をもつもの」もまた、「斧になる」や「白いものになる」といった変化を含意しない形で理解されうるものであるため、付帯的説明に分類されるという点である。

では、なぜ医者が「白いものでありうるもの」であるのかに関して様々な理由を与えることができるということによって、エレア派は完全に論駁され「医者が白いものになる」という生成変化を認めることになるのだろうか？ 彼らには、少なくとも二つの応答手段が

残されているように思われる。まず彼らは、「生成変化の基に措定されたものとしての質料である「ありうるもの」がある」という主張そのものを拒否することができる。自体的説明と付帯的説明を関連づけるために上でした作業は、いわば自体的説明となる「白いものでありうるもの」が存在するということを仮定した上で、付帯的説明である「医者」をそれとしてみなすことが可能であるということを、様々な理由を伴って示す、というものであった。「医者」が「白いものでありうるもの」であるとなぜ言えるのか、と問うていたエレア派は、今度は「白いものでありうるもの」が存在するとなぜ信じる必要があるのかを問うていることになる。「白いものでありうるもの」の存在が否定された場合、それにもとづいて様々な生成変化を肯定しようとした上でのアリストテレスの議論は根本から無効であるということになってしまう。

もう一つの手段は、医者が「白いものでありうるもの」であることを示すためにアリストテレスが与えるだろう様々な理由を不十分なものとみなし、医者が「白いものでありうるもの」であるということが依然として示されていないと考えることである。上で挙げた理由は、白くない肌をもつ（黒い肌をもつ）というものだが、白くない肌をもつものがすべて白い肌をもつものになるわけではない以上、白くない肌をもつ医者を「白いものでありうるもの」と認める必然性はない。上で確認したように、理由として挙げうるすべての性質は付帯的^{アイディア}な説明であるので、エレア派がそれらを拒否することは理不尽とはいえない。

ここまで提起された懷疑は、まとめれば次の二点に関するものであるといえる。

A 像になりうるものなど存在するのか

B 本当に青銅は像になりうるものなのか

まず A の懷疑は、「あるもの」のみを原理として認めるエレア派と、質料と形相（及びその欠如態）を原理として認めるアリストテレスの立場の違いを反映するものである。アリストテレスにおける質料が自体的には「G でありうるもの」を意味するのだとすれば、この対立は、何かになりうるものを導入することを許さないような仕方で原理を設定する立場と、それが入り込む余地を確保する仕方で原理を設定する立場との対立であると考えることができる。この原理の数をめぐる対立に関するアリストテレスの応答を知るためには、原理に関する論争に対して彼がそもそもどのような態度をとっていたのかを確認する必要がある。アリストテレスは、原理をめぐる論争において、異なる立場をとる相手を完全に論破するような議論が得難いものであることを知っている（*Phys.* I.2, 185a3; *Metaph.* Γ.4,

1006a5-8)。この対立を前に彼が選ぶことのできた恐らく最善の策は、「あるもの」は一でありかつ不動のものなのではないのかと考察することは、自然について考察することではない」(*Phys. I.2*, 184b25-5a1)⁶⁴と述べることで、いわば相手の立場を初めから突き放すことである(この点に関しては、今井 2001 も参照)。

しかし、これだけでは、アリストテレスが『自然学』第一巻第八章でエレア派の懐疑に対して行った勝利宣言は不当なものに見えてしまう。アリストテレスは、懐疑に対抗する根拠を示したのではなく、単にこれを無視したに過ぎないからである。この勝利宣言を正当に評価するためには、アリストテレスが『自然学』第一巻第一章で目標として立てたのが「自然についての学・知識」の成立であったということを想起する必要がある。学は説明アイディアを与えるものであり、かつ個別的な事柄に対しては個別的な説明アイディアが要求される。単に「ありうるもの」が存在するということを確認する、または、生成変化を我々が日常においてどう語っているかを分析するだけでは(*Phys. I.7*)、個別の生成変化の説明アイディアを与えることを可能にする学問的な枠組みが成立したことにはならない。かつ、学問的な枠組みが成立していない状況においては、「ありうるもの」の存在を確認することの意義も曖昧になり、その存在を否定する立場に引き戻される危険が常に残される。

『自然学』第一巻第八章が、生成変化を否定する立場の排除と生成変化の日常的な語り方の確認という同巻第七章までの成果を引き受けた上でさらなる課題としたのは、まさに生成変化の学の成立、正しい語り方の確立という課題であったといえる⁶⁵。その成果は、さらに『自然学』第二巻第三章などを参照しながら本論のこれまでの議論においてすでに与えられたとおりである。特徴的だったのは、アリストテレスが自体的な説明と付帯的な説明に、それぞれの固有の役割を与えていたという点である。このことによって、アリストテレスは疑い得ないが実質的な内容をもたない説明と、不確実だが内実をもつ説明を組み合わせることができた。その際に問題となったのは、このようにして手に入れることができた自体的な説明と付帯的な説明を組み合わせたものが、(付帯的なものをそこに含む以上)必ず不確実な要素を残すという点である。Bの懐疑は、まさにこの不確実さに注目するものであったといえる。

⁶⁴τὸ μὲν οὖν εἶ ἐν καὶ ἀκίνητον τὸ ὄν σκοπεῖν οὐ περὶ φύσεώς ἐστι σκοπεῖν.

⁶⁵アリストテレスが存在論的な解決だけに満足しなかつただろうということは、*Phys. I.8*, 191a31 において彼が、*Phys. I.7* では生成変化の可能性を確保するものとして扱われていた「基に措定されること」を、生成変化を否定する議論のなかで登場させていることから分かる。必要なのは、単にこういったものを導入することではなく、それを正しく語ることなのである。

重要なのは、この不確かさに対してアリストテレスが何もできないわけではないという点である。彼は、確かに付帯的な説明を用いることを止めるわけにはいかない。しかしアリストテレスは、特定の生成変化に関連する様々な性質を、その生成変化に対して与えた説明が妥当であることの理由として提示することで、より不確かさが少ない、すなわち、より自体的なものに近い付帯的な質料的説明を求めることができる⁶⁶。かりにBの懐疑を行うものが、アリストテレスが(エレア派が見落としていたものとして)提案した自体的と付帯的の区別を受け入れることで、この説明の前進という論点をも受け入れた場合、その者は、すでに次のことをも認めているということになる。説明が前進しているということを確認することは、そこで何らかの生成変化がまさに生じたということを確認することによってのみ理解可能となる。その場合、Bの懐疑は、実質的には生成変化の成立の懐疑ではなく、生成変化の成立を認めた上で、それを正しく語れているのかに関する懐疑であったといえる。いったん生成変化の学が成立したら、Bの懐疑はいわば生成変化の確保に関しては無害なのである。

説明の前進を可能にする生成変化の学の成立によって示されるのは、Bの懐疑の無害さに留まらない。説明の前進が認められるということは、まさにAの懐疑を行う論者に対して提示された、「ありうるもの」の導入を認めるというアリストテレスの立場の妥当性を擁護するものでもあるからである。「ありうるもの」の導入とそれの正しい語り方の確保は、相補的な関係にある。「ありうるもの」を指定することなしには正しい語り方などありえないが、正しい語り方がありうるということがまさに「ありうるもの」を導入することの妥当性を示す。その限りにおいて、アリストテレスは単に「ありうるもの」が存在するということを主張しただけでなく、そう考えるべき理由をも示していたということになる。エレア派に対する勝利宣言は、これらすべての論点をもとになされたものと考えべきだろう⁶⁷。

以上をもって、アリストテレスによるエレア派の懐疑への応答の全貌が示された。

第6節 質料と説明

エレア派への応答を模索する過程で、生成変化の質料の探求が、「Gでありうるもの」という、それを認めた場合に生成変化が確実な仕方で保証されるような自体的な説明と、懐疑

⁶⁶説明における遠近の内実を明らかにすることは、本論文第三章の課題となる。

⁶⁷このような解決をも拒否する方法は、「として」による二通りの語り方の存在を否定することで、生成変化の学全体を拒否するというものである。これは、「として」という語り方が実際に使用されているということを見逃しているという点で、非常に維持しがたい立場であるといえる。

しうるが生成変化が具体的にどのようなものから生じたかを示す付帯的な説明を同時に用いながらなされるものであるという理解が示された。以下では、この理解にもとづいて冒頭で問題となった質料の関係性と無規定性をどのように解釈するかを示し、この二つの特質が等しく帰されるような質料という概念とはいったいどのようなものであるかを論じる。

まず関係性について、自体的な質料的説明に対する私の理解に従えば、質料が形相に対して関係的なものであるということの意味は以下のように理解できる。自体的な質料的説明によれば、Gの質料は「Gでありうるもの」であり、「Gでありうるもの」はGを知ることなしには知り得ない。よって、質料は『カテゴリー論』第七章での関係的なものに属するための条件を満たすということになる。その質料から生成する結果物（例えば、家）の知識を抜きにしても理解しうるようなものとして質料（木材）が語られるのは、あくまで付帯的な説明においてのみである。自体的な説明は疑い得ないが空虚なものであり、具体的に何が「Gでありうるもの」に該当するのかという問いに答えるためには、付帯的な質料的説明を待つ必要がある。多彩な付帯的説明を用いることでその内実を具体的に規定すればするほど、そこで描写されるものが「Gでありうるもの」である可能性は高まる⁶⁸。

付帯的説明と自体的説明の間には常に距離があるという点から、今度は無規定性が説明される。「Gでありうるもの」であるための性質は網羅できるようなものではないので、付帯的説明を用いて必要十分な仕方では「Gでありうるもの」を規定することはできない（*Phys.* II.5, 196b27-9も参照）。例えば像でありうるために要求される性質は、硬さだけではなく、量や錆の程度といった点において様々である⁶⁹。また、硬さという性質一つをとっても、どの程度の硬さが像でありうるために必要十分なのかを正確に規定することはできない。「Gでありうるもの」を付帯的な質料的説明を用いることでは正確に規定できない、という仕方では理解された質料の無規定性は、まだGになっていないGの質料だけでなく、すでに生成したGに内属しているGの質料に対しても等しく適用される。例えば、「今像を構成しているところの青銅」について必要十分な規定を与えることは可能だろうか。像を実現するために青銅が取りうる形は、ほぼ無限であるように思われる。個物としての特定の像に的を絞ってみても、必要十分な規定を与えることの困難さは消えない。この特定の像が若干

⁶⁸付帯的質料をもって自体的質料を説明することに度合いの差があるということは、異なる事物の質料を同じと述べるアリストテレスの発言を理解可能にする（*Metaph.* H.4, 1044a25-7）。異なる事物（例えば、ベッドと像）の自体的質料が同じであるということはあるまい。しかし、「硬く、少な過ぎないもの」や「青銅」といった仕方ではベッドまたは像の付帯的な質料的説明が与えられた場合、これは他方の質料的説明としても当てはまりうる。すなわち、付帯的な仕方では、二つの異なる対象の質料的説明は同じになりうる（*APo.* II.17, 99a1-5も参照）。

⁶⁹*Metaph.* H.2, 1042b9-3a12においてアリストテレスは、多様な差別相を用いて質料を説明しようとする。これに関しては、本論文第三章で改めて論じる。

少ない、もしくは多い青銅から成立することは可能であり、その意味では、必要十分な仕方での質料を記述することの難しさは、まだGになっていないGの質料に関しても、すでに実現されているGに内属しているといわれるGの質料に関しても、同等である⁷⁰。

アリストテレスは、無規定性という言葉が文脈によって様々な意味で用いているように思われる。よって、上で示した私の理解もまた一つの提案にすぎない。しかし、この解釈は次のような利点をもつ。まず、今ある像を構成しているまさにその特定の青銅が「そのような青銅として何らかの仕方では無規定である」と直観に反して述べる必要がなくなる。無規定なのはその像を（それにこれからなる、あるいは今なっているという仕方でも）実現しうるもののあり方であり、特定の像を構成している青銅の特定の時点における特定の構成は、無規定的ではない。像に（まだなっていないが）なれる、または像になっているある青銅は、（そのような形をした青銅としては）形において不定でないし⁷¹、また不可知でもない⁷²。しかし、その青銅のあり方を述べただけでは、像の質料を必要十分な形で規定したことにはならないだろう。「もしこの像が鉄製であったら」と想定することは可能であるので、その像の質料はそもそも青銅である必然性すらないのである⁷³。

今までの議論によれば、種類語による質料同定解釈（より正確には、問題となっている

⁷⁰質料の無規定性に関する私の解釈は、GA IV.10, 778a6に言及しているバーム(Balme 1984, 306, 309-10)のそれに近い。このような仕方では無規定性が論じられる例として、さらにDA III.11, 434a4-5; *Metaph.* Z.3, 1029a20-1; K.6, 1063a28を挙げることができる。なお、すでに像がそこから生成しているところの青銅を、どのような意味で「像でありうるもの」として理解できるのかという点に関しては、本論文第三章注27で述べる。

⁷¹私は、ある種の質料が形や数において不定でありうることを否定しているわけではない。恐らく青銅を数えることはできないし、液体は定まった形をもっていないだろう。しかし、これらはすべての質料が本来的にもつような無規定性に対しては副次的なものであり、アリストテレスが質料に求めている広い意味での無規定性の内実ではない。

⁷²質料を「自体的には不可知である」(*ἡ δ' ὕλη ἄγνωστος καθ' αὐτήν.*; *Metaph.* Z.10, 1036a8-9)とするアリストテレスの言葉は、次のように理解できる。不可知であるということ、質料に関していかなることも知り得ないという意味でとる必要はない(*Phys.* II.2, 194a36-b19において、アリストテレスは質料の知に関して議論している)。我々は、像の質料を「青銅」や「硬いもの」といった様々な仕方でも知る。しかし、自体的な質料（像になりうるもの）を、「青銅」や「硬いもの」と同じような仕方でも、すなわち、像への言及を抜きにしてそれ自体のアイデンティティを保持するようなものを知るような仕方でも知ることはできない。不可知なのは、自体的質料を確定的な仕方でも記述するような付帯的質料的説明の方なのである。

⁷³本章第二節で無規定性を取り上げる際に問題になった*Metaph.* Θ.7, 1049a36-b2に関しては、次のようにここで論じられている無規定性を理解することができる。アリストテレスは質料を性質と併置し、両者はともに無規定的なので、それらを形容詞的に(*ἐκείνωνον*; that-en)用いるのは妥当であると述べる。例えば木製の箱の質料は「木製の」という形で与えられ、白い人間の性質は「白い」という形で与えられる。

質料が形容詞的に用いられなければならないこと理由は、特定の種類語を用いて質料を説明した場合、それが厳密にはGをなしている質料を説明したものにはならないという点から生じる制約として理解される（「木材」と述べるだけでは、箱の材料となっている木材を必要十分に記述したことにはならない。なお、質料の形容詞的用法に関しては、本論文第三章でさらに論じる）。大事なことは、白いといった性質もまた、あるものの何であるかを語るにおいては付帯的な語り方にすぎないという点である（最低限、白いものという言い方をしない、それは問題となっている何かを指すことができない）。すなわち、両者はともに何かを自体的に指すものではないという点で無規定的であり、適切に用いられるためには、形容詞の形で現れる必要があるということになる。

生成変化との関連を抜きにした形で自らのアイデンティティを保持するものを質料として同定する解釈)は三つの問題を抱えているということになる。

1. 質料の関係性と無規定性に対して有効な解釈を示すことができない。
2. 自体的と付帯的の区別をアリストテレスが導入したことの意義を無視している。
3. エレア派の懐疑への応答として失敗している。

このような問題点にもかかわらず、アリストテレスが今後「煉瓦」や「青銅」といった「Gでありうるもの」とは異なる表現で質料を説明することを止めることはないだろう。しかし、今やこのことがもつ意味は明らかである。「Gでありうるもの」以外の表現による質料の説明は、(それが「Gでありうるもの」を必要十分な形で規定することで懐疑を原理的に不可能にする力をもっているからではなく)それがもつ実践的な有用性にもとづいて用いられる。青銅から像が生成するという説明は、ポリュクレイトスが像を作るという説明と同じくらい大体において真である有用な情報を与える⁷⁴。付帯的説明は、自体的説明と相互を補完する関係にあり、両者はどちらも不可欠な役割を担いながらアリストテレスの質料的説明の理論を構成する。

「青銅」や「煉瓦」を無規定的で付帯的な質料的説明として理解し、これとは別に関係的で自体的な質料的説明を認め、両者がともに備わることで十全な質料的説明が可能になると考える私の解釈は、質料とは何かという問いに対してどのような答えを与えるのだろうか。一つの帰結は、ある生成変化の結果として生じるGの質料を、その生成変化を含意することなくそれ自体のアイデンティティをもつ特定の個体(及びその集合)と端的に同定することができなくなるというものである⁷⁵。それ自体としてアイデンティティをもつ木材や青銅といった存在者を質料とすることは、質料概念が導入されることによって可能になった説明の一部にすぎず、その有用性は限定的にのみ認められる。この点を理解すれば、全体として質料概念が目指したものは、むしろ木材や青銅といった限定的な説明を適切に用いることで、「ありうるもの」をうまく語るための理論を与えることであったということ

⁷⁴では付帯的な説明は常に有用な説明となりうるのだろうか? 場合によっては、付帯的説明は生成変化を理解するためにまったく役に立たないようにも思われる。例えば、白いものが像を作ったという説明(*Phys.* II.3, 195b2-3)は、像の生成の始動因の説明としてほとんど無意味なものであるように見える。この問題に関して、私は付帯的説明の有用性は結果的にそれぞれの生成変化の文脈に依存すると考える。彫刻家が実際白い人間だった場合、白いものが作ったという説明は少なくともその彫刻家に関連する情報ではある。説明の有用性を文脈に沿って理解するという発想は、本論文第三章でさらに論じられる。

⁷⁵これは、Gにまだなっていない「Gでありうるもの」についても、Gがすでにそこから生成しているところの「Gでありうるもの」についても同様である。目の前にある机は、この木で作られていなくてもよかったかもしれない。

が分かる。大事なのは、質料を特定の存在者と同定することではなく、そのような主張の意義と限界を理解し、それらを適切に位置づけることを可能にするような説明の理論が与えられたということなのである。

このことは、現代的な意味でGの構成要素を探求することと、アリストテレスにおけるGの質料の探求の違いを明らかにする。身体をそれ自体としてアイデンティティをもつものとしてまず捉え、いかにしてそれが心をもつことになるのか(心をもたない身体とはどう区別されるのか)を問う論者は、アリストテレスからしてみれば付带的説明の役割を見誤っているということになるだろう。何かがそこから生じるところのものを、まず木材や青銅、身体といった仕方で確定した上で、そこからどのようにして問題となっているものが生じるのかを問う探求の仕方は、付帯的な説明を軸に自体的説明をそこに還元しようとする試みであるといえる。これに対して、アリストテレスの方法は、自体的説明を軸に付帯的な説明をそこへと近づけることを目指すものである。両者は、説明の方向性において異なっているのである。

以上の点を踏まえれば、本論文第一章で問題となったソーマと身体の関係を次のように理解することができる。ソーマを厳密に生物の質料、すなわち「生物でありうるもの」として理解した場合、現代的な意味での身体は(それ自体としてのアイデンティティもつものとして想定されている限り)その付帯的説明でしかないということになる。さらに言えば、生物の質料を導入することの意義は、(現代の身体のような)特定の種類の存在者を同定することにあるのではなく、何が「生物でありうるもの」なのかという問いに答える様々な説明を与える枠組みを用意することにある。現代的な身体が、いわば存在者を示すという存在論的な意味合いをもつものであるのに対して、アリストテレスのソーマは、説明の枠組みを提供するという説明論的な意義をもつものとして理解されなければならない。

最後に、想定される一つの批判に答えることで本章を終えたい。懐疑不可能だが循環的でトリヴィアルな説明である自体的な質料的説明と、実用的だが懐疑しうる付帯的な質料的説明を同時に用いて生成変化の質料を探るという解釈に対しては、次のような疑問がありうる。自体的な質料が「Gでありうるもの」だとすれば、すなわちその質料のみがあればGが生じるということになり、結果的に形相(また、その他の説明)を想定することの意味が薄れてしまうのではないか。そして、このような形相の消去主義、もしくは形相の質料への還元主義は、アリストテレスにとっては受け入れることのできない立場ではな

いのが⁷⁶。——このような批判に正面から応答するためには、形相の役割に関する本論文後半部の議論を踏まえる必要があるが、本章で論じられた範囲内においても、次のことを指摘することはできる。まず、質料をそれ自体としてアイデンティティをもつ特定の個物(の集合)と同定することはできない、ということを再度思い起こす必要がある。「Gでありうるもの」とは何かという問いに対する答えは、いわばGに対する循環的な言及を必ず含むものであり、その意味ではGへの言及を必要としない仕方では特定することが決してできないものである。端的にいえば、「Gでありうるもの」そのものなど、この世界のどこにも見つからないのである。形相の消去主義や還元主義は、アリストテレスの質料的説明の理論における自体的説明と付帯的説明の役割と意味合いを理解するものにとっては、根本的に有効な選択肢とならない⁷⁷。

⁷⁶この問題に対する近年の解釈の一例として、Beere 2009, 263-83 を挙げるができる。ピーアは、ギリシア哲学における消去主義や還元主義を「substantialism」としてまとめ、アリストテレスがいかにそれらに対抗しているのかに関する見解を述べた。ピーアによれば、アリストテレスは質料の形容詞的な理解を用いることによってこれらに対抗することができた。彼は「実体は、それがそこから作られているところの質料〔と同じ〕ではない。質料からは、単にその物質的な特質を得ているだけなのである」(263)と述べる。以下で述べられる私の応答とピーアのそれを詳細に比較することはできないが、私の応答は、ピーアの形容詞的解釈が適用されづらい(269)、種子のような質料の例をうまく扱うことができる。種子は植物が生成したときには消滅するので、植物が種子から何らかの物質的な特質を得ているとは考え難い。

⁷⁷本論で示された質料解釈は、難題となってきた以下の数点に対しても光を当てる。

(1) *Phys.* II.3, 194b23-6 と *Metaph.* Δ.2, 1013a24-6 において、アリストテレスは青銅や銀の類を(青銅や銀と並列しながら)像やコップの質料として説明する。しかし、青銅が像の質料であるということ、青銅が像を物理的に構成していることと理解するならば、青銅の類である金属を青銅(また、それからなる像)の質料とする発言は、奇妙に聞こえる。青銅を物理的に構成しているのは四元素といったものであり、これを金属と述べることは不適切である。類と構成要素は、役割が異なるのではないか。Philoponus 1887, 243-4 (1993, 56) と Simplicius 1882, 309-10 (1997, 66-7) には、実際にここでの青銅の「類」が意味するものを、青銅や銀を構成し、像やコップの生成において持続する四元素として理解することで、一貫性を保とうとする解釈がみられる。しかし、このような意味で類を使用することは、アリストテレスの通常の用例では見当たらない(*Metaph.* Δ.28)。私の理解においては、類を質料として述べるときにここでアリストテレスが考えているのは、青銅が像を物理的に構成するような仕方では「金属」が(青銅をまず物理的に構成した上で)像を構成するといったことではなく、「金属」が像の質料を「像でありうるものは金属である」という形で付帯的に説明するということである(*Phys.* II.3, 195a32-b1 と *Metaph.* Δ.2, 1014a1-3 において、アリストテレスがポリュクレイトス、人間、動物をすべて像の付帯的な始動因の説明として挙げていることを想起せよ)。

(2) *Metaph.* Z.3, 1029a26-8 (Z.10, 1035a7-9 も参照) において、アリストテレスは質料は「ある・これなるもの」ではないと述べる。また、*Phys.* I.7, 191a7-12 においては、基に指定されたもの(ここでは、質料)はアナロジーによってのみ知られるとも述べている。このような発言に対して、別の箇所においてアリストテレスは、質料は数えることができるし、「ある・これなるもの」に近いとも述べる(*Phys.* I.7, 190b25-6; *Metaph.* Δ.3, 1070a9-10)。額面通り受け止めた場合、これらは互いに矛盾するように思われる。私は、前者の発言は、質料が特定の個体を自体的に指示することはないという事柄を反映したものと考え、後者の発言は、付帯的な仕方では特定のものを質料として指示することができるという事柄を反映したものと考える。

第3章 質料的説明の射程

本論文第二章において私は、特定の存在者を示すためのものとしてではなく、そのようなことをも含めて様々な仕方で「Gでありうるもの」の説明を与えることを可能にする枠組みとして質料概念の意義を理解した。第三章においては、質料概念によって可能になる説明の有効性に対する（エレア派とは異なる角度からの）深刻な懐疑を引き起こすものとして、従来の研究において様々な仕方で論じられてきた同名異義原理を提示し、これに対抗するために、質料における機能的・非機能的の区別や、質料の差別相及び遠近といったものがもつ意義を考察する。この作業は、いわば「Gでありうるもの」を目指して繰り出される説明の射程を見定めるためのものである。結果的に、質料的説明の理論がある奥行きのもとでのみ理解可能なものであり、後ほど本文で明らかになるような、非還元的な仕方で強い説明力をもつということが示されるだろう。

第1節 導入

「箱の質料は木材である。」

——アリストテレス全集の読者は、上のような文に幾度となく出くわすことになる¹。ひとまず質料を斧に対する青銅や箱に対する木材のような材料として理解するとしよう。しかし、質料を上のように説明することが、実際どれほど厳密で有効なものであるかは分からない。かりにこの説明が、すべての木材が箱になりうるということを含意するとしてみよう。その場合、ある木材が箱を作るには小さすぎる、または脆くなりすぎているということはあるので、この説明は間違っているということになる。木材には箱になれるものもあるので、この説明を端的に無意味だとすることは差し控えるとしても、「箱の質料とは何か」という問いに対して「木材」と答えることは、不満足なものには見える。本章において私は、上のような仕方で与えられた質料の説明の有効性に対する懐疑的な問いから出発して、それに対してアリストテレスがなしえただろう答えを模索することで、彼の質料的説明の目的と射程を明らかにし、アリストテレスの質料的説明の理論が説明力という点で決して不足していないと論じる²。そのために私は、彼の質料的説明の理論が、その

¹Metaph. Z.7, 1033a13-23; H.2, 1043a14-6; H.4, 1044a25-7; Θ.7, 1049a18-24 など。

²序論でも述べたように、質料と形相という枠組みでアリストテレスが事物を分析する場面は非常に多様である。本章では、感覚的対象の分析のみを論じる。

説明力に対する懐疑を乗り越えるような「良い説明」を、ある奥行きのもとで導き出す力を有していることを示す。

本章の構成は以下の通りである。まず第二節において、アリストテレス本人が提起している同名異義原理を検討し、それが質料的説明の理論の説明力に対して強力な懐疑を引き起こすものであるということを示す。同名異義原理は、例えば組み立て前の木材及び煉瓦と組立後の木材及び煉瓦を奇妙な仕方では区別することを読者に強いる。また、同名異義原理は、「斧を構成している青銅が斧の質料である」といったトリヴィアルで循環的な説明を、質料的説明の理論が提供することのできる最良の説明として理解することを要求する。近年の解釈者は、機能的と非機能的の二種類の質料を区別することで同名異義原理から生じる問題に答えることを試みてきた³。第三節で私は、先行研究の解決案を部分的に評価しながらも、それが上で述べた二つの問題のうち、特に後者をほぼそのまま温存するものであるために、質料的説明の理論の説明力に対する疑いを晴らすには不十分であることを確認する。後ほどその詳細を確認することになるが、二種の質料を分ける論者は、その帰結として今度は二つの質料をどうつなげるかという問題に直面することになる。これに対して私は、まずアリストテレスによる質料の形容詞的用法を考察し、彼が二種の質料を何らかの関連のもとで理解していたということを示す。しかし、二種の質料の関連性が認められた後も、アリストテレスがそれらの関連について詳細な説明を提供することができたということを示す必要性が依然として残される。これに答えるために私は、第四節において、このような説明を与えるために必要となる語彙を、アリストテレスが彼の質料的説明の理論のなかに組み込むことができたということを確認する。その過程で、質料の説明にはある循環的な要素が残らざるを得ないということも明らかになる。この点に関して私は、彼が質料に認めていた「遠近」という発想を考察することで、アリストテレスが循環的な要素を残す説明を依然として有効なものとして認めていただろうと論じる。続く第五節においては、実際に生物の質料を探求する場面を考察することから、幾つかのテキストにもとづいて上で提示された理解を確認する。

議論の過程において、アリストテレスが様々な質料の基準を与えているということが明らかになるだろう。これらは一見矛盾するものに見えるが、私は、本章で提示される、Gの質料を、それ自体が奥行きをもつ「Gでありうるもの」として捉える私の解釈に従えば、これらの異なる基準は、等しく「Gでありうるもの」がもつ奥行きの中に矛盾なく収まる

³ここで問題となる二種類の質料は、本論文第二章での自体的・付帯的の区別と（関連しているが）同じではない。両者の関連については、本章第六節でまとめる。

ものであると論じる。さらに、多様な基準を一つの奥行きの中にもつことは、単に矛盾しないだけでなく、質料的説明が、それが用いられる様々な説明的文脈において実的なものであることを保証するために、むしろ必要とされるということが示されるだろう。最後の第六節では、本章の議論をまとめた上で、それと本論文第二章での議論との関係を確認し、ソーマと身体のずれという本論文第一章で提起された問題を改めて考察する。

第2節 質料の探求と同名異義原理

本章であるものの質料を説明する例としてさしあたって出発点となるのは、(例えば煉瓦や木材といった)特定の材料を家の質料とする場面である(*Metaph.* Θ.7, 1049a8-11)。同じ箇所ではアリストテレスは、ある材料が家を構成する能力をもつとはどういうことなのか(能力をもたないものからはどのように区別できるのか)という問いを立てており、例えば煉瓦や木材であるということ、そのまま家になるための条件として必要十分なものであるとはみなしていない。この問いに対してアリストテレスは、「それ(すなわち、質料)の内にあるもののいかなるものも〔それが〕家になることを妨げないし、〔家になるために〕何かを付け足したり、〔何かを〕差し引いたり、〔何かに〕転化させたりすることを必要とするものが〔質料の内に〕ない⁴場合、という答えを与える⁵。ここでアリストテレスは、なんらかのさらなる加工(例えば、形の修正)を家になるために必要としない木材と煉瓦が家の質料である、と述べているように見える。要求されるのは、最後の組み立てのみであるということになる。

[質料の基準 1]

ある F は、それが G になるためのさらなる加工を必要としないものであるとき、G の質料である。

このような主張は、一見妥当で説得力をもつものであるように思われる。しかし、驚くべきことにアリストテレスは、別の箇所では今度は同名異義原理を持ち出しながらこれと相容れないような基準を提示する。

[引用 1]

⁴ εἰ μὴ θέν κωλύει τῶν ἐν τούτῳ καὶ τῇ ὕλῃ τοῦ γίγνεσθαι οἰκίαν, οὐδ' ἔστιν ὁ δεῖ προσγενέσθαι ἢ ἀπογενέσθαι ἢ μεταβαλεῖν

⁵ ビーア(Beere 2009, 247)はこれらの条件の例として、ひび割れていないし、足りなかったり、多すぎたり、焼かれていなかったりしないことを挙げている。この点に関するさらなる考察としては、Charles 2010を参照。

仮に眼が生物であったならば、視覚がそれ〔＝眼〕のプシューケーであるということになっていただろう。なぜなら、それ〔＝視覚〕が説明規定の意味での眼の実体⁶であるから。眼は視覚の質料であり、〔視覚の質料としての眼から〕これ〔＝視覚〕が離れさってしまうと、〔視覚が離れさってしまったその眼は、〕石像の〔眼〕や描かれた〔眼〕のように、同名異義的な仕方以外では、もはや眼ではない。

(DA II.1, 412b18-22)⁷

[同名異義原理]

もしある X が X としての機能を果たしていない場合、この欠陥をもつ X は同名異義的にのみ X である。よって、たとえある人々がそれを X という名で呼ぼうとも、厳密に言えばこの欠陥をもつ X は X ではない⁸。

引用 1 では、眼の理解において混乱が生じている。アリストテレスは、眼を形相（説明規定の意味での実体）と質料の結合体である生物との類比のもとで扱うと同時に、その質料のみとしても扱っているように思われる。これに関しては、後ほど眼の質料が瞳と言いつ直されているということから (DA II.1, 413a2-3) 質料としての眼は実質的には瞳のことを指しており、結合体である眼からは区別されていると考えることができるだろう。以上を踏まえれば、この引用でのアリストテレスの主張は次のように理解することができる。

- 前提 1：瞳は眼の質料である。
- 前提 2：眼の質料は、正常に機能⁹している眼を構成するものである。

⁶ 「説明規定の意味での実体」は、等しく実体の候補とされる質料、形相、両者の結合体のうち、特に形相をその他のものから区別して指すときに用いられる表現である。説明規定が形相であるということの内実は、本論文第六章で主に論じられる。

⁷ *ἔτι γὰρ ἦν ὁ ὀφθαλμὸς ζῶον, ψυχὴ ἂν ἦν αὐτοῦ ἢ ὄψις· αὕτη γὰρ οὐσία ὀφθαλμοῦ ἢ κατὰ τὸν λόγον. ὁ δ' ὀφθαλμὸς ἔλλη ὄψεως, ἣς ἀπολειπούσης οὐκέτ' ὀφθαλμὸς, πλὴν ὁμωνύμως, καθάπερ ὁ λίθινος καὶ ὁ γεγραμμένος.*

⁸ 同名異義原理に関する議論は、Ackrill 1972-3 によってその端初が与えられ、その後、特にプシューケーとソーマの関係を理解するという目的のもとで多くの論者によって論じられた。本章において私は、これらの論者によって論じられた問題を正確に再現し、それに答えることを目指しているわけではない。私の目標は、むしろ同名異義原理を説明論的な問題として改めて定式化しなおし、それに解決を与えることである。Lowe 2012, 231-2 による整理が、私の問題意識に比較的近い。また、Shields 1993b, 169-72 と Lewis 2009, 180-4 も参照せよ。

⁹ 何かが正常に機能しているということは、次の仕方理解される。

1. 死体の瞳・石像の瞳・絵に描かれた瞳
2. 眠っているが健康な人間の瞳
3. 現在何かを見ている人間の瞳

上の三つの瞳のうち、2 と 3 の瞳のみが機能している瞳である。これらは、本論文第一章第四節でプシューケーと関連して言及された第一・第二現実態にそれぞれ対応している。人工物に関しては、

1. まだ斧に組み立てられていない、または壊れた斧を構成している木材と青銅

- 前提3：正常に機能している眼を構成していない瞳は、眼の質料ではない。
- 結論：正常に機能している眼を構成していない瞳は、眼の質料ではないので、(真正な仕方では)瞳ではない。正常に機能している眼を構成していない瞳が瞳と呼ばれるとき、それは同名異義的にのみそう呼ばれる¹⁰。

よって、死体の瞳や視神経に回復不可能な傷を負った人の瞳は、同名異義的にのみ瞳と言われることになる。それらは正常に機能している眼を構成していないので、たとえこれらの瞳が正常に機能している眼を構成している瞳と同じように新鮮であったとしても、同名異義原理に従えば、それらは石像の瞳や描かれた瞳と同じ扱いを受けなければならない。機能している瞳のみが真の瞳、すなわち眼の質料であるとするこの議論は、次のような質料の基準を与える。

[質料の基準2]

ある F は、それが正常に機能している G をなしているとき、G の質料である。

これは、形相と質料の間に非常に緊密な関係を要求する立場である。質料のアイデンティティはいわば形相に依存し、形相と分離した場合、それは自らの質料としてのアイデンティティを失う。瞳の例に即して言えば、ある瞳の所有者が脳の非可塑的な障害などで視覚を失ったとき、その機能していない瞳は、機能していたときのそれとまったく同じ仕方で組成されている場合ですら、もはや瞳ではないということになるのである。質料と形相全般にこのような強い関係が認められることを仄めかすアリストテレスの発言は、幾度か確認される (DA II.1, 412b6-9; *Metaph.* H.6, 1045b17-22)。これらの箇所を字義通りにとり、この主張を質料形相論の枠組み全般に厳密に適用されるものと考えたら、以下で説明する同名異義原理によって引き起こされる問題は、アリストテレスの質料形相論の根幹に関わる問題であるということになる。

2. 壊れていないが何かを切断してもいない斧を構成している木材と青銅

3. 現に何かを切断している斧を構成している木材と青銅

上の三つのうち、2と3の木材と青銅のみを機能しているものとみなす。

¹⁰眼の質料である瞳に同名異義原理を適用するような解釈に対して、そもそも同名異義原理は質料ではなく結合体にのみ適用されるべきと主張する論者として、三浦(1998)を挙げることができる。私は、このような提案は、上の引用において、明確に質料として扱われている眼に同名異義原理が適用されていることからすれば不自然であると考え。本論で私が目指すのは、同名異義原理を特にその適用範囲に制限を設けないような一般的な原理として捉えた上で、なぜそのような原理が必要となるのかを、この原理にもとづいた質料の基準が「Gの質料とは何か」という問いに対する答えを与える際にどのような役割を担うのかを明らかにすることから示すことである。なお、同名異義原理の適用範囲に関しては、さらに本章注11及び48も参照せよ。

・奇妙な区別の問題：同名異義原理は、質料の基準1において論じられたような、それぞれの加工は完了したが、まだ斧としての活動を行えるよう結合されていない青銅の刃と木製の柄を斧の質料とみなすことを不可能にする¹¹。その結果、読者は結合前後の青銅と木材を奇妙な仕方では区別することを強いられることになる。たとえそれら結合前後の青銅と木材が、それら自体としては完全に同一に見えようと、アリストテレスは、結合後のものは前のものから区別されなければならない、前者のみが質料であり後者はそうではなく、両者は同名異義的にのみ同じなのだと主張するだろう¹²。さらに、このような不可解な区別を受け入れた場合、例えば「生物が死体になる」と述べることができなくなってしまうということが帰結する。本論文第二章での議論によれば、AがBへと生成変化することは、AとBの関係性を保証する質料の存在によって可能になる。同名異義原理に従えば、生物の質料である生物のソーマは、生物が生物として機能しなくなると同時に生物の質料でなくなる。このことは、生物から死体へ関係性を保証するようなものがなくなってしまうということを意味する。生物（または、生物のソーマ）が死体になると述べることは、できなくなるのである¹³。

・トリヴィアルで循環的な説明の問題：同名異義原理は、アリストテレスの質料形相論にもとづく質料的説明をトリヴィアルで循環的なものにする、その説明力を疑わしいものにする。どのような木材や煉瓦が家の質料となりうるのかの説明として、「Aの形をもつ木材と、Bの量をもつ煉瓦が正常に機能する家を構成する」という説明を誰かが与えたと想定してみよう。アリストテレスが与える質料的説明が、このような詳細な描写を与えるための語彙を用いることを許すようなものだったのかも問題だが、そもそもこの説明は（正常に機能している）家の質料を正しく示したものではない。家を構成していない木材と煉瓦が、Aの形やBの量をもつことはあり得るからである。木材と煉瓦に関する条件

¹¹通常、同名異義原理は生物のソーマにおいて問題とされ、人工物の質料にも同様に適用できるかに関しては解釈者の意見が分かれる。私は Shields 1993a, 145-9, 145-6n33 に従って、この原理は人工物の質料にも適用可能だと考える（*Meteor.* IV.12, 390a10-5 も参照）。

¹²この問題は、組み立て前と解体後という事例以外においても生じうる。例えば、その他の条件においてまったく問題がないにもかかわらず、それを構成するギアの一つが完全に錆つき、全体を解体することなしには取り外すことがもはやできなくなってしまうような時計を考えてみよう。この事例においては、一つのギアが抱える復旧不可能な問題のせいで、他のすべての部品が時計の質料として機能しえないものになっている。このギア以外の部品は、位置的にも機能している時計を構成していたときとまったく変わらない。にもかかわらず、これらはもはや時計の質料ではなくなってしまったのである。

¹³このような帰結は、さらに生物のソーマの質料といったものを導入しても同じである。その生物のソーマの質料は、同名異義原理に従う限り、生物のソーマが生物のソーマであることをやめると同時に、生物のソーマの質料であることをやめるだろう。

をより細かく指定した場合はどうだろうか。ある木材と煉瓦が、そこで指定された条件をすべて満たすにもかかわらず、別の要因によって家になることができない状況を想定することは、恐らく多くの場合において可能だろう。これらをすべて考慮にいと、正しく機能している家を構成している木材と煉瓦を必要十分な仕方で規定することが、条件を細かく指定するという仕方ではほぼ不可能であることがわかる。いかに詳細な条件を与えようと、そこで描写されたような木材と煉瓦は正常に機能する家を構成しない可能性を常にもつ。さらに、条件を細かく指定していけばいくほど、そこで述べられている木材と煉瓦の描写が、家を構成している木材と煉瓦の描写を網羅していない可能性が高まってしまう。結果的に、正しい家の質料の描写は、「家を構成しているところの木材と煉瓦」のようなものに落ち着かざるを得ない¹⁴。

これらの問題は、質料的説明の理論の説明力に対して強い疑いを投げかける。家を作るとき、人はどのようにしてまだ家でない煉瓦と木材からそれを作り出すことができるのかを知ろうとするだろう。すなわち、人は、まだ家になっていない木材と煉瓦を、家を構成している木材及び煉瓦と関係づけて理解することを必要とする。ある理論が、家になっていない木材と煉瓦について「それは家の質料ではない」と述べ、それらと家になっている木材と煉瓦との関連性を否定し、家の質料については「家を構成している木材と煉瓦が家の質料である」といった循環的でトリヴィアルな説明のみを与えるのなら、その理論は家を実際に作るに際しても、またどのようなものが家を構成するのかを理解するに際しても、まったく役に立たないものであるということになる。その理論は、端的に無用なのである。

¹⁴さらにいえば、家を構成するものが木材と煉瓦である必然性もないので、真に厳密に家の質料を述べたものは、「家を構成しているところの木材と煉瓦」でもなく、「家を構成しているところのもの」といったほとんど情報量をもたないものになってしまう。

これと関連して、少なくとも一つの時点に限れば、機能している家を構成している木材と煉瓦の物理的構成（及び両者の関連）を完全に記述することはできないのではないかという指摘がありうる（Balme 1984, 309-10）。このような描写は家に関する循環的な言及を含まず、しかも家になる準備ができた木材と煉瓦のそれとは必ず異なるようなものになるだろう。しかし、このような描写は、依然として家の質料を正確に示すものではない。家は、そこで描写されたものとはまったく異なる仕方で実現しうるからである。必要十分な描写を与えることに成功しない限り、家の質料を適切な仕方で示すような明確な記述を得たことにはならない。この点に関しては本章第四節においてさらに論じる（そこで明らかになるように、質料の基準1にもこの問題は等しく適用される。また、本章注47を参照）。

第3節 機能的質料と非機能的質料

同名異義原理によって生じる問題を乗り越えるためには、シールズ (Shields 1993a) によって導入された、二種類の異なる質料を分けるという試みが参考になる¹⁵。彼の提案によれば、我々は正常に機能している G を必然的に構成していなければならない「G の機能的質料」と、正常に機能している G とは必然的な関係をもたない「G の非機能的質料」を分ける必要がある。機能的質料は、『デ・アニマ』第二巻第一章 (引用 1) で論じられるような、同名異義原理に従う質料である。これは、それが存在するすべての時点において、他の何かを構成することで何らかの機能を実現しているということから、機能的質料と呼ばれる。例えば、特定の形をもって現に斧を構成している青銅は、斧の機能的質料であるということになる。これに対して、非機能的質料は、特定の形をもつといった仕方でのあり方が制限されていないような、端的な青銅を指す (*Phys.* I.7 など) にこれが見られる)。後者の質料は、それが斧を構成していることがありうるという点で斧の質料と呼ばれる。しかし、その質料は、ある機能を実現していないからといって、それ自体 (すなわち、非機能的質料) でなくなるわけではない (以後、非機能的質料としての F を「一般的な意味での F」と呼ぶことがある。この点に関して、本章注 48 も参照せよ)。このような区別を受け入れれば、家の成立前後において厳密に区別されなければならないのは家の機能的質料としての木材と煉瓦ということになり、家の非機能的質料としての木材と煉瓦は、家の成立前後において不自然に区別されず一貫して存続するということになる (Shields 1993a, 152-3)¹⁶。

¹⁵質料を二種に分けるという解決は、多くの論者によって試みられてきた。ここでは、Shields 1993a のみを考慮する。なお、そこでは「機能的」と「非機能的」ではなく、主に生物のソーマをどう理解するかという問題に焦点を当てながら、アリストテレス的な意味での *ὄργανον* (*PA* I.5, 645b14; *Metaph.* Δ.2, 1013a35-b3; *Pol.* I.3, 1253b27-33) を念頭においた上で、organic と non-organic という表現が用いられている。有機的・非有機的と訳されるこれらの表現を私が採用しない理由は、これらが読者に生物と無生物というここで問題になっていない (さらに、アリストテレスのテキストにおける *ὄργανικόν* と non-*ὄργανικόν* の区別にも対応しない) 区別を想起させる危険があるからである。二種類の質料を分けるアプローチに対する最近の批判としては、Frey 2007 を参照せよ。

¹⁶今まさに斧を構成している青銅が、機能的質料としても、非機能的質料としても述べられうるという点に留意せよ。よって、機能的質料と非機能的質料の区別は、第一に記述的なものであり、形の違いといった物理的な点にあるのではない。物理的に同一な青銅は、「斧を実現している青銅」または「(青銅としての、すなわち一般的な意味での) 青銅」という異なった二つの仕方での記述されうる。

混乱を避けるために、以下の三種を明確に区別しておこう。

- 現に斧を構成している青銅：機能的質料
- (組み立てられていない、もしくは壊れているといった仕方での) 斧を構成していない青銅
- (一般的な意味での) 青銅：非機能的質料

非機能的質料は、上の二つのどちらでもありうる。よって、機能的質料と非機能的質料の関係は、排他的なものではない。排他的なのは、機能的質料と (本論では特に名前を与えていない) 二番目のものである。二番目のものは、アリストテレスの語法に則れば、非機能的質料に欠かざる態を加えたものとして表現できる。

機能的質料と非機能的質料の関係を具体的にどのように理解するかに関する考察は後に回すとして、とりあえず両者の区別は、質料を例えば家の成立の前後において奇妙な仕方
で区別しなければならなかったという問題に応答することを可能にする。家を構成してい
なかつた煉瓦と木材も、家を構成している煉瓦と木材も、煉瓦と木材であるという点では
同一であり、その意味においてなら（すなわち、非機能的質料としてなら）両者は同じも
のとして連続性をもつといえるのである。しかしこの区別は、本章第二節で論じられたも
う一つの問題である、トリヴィアルで循環的な質料的説明をどのように理解するかという
点に関しては有効ではない。二種類の質料を区別することによって、現時点では以下の二
つの質料的説明がアリストテレスによって与えられているということになる。

1. 機能的質料にもとづいた説明：正常に機能している G になっている F が G の質料で
ある¹⁷。
2. 非機能的質料にもとづいた説明：（一般的な意味での F としての）F が G の質料で
ある。

二番目の答えは少なくとも循環してはいない。しかし、この答えは直ちに読者を本章の
冒頭で言及した憂慮に引き戻す。そこで問題となったのは、すべての F が G を構成できる
わけではないので、単に F と答えただけでは G の質料を正確に答えたことにならないとい
う問題だったが、二番目の答えはまさにこのような不十分なものにすぎないからである。
従って今度は、様々な非機能的質料 F のうち、どのようなものが機能的質料 F なのか、と
いう点が論じられなければならないということになる。これは、二つの質料を区別すると
いう戦略によって、今度は二つの質料を何らかの仕方に関係づける必要が生じたというこ
とを意味する。この問いに答えるためには、まず彼は二つの質料の関連性に気づいている
必要があり、さらにどのような非機能的質料 F が機能的質料 F であるのかを明らかにする
ために必要となる様々な語彙を、両者の関係を説明する際に実際に用いることができる必
要がある。これらの条件が満たされた場合のみ、アリストテレスは非機能的質料から機能
的質料を循環せずかつトリヴィアルでない仕方で引き出すことができるだろう¹⁸。

¹⁷アリストテレス自身がこのような説明（質料ではなく、始動因的説明の例ではあるが）を与えている例とし
て、像の説明である「活動している彫刻家としてのポリュクレイトス」を想定することができる（*Phys.* II.3,
195b10-21; *Metaph.* Δ.2, 1014a13-25; ただし、アリストテレスのテキストに明確に認められるのは「彫刻家である
ポリュクレイトス」であり、「活動している」や「として」句は彼がその周辺で述べていることをもとに私が補足
したものである）。

¹⁸刊行時での『デ・アニマ』研究を総括した Shields 1993b, 171-2 において、シールズは二つの質料の関係を
明らかにすることがさらなる課題であることをすでに指摘しており、質料を二つに区別することから生じる

二つの質料が何らかの関係をもつということをアリストテレスが理解していたことを示すためには、質料の形容詞的用法に関するアリストテレスの記述を確認する必要がある。

[引用2]

ところで、我々が「これ τόδε」ではなく「それ製の・それ的な〔もの〕 ἐκείνῳν」と呼ぶところのものがあると思われるが——例えば、箱は「木材」ではなく「木製の〔もの〕」と〔呼ばれ〕、木材は「〔四元素の〕土」ではなく「土製の〔もの〕」と〔呼ばれ〕、さらには土も、もし〔箱や木材と〕同様であるなら、他の何らかの〔「これ」〕ではなく「それ製の・それ的な〔もの〕」と〔呼ばれる〕ように——、「〔それ製の・それ的なもの〕の」「それ」〔＝例えば、木材〕が常に可能的に端的に後のもの〔＝例えば、箱〕である。例えば、箱は「土製の〔もの〕」ではなく土でもなく、むしろ「木製の〔もの〕」である。なぜならこれ〔＝木材〕が可能的に箱であるから、すなわち、これが箱の質料だからである。

(*Metaph.* Θ.7, 1049a18-23)¹⁹

二つの難問のうちの一つとしてこれを挙げている（また、Lewis 1994, 276-7）。二つの難問のうちのもう一つである、現に生きている生物の質料をなぜアリストテレスは可能的に生きていると述べるのか（*DA* II.1, 412a20-1; II.1, 412b25-6）という問題は、より詳しく述べれば次のようなものである。

アリストテレスのこの発言は次のような意味で理解しがたい。像の質料の場合、像を現に構成している青銅は像を再度構成するための可能性を何らかの仕方でも依然として保持しているように思われる。彫刻家は、その青銅を溶かし、同じ像、または異なる像をそれから作り出すことができるからである。これに対して、生物のソーマは復活や変身の能力を有しているわけではない。現に像でありながら可能的にも像である青銅に対して、生物のソーマは、これと同じ意味で、現に生物を構成している場合にも可能的に生物である、と述べることができない。だとすれば、アリストテレスが生物のソーマを可能的と述べることは不可解に映る。——この問題に対処するための提案として、人工物の質料と生物の質料との間には決定的な違いがあると主張し、生物の質料における可能的という言葉が人工物のそれとは異なるものとして理解する試みがある。私は、質料的説明の理論は人工物と生物の質料に対して同じ仕方で適用可能であると考えるので、両者の質料を何か根本的に違うものとして考える解釈はとらない。上で描写された人工物と生物の質料における可能的の意味の理解に関しては、もし機能的質料と非機能的質料との区別に十分な注意を払うならば、生物の質料に対して提起された問題（現に G になっている F は可能的に G ではない）は、実は人工物の質料に対しても適用可能であったということがわかる。現に像を構成している像の機能的質料は、像が溶解したときには（上の想定に反して）消滅してしまうので、他の像を構成することができない。よって、この例にもとづいて人工物の質料と生物の質料を区別することは適切ではない（本章注 11 も参照せよ）。

機能的質料と非機能的質料の区別に注目した場合、現に X を構成している質料はどのような意味で可能的と呼ばれているということになるのかに関する私の現時点での応答は、本章注 27 に述べられている。なお、人工物の質料と生物の質料を並列する私の立場の妥当性を示すためには、生物にも（*DA* II.1 で瞳を例に認められた機能的質料以外に）非機能的質料があるということと、人工物にも（*Phys.* I.7 などで認められた非機能的質料以外に）機能的質料があるということを示す必要がある。この点に関しては、以下で論じられる形容詞的用法と、本章注 48 及び本章第五節を参照せよ。

¹⁹ ἔοικε δὲ ὁ λέγομεν εἶναι οὐ τόδε ἀλλ' ἐκείνῳν——οἶον τὸ κιβώτιον οὐ ξύλον ἀλλὰ ξύλινον, οὐδὲ τὸ ξύλον γῆ ἀλλὰ γῆινον, πάλιν ἢ γῆ εἰ οὕτως μὴ ἄλλο ἀλλὰ ἐκείνῳν——ἀεὶ ἐκείνο δυνάμει ἀπλῶς τὸ ὑστερόν ἐστιν. οἶον τὸ κιβώτιον οὐ γῆινον οὐδὲ γῆ ἀλλὰ ξύλινον· τοῦτο γὰρ δυνάμει κιβώτιον καὶ ὕλη κιβωτίου αὐτῆς.

アリストテレスは、何かの質料は「木材」のような名詞形で呼ばれるのではなく、「木製の」（一般的な形では、「それ製の・それ的な」）のような形容詞として述べられると主張する。この引用からは、「木材」と「木製の」という呼び方が具体的にどのような関係にあるのかは明らかにならない。しかし、この問題が取り上げられているもう一つの箇所である『形而上学』Z 巻第七章 1033a5-23 においてアリストテレスは、二つの表現が実質的な違いをもつものであるということを明らかにしている。彼はまず、家は「煉瓦」ではなく「煉瓦製の」として呼ばれるという、引用2と同じ論点に言及する。続いて彼は、今度は引用2から離れて、異なる仕方で述べられている質料の間には明白な違いがあると指摘する。家を単に煉瓦とは呼ばないという点をまず確認した後、アリストテレスは「よく観察すれば」²⁰、我々は家が煉瓦から生成するとは端的には (*ἀπλῶς*) 言わないだろうと主張する²¹。その理由として、アリストテレスは煉瓦（すなわち、家を構成していない煉瓦）は家になるために必ず転化する必要があるという点を挙げる。ここで彼は、まだ家を構成していない煉瓦が正常に機能している家を構成する（すなわち、形容詞を用いて述べられるものになる）ことが、単なる述べ方の違いやいわゆるケンブリッジ変化ではなく、例えば、煉瓦を特定の状態へと導く、形や位置における変化を含意するものであると考えている²²。よって、「よく観察すれば」、家を構成している煉瓦（機能的質料）を単に「煉瓦」（非機能的質料）と呼ぶことは不正確であるということになる。家を構成している煉瓦は、家を構成することに関連する特定の状態にあるという点において、一般的な意味での煉瓦から区別される。ここからは、次のことが自然に帰結する。家を構成している煉瓦を正確な仕方で描写するためには、これらの関連する状態に言及することが必要である。

質料の形容詞的用法を確認することによって、アリストテレスが非機能的質料（例えば、名詞形で言及される一般的な意味での煉瓦）と機能的質料（形容詞的に用いられる、家を構成している煉瓦）の関係をどのように考えていたのかが明らかになった²³。機能的質料は、

²⁰ *εάν τις ἐπιβλέπη σφόδρα*

²¹ この *ἀπλῶς* (*Metaph. Z.7, 1033a21*) と引用2における *ἀπλῶς* (*Metaph. Θ.7, 1049a21*) は異なる役割を担っているように思われる。ここでの *ἀπλῶς* が「煉瓦」と「煉瓦製の」の違いに注目させるためのものであるとすれば、引用2での *ἀπλῶς* は、「木材」は箱と直接的な関係をもつが、「土」はそうではない、ということをも明らかにするために用いられている。

²² 同じ箇所でもアリストテレスは、散らばった煉瓦が家を構成する煉瓦になることを、病人が健康になることと比較する。両者は、ともに単なる述べ方の違いやケンブリッジ変化ではない変化を意味しているように見える。*Phys. I.7, 190b1-10* 及び *PA I.1, 639b27-30* もまた、そのような変化に言及している（Whiting 1992, 83, 83-4n24 も参照せよ）。散らばった煉瓦が家を構成する煉瓦になる例は、機能的質料を理解するために有用である。しかし、「散らばった煉瓦」はすでに何らかの制限が加えられた煉瓦であるため、これを非機能的質料として理解してはならない（本章注16を参照）。

²³ 形容詞的用法の位置づけに関しては、本論文第二章注73も参照。

特定の状態にあるという仕方で制限された非機能的質料である。では、アリストテレスは両者の関係を詳細な仕方で説明することができるのだろうか？²⁴

第4節 質料における遠近

もしアリストテレスが、例えば箱の質料は何かという問いに対して、(一般的な意味での)木材を形といった様々な状態と組み合わせることで得られるような答を与えることができるなら、彼は不十分な答えである「木材」や循環的である「箱を構成している木材」の二択に陥らない説明を与えることができるということになる。この新しい説明は、より詳細に満ちたものであり、実質的なものであるだろう。上の引用からは、アリストテレスが実際に詳細な描写を伴った質料の説明を与えることができたということが示されたとはまだいえない。しかし、『形而上学』H 巻第二章 1042b9-3a12 は、アリストテレスが質料に帰されることができるよう様々な状態を描写するための語彙を、自らの理論のなかに組み込むことができたということを明らかにしてくれる。そこでアリストテレスは、結合、位置、時間、場所といった点から様々な質料を区別している。これらの違いは、「差別相」(*διαφορά*)²⁵と呼ばれる。アリストテレスが様々な差別相を用いることで異なる状態にある質料を区別することができたということは、彼が「Aの仕方でおかれた石」と「Bの仕方でおかれた石」といったものを、(石という点では同じだが)明確に区別しえたということの意味する。このことは、どのような状態にある煉瓦や青銅が家や斧の質料なのか(同時に、どのような煉瓦や青銅が家や斧の質料ではないのか)について、アリストテレスが、非機能的質料と差別相を組み合わせることによってそれを詳細に説明することができたということを示している。

しかし、問題は依然として残る。非機能的質料と差別相を組み立てて得られる説明は非

²⁴機能的質料と非機能的質料の違いを、質料がもちうる様々な状態に言及することで説明することの重要性は、アリストテレス本人によって明確に意識されていた。PA I.1, 640b17-29において彼は、あるものの質料的説明を探求する場合に「それが何からなっているか(例えば、火や土 [= 非機能的質料])だけでは十分でない」(*οὐ γὰρ ἱκανὸν τὸ ἐκ τίνων εἶστίν, οἷον πυρὸς ἢ γῆς*)と述べる。ベッドの質料を理解するためには、その材料だけでなく、その材料がもつ形といった状態をも考慮しなければならない(すなわち、特定の状態にある非機能的質料を理解しなければならない)。実際には、ベッドを理解するためにはむしろこの状態のほうが重要なのである(Balme 1992, 88; Lennox 2001, 137-38; また、Shields 2014, 54も参照せよ)。生物のソーマの一部である手や足についてもアリストテレスが同様の指摘をなすという点に関しては、*Metaph.* H.2, 1042b25-3a11(特に、b28-31及びBostock 1994, 257)を参照せよ。

²⁵*Metaph.* H.2においてアリストテレスは、二種の差別相について述べている。ひとつは、質料の多様性に関する差別相であり(1043a4-7)もうひとつは、現実態や形相に関する差別相である(1043a19-20)。本章において重要になるのは、前者の差別相の存在が認められているという点であるので、後者の差別相に関してはこれ以上言及しない。

常に多様なものになると思われるが、そのうちのどの説明が家や斧の機能的質料を適切に表すものと言えるのだろうか？説明における欠如や超過は、いかに差別相を多用しようと必ずつきまとうものに思われる。例えば、そこから煉瓦を一つ抜いたり足したりしても、家を構成している煉瓦が家の質料でなくなるわけではないし、刃が少し欠けたり錆びたりしたからといって、斧を構成している青銅が斧の質料でなくなるわけではない。許容されるべき質料の変化に関する条件の全てを差別相で列挙することが不可能であるならば、機能的質料がどのようなものであるかを、非機能的質料と差別相からなる説明のみによって十全に規定することはできないということになる²⁶。よって、どのような状態にある非機能的質料が機能的質料なのかという問いに対して我々が返せる答えは、家や斧が実現されることを保証する、欠如や超過といった不正確さを埋め合わせるための補足を含むものにならざるをえない。その場合、非機能的質料と差別相の組み合わせによる機能的質料の説明は、結果的には例えば次のようなものになる。「状態 A、状態 B、状態 C、... 及びそれが斧になることを妨げないために必要となるすべての状態を実現しているところの（端的に言えば、*mutatis mutandis*）青銅」。この説明は、その一部である「それが斧になるために問題となりうる状況を生じさせないようなすべての状態」という句に、目的となるものへの言及を含んでしまっている²⁷。だとすれば、アリストテレスは、差別相を用いることによって詳細な（よって、トリヴィアルでない）仕方では家や斧の質料を説明することには成功したが、本章第二節ですでに示唆されていたように、そこから循環的な要素を追い払うこと

²⁶まさに今ある結合体をなしている質料に対して適用される無規定性の内実は、このような困難を意味するものであるように思われる（GA IV.10, 778a4-9; *Metaph.* Z.11, 1037a27; Θ.7, 1049b1-2; Balme 1984, 306, 309-10 及び本論文第二章における無規定性の分析を参照せよ）。

²⁷質料を理解するために、目的となるもの、すなわち形相への言及が必ず必要となるという点に関しては、Charles 2009, 2010 及び本論文第四章と第六章を参照せよ。また、補足なしには機能的質料を十全に規定することができないという点は、現に結合体の部分となっている質料をアリストテレスが「可能的」と呼んでいるというパズルを解くための一つの可能性を与えてくれる（本章注 18 を参照）。

まず、現に斧となっている青銅が、機能的質料としても、非機能的質料としても記述されうるという点を想起せよ（本章注 16; また、生物の質料に関しては、本章注 48 と本章第五節を参照）。（斧でありうる）非機能的質料としての「青銅」にいかに多くの差別相を適用しようと、本文で述べられた（斧が生成していることを担保すると同時に、形相への言及を含む）補足が与えられない限り、そこで得られる描写は「斧でありうる（しかし必ずしも「なっている」とはいえない）もの」の描写にすぎない。形相への言及を含むこの補足が加えられた仕方では描写されている青銅を、「可能的に斧である」とするのは確かに奇妙である。しかし、たとえそこで描写されている実際の対象が現に斧になっている青銅であったとしても、それが形相への言及を含む補足が加えられていない仕方では描写されたならば、その描写が示すものは常に「可能的に斧であるもの」に留まらざるをえない。結果的に、現に結合体の部分となっている質料についても、それを非機能的質料（と差別相）として述べれば、そこで述べられているものは「可能的にその結合体であるもの」であるということになる。このような解釈を全面的に展開するためには、アリストテレスが結合体の質料を可能的であると述べているときに実際に対象となっているものが、非機能的質料としてのそれであるということ、DA II.1 や *Metaph.* H.6 といった論争になっているテキストを解釈することから示さなければならない。その具体的な検討は、今後の課題とする。

には成功できなかったということになる。このような帰結は、今までその内実を追いかけてきた質料的説明の理論を無意味にしてしまうのではないか？

上の疑念に対して、私は適切さにおける遠近を質料に認めるというアリストテレスの発想を検討するならば、彼が循環的な要素を残す答えのうちにも十分な意義を見出していたことを示せると考える²⁸。

[引用3]

それぞれには〔それぞれに〕適した〔質料〕〔=近い質料〕があるということ〔を見逃してはならない〕。例えば、粘液にとっては甘いものまたは脂っこいものが〔それに適した質料であり〕、胆汁には苦いものまたは他の何かが〔それに適した質料である〕。しかし、恐らくこれら〔=甘いもの、脂っこいもの、苦いもの、他の何か〕は同じものから生じている。

ところで、あるものが別のものの〔質料〕であるとすれば、同じ物に多くの質料があるということになる。例えば、もし脂っこいものが甘いものから生じるならば、粘液は脂っこいものと、〔脂っこいものの質料である〕甘いものから〔生じるということになるだろうし〕、胆汁が第一の質料²⁹へと分解されることによって、胆汁から〔生じるということにもなる〕。なぜなら、あるものからあるものが生じる仕方は、〔粘液にとっての脂っこいものや甘いもののように〕先にあることによってか、または〔粘液にとっての胆汁のように〕原理へと分解されることによってかの二通りだからである。

(*Metaph.* H.4, 1044a17-25)³⁰

引用3においてアリストテレスは、粘液にそれに適した質料（脂っこいもの）があると

²⁸質料が遠近と関連して論じられる箇所として、他に *Metaph.* Δ.4, 1015a7-10; Δ.6, 1016a19-24; H.4, 1044b1-3; Θ.7, 1049a18-36 など挙げることができる。なお、四種の説明^{アイディア}の他のものについてもアリストテレスは遠近を認めている (*Phys.* II.3, 195a29-32; *Metaph.* Δ.2, 1013b30-4)。

²⁹この箇所での第一の質料 (*πρώτη ὕλη*) という表現に関して、私はいわゆる「第一質料」をめぐる生じている様々な論争 (それは何か、アリストテレスはその存在を信じていたか) に対する判断を保留する。ここで見られる *πρώτη ὕλη* という第一質料の関係に関しては、Bostock 1994, 272-73 も参照せよ。また、*πρώτη ὕλη* という言葉がアリストテレスの著作でどのように用いられているのかを精査し、アリストテレスがいわゆる第一質料というものを指すための決まった表現をもってはいなかったということを示すものとして、伊藤 1990 を参照せよ。

³⁰ὅμως ἔστι τις οἰκεία ἐκάστου, οἷον φλέγματος [ἔστι πρώτη ὕλη] τὰ γλυκέα ἢ λιπαρά, χολῆς δὲ τὰ πικρὰ ἢ ἄλλ' ἄττα· ἴσως δὲ ταῦτα ἐκ τοῦ αὐτοῦ. γίνονται δὲ πλείους ὕλαι τοῦ αὐτοῦ ὅταν θατέρου ἢ ἐτέρα ἦ, οἷον φλέγμα ἐκ λιπαροῦ καὶ γλυκέος εἰ τὸ λιπαρὸν ἐκ τοῦ γλυκέος, ἐκ δὲ χολῆς τῶ ἀναλύεσθαι εἰς τὴν πρώτην ὕλην τὴν χολήν. διχῶς γὰρ τὸδ' ἐκ τοῦδε, ἢ ὅτι πρὸ ὁδοῦ ἔσται ἢ ὅτι ἀναλυθέντος εἰς τὴν ἀρχήν.

いうことを認めると同時に、「同じ物に多くの質料があるということになる」と述べることで、他の様々なもの（甘いものや、さらには胆汁まで）を、等しく粘液の、しかし、より遠くにある質料として挙げるのが可能であると主張する。この区別は、粘液になりうるものとなりえないものの区別ではなく、粘液になるにより適した質料と、相対的にそうでない質料の区別である。胆汁は、粘液になるために、脂っこいものよりもより多くの段階を経なければならない。空間的な譬喩を用いるならば、胆汁は粘液になるために脂っこいものよりも遠いところに位置しているのである。粘液がそれになるに適した複数の質料をもつということは、新たな質料の基準を読者に与える。

[質料の基準 3]

G になるに（より多く、またはより少なく）適した F が、G の質料である³¹。

この新しい基準と以前の二つの基準との最も明白な違いは、新しいものにおいては質料であることにある奥行きが認められるという点である。

通常、近い質料と遠い質料の区別は、（一般的な意味での）脂っこいものと（一般的な意味での）甘いもののような、種類において異なる非機能的質料の区別に対応すると理解される。上の引用 3 もまた、そのような理解を支持するもののように見える³²。もしこの理解が正しいとすれば、何かの質料であることには、種類における違いに対応して階段状の秩序が存在するということになるだろう。この場合、質料の遠近に訴えることは、どの質料が他の質料より結果物になるに適しているのかを知るために、種類の違いに即してそれを理解することには資するが、同じ種類に属するものどものうちのどれが同じくその種類に属する他のものより適しているのかを理解するためには役に立たないということになる。

しかし以下の引用においてアリストテレスは、遠近のなかに（種類の違いだけでは理解することのできない）機能的質料をも含めて考えているように思われる。彼は、「最後の質料と型式³³は同じであり一つ」（*Metaph.* H.6, 1045b18-9）³⁴と述べる³⁵。ここで言及されて

³¹例えば、甘いものは粘液になったときはすでに消滅しているので、「粘液になるに適した甘いものは、粘液の質料である」といった説明はやや奇妙に映るかも知れない。これに関しては、「問題となる生成変化との関連をもたないものとしてのアイデンティティを保ちながら、何かが持続すること」を質料であること条件として考える発想に対する本論文第二章での批判と、本章注 39 を参照せよ。

³²このような説明がなされている例として、Ross 1924, 2:256 や Fine 1992、Bostock 1994, 272-3 などを挙げることができる。

³³型式と訳した *μορφή* は形相とほぼ同義で用いられる。*Metaph.* における両者の関係については、伊藤 2006 を参照。

³⁴*ἡ ἐσχάτη ὕλη καὶ ἡ μορφή ταὐτὸ καὶ ἓν*

³⁵この文が記されている文脈は、実際にはかなり複雑である。それを理解するためには、次のような形相の複

いる最後の質料が何を意味するのかは、その表現の用例の少なさと相まって簡単に答えられる問題ではない。一つの可能性は、最後の質料が例えば粘液の例における、一般的な意味での脂っこいもの（非機能的質料）を指すという解釈である。しかし、同じく質料の遠近への言及が見られる『形而上学』^Θ 卷第七章 1049a18-36 においてアリストテレスは、形容詞的な仕方で用いられている木材を最後の基に指定されたもの（すなわち、最後の質料）とみなしている³⁶。最後の基に指定されたものとしての質料が形容詞的に用いられるものであるなら、最後の（すなわち、最も近く、最も適している）質料は、端的に非機能的質料と同一視されてはならないということになる。「よく観察すれば」、それは機能的質料を指しているのである。

最も近い質料をこのように機能的質料として理解し、それを同じ質料の遠近のなかに位置づけた場合、質料の遠近を正しく理解するためには、異なる種類を区別するための差別相（種差、異種類間差別相）だけでなく、一つの種類に属するもの同士を互いから区別するための差別相（同種類内差別相）も必要とされるということが帰結する³⁷。同種類内差別相を導入することによって、質料の遠近は種の異同に応じた階段状のものではなく、より連続的な奥行きとして理解されることになる。この奥行きはきめ細かいものであり、例えば次のいくつかの異なる質料的説明を、一つの遠近の上にその適切さと詳細さの度合いに応じて配置することを可能にする：³⁸

層的な構造に言及する必要がある。質料1と合わさって結合体1をなしている形相1は、それ自体が入れ子構造的に質料2と形相2の結合体2としてあると考えられている。質料1や形相1、結合体1が感覚される対象に関して言われると考えられているのに対して、形相1の内部構造をなしていると思われる結合体2と質料2、形相2は、（形相がそれといわれるところの一つである）定義に関して述べられていると思われる。Metaph. H.6のこの文においてアリストテレスは、特に定義と関連する後者の結合体2と関連して、それをなしている形相2と質料2の一性を論じているように見える。私は、ここで展開されている一性の説明は、定義を論じるという文脈に限られず、感覚される結合体における形相と質料（すなわち、結合体1をなしている形相1と質料1）の一性に対しても適用可能だと考える Bostock 1994, 288-90 や Keeling 2012 の理解に従う。質料と形相の一性に関しては、本論文第四章でさらに論じられる。

³⁶ 解釈が大変困難な箇所だが、現にソクラテスとなっている質料が「最後の質料」と呼ばれている Metaph. Z.10, 1035b30-1 も参照せよ。

³⁷ 質料の基準1を導き出した際のアリストテレスの議論もまた、同種類内差別相を要求するようなものであることに注意せよ。

³⁸ この奥行きのうちの近さや遠さは、現代において因果を論じる際に引き合いに出される「出来事の因果的連鎖」における近さと遠さとは区別されなければならない。同じ出来事の連鎖においては、遠い出来事（例えば、この腕のこの動き）も近い出来事（この花瓶のこの落下）も、同じ結果（この花瓶のこの破損）を必ず引き起こす。その意味では、遠い出来事は因果的には近い出来事と同じくらい決定的である。これに対して、質料の遠近はこのような決定性を保証しない。四元素の塊（遠い質料）は、斧（結果）になることも、ならないこともありうる。質料が近くなるにつれて、結果が実際に生じる可能性は高まる（刃の形をした青銅が斧になる可能性は高い）。しかし、ほとんどの質料はその目標を達成するという点において不確定なものとして残る。これに対して、現に何かを構成しているものとしての直近の質料には、このような不確定性はない。しかし、直近の質料は、それを規定するために常に関連する形相への言及を含む循環的な補足を必要とするので、確定的に述べることができないという意味での不確定性をもつ（本章注26も参照）。

- 状態 A、状態 B、状態 C、... 及び斧になることを妨げないために必要となるその他の状態をすべて実現することで、現に斧になっている青銅は斧の質料である。
- 現に斧になっている青銅は斧の質料である。
- 木製の柄と結合される準備が整った青銅は斧の質料である。
- 一般的な意味での青銅は斧の質料である。
- 一般的な意味での青銅の質料³⁹は斧の質料である。
- 一般的な意味での第一の質料は、広い意味で、斧の質料である。
- より広い意味では、肉や骨も斧の質料である。なぜなら、それらは第一の質料に分解されることができるからである。

第5節 質料的説明の現場

上の理解がどれほどテキストに沿ったものであるかを考えるために、アリストテレスの生物学的著作における、同種類内差別相にもとづいた説明の例をいくつか確認しよう。ここでは、質料の遠近の概観を示すことで事足りていた理論的な著作においてよりも、はるかに細かい作業がなされている。以下の例は、アリストテレスが実際に質料的説明の現場においてなしていたことを私の理解が正確にとらえたものであることを示してくれるだろう。この点を踏まえた後に、改めてトリヴィアルで循環的な説明という問題に対する私の応答を示す。

『動物の諸部分について』第二巻において、アリストテレスは様々な動物の部分について次のような説明を与えている。

³⁹ 若干の混乱をきたす余地を残す説明として、次のようなものがある。

・ (青銅の質料を F とした場合) 斧の機能的質料としての F は斧の質料である。

一般的な意味での F は斧の質料がもつ奥行きにおいて青銅より遠い場所に位置づけられるので、「斧の機能的質料としての F」をどこに位置づけるかは明確でない。私は「斧の機能的質料としての F は斧の質料である」という説明は、「斧の機能的質料としての青銅は斧の質料である」という説明に変換可能であると考え。機能的質料としての F が斧を構成するためには、それが青銅になっている必要があるからである (別の例として、手になっている肉が「人間の機能的質料としての肉」と呼ばれ、この説明が「人間の機能的質料としての手」に変換されるというものを想定することができる)。この点は「(青銅の質料である F の質料を G とした場合) 斧の機能的な質料としての G の質料は斧の質料である」といった仕方で拡張されうる。結果的に、ある F が機能的質料であるか否かは、それがどのような種類 (例えば、手、肉、肉の質料、第一の質料など) に属するかからは決まらないということになる。なお、結果が生成しているときは遠い質料が観察不可能になる混合の事例においては、このような説明はなりたないように思われるかも知れない。しかしこの場合も、見えなくなった質料が可能的には存在しているという点から (GC I.10, 327b22-6) 「P の機能的質料としての可能的な R (現実的には Q) は P の質料である」といった説明が可能であり、これは「P の機能的質料としての Q は P の質料である」という説明に変換可能である。

ある同じ〔種類に属する部分〕が互いに対してもつ差別相〔＝同種類内差別相〕——例えば、〔血とは〕別のある種類に属するもの同士の〔互いに対する差別相〕と、〔ある〕血の〔異なる〕血に対する〔差別相〕——は、よりよくあるためのものである。より薄い血、より濃い血、より純粋な血、より混濁した血、さらに、より冷たい血、より温かい血などが、ひとつの動物の諸々の部分に〔それぞれ〕あるし（実際に、〔体の〕下の部分に対して上の部分にある〔血〕は、〔下の部分にある血〕に対して）これらの差別相によって異なっている）、ある〔動物〕に対する別の〔動物〕にも〔それぞれ〕あるのだから。全体として、動物のうちのあるものは有血であり、他のものは血の代わりに何か別のそのような〔部分〕をもつ。血は、より濃く暖かければそうであるほど強さを生み出すものであるし、より薄く冷たければそうであるほど、より感覚に優れより知的なものになる。

(PA II.2, 647b29-8a4)⁴⁰

他の部分、すなわちそのような〔＝同質〕部分に関しても、また異質部分⁴¹に関しても、〔それらが〕同様に次のような差別相をもつと想定されなければならない。〔その差別相の〕あるものはよくあることまたは悪くあることのためにあり、またあるものはそれぞれの動物の働きや実体〔＝本質〕のためにある。例えば、両方〔のグループの動物〕が眼をもっているときに、あるもの〔＝一方のグループ〕は硬い眼を、他のあるもの〔＝他方のグループ〕は湿った眼をもち、前者はまぶたをもたず、後者は〔まぶたを〕もつが、〔それらの違いはすべて〕より正確な視覚をもつためなのである。

(PA II.2, 648a13-9)⁴²

まず、ここで問題になっているものが同種類内差別相であることは明らかである。アリ

⁴⁰ αὐτῶν δὲ τούτων αἱ διαφοραὶ πρὸς ἀλλήλα τοῦ βελτίονος ἕνεκέν εἰσιν, οἷον τῶν τε ἄλλων καὶ αἵματος πρὸς αἷμα· τὸ μὲν γὰρ λεπτότερον τὸ δὲ παχύτερον καὶ τὸ μὲν καθαρώτερον ἐστὶ τὸ δὲ θολερώτερον, ἔτι δὲ τὸ μὲν ψυχρότερον τὸ δὲ θερμότερον ἐν τε τοῖς μορίοις τοῦ ἐνὸς ζώου (τὸ γὰρ ἐν τοῖς ἄνω μέρεσι πρὸς τὰ κάτω μόρια διαφέρει ταύταις ταῖς διαφοραῖς) καὶ ἐτέρῳ πρὸς ἕτερον. καὶ ὅλως τὰ μὲν ἔναυμα τῶν ζώων ἐστὶ, τὰ δ' ἀντὶ τοῦ αἵματος ἔχει ἕτερόν τι μόριον τοιοῦτον. ἐστὶ δ' ἰσχύος μὲν ποιητικώτερον τὸ παχύτερον αἷμα καὶ θερμότερον, αἰσθητικώτερον δὲ καὶ νοερώτερον τὸ λεπτότερον καὶ ψυχρότερον.

⁴¹ 同質部分は、肉や骨のようなものを、異質部分は鼻や手などを指す。

⁴² ὁμοίως δὲ καὶ περὶ τῶν ἄλλων καὶ τῶν τοιοῦτων μορίων καὶ τῶν ἀνομοιομερῶν ὑποληπτέον ἔχειν τὴν διαφορὰν, τὰ μὲν πρὸς τὸ βέλτιον ἢ χεῖρον, τὰ δὲ πρὸς τὰ ἔργα καὶ τὴν οὐσίαν ἐκάστῳ τῶν ζώων, οἷον ἐχόντων ὀφθαλμοὺς ἀμφοτέρων τὰ μὲν ἐστὶ σκληρόφθαλμα τὰ δ' ὑγρόφθαλμα, καὶ τὰ μὲν οὐκ ἔχει βλέφαρα τὰ δ' ἔχει πρὸς τὸ τὴν ὄψιν ἀκριβεστέραν εἶναι.

ストテレスはここで、同じ種類に属するものに帰され得る様々な差別相について言及している。後者の眼の例においては、これらの差別相が、同じく眼に属するもののある眼はよりよいものに、ある眼はよい悪いものにするとされている。さらに、同種類内差別相は、単に良い眼と悪い眼（良くも悪くも、両者は等しく機能している眼である）の区別を可能にするだけでなく、ある部分であるに適したものと、それであるに適していないもの、すなわち、結果としてそれをもつものを死に至らせるようなものを区別するためにも用いられる。

馬とある種の牛を除いて、我々が吟味したすべて〔の動物〕において、〔心臓は〕骨をもたない。しかし、これら〔＝馬とある種の牛の心臓〕においては、骨は、その〔心臓の〕巨大さゆえに、まさに全身を支えているような仕方で〔心臓の〕支えとなるために、〔心臓の〕もとにもあるのである。

(PA III.4, 666b17-21)⁴³

〔羊以外の〕他の動物にとって、脂っこい肝臓をもつことは有利なことであり、〔羊以外の他の動物は〕往々にして全体が〔脂で〕満ちている〔肝臓〕をもつ。しかし、羊はこのような状態を被ると、死んでしまう。

(PA III.9, 672a26-28)⁴⁴

これらの例は、アリストテレスが同じ種類に属するが異なる状態にあるもの（良く機能しているもの、少し劣っているが機能しているもの、機能していないもの）を、同じ遠近の中に位置づけて比較しながら論じることができたということを示している。これらは、目的となるものから異なる距離をもつものとして理解されているのである。さらに、上で与えられた例は「心臓」や「肝臓」といった言葉が、非機能的質料を指すために用いられることがあるということをも示す。「骨をもたない」または「骨をもつ」という差別相を抜きにして考えた場合、「心臓」は機能しないものと機能するものの両方を同時に指す。

すでに明らかだが、このように質料における遠近を導入することは、質料的説明から循環的要素を取り去ることを可能にするわけではない。しかしこれに関しては、質料が関係的なものに属するという（本論文第二章で主に論じられた）ことに留意する必要がある。付帯的説明に加えて、循環的な要素を含む自体的説明をも用いることで初めて十全な説明

⁴³ ἔστι δ' ἀνόστεος πάντων ὅσα καὶ ἡμεῖς τεθεάμεθα, πλὴν τῶν ἵππων καὶ γένους τινὸς βοῶν· τούτοις δὲ διὰ τὸ μέγεθος οἶον ἐρείσματος χάριν ὅσπουν ὕπεστι, καθάπερ καὶ τοῖς ὅλοις σώμασιν.

⁴⁴ τοῖς μὲν οὖν ἄλλοις ζώοις συμφέρει τε τοὺς νεφροὺς ἔχειν πiónας, καὶ πολλάκις ἔχουσιν ὅλους περίπλεως· τὸ δὲ πρόβατον ὅταν τοῦτο πάθη, ἀποθνήσκει.

となるものとして質料的説明を捉えた場合、質料を形相への言及を削除した形で規定することを、そもそもアリストテレスは目指していなかったということがわかる。これに加えて大事な点は以下の点である。質料の遠近に関する私の解釈によれば、アリストテレスは、斧を知る様々な人々の間で斧の質料に関する知識に度合いの差が認められるということに同意するだろう。鍛冶屋でない私は、斧の質料について、青銅と木材がそれであるという程度の説明しか与えることができない。これは、鍛冶屋にとってはまったくもって満足のいく説明ではない。彼らは、斧になるに適した質料について、より情報量のある実質的な説明を与えるだろう。私と鍛冶屋は、斧を知っているという点では等しい。しかし、斧の質料に関する我々の知識は非常に異なる。かつ、斧の質料とは何かという問題に理論的な興味を示すだろう研究室の科学者は、両者ともさらに異なる説明を与えるだろう。

ここまで来て初めて、アリストテレスがトリヴィアルで循環的な説明という批判に対してどのように応答するのかを考察することができる。質料的説明の理論は、箱でありうるものは何かという問いに対して、還元的な仕方で確定した答えを与えることはできない。言い直せば、箱を構成する木材に関する知識を、目的としての箱に言及する循環的な要素を排除した仕方で、「(一般的な意味での)木材」と様々な差別相を組み合わせた説明に還元する方法はない。しかし質料的説明の理論は、箱になれるものの奥行きにもとづいて、詳細な(よってトリヴィアルではない)描写を与えることができる。これら様々な状態にある質料に関する非還元的な、しかしトリヴィアルではない描写は、次のような意味で有用なものである。たとえアリストテレスが箱の質料に関して還元的で確定的な説明を与えることができないとしても、本章第五節で確認した例が明らかにするように、彼は一つの奥行きにもとづいてなされた様々な質料的説明を、それと関連付けられている差別相を対比させることで比較することができる。このような比較は、「一般的に言って、次々のような差別相をもつFがGになるのにより適している」といった説明を与えることを可能にする。すなわち、説明から循環的な要素を根絶することなしにも、質料的説明の理論は様々な状態にある質料を比べることを可能にし、結果的に、どのような状態にあるどのような種類の材料が箱を構成するのにより適していて、どれがより少なく適しているのかに関するトリヴィアルでない説明を与えることができる⁴⁵。

⁴⁵質料の遠近に対する私の理解は、質料であることに関して様々な基準が存在することを認めるものである。このような理解が本章第二節において提起された質料の奇妙な区別の問題に対してどのような帰結をもたらすのかに関しては、以下のように述べることができる。まず、(二種の質料を分ける論者がそうしたように)この問題を解くためにPの非機能的質料 R_1 を導入することは、Pの質料であることにおいて「Pの機能的質料 R_2 であること」とは異なる新たな質料を導入することに等しい。大事な点は、これらに加えて、 R_1 の非機能的質料 Q_1

私は、以上のような帰結が、例えば斧の質料について語らなければならないほとんどの場面において、アリストテレスの質料的説明の理論が強い説明力をもつものであることを示すと考える。アリストテレスの質料的説明の理論は、どのような青銅と木材が斧であるためにより適しているのかを、異なる状態にある木材と青銅がもちうる様々な違いに言及しながら鍛冶屋とともに論じることを可能にするものである⁴⁶。同様に、その理論の枠組みの中では、より一般的な意味で何かが斧を構成する可能性をめぐって、例えば、青銅を構成する質料について、どのようなものがより硬い青銅を作るのかといった点を科学者とともに議論する可能性も担保されている。

第6節 質料の基準の多様性と奥行き

本章全体を通していくつかの引用を検討することで、私はアリストテレス本人が少なくとも三つの異なる質料の基準を与えているということを示した。ある場合においては、アリストテレスは組み立ての準備が整った木材や煉瓦を家の質料であると述べる（基準1）。続いて彼は、機能的質料こそが質料であると述べる（基準2）。さらには、彼は遠い第一の質料すらも（より広くは、第一の質料に還元されうるすべてのものをも）質料として認める（基準3）。これらの基準は、一見相互に矛盾するように思われる。よって、ここに質料概念の根源的な齟齬を読み込んだり、あるいは、生物の部分、組み立ての準備が整った煉瓦、第一の質料といったものは同名異義的にのみ質料と呼ばれようとする論者が現れることは不思議ではない。

しかし、このような多様性が単なる混乱ではないということはもはや明らかである。アリストテレスは、「家を構成している煉瓦」、「組み立ての準備が整った煉瓦」、さらには「第一の質料」といったものを、一つの奥行きのもとに見ているからである。実際には、このような基準の多様性こそが、それ自体非常に多様でありうる説明の文脈に応じて、適切な基準を採用することを可能にする。実際にGを実現しているGの質料を説明する必要がある場面では、機能的質料をGの質料であると述べるだろう（基準2）。これに対して、ま

といった新たな基準をさらに加えることができるという点である。非機能的質料としての R_1 や Q_1 は、どちらも奇妙な区別に苛まれない。結果的に、私の理解は、質料を二つに分けることで可能になった解決を拡張することを目指すものであったということになる。

⁴⁶ 上で引用された PA II.2, 648a13-9 を参照すれば、異なる状態にある質料が、異なる状況に応じた形でなら等しい程度に何かを構成するに適していた可能性があるということのアリストテレスの質料的説明の理論が適切な仕方でも処理することができたということも明らかである。ある状況においては、硬い眼とまぶたがないことが正確な視覚のために必要であるが、別の状況では、湿った眼とまぶたが必要とされる。

だGになっていないものからGを生み出す必要がある場面においては、例えば、組み立ての準備が整った木材や煉瓦を質料として述べることになる(基準1)。Gになりうるものに関して最も広い意味で理論的な考察をしている場面においては、遠い第一の質料もGの質料として考慮される(基準3)。このような理解に照らせば、基準1と2は、最も広い基準3に回収される特定の焦点であるということになる⁴⁷。適切な質料的説明を得るためには、質料を問う場面に応じて適切な基準が採用される必要があるが、どのような基準がその場で採用されようと、有意味な質料的説明が与えられるためには、機能的質料と非機能的質料を区別し、質料がもちうる様々な状態の違い及びそれらとそれらに共通する目的の間の距離とを考慮しながら、異なる質料的説明を比較することが必要となる。

質料をこういった奥行きをもつものとして理解することを拒否し、例えば同名異義原理を検討するとき問題になったような仕方で、必然的に結合体を構成していなければならないような特殊なもののみを指す質料があると考える必然性はあるのだろうか？もしここで私が論じたことが正しいのなら、一般的な意味での質料に対比されるような、こうした特殊な質料(例えば、眼を構成していることがその本質となる、必然的に生きていなければならない瞳)の存在に加担する必要はない。問題となっている質料が、瞳なのかそれとも青銅なのかは、それが機能的質料として、あるいは非機能的質料として語られているのかを見定めるための助けにはならない(*Metaph. Z.16, 1040b5-8* や本章注39を参照)。説明を要求する文脈に応じて、煉瓦が機能的な質料として想定されることもあれば(本章で問題となった形容詞的用法を参照)手や血が非機能的質料として想定されることもある(本章第五節での例を参照)⁴⁸。アリストテレスは(そして彼以外の人も)「手」や「血」といっ

⁴⁷よって、厳密には、質料の基準1(「あるFは、それがGになるためにさらなる加工を必要としないものであるとき、Gの質料である。」)も循環的な要素を含んでいるということになる。正確には、人は家の機能的質料としての木材と煉瓦からの距離を測ることなしには、どのような木材と煉瓦が基準1を満たす意味での家の質料なのかを知ることができない。誰かが、これらの材料は組み立ての準備が整ったので家の質料であると述べるとき、その人は前もって組立後の材料がどのようなものであるかを知っている必要があり、目の前の材料と組立後の材料の違いを述べることができなければならない。

実際には、どのような質料の基準を採用しようと、関連する形相への指示は常に(暗黙的であれ)前提される。一般的な意味での青銅を質料として述べる場合は、斧への指示を質料の説明に必要としないように思われるかもしれない。しかし、その場合においても、特に青銅を斧の質料として選んだからには、なぜ一般的な意味での青銅は斧の質料として適しているのに、泥はだめなのかといった問いに答えることは可能である必要がある。一般的な意味での青銅と泥が斧の質料であるための適切さにおいてもつ違いを説明するためには、その目的(斧)がすでに視野に入っていなければならない。

⁴⁸Mirus 2001においても、生物の同質部分が機能的質料としても、また非機能的質料としても記述されうるといふ点が指摘されている(Whiting 1992, 77-85も参照せよ)。ここでは、アリストテレスが機能的と非機能的を含む様々な質料の基準を用いているという私の理解を擁護するための論点を、さらに一点示す。

アリストテレスは、(*Cat.*における第二実体としての)手や頭が、関係的なものに分類されるのかに対する判断を下すのに躊躇している(*Cat.* 7, 8a12-b24)。これは、本章で見てきたように、生物の部分が機能的質料として

た言葉を、主に機能的質料を指すものとして用い、「青銅」や「煉瓦」といった言葉は逆に非機能的質料を指すものとして用いるだろう。しかしこのことは、それらの言葉が本来的にどちらかの質料を指すためにしか使えないからではなく、それらの言葉が用いられる通常の(かつ、恐らく、自然な)説明的文脈がそのような使い方を要求するからである⁴⁹。異なる質料の基準が必要となる理由は、説明が要求される文脈が多様だからであり、手や青銅といった事物の分類に対応してではない。

質料的説明がもつ奥行きに注目することで、私はトリヴィアルで循環的な説明や質料の基準の多様性といった問題が解決されうる、あるいは少なくとも緩和されうるものであることを示した。シールズ(Shields 1993b, 171)は、二種類の質料を分けた上で、その複雑な関係を説明しなければならないような理論は「かなり散らかった理論に見える」⁵⁰と危惧している。本章での議論に従えば、質料的説明の複雑性はむしろ説明されるべき事柄の複雑性を反映するものであり、その理論が提供する説明の実用性を担保するものであるということになる⁵¹。「(一般的な意味での)木材」や「箱を構成している木材」といった説明を与える者は、箱の質料について、ある程度の知識をもっている。しかし、質料的説明の理論が可能にするものは、これらの説明にとどまらない。真正な意味において箱の質料を理解することは、箱になれるものの奥行きを理解することである。箱の質料の説明は、それが要求される文脈に応じて、焦点を絞って詳細なものにもなりえれば、より広い視野からみた大雑把なものにもなりうる。質料的説明の理論は箱の質料に関して、還元的な説明を与えることはできないが、依然としてそれが有用なものであることは明らかである。

次章へと進む前にさらに二つの点を明らかにしておきたい。まず一点は、ここで論じられた質料における機能的・非機能的の区別と、前章での自体的・付帯的な質料的説明の区

も、また非機能的質料としても記述されうるという点に起因するように思われる。もし頭が何かに関係づけられず、それ自体として同定されうるものだとすれば、頭をその機能と関連づけずに理解すること(頭を、非機能的質料として理解すること)も可能だろう。

⁴⁹このことは、なぜ「一般的な意味での手」が(「一般的な意味での青銅」とは違って)通常生物の部分として機能している手を指すのかを説明する。しかし、ここから「手」は非機能的質料として用いられることができないということは帰結しない。本章注48及び本章第五節を参照せよ。

⁵⁰同名異義原理と「部分」や「器官」といった言葉に起因する困難について言及した後、ロウ(Lowe 2012, 232)はこれらを論じる際に厳密な用語を採用することの重要性を指摘する。この指摘に照らせば、アリストテレスは恐らく「部分」や「器官」といった言葉と関連している質料の概念を練り上げるに際して、混乱を招くような用語法を用い、その結果散らかった理論を与えたということになるだろう。このような見解に対してアリストテレスの立場を擁護するならば、彼はむしろ様々な基準によって捉えられる質料という概念に共通の基盤を与えることを目指していたのであり、この共通する基盤をもとに、理論の説明力を担保することを試みたのである。

⁵¹アリストテレスは、*Metaph.* Θ.6, 1048a32-b4において可能態に様々な意味を認め、木材が像になる事例をそのうちの一つとして挙げている。本章の議論は、可能態の多くの意味のなかの一つであるとされるものに対して、さらにその内部に複雑で広範な奥行きを認めなければならないということを実証したものと理解できる。

別の関係である。例えば、斧の機能的質料と非機能的質料は次のようなものであった。

[斧の機能的・非機能的質料 1]

- 斧を現に構成している青銅が斧の機能的質料である
- 青銅が斧の非機能的質料である

これに対して、第二章で論じられた斧の自体的質料は「斧でありうるもの」であり、付帯的質料は「青銅」などである。機能的・非機能的と自体的・付帯的の関係を理解するために必要なのは、自体的と付帯的質料のそれぞれに、さらに現実態と可能態の区別があるという点である（*Phys.* II.3, 195b3-6）。例えば、家の自体的な始動因的説明は「現に建築している建築家」（現実態）でも、単に「建築家」（可能態）でもありうる。ここでの可能態にもとづいた始動因的説明である「建築家」は、非機能的質料が機能的質料でありうるものを指すように、現に建築していることがありうる建築家を指していると思われる（現実態を含むような意味で可能態が用いられている例として、*DI* 13, 23a7-20）。斧の質料、すなわち「斧でありうるもの」としての青銅も、「現に斧になっている青銅」と記述されることもあれば、単に「青銅」と記述されることもある。このような理解を導入した場合、斧の機能的・非機能的質料は、次のように述べ直すことができる。

[斧の機能的・非機能的質料 2]

- 「現実態にある斧の質料としての青銅」が斧の機能的質料である
- 「可能態にある斧の質料としての青銅」が斧の非機能的質料である

結果的に、上で挙げた斧の機能的・非機能的質料は、現実態または可能態にある付帯的質料に相当するものであるということが分かる。本章での考察は、これに相当するものを具体的に述べるための説明が、多彩な差別相を用いることで様々な仕方で奥行きをもつということを示す試みであったといえる。

次に明らかにしておくべきは、これまで本論においてその概要が示された質料理解が、生物の質料としてのソーマを探求するにあたってどのような意味をもつのかという点である。本論文第一章第三節において、アリストテレスのソーマ概念を理解することを難しくする要因として挙げられたのは、ソーマがプシューケーとの関係なしには自らのアイデンティティをもたないものとして描写されているという点であった。本章の議論に即してこの問題を述べ直せば、このような事態はソーマが同名異義原理に支配される質料であるということに起因する。では、このことは、バーニェトが論じたように、アリストテレスが

理解不可能な奇妙な身体概念を持っていたということの意味するのだろうか。

本論文第二章第六節において私は、アリストテレスの質料概念がもつ主な意義は、問題となっている生成変化への言及なしに特定されうるアイデンティティをもつ何らかの存在者を同定することではなく、そういったものを同定することを含めて展開される説明のための枠組みを与えたことにあると主張した。本章でも継承されているこのような理解のもとづけば、まず、質料としてのソーマが、説明という観点と関連してのみ理解できる奥行きをもつものである以上、それを現代の身体と端的に比較するのは不適切であるといえる。質料としてのソーマは説明のために導入された枠組みを指すものであり、身体はそこで与えられ得る答えの一候補にすぎないからである。その限りでは、ソーマを奇妙な身体と理解することもまた、不適切であるということになるだろう。

しかし、バーニエトの批判にはもう一つ考慮すべきものが残っている。質料としてのソーマの難解さに注目しながらバーニエトは「真にアリストテレス主義者であるためには、我々は生命や心の出現が説明を必要とするものであると信じることを止める必要があるだろう」と述べる（Burnyeat 1992, 26）。この批判は、本章で論じた、ソーマが同名異義原理の束縛を受けるという事態にもとづいたものである。機能していないソーマはソーマではないとする同名異義原理が、上の批判においては「ソーマは本質的に生命をもつ身体である」ということを意味するものとして理解されている。質料としてのソーマと現代の身体が単純に比較可能なものではないということを経験にのりとしても、ではソーマの概念にもとづいた説明が生命や心の出現に対して有意味なものでありうるのかという点は、まだ答えられていない。

この批判は、ソーマの基準、すなわち生物の質料の基準が、同名異義原理が提示するようなもののみであった場合には有効である。しかし私は本章において、質料を説明することを、ある奥行きのもとで様々な説明を与えることとして理解し、その際には多様な基準がその奥行きのもとで用いられるということを示した。このような探求は、本章第五節で確認したように、動物学的著作において、生物の質料に対しても行われているものである。これらは、アリストテレスが、同名異義原理に支配されないような非機能的質料としてのソーマを導入し、「どのようなソーマが機能しているソーマなのか」という問いを問うことができたということの意味する。同名異義原理のもとでソーマを導入した理由は、生きていくということを経験をそれ以上の探求を拒否するようなものとして提示するためではない。むしろこれは、「どのようなソーマが機能しているソーマなのか」という問いを形式的に成り

立たせるために必ず導入されなければならない、質料的説明の必須の部分なのである。

こうして可能になる説明はどのようなものだろうか。「どのような F が (G の質料である) 機能している F なのか」という問いは、一見 G への言及を抜きにした形で機能している F を求めるという還元主義的な方向性を有しているように見えるかもしれない。この問いに答えることは、F を差別相とともに記述することによって、G の何であるかを説明し尽くすことであるように思われるからである⁵²。しかし、このような理解に対する本章の応答はすでに明らかである。付帯的説明の限界を理解し、G の機能的質料を説明するに際して G への言及を削除することができないとするアリストテレスは、還元的な説明をそもそも目指していない。

もし上でバーニエトが述べている生命や心の出現に関する説明が、生命や心が、それを持たない対象からいかにして出現するのかを明らかにするような還元的な説明だとすれば、アリストテレスの与えるものがこのような説明を求める人々の望みを満たすことができないという点は恐らく正しい。実際のところ、アリストテレスの質料的説明の理論は、生命や心だけでなく、斧の出現にすらそのような還元的な説明を与えることができない。しかし、本章で論じられたことが正しいなら、還元的な説明を与えることの失敗は、この理論が無用なものであり、よって駆除されるべきものであるということの意味するわけではない。質料的説明の理論は、アリストテレスが生物学的著作においてそうしたように、生物の質料に関する (還元的ではないが) よりよい説明を求めることをも妨げるようなものではないからである⁵³。

⁵²Williams 1986 では、非機能的質料 (彼の論文では、機能的質料である body に対する BODY) を導入することによって、結果的に質料形相論は一種の控えめな物質主義にすぎないものになってしまうのでは、という危惧が露わになっている。この点に関しては、本論文第一章注 19 も参照せよ。

⁵³還元主義を含めた現代的な自然主義と質料形相論との距離を計りながら、現代的なそれとは異なるアリストテレス的自然主義の可能性を模索したものとして、今井 2004 を参照。

第4章 説明の修正と柔軟性

本論文第二章と第三章で主張されたことは、質料という概念が、「Gでありうるもの」という自体的説明に対応するものを措定した上で、その具体的な何であるかを様々な付帯的説明を用いて探求することを可能にする「生成変化を正しく語るための学」を構成する理論的装置として理解されるべきであるという点である。その際に明らかになったのは、「Gでありうるもの」を、Gが生じるという生成変化との関係を抜きにした形で自らのアイデンティティをもつものを指す言葉（例えば、特定の個体やその集合を指す種類語）を用いて必要十分な仕方で規定する説明を与えることはできないし、そこで与えられる説明は、常にある奥行きのもとで把握されなければならないということであった。

アリストテレスは、Gの質料を説明するために、自体的・付帯的説明の区別（また、それと関連するものとして、機能的・非機能的質料の区別）を用い、その内実を具体的に説明するための差別相や、様々な説明を一つの秩序のもとで理解することを可能にする遠近といった道具立てを有しており、それらの役割を正確に把握することが、彼の質料概念がもつ意義を理解するために必要となる。こういった事柄を確認する過程で、質料的説明の性格も同時に明らかになった。質料的説明は、「Gでありうるもの」に対する非還元的だが情報に富む説明をそれぞれの説明的文脈において与えることを目指すものであり、説明はより一般的なものにもより精緻なものにもなりうるが、そこから循環性が完全に排除されることはない。

質料形相論を説明論的な観点から理解するというアプローチが、質料形相論を構成するもう一つの軸となる「形相」をどのように解釈することを可能にするのかという本論文後半部の主題へと進む前に、質料形相論がよりよい質的説明を与える可能性を有するものであるという前章の主張と関連するもう一つの論点、すなわち、間違っただ説明はいかに修正されるのかという点を議論しておきたい。そのために本章では、まず近年引き起こされた一つの論争を確認することにする。それへの応答を模索する過程で、本論は説明の方法論に言及するアリストテレスのテキストをいくつか検討することになるが、その作業を通じて、質料形相論が与える説明において「理由」がもつ位相が明らかになるだろう。そこから私は、質料形相論が説明理論としてもつ柔軟性を浮彫りにすることを目指す。

第1節 導入

本論文第一章で機能主義を検討する際に引用された「プシューケーのパトス」に関して、アリストテレスはそれが「質料において実現された説明規定」(λόγοι ἐνυλοὶ)であると述べ、より具体的な定義として「これこれによるこれこれのための、このようなソーマの、あるいはその部分ないし能力の、なんらかの^{キーンネーシス}運動変化」(DA I.1, 403a26-7)¹というものを挙げる。この非常に抽象的な定義を理解するためには、数行後のより直感的で分かりやすい例が助けになる。アリストテレスはプシューケーのパトスの一つである怒りに関して、問答家たちはそれを「復讐への欲求か、もしくは何かそれに類似したもの」として説明し、自然学者は「心臓の周りの血と熱いものの沸騰」として説明するだろうと述べる(DA I.1, 403a30-b1)²。大事なのは、アリストテレスがこれら二つの説明を、それぞれ怒りの形相(すなわち、説明規定)と質料に関わるものとして捉えているという点である。冒頭でのプシューケーのパトスが「質料において実現された説明規定」であり、問答家と自然学者の説明がそれぞれ怒りの形相と質料に対応するものであるならば、問答家と自然学者の説明の両方を用いれば、上で与えられたプシューケーのパトスの定義である「これこれによるこれこれのための、このようなソーマの、あるいはその部分ないし能力の、なんらかの^{キーンネーシス}運動変化」に相当するものを怒りに関して具体的に示すことができるということになる。最終的にアリストテレスは、質料と形相の両方に言及する説明規定を探求することこそが、真の自然学者の目指すべきところであり、プシューケーを探求するものもまたそのようにしなければならないという結論を下す。真の自然学者は形相と質料の両方を理解する必要があるという主張自体は、他に『自然学』第二巻第二章などにもはっきりと認められる³。

上のような主張に対してまず思い浮かぶ非常に素朴な疑問は、心臓周辺の血の沸騰が怒りに関連している、という発言そのものの信憑性である。まずアリストテレス本人が、血をもっていないものも怒るということを認めている(例えば、HA IX.40, 626a22-3における蜂)⁴。これは、単に「心臓と血をもっている動物に関しては」という限定を付すことで

¹κίνησις τις τοῦ τοιοῦδι σώματος ἢ μέρους ἢ δυνάμεως ὑπὸ τοῦδε ἔνεκα τοῦδε.

²ὁ μὲν γὰρ ὄρεξιν ἀντιλυπήσεως ἢ τι τοιοῦτον, ὁ δὲ ζέειν τοῦ περὶ καρδίαν αἵματος καὶ θερμοῦ.

³この主張の内実に関しては、後ほど本論文第六章で改めて考察する。

⁴HA IX.40では、DA I.1で怒りを表すために用いられているὄργηではなく、χαλεπαίνεινという言葉が用いられている。しかし、χαλεπαίνεινはὄργίζεσθαιと同じ意味で用いられることがある(EN IV.5, 1125b31-6a1; Bonitz 1870, 844)。なお、バームによる新しい校訂(Balme 2002)では、伝統的にはHAの第九巻とされていたものが第八巻の位置に置かれている。本論文での表記は、伝統的な配列に従った。

解決する問題かも知れない。しかし本当の問題はむしろ、現代的な知見からすれば、血をもつ人間が怒るときに本当に心臓付近に温度の上昇が観察されるのか、また、観察された場合、その温度の上昇は怒りに対して有意な関連をもつのかが疑いえる事柄であるという点にある⁵。このような疑問に対しては、アリストテレスの生理学的知識の限界を指摘し、それを現代風に修正（例えば、怒りの質料を「心臓付近の血の沸騰」から「特定の脳状態」というものに変更）すれば問題はない、という応答がなされるかも知れない。

しかしアリストテレスの質料形相論は、「怒り」の質料をこのように簡単に変更することを許すようなものなのだろうか？ 例えばアリストテレスは、質料と形相の関係を説明するために「蜜蝋と印形が〔一つであるかどうかを探索する必要が〕なく、一般的に言って、それぞれのものの質料と、質料がその質料であるところのもの〔＝形相〕が〔一つであるかどうかを探索する必要が〕ないのと同じように、人は、プシューケーとソーマが一つであるかどうかを探索する必要もない」(DA II.1, 412b6-8)⁶と述べる。プシューケーは生物の形相、ソーマは質料であるが、これらが一つであるかどうか探索される必要すらない事柄であるということは、両者の一性を自明なものと捉えるような見解を示している。プシューケーとソーマの関係については、両者を現実態と可能態として理解するという方針が上の引用の直前に述べられているので、一性の自明性に関するアリストテレスの言及は、このような方針を受け入れる限り、まったく不可解なものというわけではない。しかし、プシューケーとソーマにおける一性の自明性を補足するために持ちだされたと思われる蜜蝋と印形の例は、あまりにも場違いに見える。いかなる印形とも関連のない（すなわち、いかなる印形も押されていない）蜜蝋や、いかなる蜜蝋とも関連のない印形を想定することができる以上、両者の関係が探索する必要すらない仕方で自明であると考えことは非常に難しい。可能態と現実態の対に関連して述べ直せば、蜜蝋が印形の可能態であり、印形が蜜蝋の現実態であると端的に述べることは奇妙に聞こえるし、この点を譲歩するとしても、このことが、探索する必要もないほど自明なことであるとは到底思えないのである。となると、恐らくここで述べられているのは、「印形が押されている（または押されうる）蜜蝋」と「蜜蝋に押されている（または押されうる）印形」の関係であると思われる（Hicks 1907, 314）。このように述べ直した場合、これら二つが何らかの緊密な関係をもつ

⁵ 様々な感情を身体の温度変化と関連づける発想そのものは、古代人の占有物でも、特定の文化圏にのみ通用するものでもない（Nummenmaa et al. 2014）。しかし、ある感情が生じたときに、それが本当に特定可能な生理学的変化を伴うかに関しては、意見が分かれている（Barrett 2006）。

⁶ διὸ καὶ οὐ δεῖ ζητεῖν εἰ ἐν ἡ ψυχῇ καὶ τὸ σῶμα, ὡς περ οὐδὲ τὸν κηρὸν καὶ τὸ σχῆμα, οὐδ' ὅλως τὴν ἐκάστου ὕλην καὶ τὸ οὐ ἢ ὕλη.

ということは、確かに自明であるように思われるからである。

質料と形相の一性の自明性を怒りの事例に適用した場合、「復讐への欲求」と「心臓付近の血の沸騰」もまたアリストテレスによって、一つであるか否かを探索する必要がないほど自明なこととして考えられていたということになるだろう。彼は、「復讐への欲求」と「心臓付近の血の沸騰」がそれぞれの現実態と可能態であることは自明であり、「復讐への欲求」は、「蜜蝋に押された印形」を「印形の押された蜜蝋」から切り離すことが不可能であるのと同じような意味で、「心臓付近の血の沸騰」から切り離すことができないと主張するだろう。「蜜蝋に押された印形」の質料を「印形の押された蜜蝋」から他のものに変更するのはほぼ不可能に思われるので、怒りの質料を別のものへと修正する余地がアリストテレスに本当に残されているのかは非常に疑わしくなる。このような帰結は、質料形相論を非常に硬直したものとして提示することを余儀なくする。

本章で私が目指すのは、アリストテレスの質料形相論が、上の引用で見られるような質料と形相における自明な一性を認めながらも、同時に経験的な探求による説明の修正の可能性を残すようなものでもあることを示すという、ほぼパラドキシカルにすら見える目標である。出発点となるのは、質料と形相の関係の理解をめぐるチャールズの議論とそれに対するキャストンの応答である（Charles 2009; Caston 2009; 日本語でこの議論を紹介したものとして、茶谷 2012）。両者はそれぞれ、質料と形相の一性を字義通りに受け止める立場と、その帰結として生じる説明力の欠如という問題に対応するために、そのような字義通りの解釈を避け、質料と形相の間に分離可能性を認めようとする立場を代表する。

チャールズとキャストンの議論を追う過程で、一性と分離可能性の関係を調整し、両者の主張がそれぞれもつ無視することのできない大事な論点を矛盾しない形で引き継ぐことを可能にするような質料解釈が、すでに本論文第二章と第三章で与えられていたということが明らかになるだろう。しかし、チャールズとキャストンの論争は、第三章までの本論の議論では簡単に解決できない問題である、間違った説明の修正をいかに行うかという問いに注意を向けるという点で、依然として議論されるべきものを残している。この新たな課題に答えるために、アリストテレスが実際に用いている様々な説明の様式を確認し、それらにおいて「理由」がもつ位相を明らかにすることで、質料形相論がもつ説明理論としての柔軟性を示すことが、本章の目標となる。

第2節 分離可能性と説明力

近年チャールズ (Charles 2009) は、「プシューケーのパトス」に関する上記の定義を論じることから、アリストテレスの心の哲学の内実を理解するための、非常に強力で新しい見解を提示した。チャールズによれば、質料と形相の緊密な関係に注目するならば、我々は、怒りといった現象を分析する際にアリストテレスが用いる枠組みが、現代的な発想からはまったくかけ離れているということを見て取ることができる。チャールズの議論の要点の一つは、形相と質料が、互いなしには存在することができず、さらに互いへの言及なしにはそれとして同定することすらできないようなものであるという主張である。チャールズによれば、怒りの質料であるような血の沸騰は単なる血の沸騰ではない (Charles 2009, 18)。それは、正確には「復讐への欲求と関連するタイプの血の沸騰 (a-desire-for-revenge-type of boiling of the blood)」としてしか同定されえないものであり、よって、怒りの形相を抜きにしては存在することも、その何であるかを述べることもできない。同様の議論は、形相にも適用される。怒りの形相は「血の沸騰と関連するタイプの復讐への欲求」であり、これにはすでに質料への言及が含まれている。

チャールズは、このような立場が怒りを分析する際の現代的な立場とは著しく異なるものであると考える。チャールズによれば、現代の心の哲学における二元論や物質主義は(同時に、これらのうちのどちらかにアリストテレスを振り分けようとする論者たちも) ある心的現象を説明する際に、そこに心的変化への言及なしに同定されうる物的変化と、物的変化への言及なしに同定されうる心的変化の区別があると考えているという点では一致している。よって両者は、心的変化と物的変化の関係を実際に探求する際に、これらを互いへの言及を含まず同定しうるものとしてまず措定した上で、次にそれらの関係をどう捉えるか(もしくはどう一方を他方へと解消するか)を問うという順序で進むという点でも共通している。二元論者や物質主義者と比較して、物的変化と心的変化(ここでは、怒りの質料と形相)をそもそも互いから分離して同定することができないと考えるアリストテレスの立場は、まったくもって独自 (sui generis) のものであるとチャールズは主張する。心的なものや物的なものとの分離可能性を前提とするデカルト以後の哲学とは違って、互いから分離して述べうるような純粋な「心的」や「物的」は、アリストテレスの自然にはないものである。

[形相と質料の存在と同定における分離不可能性テーゼ]

Xの質料は、Xの形相の存在なしには存在することができず、Xの形相への言及を抜きに同定されることもできない。これは、Xの形相についても同様である。

このような解釈がどのような帰結をもたらすのかを考えるためには、キャストンによるコメントを参照する必要がある(Caston 2009)。彼は、質料と形相の関係を理解するに際して、「強い質料形相論」と「穏健な質料形相論」の二つの選択肢があると述べる⁷。「強い質料形相論」は上で展開されたチャールズの立場であり、そこでは質料と形相はその存在と同定の両方において互いを必要とする。質料と形相が常に同時になりたつということからは、結合体もまた両者と同時になりたつということが帰結するので、結果的に、質料・形相・結合体は、いかなる仕方でも分離不可能であるということになる。キャストンはこのような立場を否定し、代わりに「穏健な質料形相論」と彼が呼ぶものを採用する。キャストンもまた、質料と形相の結合体に関しては、質料と形相抜きにそれが存在することはできないし、結合体を理解するためにはその質料と形相の両方を知らなければならない、と考える点においてはチャールズに同意する。すなわち、「穏健な質料形相論」においても、結合体の存在と同定には、必ずその形相及び質料の存在とそれらへの言及が必要となる。問題は、チャールズが特に強調して論じた、結合体の形相と質料の相互の関係である。結合体の存在と同定に関しては、それと質料及び形相の間に何らかの分離不可能性を認めていたのに対して、質料と形相の相互関係においては、キャストンはそれぞれの存在と同定における分離不可能性を拒否する。また、質料や形相が存在するために必ず結合体が存在している必要もなく、それらを知るために必ず結合体を知っていなければならないということもないとされる。キャストンによれば、怒りが存在するためには、確かに「復讐への欲求」と「心臓付近の血の沸騰」が両方存在している必要があるし、怒りを知るためにはこれらの両方を知る必要がある。しかし、「心臓付近の血の沸騰」が存在するために、またはその何であるかを知るために、「復讐への欲求」や「怒り」が同時に存在する必要はないし、それらの何であるかを知る必要もないのである(形相である「復讐への欲求」に関しても同様の議論がなりたつ)⁸。

⁷彼の論文では、この二つに加えて「過激な質料形相論」というものも挙げられてる(Caston 2009, 33)。これは、質料と形相を、互い抜きには存在できないものや、互いへの言及抜きには理解されえないものとして考えるだけでなく、完全に同一であるとする立場である。この立場の整合性はキャストン本人によっても疑問に付されているので、本論でも考察の対象とはしない。

⁸結合体と質料・形相の分離不可能性に関する、キャストンの穏健な質料形相論の立場は、次のように整理することができるだろう(Caston 2009, 37)。

- (結合体と質料・形相の間の)下向きの分離不可能性(downwards inseparability)の肯定: 怒りからその質料と形相を引き離すことはできない。質料と形相なしには、怒りは存在することも、同定することもで

[形相と質料の存在と同定における分離可能性テーゼ]

Xの質料は、Xの形相の存在なしにも存在しうるし、Xの形相への言及なしにも同定されうる。これは、Xの形相についても同様である。

キャストンがチャールズの「強い質料形相論」を拒否する理由は多岐にわたる。まずテキストの読解に関して、彼は「プシューケーのパトス」の定義が述べられている箇所の議論が、必ずしもチャールズが考えるような強い相互依存関係を質料と形相に要求しているわけではないと主張する。また、それ以外にチャールズが自らの議論を支持するものとして持ちだした、獅子鼻⁹の事例に関して、それが必ずしも「強い質料形相論」を含意しないと述べる。「プシューケーのパトス」の定義も獅子鼻の例も長い解釈論争を巻き起こしてきた難解な箇所であり、これらがチャールズの「強い質料形相論」を支持するのか、キャストンの「穏健な質料形相論」を支持するのか、それとも何らかのまったく別の立場を支持するのかは、私には簡単には決着がつかない問題に見える¹⁰。

テキストの解釈の問題には踏み込まないが、キャストンが「強い質料形相論」に対して提起するもうひとつの批判である「説明力の欠如」に関しては、私は基本的に正しい指摘であると考えている (Caston 2009, 46)。怒りの質料とは何か、あるいは、怒りはどのような基盤において成立しているのかと問う論者が、「復讐への欲求と関連するタイプの血の沸騰」という答えに満足するとは到底思えない。キャストンが問題にする通り、この答えは循環的でトリヴィアルな仕方で規定されたものなので、この答えが真であることは、もはや経験的に探求される事柄ではなくなってしまうのである (Caston 2009, 40)。「血の沸騰」は本当に怒りの質料なのか、怒りの質料ならば、怒りの質料でないような単なる「血の沸騰」とそれはどのように区別されるのかを誰かが問題にした場合、チャールズの質料形相

きない。

- (結合体と質料・形相の間の) 上向きの分離不可能性 (upwards inseparability) の否定: 怒りの質料と形相から怒りを引き離すことができない、ということはない。怒りの質料と形相は、怒り抜きにも存在できるし、同定もできる。
- (質料と形相の間の) 水平方向の分離不可能性 (horizontal inseparability) の否定: 質料と形相を相互から引き離すことはできない、ということはない。両者は、互い抜きにも存在できるし、同定もできる (これは、本文で与えられる「形相と質料の存在と同定における分離可能性テーゼ」と同じである)。

これに対してチャールズの強い質料形相論は、すべての分離不可能性を肯定するものであるといえる。

⁹これは、形相と質料の結合体の例としてアリストテレスが常用するものである (Phys. II.2, 194a3-7; *Metaph.* E.1, 1025b30-4)。この事例は、本論文第六章第四節で改めて論じられる。

¹⁰特に、獅子鼻の例を題材に論じられてきた、自然物の形相を定義する際に、その形相に対応する質料に関する言及がその定義に入り込むのか否かという問題を考慮に入れば、同定における形相と質料の関係に関しては、チャールズ (質料が必要) とキャストン (質料は不要) の対立では組み尽くせないほど多様な選択肢が、様々な論者によって提示されている (Corkum 2013)。

論はほとんど有意味な答えを返すことができない。

また、質料と形相が互いへの言及抜きに同定されることができないものであるということになると、問答家と（質料のみに言及して怒りを説明するような、狭い意味での）自然学者の探求というものは、そもそも成り立つのかという疑問が湧いてくる。怒りの質料がチャールズを理解するようなもの（「復讐への欲求と関連するタイプの血の沸騰」）であった場合、それを知るものは必然的に怒りの形相をも理解していなければならない。すなわち、怒りの質料のみを知ることなど、原理的にありえないのである。しかし、三つの説明の仕方（質料のみ、形相のみ、質料と形相）を並べた上でそのどれが（狭い意味でのそれではない）真の自然学者にふさわしいかを問題にするアリストテレスの記述は、問答家や狭い意味での自然学者の探求が実は根本的に不可能なものであったということを示唆しているようには思えない。

このような問題にもかかわらず、私には形相と質料の分離不可能性を肯定するチャールズの「強い質料形相論」を、少なくとも形相と質料の同定に関してはアリストテレスが受け入れていると考えることに（チャールズが与えた議論以外にも）一定の根拠があるように思われる¹¹。例えば、本章の冒頭で述べた、質料と形相の一性を探索する必要すらないほどに自明視するアリストテレスの態度は、怒りの質料と形相を（両者の関係が十分に疑問視されうる）単なる「心臓付近の血の沸騰」と「復讐への欲求」ではない仕方で彼が捉えている可能性を示唆する。探索する必要すらないものの例としてアリストテレスが挙げたのは「蜜蠟」と「印形」だったが、それらは実質的には「印形が押された蜜蠟」と「蜜蠟に押された印形」を意味するものとして理解される必要があると私は述べた。後者の二つは、まさにチャールズが与えた「復讐への欲求と関連するタイプの血の沸騰」と「血の沸騰と関連するタイプの復讐への欲求」に対応するものに見える。さらに、本論文第二章で主に論じた、質料を形相に対する「関係的なもの」(*Phys.* II.2, 194b8-9)であるとみなすアリストテレスの見解もまた、強い質料形相論を支持するように見える。AがBに対して関係的であるということは、『カテゴリー論』第七章の理解によれば、一方を理解すれば他方も必然的に知ることになるということを含意していた。もしキャストンのいうように、怒りの質料としての「心臓付近の血の沸騰」が、怒りの形相に対する言及なしにも同定できるようなものであるならば、そのことは質料が形相に対して関係的であるという上の言葉と齟

¹¹本章では、以後この同定における分離可能性に主に注目することになる（ただし、この論点は本論文第六章で重点を形相へと移して改めて論じられる）。もう一つの分離可能性である、存在における分離可能性は、本章末尾以降、特に本論文第七章でさらに論じられる。

齟をきたすのではないか。

このような対立を前に、トリヴィアルで循環的なものではない説明が理論の説明力の確保のためには必要であるとする立場にまず立ち、「穏健な質料形相論」を受け入れることにしてみよう。しかし、だからといって説明力に関するすべての疑問がただちに解決するわけではない。「心臓付近の血の沸騰」には、怒りを伴うものと伴わないものの区別があるように思われる。例えば、風邪を引いた患者の体温が上昇し、心臓付近の血液においても温度の変化が観察されたとしよう。この場合、「心臓付近の血の沸騰」に該当すると思われる現象は確認されるが、恐らく怒りをそこに認めることはできない。すると、「心臓付近の血の沸騰」は怒りの質料の説明としては（間違いとまでは言わなくとも）まだ十分有用なものではないということになる。分離可能性を認める論者が質料形相論の説明力を確保するためには、さらに次のような問いに答える必要がある。

- どのような「心臓付近の血の沸騰」が怒りが生じているときに生じる「心臓付近の血の沸騰」なのか？

かりにある特定の「心臓付近の温度の上昇」が常に怒りとともに観察されるということが判明したとしても、その心臓付近の温度の上昇が怒りの実現において何らかの役割を担っているということが直ちに帰結するわけではない。雷が木に落ちた場合、必ず木が切り裂かれるとしよう。その場合、落雷には常に特定の轟音が伴うので、木が切り裂かれるときにも常にその轟音が観察されるということになる。しかし、だからといってその轟音が木の破裂に関係しているということにはならない（*DA II.12, 424b10-2*）。特定の「心臓付近の血の沸騰」が、この轟音のようなものではないと考えることに根拠はあるのだろうか。これに反論し、血の沸騰は怒りの質料であるとする主張を擁護するためには、血の沸騰が怒りの質料であるとする理由を示す必要がある。

[質料の同定における理由の必要性テーゼ]

Xの質料と形相に関して、Xの形相への言及なしに同定されうるFがXの質料であると主張するためには、なぜFがXの質料であるといえるのかに関する理由を述べることができなければならない。

理由への要求は、アリストテレスにとって決して理不尽なものではない。彼は、斧が青銅や鉄から作られると主張するとき、その理由として、青銅や斧の硬さに言及する（*PA I.1,*

642a9-11; *Metaph.* H.4, 1044a27-9)。Fを何かの質料として捉えるということが、それが何かの質料である理由を与えることと深く関係しているとするならば、分離可能なものであるFをそれ自体として理解しているだけでは、Fを何かの質料として理解したことにはならないということが帰結する。青銅は斧の質料であると主張する人は、青銅がその硬さという点で斧の形相を実現するに適しているという答えを返すことができなければならない。ここで彼は、初めから斧への言及を含む「斧を実現している（しうる）青銅」が斧の質料であるとする循環的でトリヴィアルな質料的説明を与えるわけではないが、それでも青銅を斧との関係のもとで理解している。これは、形相への言及抜きに同定された質料と端的に同じではない。その意味では、同定における質料の分離可能性テーゼを認めるだけでは、何かの質料を理解するためには未だ不十分なのである。

上で問題となった論点のいくつかは、実は本論文が今まで扱ってきた問題と密接につながっている。例えば、「強い質料形相論」と「穏健な質料形相論」のどちらを選択するかという問題に関しては、第三章の議論がそれに対応する。そこで私は、先行研究に従って機能的質料と非機能的質料の区別を導入したが、これはそれぞれチャールズの理解する質料（「復讐への欲求と関連するタイプの血の沸騰」）とキャストンの理解する質料（「血の沸騰」）に対応するものとして捉えることができる。第三章で私は、これらは二つのまったく異なる質料理解として処理されるべきではなく、ひとつの遠近のもとで統合されるべきものであると主張した。その意味では、本論文第三章での議論は、チャールズとキャストンの論争を調停することを目指したものであったと理解することもできる。

しかし、上のプシューケーのパトスをめぐる論争は、「強い質料形相論」と「穏健な質料形相論」を調停するだけでは解決できない問題をも突きつけている。例えば、経験的な観察の結果、怒りが生じるときに心臓付近で血が沸騰することはもちろん、温度が上昇することもまったく観察できなかったとしよう。その場合、「血の沸騰」が怒りの質料であったとする説明は、初めから完全に間違っていたということになるのではないか。これを修正する可能性は、「強い質料形相論」はもちろんのこと、血の沸騰を怒り（と怒りの形相）への言及なしに同定可能なものとして考える「穏健な質料形相論」においても、明確には見当たらない。

この批判は、生成変化を可能にする質料の存在を否定する立場（本論文第二章での、エレア派の一解釈）や、その存在を認めるとしても、それが循環的な説明しか与えないようなものであると考える立場（本論文第三章での、同名異義原理にもとづいた批判）につぐ、

非常に強力なものである。これに対するアリストテレスの応答を再構築することは、質料形相論の擁護にとっては非常に重要な課題である。もし「血の沸騰」を怒りの質料とする説明が間違っているにもかかわらず、それが質料形相論の枠組みにおいては修正不可能だとすれば、それは理論の無力さを示すように見えるからである。

この批判に応答する手がかりが、本論の今までの議論でまったく与えられなかったわけではない。本論文第二章での議論によれば、「血の沸騰」も「復讐への欲求と関連するタイプの血の沸騰 (= 怒りを可能にするような血の沸騰)」も、前者はそれ自体が付帯の説明として、後者は付帯的な説明と自体的な説明を組み合わせたものとして理解されるべきであり、その意味では、問題となっている「怒り」と切り離されうる要素を含んでいるからである。自体的な質料と形相の関係を否定することは不可能に見えるが、付帯的な説明において与えられたものを切り離すことは、怒りの質料の探求に際して致命的ではないかも知れない。ただし、第二章で示されたのは単なる手がかりであり、質料的説明の修正がどのような手順を踏んでなされるのかに関する具体的な描写は、そこでは与えられていなかった。このことを踏まえて次節では、特に動物の部分に関するアリストテレスの説明の様式に注目することで、まず何かがあるものの質料として示す議論がどのような形式をもつものなのかを確認する。

第3節 『動物の諸部分について』第一巻第一章における三つの分類

前節において私は、「強い質料形相論」を却下し、説明力の確保という観点から「穏健な質料形相論」を選択したとしても、それだけで説明力の確保という課題が完遂されるわけではないと指摘し、さらに必要となるのは、何かがあるものの質料であることを示す理由を与えることであると主張した。青銅や鉄を斧の質料として提示する例においては、それらを質料とみなすための理由となるものが与えられているということがはっきりと見て取れる。しかし、硬いものが斧を作るために必要であるということはあまりにも自明に見えるので、この例から質料的説明を修正する作業がどのように行われるのかを読み取ることは難しい。では、「プシューケーのパトス」の定義がまさに問題としたような、複雑な生物の質料の場合はどうだろうか。生物に関する質料的説明を与える作業をアリストテレスがどのように考えていたのかを理解するためには、動物の質料である動物の部分を論じる

『動物の諸部分について』の第一巻第一章における次の一節が手がかりを与えてくれる¹²。

よって、まさに次のように述べるべきである。

(1) 人間であるということは云々のことなので、よってそれ〔=人間〕はこれら〔=部分〕を有する。なぜなら、これらの部分なしには〔何かが人間で〕あることはありえないからである。

もし〔上のようなことを述べることができ〕ないなら、これに最も近いものを〔述べるべきであり〕、すなわち、

(2) 一般的には、他の仕方では不可能である。

〔と述べるか、〕あるいは、

(3) そのような仕方であるのが美しい。

〔と述べるべきである。〕そこで、次の事柄が帰結する¹³。〔人間とは〕このような云々のものであるので、このような生成がこのような仕方では生じるのは必然的である。よって、これらの部分のうちこれがまず生成し、次にあれが〔生成する〕。

(PA I.1, 640a33-b3)¹⁴

この一節はあまりにも凝縮されており、そもそも冒頭の「述べるべき」とされているものが、何のために述べるべきとされているのかすら、文面からは明確に読み取ることができない。また、具体的な例もほぼ与えられていないに等しい。この一節でアリストテレス

¹²動物の部分が動物の質料であるという点に関しては、GA I.1, 715a8-11 を参照。なお、以下の引用を解釈するためにまず参照されるバームやクルマンの議論においては、部分の例として挙げられるものが臓器に限られている。しかし、アリストテレスは動物を構成するもののほぼすべてを指すために「動物の部分」という表現を用いている。よって、複雑な臓器や腕、足からより単純な血や肉、骨といったものはすべて「動物の部分」であると考えることができる(HA I.1; PA II.1; II.2)。本論文でも、例としては主に臓器を用いるが、「動物の部分」はこのような広い意味をもつものとして理解されている。

¹³これに該当する原文 *ταῦτα δ' ἐπεταί* をめぐっては、解釈論争が起こっている。バーム (Balme 1992, 6, 87) を筆頭とする解釈者たちは、これを本論文とは異なる仕方では理解し、四番目の分類を提示するものとして解釈する(例えば、「これこれの部分が〔1 から 3 までの部分に〕続く」と解釈する)。それに当てはまる具体例としては、脾臓が挙げられる (PA III.7, 670a29-31; APo. II.14 も参照)。ペック (Peck 1961, 63) のような解釈者たちは、この一文を、前の議論と次の議論をつなぐためのものとして理解する。どちらも文法的には可能であり、ここではペックに従った。

¹⁴*διὸ μάλιστα μὲν λεκτέον ὡς*

(1) *ἐπειδὴ τοῦτ' ἦν τὸ ἀνθρώπου εἶναι, διὰ τοῦτο ταῦτ' ἔχει· οὐ γὰρ ἐνδέχεται εἶναι ἄνευ τῶν μορίων τούτων.*

εἰ δὲ μή, ὅτι ἐγγύτατα τούτου, καὶ ἡ ὅτι

(2) *ὅλως ἀδύνατον ἄλλως*

ἢ

(3) *καλῶς γε οὕτως.*

ταῦτα δ' ἐπεταί· ἐπεὶ δ' ἐστὶ τοιοῦτον, τὴν γένεσιν ὡδὶ καὶ τοιαύτην συμβαίνει ἀναγκαῖον. διὸ γίνεται πρῶτον τῶν μορίων τόδε, εἶτα τόδε.

は何をしているのかを理解するためにバーム (Balme 1992, 87) は、ここで与えられているいくつかの分類を、異なる人間の部分の区別に対応するものとして考える解釈を提案した。それに従えば、一番目の分類に該当するものには、人間の定義 (例えば、定義の一部を表したものとして「感覚するもの」) から直接的にその必要性が導き出されるような、眼といった感覚器官が、二番目の分類に該当するものには、それなしには人間は死んでしまうが、それが人間の定義と関連するかどうかは必ずしもはっきりしない、心臓や肝臓といったものがあり (PA III.7, 670a22-9) 最後の分類に該当するものには、人間の定義にもその生存にも関連しないが、それがあつたほうが人間の生がよりよいものになるとされる、腎臓のようなものがあるということになる (PA III.7, 670b23-7)¹⁵。どの分類にどの部分に対応するのかに関しては幾つもの異なる意見が提示されているが、それぞれの分類が異なる人間の部分に対応するという基本的な発想は多くの研究者に共有されている¹⁶。にもかかわらず、私はここでの分類が人間の異なる部分の区別に対応するとする発想そのものが、いくつかの難点を抱えていると考える。

まず、上の分類が異なる人間の部分を明確に区別するような基準として成り立っているのかが問題となる。例えば血は、第一には人間の生存のために必ず必要なものであるように思われる (PA II.5, 651b11)。では血は二番目の分類に該当するのだろうか？ しかし、血は栄養とも関連するので (PA II.3, 650b2-3) 人間の定義 (「栄養摂取するもの」) にも関わるように思われる。さらにアリストテレスは、血が「よりよくあること」(PA II.2, 647b29-31) と関連すると述べているので、血は結果的に上の三つの分類のすべてに該当するということになってしまう。そもそも、栄養摂取に関連するものはすべて人間の定義にも関連すると思われるが、その場合、上で二番目の分類に該当するものとして挙げた、それなしには人間が死んでしまうような部分の恐らくすべてが一番目の分類と重なってしまうということになりかねない。

これに対して、クルマン (Kullmann 2007, 300-2) はバームとは異なる分類を提案する。彼は、一番目の分類には、バームと同じく人間の定義に関連する (すなわち、栄養摂取や

¹⁵特に注記されている場合を除き、以下で述べられるそれぞれの臓器の説明はアリストテレスの記述に従ったものであり、現代の医学の理解とは異なる。

¹⁶上では三つの分類のみを挙げたが、実際にはバームは、本論文が「そこで、次の事柄が帰結する」(ταῦτα δ' ἐπεταί) と訳した一文を四番目の分類を意味するものとして捉え、それに該当するものとして脾臓を挙げる。本論文は、この一文を四番目の分類に相当するものとしては理解しない (本章注 13)。以下の本論文の議論は、動物の部分の区別に対応するものとしてこれらの分類を理解するという方針そのものを疑うことを目指すものなので、四番目の分類については今後特に取り上げたりはしない。なお、本論文では扱わないが、バームやクルマンと基本的には同じ方針を採用しながら、より洗練された枠組みを提示したものとして、Leunissen 2010, 97-9 を挙げることができる。

感覚と関連する)部分として眼や心臓などを、二番目の分類には、それ自体は人体にとって絶対に必要というわけではないが、結果として必然的に分泌される余剰物のように、他の臓器に必然的に付帯する仕方では生成するもの、すなわち脾臓のようなものを (PA III.7, 670a29-31)、三番目の分類には、同じ機能を担う臓器が別にあるが、それも存在するほうがより好ましいとされる腎臓のようなものを振り分けるべきである¹⁷。この提案が本当に部分の区別の曖昧さをすべて払拭するようなものかもまだ疑問の余地があるが、この問題を措くとしても、依然として別の重大な疑問が残される。

上の引用において、アリストテレスは三つの分類を与えた直後に、「〔人間とは〕このような云々のものであるので、このような生成がこのような仕方では生じるのは必然的である。よって、これらの部分のうちこれがまず生成し、次にあれが〔生成する〕」と述べる。ここで明らかにされているのは、人間が云々の仕方では定義されるものであり、その定義が、どのような仕方では生成が生じるかを定める、ということであるように思われる。問題は、三つの分類をバームに従って「本質(定義)・生存・美しさ」と理解するのであれば、クルマンのように「本質(定義)・必然的に付帯すること・美しさ」と理解するのであれば、これらのうちで、生成に関するこの言及と関連するよう見えるものは第一の分類しかないという点である。だとすれば、三つの分類のうち二つが、実はその直後になされた発言とほとんど無関係であったということになってしまう。このような不自然さに眼をつぶり、二つの分類がそれに続く発言と無関係であることを認め、直後の発言は第一の分類のみと関連すると考えることはできるのだろうか？ その場合は、今度は「これらの部分〔=第一の分類に該当する部分〕のうちこれがまず生成し、次にあれが〔生成する〕」という言葉のいかんを理解するかという問題と向き合う必要が生じる。上の引用は、それ自体としては、第一の分類に属する部分が相互にどのような順序で生成するののかに関してはいかなる情報も与えていない。結果的に、アリストテレスは問題となっている生成の順序に関する情報をほぼまったく与えないに等しい分類を提示しておいて、その直後にそれらの分類から何らかの生成の順序を読み取れるとする、飛躍を孕んだ議論を展開しているということになってしまう。

¹⁷本章注13で問題となった、「そこで、次の事柄が帰結する」(ταῦτα δ' ἐπεταί)に関して、クルマン(Kullmann 2007, 20, 302)は「そこから、これらの部分が存在するということが帰結する(Und das Vorhandensein dieser Teile ist die Konsequenz davon)」という訳を与え、これを、二通りの部分の生成の仕方(定義による生成、必然的な付帯性による生成)の妥当性を追認するものとして理解する。私は、このような解釈では、これから本論で与えられる文脈的な問題提起に答えることができないと考える。

人間の定義といったものから見出されることが期待されるような論理的な関連を、人間のすべての部分の生成の順序に読み込むことの難しさは、『動物の発生について』第二巻第一章 734a17-5a26 における、アリストテレス自身による発生の順序の考察からも読み取ることができる。アリストテレスは動物の諸部分が同時に発生するわけではないという観察的事実を認めることから発生の順序の探求へと乗り出すが、ある部分とそれが発生した後に発生する部分の間に直接的な何らかの関係があるという見解は（例えば肝臓の形相が心臓の内にあるということは奇妙であるという理由から）却下している。そこで最終的に認められるのは、親から生じる^{キーンネーシス}運動変化を発生の過程の始動因とする、一種の機械論的な生成の順序である。そこでも心臓といった栄養摂取と成長に関連する部分が最初にくるといったことの必要性は認められているが、機械論的な生成の説明は、本論で問題となっているような、人間の様々な部分の区別に対応するような仕方で生成の順序を明らかにすることはできないだろう。

上の引用における三つの分類が人体の異なる部分の区別に対応すると考える解釈の問題は、さらにある。それは、この引用が置かれたより大きな文脈と関係している。上の引用を含む一連の議論の冒頭において、アリストテレスはまずエンペドクレスによる、ある仕方での生成が生じた理由を偶然として捉える見方に反対する。ある動物が特定の形をした背骨をもつということを単なる偶然として片づけようとするエンペドクレスに対して、アリストテレスは本質（ここでは、目的と同義）の概念を持ち出すことで、ある仕方で行われる生成が単なる偶然ではありえないということを示そうとする。背骨の例で言えば、人間は移動する存在であり、それを可能にするためには、云々の形の背骨が生じるということが必ず必要であるので、これを単なる偶然として片づけることはできない、ということになる。上で問題となった三つの分類は、このような議論を受けて提出されたものであり、それが示された後に続くアリストテレスの発言をみる限りにおいても、そこで提出された三つの分類のすべてが、特定の生成が生じたことがエンペドクレスが考えるような偶然ではないことを示すために導入されたと考えべきである。このように文脈を理解すれば、目的論的に生成の必然性を示すという目論見からの完全な逸脱（例えば、第二の分類は、バームとクルマンのどちらの解釈においても、本質（定義・目的）とは関係しないとされる）に見える分類が挿入されているという解釈は非常に奇妙に聞こえる。それらは、エンペドクレスへの反論としては役に立たないということになるからである¹⁸。このような解

¹⁸例えば、「すべての人間がそのような背骨を持っている（そうでない人間はいない）」ということの意味する説明として二番目の分類を理解したとしよう。その場合、二番目の分類はエンペドクレスの偶然説に対する有効

積は、二番目と三番目の分類を一番目の分類に「最も近い」ものであるとするアリストテレスの言葉からしても、なお受け入れがたい。一連の議論の中心となっている偶然説への反論としてまったく無力なものを、なぜ「最も近い」とすることができるのだろうか？

第4節 生成の必然性の目的論的説明

以上の理由から、私は上の三つの分類を目的論的に生成の必然性を説明できたりできなかったりする様々な部分の区別に対応するものとしてではなく、ある部分の生成の必然性を目的論的に説明するための三つの異なる説明の様式に対応するものとして理解すべきと考える。その詳細を述べる前に、三つの分類を私の理解に即して改めて定式化したものをまず与えておこう。

[生成の必然性の目的論的説明]

なぜ人間に特定の仕方での生成が生じたのかを目的論的に説明するためには、次のように述べるのが最も望ましい。

・(説明1) 人間がFをもつ仕方での生成したのは次の理由によってである。人間は感覚するものであり、感覚するためには感覚器官が必要である(そして、Fは感覚器官である)。

上の説明を与えることができない場合、次に望ましい説明を与えるべきである。すなわち、

・(説明2) 人間がFをもつ仕方での生成したのは次の理由によってである。人間は感覚するものであり、感覚するためには感覚器官が必要である。一般的には、Fをもつ人間のみが感覚する(そして、Fは感覚器官であると思われる)。

または、

・(説明3) 人間がFをもつ仕方での生成したのは次の理由によってである。人間は感覚するものであり、感覚するためには感覚器官が必要である。Fをもつ人間は、よりよく感覚する(そして、Fは感覚器官と切り離すことのできない何かであると思われる)。

な論駁となるのか？ そうは思えない。そもそもエンペドクレスは、このような形をしていない背骨を持っている人間が実際にいるということを根拠に偶然説を主張しているわけではないだろう。

これらすべての説明は、人間がある対象 F を伴って生成することの必然性を、感覚という人間の定義（本質・目的）との関連から正当化するためのものである。その点では、説明 1（「なぜ F は生成したか」「F は感覚器官なので」）に関しては、私の解釈はバームとクルマンのそれと形式的にはほぼ同じである（違いに関しては、本章注 28 を参照）。説明 1 は、より具体的には以下のような形で表すことができる。

[生成の必然性の目的論的説明 1]

- 前提 1：人間は感覚するものである
- 前提 2：感覚するためには感覚器官が必要である
- 前提 3：F は感覚器官である
- 結論：人間は必然的に F を有する（人間が F をもつような仕方では生成するのは必然である）

上の前提 1 と 2 は、人間や感覚の定義にもとづいて真であるとされる。よって、前提 3 を真であると指し示した場合、人間が F をもって生成することは、その定義や目的からして必然的な結論であり、まったくもって偶然とはいえないということになる。

説明 2 もまた、F をもつ仕方では人間が生成する必然性を示すためのものであるという点では説明 1 と同じである。説明 2（「なぜ F は生成したか」「F をもつもののみが感覚するので」）は、具体的には次のようなものになるだろう。

[生成の必然性の目的論的説明 2]

- 前提 1：人間は感覚するものである
- 前提 2：感覚するためには感覚器官が必要である
- 前提 3：すべての感覚するものは F をもつ
- 結論 1：F は感覚器官である
- 結論 2：人間は必然的に F を有する（人間が F をもつような仕方では生成するのは必然である）

何よりもまず示されるべきは、そもそもアリストテレスがこのように「Z するものはすべて F をもつ」ということを前提に用いながら F の生成の必然性を目的論的に説明する箇所があるのかという点である。私は『動物の諸部分について』第三巻第四章における、心臓を血の原理として捉えるべき理由の説明から、これに相当するものを取り出すことができると考える。そこでアリストテレスは、心臓が血の原理であると主張し、そう考えるべき

理由を多数与えた上で、「上で述べられたこと〔＝心臓が血の原理であることとその理由〕の証拠は、すべての有血動物にそれ〔＝心臓〕が備わっているということである。というのは、それら〔＝有血動物〕にとって、血の原理をもつことは必然だからである」(PA III.4, 666a22-4)¹⁹と述べる。ここで述べられていることは、以下のように表すことができる。

[血の原理の生成の目的論的説明 1]

- 前提 1：有血動物は血をもつ (PA III.4, 665b11-2)
- 前提 2：有血動物は血の原理を必要とする (PA III.4, 666a23-4)
- 前提 3：すべての有血動物は心臓をもつ (PA III.4, 666a22-3)
- 結論 1：心臓は血の原理である
- 結論 2：有血動物は必然的に心臓を有する (有血動物が心臓をもつような仕方では生成するのは必然である)

上の例は、心臓が血の原理であり、すべての有血動物が心臓をもつような仕方では生成しなければならないということを説明するために、すべての有血動物が心臓をもつ (他の仕方では、有血動物は存在しえない) ということ根拠に用いている。もちろん、アリストテレスが心臓を血の原理として捉えることの根拠はこれだけではない。すでに述べたように、上の引用の前の部分において、アリストテレスはこれとは異なる様々な理由にもとづいて心臓が血の原理であることを示そうとしており、その考察は位置的な特性から、それを貫く血管がないといった観察結果や、感覚の原理でもあるという特徴にまで及ぶ。上の推論は、これらの論点を補強するために提出されたものとして考えるべきである。

これが心臓を血の原理として説明するための唯一の根拠ではないにせよ、少なくともこのような推論をアリストテレスが用いることがあったということが確かなら、このことは生成の必然性を目的論的に説明する際の三つの分類のうち二番目のものについて、次のような読解を与える可能性を示唆する。——二番目の分類は、生存のために必要だが定義と無関係な器官、もしくは目的論的に説明できない単なる付随物进行处理のために導入されたものではなく、ある部分と同じく目的論的に説明するためのもうひとつの説明の様式を示すために導入されたものである。「すべての有血動物が心臓をもつ (他の仕方では、有血動物は存在しない)」という説明は、本質 (定義) にもとづいて生成の必然性を目的論

¹⁹ μαρτύριον δὲ τῶν εἰρημένων καὶ τὸ πᾶσι τοῖς ἐναίμοις ὑπάρχειν αὐτήν· ἀναγκαῖον γὰρ αὐτοῖς ἔχειν τὴν ἀρχὴν τοῦ αἵματος.

的に説明するという議論の流れからの逸脱として想定されるべきではない²⁰。

しかし、説明1と説明2には違いもある。それは、推論の形が変わっているという点からも明らかである。まず説明2の前提1と2は、説明1の場合と同じく定義によって真である。説明1とは異なるものが導入されている前提3は、そこから推論が構築されるものとして、説明1の前提3と同じく真と措定されなければならない。問題は、これらから導き出される結論1である。推論1の前提3とは違って、「すべての感覚するものはFをもつ」という推論2の前提3は、結論1(推論1の結論)である「Fは感覚器官である」が導き出されることを保証しないからである。このことは、血の原理に関して、まさに上のものと同じ形の別の推論をアリストテレスが否定していることから明らかである。

[血の原理の生成の目的論的説明2]

- 前提1：有血動物は血をもつ (PA III.4, 665b11-2)
- 前提2：有血動物は血の原理を必要とする (PA III.4, 666a23-4)
- 前提3：すべての有血動物は肝臓をもつ (PA III.4, 666a24-5)
- 結論1：肝臓は血の原理である
- 結論2：有血動物は必然的に肝臓を有する (有血動物が肝臓をもつような仕方では生成するのは必然である)

前提の1から3までは、形式においては心臓の推論の例と同じである。しかしアリストテレスは、そこから結論1を導くことを拒否する。これを理解するためには、上の肝臓の推論では(心臓の推論でも)明示されていない別の前提を考慮する必要がある。心臓にはそれを通して血管がないが肝臓にはあり、アリストテレスは、血の原理を通してような血管はあってはならないと考えている。また、それが置かれている位置に関して、肝臓は血の原理であるに相応しくない場所にある。こういった点を追加して考慮する限り、たとえすべての有血動物がそれをもつという点において心臓と肝臓が同じであるとしても、

²⁰結果的に私は、「(2)一般的には、他の仕方では不可能である」という説明を、「心臓を持たなければ感覚することは不可能である」という仕方ではなく、「通常は感覚するものはすべて心臓をもつ」といった意味で理解したことになる。後者の理解においては、(現実には存在しないかもしれないが)何か別の器官を有することで感覚が実現される可能性が完全に排除されてはいないので、厳密に言えば「他の仕方では不可能」であるということ述べているわけではない。後者の解釈をとる根拠としては、前者の解釈を取る場合に第一の分類との区別が曖昧になるという点と、「一般的には」という(厳密な可能性を問題にしている場面では用いられることがないと思われる)限定をアリストテレス本人が付しているという点を挙げることができる。なお、パーム(「Fがなければ人間は死ぬ」)やクルマン(「Fは必然的に付帯する」)の理解を採用した場合も、厳密な意味での不可能性が直ちに確保されるわけではない。「少なくとも現実世界においては常にそのようである」という特性を目的論的な論点とつなげる例としては、他にも *Phys.* II.8, 198b34-9a5 を挙げることができる。

肝臓を血の原理とみなすことはできない。

血に関して、肝臓よりも心臓の役割がより重要であるとするアリストテレスのこの結論は恐らく正しいが、そこには現代の知見からすれば色々な間違いが含まれる。例えば、アリストテレスは血の原理としての心臓の役割を、血を作ることと血をそこから送り出すこと（しかし受け入れはしないこと）として理解していたようだが、実際は血は骨髄で作られるのであり、心臓は血を受け入れて循環させる²¹。ここで大事な点は、心臓や肝臓及び血に関する彼の見解に間違いがあるということ指摘することではなく、同じ形を有する二つの推論に対して、新たな議論をもちこむという仕方、それらの妥当性をさらに検証することができたということである²²。

説明2の実例に当たる、心臓と肝臓を用いた二つの推論は、本章第一節で問題になった間違った質料的説明の修正が、アリストテレスにおいて可能であったということをはっきりと示している。何かが本当に血の原理であるか否かを、アリストテレスは決して自明視しているわけではない。それは、理由をともなって示されるべき事柄であり、その理由にもとづいて却下されることも、肯定されることもありうる。例えば、本当は怒りに血の沸騰が伴わないということがわかったら、アリストテレスは怒りの質料的説明を修正するだろう。また、血の沸騰が怒りに伴うとしても、他の何らかの理由でそれが怒りの質料ではありえないということが示された場合には、彼は同様に怒りの質料に関する考え方を変えるだろう。

三番目の分類に関しては形式的な分析は省略するが、これもまた類似した仕方、生成の必然性に関する目的論的な説明として理解することができる。この分類に当てはまるものとしては、例えば、特定の形態をした眼をもって動物が生成することの必然性を、そのような形態がよりよい視覚をもつために役立つという点から正当化するという場面を考えることができる（*PA* II.2, 648a13-9）。このような説明は、その妥当性を示すために「ZするものはすべてFをもつ」という点を出発点とする説明2と同じく、さらなる論点を多く引き入れることを必要とするものになるだろう。しかしその場合も、全体としてこの説明が目指すところが、ある対象が動物の部分として必要な機能を担っており、その意味でそれを伴った仕方、動物が生成する必要があるということ、これを目的論的な枠組みのもとで示すことであるという点はかわらない。まさにこの点において、説明3もまた説明1からかけ

²¹骨髄が機能しない場合や胎児においては、肝臓での造血がみられることもある。

²²Detel 1997は、特に胃の事例に注目して、その必然性の証明が多種多様な推論を用いることによってなされるということを示している（Gotthelf 1987も参照）。

離れているものではないといえる²³。

説明論的に生成の必然性を示すという一つの目的のために、なぜ三つの説明の様式が必要なのか、これら相互の関係はどのようなものなのかといった問題を扱うことから始まる次の節に移る前に、もう一つ論じておかなければならない点がある。それは、生成の必然性を擁護するための三つの異なる目的論的説明の様式として三つの分類を理解する本論の立場からすれば、それに続く生成の順序に関するアリストテレスの「〔人間とは〕このような云々のものであるので、このような生成がこのような仕方では生じるのは必然的である。よって、これらの部分のうちこれがまず生成し、次にあれが〔生成する〕」という発言はどのように理解されることになるのかという点である。これを論じるに際してまず確認すべきは、三つの分類を（人体の雑多な部分を網羅するためのものとしてではなく）特定の部分が人体に生じることの必然性に対する目的論的な説明を与えるためのものとして等しく捉える本論の立場においては、人体のすべての部分の生成の順序を決める、もしくは、それぞれの機能がまったく関連をもたないような部分の生成の順序を決めるということはこの場面での目標とみなす必要がなくなるという点である。その場合、ここで述べられていることは、アリストテレスが度々与える、ある特定の目的のためにはAが生じる必要があり、さらにAが生じるためにはBが生じる必要がある、といった事柄と同じものとして理解することができる。このような議論の例として、（上で言及したGA II.1で論じられたように）心臓といった生成の原理となる部分が他の部分（眼といった感覚器官）の生成のために必要であるということから、以下のような説明を想定することができる。

1. 人間は感覚するものである
2. 感覚するためには感覚器官が必要である
3. 眼は感覚器官である
4. 感覚するためには、眼が生じる必要がある
5. 眼が生じるためには、生成の原理となる部分が必要である
6. 心臓は生成の原理となる部分である
7. 眼が生じるためには、心臓が生じる必要がある

²³なお、三つの分類を私のように理解することは、目的論では処理できないような部分の存在をアリストテレスが認めていたということを否定するものではない。バームとクルマンが三つの分類に含まれると考えた脾臓といったものは、恐らく目的論的には処理できない臓器であるように思われる。本論が主張しているのは、三つの分類はそのような部分を位置づけるために導入されたものではない、ということである。

同じ『動物の諸部分について』からの例としては、以下のようなものを挙げることもできる。

もし家またはそれ以外の目的となる何か〔= A〕が生じるのであれば、云々の〔性質をもつ〕質料があることが必然である。すなわち、まずこれ〔= B〕が生じ運動変化させられ、次にあれ〔= C〕が〔生じ運動変化させられ〕なければならず、目的〔となるもの、〕すなわちそのためにそれぞれ〔= B や C〕が生じかつあるところのもの〔= A〕に至るまで、この仕方で次々と〔質料となるものが生じ運動変化させられなければならない〕。自然に生じたものにおいても、同様である。

(PA I.1, 639b26-30)²⁴

構成要素という質料が、同質部分のためにあることが必然である。というのは、生成においてこれら〔= 同質部分〕はそれら〔= 構成要素〕よりも後であり、異質部分はさらにこれら〔= 同質部分〕よりも後だからである。

(PA II.1, 646b5-8)²⁵

前者は、人工物を作る際に必要となる材料の加工を意味していると思われる。例えば、煉瓦の材料が用意され、それが焼かれた煉瓦になり、特定の形で組み立てられるといった過程を考えることができるだろう。後者は、生物の発生における、四元素のような最も基本的な構成要素が、肉や骨といった同質部分をなし、さらに同質部分がより複雑な顔や腕といった異質部分をなすという過程を描写している。このような生成の順序において、後に生じたもの（例えば、焼かれた煉瓦や異質部分）は先に生じたもの（煉瓦や同質部分）を前提する。ここで論じられている先後関係は、直接一方が他方を前提とするような関係を持たない、眼と足といったものの関係を理解するに際しても適用できるようなものではない。『動物の発生について』第二巻第一章を確認した際に示したように、アリストテレスが人間のすべての部分を対象とする生成の順序の解明を可能と考えていたかは疑わしいし、生成の必然性を目的論的に説明するという文脈に照らしても、ここでの主張の適用範囲を限ることは不自然ではない。

²⁴ ἀνάγκη δὲ τοιάνδε τὴν ὕλην ὑπάρξαι, εἰ ἔσται οἰκία ἢ ἄλλο τι τέλος· καὶ γενέσθαι τε καὶ κινηθῆναι δεῖ τὸδε πρῶτον, εἶτα τὸδε, καὶ τοῦτον δὴ τὸν τρόπον ἐφεξῆς μέχρι τοῦ τέλους καὶ οὐ ἔνεκα γίνεται ἕκαστον καὶ ἔστιν. ὡσαύτως δὲ καὶ ἐν τοῖς φύσει γιγνομένοις.

²⁵ ὥστε τὴν μὲν τῶν στοιχείων ὕλην ἀναγκαῖον εἶναι τῶν ὁμοιομερῶν ἔνεκεν. ὕστερα γὰρ ἐκείνων ταῦτα τῇ γενέσει, τούτων δὲ τὰ ἀνομοιομερῆ·

第5節 自体的な付帯性と「何であるか」の探求

前節において私は、アリストテレスが生成の必然性を目的論的に説明するという文脈で提示した三つの分類に関して、それを眼や心臓、肝臓といった異なる部分の区別に対応するものとし、生成の必然性を目的論的に説明するという文脈からの逸脱例がその中に含まれているとする解釈に対抗して、目的論的な観点からある部分が生成することの必然性を語るための異なる説明の様式としてこれらの分類を理解し、すべてを同じ文脈のなかで意味をもつものとして位置づけるべきであるとする解釈を提示した。これは、直ちに次のような疑問を引き起こす。なぜ三つの異なる説明が必要なのか？ すなわち、なぜ最も述べられるべきとされる最初の説明だけではだめで、残りの二つのための余地が残されなければならないのか？ 私が反対したバームやクルマンの解釈においては、分類2と3は、そもそも1では扱うことのできない部分を扱うために必要であるとされていたので、このような問いは生じない。三つの分離を異なる（しかし目標を同じくする）説明の様式とみなす私の解釈は、この点をどう説明することができるのだろうか。

まず確認しておきたいのは、説明1を直接与えることのできるような場面がいったいどれほどあるのかという点である。今、ある動物を解剖し、そこで見つけることのできた何らかの塊に対して、それがその動物の活動に寄与するもの、すなわちその動物の部分であり、その動物が必然的に伴って生成しなければならないものであるということを示そうとしていると想定して見よう。もし、説明1がそうしたように、その対象が感覚器官、もしくは栄養摂取のための器官であるということを端的に前提してもよいのならば、その対象が動物に生じることの必然性は最も判明な仕方では証明されることになるだろう。しかし、目の前にある塊を感覚器官、もしくは栄養摂取のための器官であると前提することが、端的に許されるとは思われない。

アリストテレスがこの場面で問題としているのが、（分類に関する上の引用で背景的な問いとなっていた）「特定の形の背骨が生きている人間の身体において認められるが、これが必然的にこのような形で人間に生じなければならないものであるということをいかに示すか」といった問いである限り、このように端的な形であるものを感覚器官もしくは栄養摂取のための器官として措定することはなされてはならない。それは、議論の結果として証明されるべき事柄であり、初めから前提されるべき事柄ではないのである²⁶。実際に人体

²⁶その意味で、私の解釈は眼などを直ちに感覚器官と同一視するバームやクルマンと異なる。云々の形をした

において経験的に観察される云々の（まだその機能が特定されていない）塊が、人体においてどのような役割を担っているのかをこれから示すことが必要とされているのが議論の文脈だとすれば、説明1に相当する推論をそのまま適用できる場面は、実はありえないということがわかる。

定義のみにもとづいて何らかの結論を導き出す形の説明として説明1を理解すれば、このような説明だけでは自然の探求が実りあるものにはならないかも知れないという同種の危惧は、動物の質料ではなくその形相であるプシューケーの探求を主題とする『デ・アニマ』においても見られる。『デ・アニマ』第一巻第一章においてアリストテレスは、プシューケーを探求するために検討されるべき点をいくつか押さえた後に、探求の仕方に関する次のようなより一般的なコメントを残している。

その「何であるか」を認識することは、それらの実体に付帯する事柄の^{アイティアー}説明を考察するために有用であるように思われる（数学において、直や曲の何であるか、あるいは線や面の何であるか〔を認識することが〕、三角形の内角がどれだけの直角に等しいかを見定めるために〔有用であるように〕）。しかし、それだけでなく、逆に〔実体に〕付帯する事柄の認識が、その「何であるか」を知るために大きく寄与するということも〔あるように思われる〕。というのは、付帯する事柄について（そのすべてであれ大部分であれ）我々が^{パンタシア}現れに即した説明を与えることができる時、我々は実体についても最も見事に語ることができるだろうからである。すべての論証の原理は「何であるか」であり、よって〔「何であるか」を示す〕定義のうちで、それに従うことでは付帯する事柄を認識することにならず、それら〔＝付帯する事柄〕について容易に推測することにすらならないようなものが、すべて問答法的な仕方ですべて空虚に述べられているということは明らかである。

(DA I.1, 402b16-3a2)²⁷

塊が感覚器官であるか否かは、定義的に明らかになることには思えない。例えば DA II.8, 420a3-7 においてアリストテレスは、なぜ動物のすべての部分ではなくある特定の部分が聴覚をもつのかについて、外部とつながっている空気がそこに認められるか否かという点にもとづいた説明を与えている。これは、何かを聴覚器官とみなすことを、さらなる理由を要求するものとして彼が理解していたということを示す。

²⁷ εἰκοι δ' οὐ μόνον τὸ τί ἐστὶ γινῶναι χρῆσιμον εἶναι πρὸς τὸ θεωρῆσαι τὰς αἰτίας τῶν συμβεβηκότων ταῖς οὐσίαις (ὥσπερ ἐν τοῖς μαθήμασι τί τὸ εὐθὺ καὶ τὸ καμπύλον, ἢ τί γραμμὴ καὶ ἐπίπεδον, πρὸς τὸ κατιδεῖν πόσαις ὀρθαῖς αἰ τοῦ τριγώνου γωνίαι ἴσαι), ἀλλὰ καὶ ἀνάπαλιν τὰ συμβεβηκότα συμβάλλεται μέγα μέρος πρὸς τὸ εἰδέναι τὸ τί ἐστίν· ἐπειδὴν γὰρ ἔχωμεν ἀποδιδόναι κατὰ τὴν φαντασίαν περὶ τῶν συμβεβηκότων, ἢ πάντων ἢ τῶν πλείστων, τότε καὶ περὶ τῆς οὐσίας ἔξομεν λέγειν κάλλιστα· πάσης γὰρ ἀποδείξεως ἀρχὴ τὸ τί ἐστίν, ὥστε καθ' ὅσους τῶν ὀρισμῶν μὴ συμβαίνει τὰ συμβεβηκότα γνωρίζειν, ἀλλὰ μὴδ' εἰκόσαι περὶ αὐτῶν εὐμαρές, δῆλον ὅτι διαλεκτικῶς εἴρηγται καὶ κενῶς ἅπαντες.

三角形の実体に付帯する事柄（すなわち、二直角をもつということ）は、三角形に関して必然的に真であるが、三角形の実体においてあるとは言われぬようなものを指す。アリストテレスはこのような付帯性を、自体的な付帯性と呼ぶ（*Metaph.* Δ.30, 1025a30-4）²⁸。

上の引用の冒頭に書かれている、三角形の「何であるか」を理解することが、三角形が二直角をもつということを理解するために寄与するということは、比較的簡単に納得できる。三角形が二直角をもつということをはっきりと明らかにするためには、三角形が、その「何であるか」を示す定義を構成する「三つの直線と内角」によって成り立っているということを経験することから始める必要があるからである。問題はそれに続く指摘である。アリストテレスは、今度は逆に、自体的な付帯性が「何であるか」の探求に寄与すると述べる。三角形の内角の和が二直角であるということを知らずとも、三角形が三つの線と内角からなるということを知ることにはありえそうなので、この指摘を、上と同じ仕方で証明の前提のような意味でとることはできない。後者の指摘がどのような意味でなりたつのかを理解するための手がかりは、少し後のプシューケーに関する先行研究の批判において与えられる。

アリストテレスは、自らのプシューケー論を展開するにあたって、先行研究を検討することから議論を始めている。俎上に載せられる説は様々だが、特にプシューケーを運動変化^{キネーシス}と数の両方と関係づけて理解するものたちが直面する難点を論じる場面で、アリストテレスは次のように述べる。

そのようなもの〔＝「自分自身を動かす数」〕は、プシューケーの定義となることがありえないだけでなく、〔プシューケーの〕付帯性となることもありえない。このことは、もし人がこの〔「自分自身を動かす数」という〕説明規定からプシューケーの^{エルゴン}パトスや働き（^{アイステーシス}推論や感覚、^{キネーシス}快楽や苦痛、その他の類似した事柄）を説明しようと試みれば明らかである。というのも、我々が先に述べたように、こうした見解が

²⁸ 自体的な付帯性とは何であるのか、また、それはそれが付帯するところの対象に対して具体的にどのような関係をもっているのかは論争になっている。また、自体的な付帯性と単なる付帯性（例えば、偶然に動物に付帯する「赤さ」など）の関係なども問題であるが、本論では扱わない（これらの区別を扱った論考としては、Tierney 2001）。

なお、DA I.1 からの引用で問題となっている自体的な付帯性は、三角形における「二直角をもつこと」のように、厳密な証明によって導き出されるものだけを対象としているわけではないと思われる。そこでアリストテレスは、付帯する事柄と現れに即した説明を関連づけているからである。Bonitz 1870, 811 や Hicks 1907, 192-3 及び Ross 1961, 167 などにおいて、ここでの「現れ」は後ほど DA III.3 などで問題となる想像^{パンタシア}（*φαντασία*）と同じものを意味するのではなく、経験や知識を通して我々が得ることができるもの全般を指すとされており、私もこの解釈に同意する（*Top.* I.1, 100b26-9; *SE* 4, 165b25-6; *DC* II.13, 294a7; *SS* 3, 439b6; *Insom.* 2, 460b18 など参照せよ）。ポランスキーもまた、Owen 1961 を参照しながら、「このような現れは、*ἐνδοξα* として簡略にまとめることができるだろう」と述べている（Polansky 2007, 49n28）。

らは、〔プシューケーのパトスや働き^{エルゴン}について何かを〕推量することすら容易ではないのである。

(DA I.5, 409b13-8)²⁹

上の一節においてアリストテレスは、先人が提示した「自分自身を動かす数」というものは、プシューケーの定義でも、付帯性でもありえないと主張し、その根拠として、プシューケーの自体的な付帯性として挙げられる「プシューケーのパトスや働き^{エルゴン}（推論や^{アイステーシス}感覚、快楽や苦痛、その他の類似した事柄）」を「自分自身を動かす数」というものから説明することができない、という点を指摘する³⁰。

注目すべきは、このような難点が、この引用の前の部分で検討された様々な難点とは異なるものとして導入されているという点である。これまで問題とされていた難点は、例えばある理解を採用した場合に生じる「同じ場所に二つの事物が存在することになってしまう」といった不整合な帰結に関するものであった(DA I.4, 409a21-5; I.5, 409b2-4)。しかし、ある自体的な付帯性が説明できない、もしくは推測できないということは、不整合な帰結が生じるということとは異なる。許容することのできない不整合が生じるということから、ある定義の妥当性を疑問視するということは当然だと思われるが、問題となっている対象に必然的に付帯すると思われる事柄が説明できないということ、その対象の定義として提示されているものを棄却する理由としてアリストテレスが認める根拠は何なのか。

これについては「定義のうちで、それに従うことでは付帯する事柄を認識することにならず、それら〔=付帯する事柄〕について容易に推測することにすらならないようなものが、すべて問答法的な仕方で空虚に述べられているということは明らか」(DA I.1, 402b26-3a2)であるとすると先のアリストテレスの言葉が答えを与えてくれる。アリストテレスにとって、プシューケーに必然的に付帯する事柄、すなわち「プシューケーに自然に属していると特に思われている事柄」は、いわば「探求の原理」であり(DA I.2, 403b24-5)³¹、それについていかなる情報をも与えないような定義は、たとえ不整合でなくとも、空虚であるという理由で却下することができるようなものなのである。

²⁹ οὐ γὰρ μόνον ὀρισμὸν ψυχῆς ἀδύνατον τοιοῦτον εἶναι, ἀλλὰ καὶ συμβεβηκός. δῆλον δ' εἴ τις ἐπιχειρήσειεν ἐκ τοῦ λόγου τούτου τὰ πάθη καὶ τὰ ἔργα τῆς ψυχῆς ἀποδιδόναι, οἷον λογισμούς, αἰσθήσεις, ἡδονάς, λύπας, ὅσα ἄλλα τοιαῦτα· ὥσπερ γὰρ εἶπομεν πρότερον, οὐδὲ μαντεύσασθαι ῥάδιον ἐξ αὐτῶν.

³⁰ ここでプシューケーのパトスや働き^{エルゴン}の例として挙げられているものは、上の引用では単に付帯性とされている。しかし、これが単なる偶然的な特質を指すわけではないということに関しては、DA I.1, 402a8; I.1, 403a3-10; I.1, 403a16-8; I.2, 403b24-5 などを見よ。

³¹ ἀρχὴ δὲ τῆς ζητήσεως προθέσθαι τὰ μάλιστα δοκοῦνθ' ὑπάρχειν αὐτῇ κατὰ φύσιν.

ここまで来て、なぜアリストテレスが「実体に付帯する事柄の認識が、「何であるか」を知るために大きく寄与する」と考えているのかを理解する準備が整った。「自己運動する数」といったプシューケーの定義は、プシューケーに自体的に付帯すると思われる事柄についていかなる説明も与えない、という理由で却下されうる。すなわち、自体的な付帯性は、それを説明できるか否かをチェックすることによって、問題となっている定義の妥当性を検証するという役割を担う。プシューケーの厳密な定義を手にはしているわけではないが、プシューケーが感覚と関連をもつと考えてはいる人に、ある哲学者が「自己運動する数」といったものをプシューケーの定義として提示したとしよう。その主張を聞いたものの一部は、これらが何らかの不整合な帰結を生み出すということに気づき、その点にもとづいてこの定義を却下することができる。しかし、そのような不整合に気づかない者でも、「ではその定義は感覚といったものをどう説明するのか？」という問いを発することは可能であり、それに対して有効な答えが与えられない限り、その定義を受け入れる積極的な理由はないと主張することができる³²。

以上で示されたように、『デ・アニマ』においてアリストテレスは、生物の形相であるプシューケーに関して、それを単なる整合性といった視点から探求することが不毛に終わる可能性を指摘している。プシューケーの定義は（それ以外のものの定義もまた）それが定義しているところのものの実体に付帯する事柄と何らかの仕方に関連づけられうるということが示されない限り、その妥当性が検証されたことにならない。定義が説明しなければならない付帯する事柄は、「現^{パンクシア}れに即した説明を与えること」ができるようなものとして考えられているので、ここでは結果的に、事柄を探求していく上での経験的な観察結果や先人の意見などの重要性が強調されているということになるだろう。

定義の中身に含まれないものをうまく反映する説明を求めることで定義の妥当性を検証するという方向性は、前節で検討した三種の説明の様式を考えるに際して重要な示唆を与えてくれる。アリストテレスは、定義の中身に含まれないものを排除する、説明1のようなものを用いて物事を探求することができる。しかし、これはほとんど実質的な情報を与えない説明であり、それが本当に問題となっている物事に関して正しいことを述べているのか否かを検証する手段をもたないという点で、「一般的に、感覚するものは心臓をもつ」や「云々の形をした眼をもつものがよく感覚する」といった、定義からはみ出る内容を引き入れることが必要となる。その意味において、これらを含む説明2と3は内実のあ

³² ポランスキー (Polansky 2007, 48-50) も、ある定義から自体的な付帯性に関する説明を引き出せるか否かを検証することが「その定義の成功を測るための重要なテストの役割を担っている」と述べている。

る探求を進めるために必須のものであると言える。ここで大事なものは、説明2と3が、形式的には説明1を拡張したものになっているという点である。アリストテレスは、説明1のみを追い求める者を「問答法的な仕方では空虚に」語る者とみなすだろう。しかし、説明1のようなものをそこから説明2や3を取り出すための「型」として設定しない限り、説明2と3のようなものを求めるという作業そのものが不可能になる。「すべての論証の原理は「何であるか」であり」、その意味で「何であるか」にもとづいた推論の型を与える説明1は優位に立つ。アリストテレスが『デ・アニマ』第一巻第一章で述べた、二つの方向の説明（「何であるか」から自体的な付帯性へ・自体的な付帯性から「何であるか」へ）が両方用いられなければならないという主張は、型となるものとそれを拡張したものがそれぞれ独自の役割をもって物事の探求を可能にするということを示すという仕方、三つの説明の様式の間関係を明らかにしているのである。

第6節 説明の修正と柔軟な学としての質料形相論

本章の議論を簡略に振り返りたい。本章第一節では私は、まず「プシューケーのパトス」の一つである怒りの例をもとに、怒りの質料を「心臓付近の血の沸騰」とする（恐らく間違っていると思われる）説明を修正する可能性をアリストテレスの質料形相論が認めることができるのかという問いを与えた。続く第二節において私は、この問いへと進む前段階として、質料形相論を理解するための二つの選択肢である「強い質料形相論」と「穏健な質料形相論」の対立を紹介し、説明力を重視するという点で、後者の立場にとりあえず寄り添うという方針を選択した。その直後に明らかになったのは、本当の意味で質料形相論の説明力を確保するためには、穏健な質料形相論による、形相から存在や同定において切り離しうるものとして質料を理解するという提案だけでは十分ではないという点であった。これを乗り越えるために必要となるのは、切り離されたあるものをなぜ質料とすることができるのかを示す理由を述べることである。

これがアリストテレスにとって可能であったことを示すために、私は第三節と第四節において、『動物の諸部分について』第一巻第一章における三つの分類の解釈へと進んだ。まず第三節において私は、三つの分類を動物の異なる部分の区別に対応すると考える従来の解釈を批判し、第四節において、生成の必然性を目的論的に説明するという同じ目的を達成するための、異なる三つの説明の様式としてそれらを理解することを提案した。その際に明らかになったのは、アリストテレスがある対象の生成の必然性を示す、すなわちある

対象が質料であるということを示す際に、第二節で必要とされたような、様々な理由を取り込んだ説明を与えていたという点である。これによって、怒りの質料の説明が修正される可能性が確保されたことになる。

三つの説明の様式の区別は、理由にもとづいた質料的説明の修正という問題に対して一定の答えを与えてくれたが、同時になぜ一つではなく三つの説明が必要となるのかという点を明らかにしなければならないという課題も与えてくれた。この点を論じるために私は、『デ・アニマ』第一巻第一章における、「何であるか」と自体的な付帯性の関係にもとづいた、方向性を異にする二種類の説明の内実を検討した。そこから明らかになったのは、三つの説明の様式のうちの第一のものとそうでないものが、型としての第一の説明とその型を拡張したものとしての第二と第三の説明という関係を有するものであり、それぞれが独自の役割をもって探求を可能にしているということであった。

以上の議論から、質料形相論の説明力の確保という点に関して次のことが帰結する。まず、質料形相論が与える説明は、関連する理由を検討することでその説明を検証及び修正することを許容するものである。さらに、この点は本章第一節と第二節で問題になった質料的説明のみではなく、形相的説明にも該当する。質料的説明と形相的説明の双方に対して、その妥当性を検討し、間違った説明が与えられた場合にはそれらを修正することができるということは、アリストテレスによってなされた自然の学的探求というものが、第一節で「プシューケーのパトス」の例を考察した時に想定されたものに比べて、はるかに柔軟な性格を備えたものであったということを意味する。このように理解された質料形相論は、質料と形相の同定における分離可能性と不可能性をめぐるチャールズの論点（形相を抜きにして質料を知ることはできない）とキャストンの論点（できる）を、矛盾しない仕方で調停することを可能にするものである。「何であるか」にもとづいて質料を探求する説明1においては、確かにチャールズの論じる分離不可能性が認められる。これに対して、説明2や3で導入される「心臓」や「然々の形をした眼」といったものに対しては、キャストンの擁護する分離可能性が認められる。大事なのは、これらがそれぞれ相補的な役割を担うことによって初めて、理由にもとづいた説得力のある説明を与えることと、それを検証及び修正することが、ともに可能になるという点である。

次の章へと進むための橋渡しとなるものとして、チャールズとキャストンが言及したもう一つの分離可能性である、質料と形相の「存在における分離可能性」に関して言及しておきたい。本章において私は、質料は、それがどのような仕方で語られるかによって、その

同定において形相や結合体から分離可能でも不可能でもあると主張した。このことは、質料の存在における分離可能性に対してはどのような意義をもつのだろうか。AがBから存在において分離可能であるということを、Bが存在しなくてもAは存在しうるとする主張として考えてみよう。AがBから存在において分離可能か不可能かを判定するためにまず明らかにする必要があるのは、当然AやBとは何かという点である。この指摘がもつ重要性は、例えば心臓は生物から存在において離存可能か否かを問えば明確になる。心臓ということで、実質的に「血を循環させ生命活動を維持する器官」を意味した場合、それは生物から同定においても存在においても分離不可能だろう。しかし、心臓ということが「微生物による分解が始まっていない、特定の材料からなる特定の形の塊」を意味するものとして使われている場合、生物を知ることとそれを知るとは分離不可能ではないし、そのような塊が単にそのような塊として存在する世界がある可能性を否定できない以上、存在における分離不可能性もまた帰結しない。ここから帰結するのは、質料が存在において分離可能か否かに関しても、端的な答えを与えることはできないということである。質料が形相または結合体から存在において分離可能か否かは、その質料ということで我々が何を意味しているのかに依存する。

このような文脈依存的性格は、説明理論を構成するものとしてそれが当てはまる対象を理解することを後押しするものであり、これまで私が示してきたように、質料概念は実際このような性格をもっており、よって説明理論を構成する要素として理解することができる。これに対して、形相概念には（本章で示した説明の修正可能性という論点にもかかわらず）より大きな困難がある。関係性や無規定性を有するものとして主に描かれる質料とは違って、形相は離存性³³や「質料抜きに」といった限定と絶えず関係づけられる。このことが、形相は質料から存在において端的に分離可能であるということの意味するのだとしたら、質料と同じ仕方で説明理論を構成するものとして形相を理解することができるのかは疑わしくなる。問題となる生成変化への言及を抜きにしてそれ自体のアイデンティティをもつ特定の存在者を同定することを限定的にのみ認める質料に対して、形相は生成変化から切り離された仕方でアイデンティティを保ちながら存在しうる何かを指すということが明らかになった場合、説明理論として質料形相論全体を整合的に理解するという試みは

³³離存性は本章で用いた分離可能性とほぼ同義であるが、古典ギリシア語でこの性質をもつものを形容する *χωριστόν* が「離存しうる」と「すでに離存している」の両方を意味しうる言葉であるため、この言葉が意識されている文脈においては、すでに可能性への言及を含む「分離可能性」ではなく「離存性」を用いる。本章での存在における分離可能性や同定における分離可能性に対応するものは「存在における離存性」と「思惟における離存性」だが、これらの区別を含む離存性の詳しい解釈の問題は、第六章と第七章で扱われる。

瓦解することになりかねない。続く本論文第五章から第七章において私は、ここで何が本当の争点となっているのかを明らかにした上で、説明理論としての質料形相論理解を擁護することを目指す。その過程で、形相が説明を与えるという主張の内実もまた明らかになるだろう³⁴。

³⁴本章で論じ残したもう一つの問題である、「強い質料形相論」を打ち出すことでデカルト以降の心身問題の枠組み全般を疑うというチャールズの試みの帰趨を見届けることは、私の形相理解を提示する作業が終わった本論文の結びでなされることになる（特に、本論文結び注4を参照）。

第5章 感覚される形相の受容をめぐる

本論文第二章から第四章において私は、序論と第一章で与えられた、質料形相論を説明理論として読みなおすという方針のもと、まず質料を説明理論を構成するものとして理解するという主張に内実を与え、それに対して提起される様々な批判に応答することを試みた。質料概念に関する私の解釈の概要はこれで示されたことになるが、質料形相論のもう一つの軸をなす形相に関しては、これがそもそも何かを説明するようなものなのかといった点をはじめ、考察されなければならない問題が山積している。

本章では、近年アリストテレスの感覚論をめぐる議論が繰り返された一つの論争へと立ち入ることで、説明理論を構成するものとして形相を理解するにあたって本論文が退ける解釈の姿を明らかにし、私の解釈とそれとの間で争点とすべきものが何であるのかを見定めることを目指す。アリストテレスの感覚論をめぐる論争とは、本論文第一章第三節で紹介した、心的変化に対応する物的変化の有無（及び、あるとされる場合、その内実）をめぐる三つの立場の対立を指す。本章で私は、まず三つの立場のうちの一つにコミットし、その立場をテキストの分析にもとづいて擁護する。それを終えた後にこの三つの立場の対立が結局何をめぐるものだったのかを改めて考察する過程で、生成変化における形相の役割こそが本当に問い直されなければならない問題であるということが明らかになるだろう¹。

第1節 導入

一九九二年に公刊された論文において、バーニェトは質料を伴わず形相を受容することとして説明されるアリストテレスの感覚論に深刻な欠陥があると主張した（Burnyeat 1992）。バーニェトは質料を伴わない形相の受容を例えば赤の気づき（awareness）のようなものとして理解し、アリストテレスの感覚論においてはこの気づきとしての感覚的变化に対応する²物的変化が（「質料を伴わない」という限定によって）排除されている、と考えた。もしバーニェトの解釈が正しいとすれば、アリストテレスの感覚論は現代の科学が当

¹本章は文[△]2012を加筆修正したものである。

²物的変化と感覚的变化の対応の仕方には、様々なものがありうる。前者は、後者を決定するかもしれない。あるいは、前者は後者のための必要条件ではあるが、後者を決定するほどの力はないかもしれない。あるいは、以下で論じられる一つの立場がそう考えるように、両者はそもそも無関係かもしれない。本章において私は、最後の選択肢は明確に排除するが、それ以外のものに関してはとりあえず中立を維持する。心身の区別にもとづくこのような問いの枠組みが質料形相論とどのような関係にあるのか、質料形相論がこの問題設定に対してどこまで答えることができるものなのかという点は、本論文の結論部において改めて論じられることになる。

然前提するだろう感覚的变化と物的变化（例えば、視神経の興奮）の対応関係を認めないということになり、神秘的で未熟な議論と評価されることになってしまう。

上記のような立場（スピリチュアリスト）に対して、感覚的变化に対応する物的变化を認める解釈も当然存在する。代表的な例は、ソラブジなどによって展開された、字義通りの物的变化を認める立場（リテラリスト）である。彼らは、感覚される形相をその質料と独立に存在しうる赤そのものと解釈し、眼がこの形相を受容することを字義通り眼が（物質的・物理的に）赤くなることとして理解する³。

アリストテレスの感覚論における物的变化の有無（とその内実）に対する上記二つの相異なる立場は、現代の読者としてはどちらも受け入れがたいものであるという点では共通している。物的变化を認めない立場が理解しがたいものであることはあえて強調する必要がないとしても、眼が字義通り赤くなることが赤いものを見ることに対応する物的变化であるという説明もまた、日々の我々の観察からすればあまりにも素朴なものに思われる。また、後者の立場は、アリストテレスは赤くなることと赤を感覚することの差異を結局のところ把握できなかったという結論に読者を導く危険をもつという問題点も有している。

このような従来二つの立場に対して、「感覚的变化に対応する字義通りではない物的变化が認められる」とする第三の立場を採用する論者も存在する。この立場を推進する論者は、感覚的变化に対応する物的变化を認めるという点でスピリチュアリストから、赤いものを見ることで眼が赤くなるといった字義通りのものではない物的变化を認めるという点でリテラリストから区別される⁴。字義通りではない物的变化の内実として、現代の読者ならば視神経の興奮や脳内での電気的变化などを想定するだろうが、アリストテレスにこのような現代的な説明を求めることはできない。よって、第三の立場に与する論者がとる戦略は、従来二つの立場が実はアリストテレス解釈としても不整合をきたすということを示す作業に重点を置くものである場合が多い。

³スピリチュアリストとリテラリストの代表として、ここでは Burnyeat 1992, 2001 と Sorabji 1992, 2001 を挙げるにとどめる（ただし、Sorabji 1992 では DA II.12 の箇所が本当に自説の根拠となるのかに関して若干の留保が与えられている）。なお、物的变化に対する両者の捉え方は実際はより複雑なものだが（例えば、バーニエトは感覚的变化に対応しない付帯的な物的变化としてならば、熱を感覚する際に熱くなることを認めるし、感覚的变化が生じるためには、その前提条件として——感覚が実際に生じる際にいかなる追加的な物的变化も被らない奇妙なものとして理解されるが——感覚器官が存在しなければならないとも主張する）。ここでは私の議論との対比を明確にするために要点を絞っている。なお、本章注 8 も参照せよ。

⁴私はこの第三の立場を、スピリチュアリストまたはリテラリストの立場をとらないものという消極的な仕方規定しており、よって第三の立場をとる論者の間にも多様な相違がありうる。この立場に親和的な解釈には Ward 1988, Silverman 1989, Bradshaw 1997, Magee 2000, Caston 2005, Polansky 2007 などがある。Caston 2005, 247n7 にこの立場に親和的な論者が網羅的に整理されている。

私はアリストテレスの感覚論に対する理解として、従来の二つの立場よりもこの第三の立場が感覚論そのものとしても、またアリストテレス解釈としてもより有望だと考える。また、第三の立場を擁護しようとする論者たちが、実際に数々の論点において従来の二つの立場がもつ困難をすでに指摘していると考え⁵。しかし、今まで展開された擁護は、論争の焦点の一つとなっている、質料を伴わず形相を受容するという表現を含む『デ・アニマ』第二巻第十二章に対しては十分説得力のあるテキスト分析を展開していない⁶。本章で私は、『デ・アニマ』第二巻第十二章のテキストを分析することから、第三の立場を整合的な仕方ですこに読み取ることが可能であることを示すことを目指す。第三の立場から従来の二つの立場を完全に論駁するためには、本来ならば関連するアリストテレスの著作を網羅的に検討する作業が要求される⁷。質料形相論の理解を主題とする本論文でそれを遂行する余裕はないので、ここでは、従来の立場を駆逐することよりも、第三の立場を『デ・アニマ』第二巻第十二章から読み取ることが可能であるということを示すことに重点をおく。

まず第二節では、『デ・アニマ』第二巻第十二章における感覚論をめぐる議論の状況を簡潔に整理する。この論争に関連する二次文献は膨大であり、ここでは私がまさに対象とする論点に直接関係する対立を示すことに終始する。第三節では、『デ・アニマ』第二巻第十二章の全体の構造に関する私の理解を注釈の形式で示す。続く第四節と第五節では、議論の中心となる、「質料を伴わず形相を受容する」と「質料を伴って作用を受ける」という二つの句の解釈が提示される。この二つの句は、「質料を伴って」と「質料を伴わず」からなる対立図式を『デ・アニマ』第二巻第十二章に読み込む解釈に強い動機を与えてきた。このような対立図式は、スピリチュアリストとリテラリストだけでなく、第三の立場を標榜する論者によっても支持されることが多い。私は、二つの句を分析することによって、『デ・アニマ』第二巻第十二章にこのような対立図式を読み込まないことが可能であると主張する。最後の第六節では、私の解釈に従った場合、『デ・アニマ』第二巻第十二章におけるアリストテレスによる感覚の分析が、「感覚的变化に対応する字義通りではない物的変化」を引き入れる余地を残すものであるということを示した上で、三つの立場の対立が、生成変

⁵Caston 2005, 265-99 が従来の二つの立場に対する包括的な反論を提示している。

⁶Caston 2005, 299-316 と Polansky 2007, 338-58 にそのような試みがあるが、両者の解釈はともに私の解釈といくつかの点で決定的に異なっている。ここでそれらを詳細に検討する余裕はないが、一点だけ述べておこなら、両者は形相の受容が質料を伴うか否かが感覚の成否において重要な意味をもつとする、バーニェトとソラブリが採用している（しかし私は否定している）図式を受け継いでいる。

⁷例えば、感覚を現実態と可能態との関連から論じる DA II.5 がまず問題になるだろう。Burnyeat 2002、Heinaman 2007、Bowin 2011、2012a、2012b などがこの章を論じているが、何らかの合意が得られたとはいえない。

化における形相の役割をどのように理解するかという問題へと進むことを要求するものであることを明らかにする。

第2節 形相の受容をめぐる対立

本論に入る前に、混乱を招く用語を整理しておきたい。本章では以下の言葉の使い分けが大事になる。

- 感覚
- 感覚的变化
- アイステーシス 感 覚

まず「感覚」と「感覚的变化」に関して、後者は物的変化ではないとされる気づきといった（現代で言えば）心的な変化のみを指すために用いられるが、前者は、感覚的变化と（その存在が認められた場合）それに対応する物的変化を同時に指しうる。よって、可能性としては、感覚が生じるに際してそこに感覚的变化のみを認める解釈と、関連する物的変化が同時にあることを認める解釈の二つが与えられる。感覚という語はアリストテレスのテキストにおける *αἴσθησις* を特に指すためにも用いられるが、その場合は「アイステーシス 感 覚」のようにルビをふる。*αἴσθησις* は当然一般的な意味での感覚に関連するものだが、それをどのように定義するかはブシューケーを定義するのと同様に難しい問題であり、ここでは深入りしない。その他にも幾つか区別される表現があるが、それらはすべて本文中で説明される。

上で述べた心的変化としての感覚的变化に関して、アリストテレスの感覚論においてはそれに対応する物的変化が存在しないという主張がパーニエトによってなされた。彼の「質料を伴わず形相を受容すること」の理解は、以下の文章に要約されている。

何かの形相を受容することは、形相においてそれのようになることを意味しているだけである。よって、その質料を伴わず形相を受容することは、形相においてはそれのようになるが、質料においてはそれのようにならないことを意味する。よって、質料を伴って何かの形相を受容することのほうは、その形相と質料の両方においてそれに似ることを意味する。〔中略〕

このことから、熱いものの熱をその質料を伴わず受容することは、本当に熱くなることなしに熱くなることを意味するということが帰結する。それは、実際に熱くなることなく熱を〔意識に〕載せること、熱に気づくこと、または、熱を感覚するこ

とを意味する。〔中略〕彼〔＝アリストテレス〕の世界においては、熱や赤が（これらの性質の物質的基盤によるものではない）「効果」を引き起こすということが、当たり前のこととされているのである。（Burnyeat 1992, 24）

上の引用は、質料を伴わない「熱いものの形相」の受容として説明されるアリストテレスにおける感覚が、熱の気づきが生じることのみを認めるものであるという見解を示している。この見解に従えば、物的変化は「質料を伴わない」という表現によって明確に排除されているということになる。バーニエトはこのような見解が奇妙であることを承知しているが、この奇妙な見解こそがアリストテレスのものであると主張する。これに対して、感覚的变化に対応する字義通りの変化があるとする主張の代表であるソラブジは、熱いものの形相を、それ自体で気づきを引き起こすものとしてではなく、質料とは独立して存在しうる熱そのものとして考える。熱は常にそれが内属するための質料を必要とするが、ある質料から別の質料へと移りゆくことができるものであるとされる。よって、彼の理解では形相は物的変化をそれ自体で生じさせうる（Sorabji 1992, 209, 222-3）。

スピリチュアリストとリテラリストの対立は、まさに形相の受容をどのように理解するかという点に最も克明に現れている。前者は「形相の受容」が厳密に感覚的变化のみを指すと考え（さらに、「質料を伴わず」によって感覚的变化に対応する物的変化を読み込む可能性がすべて排除されていると考え）、後者は「形相の受容」がまさに字義通りの物的変化を意味すると考える。二つの立場に関しては、これ以外にも様々な違いを指摘しうる。しかし、両者はともに『デ・アニマ』第二巻第十二章の理解に関連して、そこに二種類の変化の対立からなる図式を読み込んでいるという点では一致する。すなわち、「質料を伴った形相の受容」と「質料を伴わない形相の受容」の対立がそれである。これと関連して両者は、質料を伴うか否かが感覚の成否を判断する際に重要な意味をもつという発想も共有している。感覚が成立しないとされる、質料を伴った形相の受容には、ソラブジは「〔熱そのものではなく〕熱い空気や他の熱い質料をそれら〔＝植物〕のシステムの内部へと取り込むことによって熱くなること」（Sorabji 1992, 217）を、バーニエトは「形相と質料の両方においてそれに似ること」、すなわち、物的に（しかし、ソラブジとは違って、熱い空気といった質料を内部へと取り込むのではない仕方）熱くなることを割り当てる⁸。

⁸ソラブジの解釈は、結果として以下の異なる「熱くなること」をいかに区別するかという問題に苛まれることになる。

1. 熱い物質を取り込むという仕方（質料を伴って形相を受容すること）
2. 熱い物質を取り込むのではない仕方（熱くなりながら、熱さを感じないこと（質料を伴わず形相を受容））

『デ・アニマ』第二巻第十二章における第三の解釈の可能性を示すために以下で私が主張することの一つは、このような「質料を伴わない形相の受容」と「質料を伴う形相の受容」という対立図式が必ずしも成り立たないという点である⁹。これを棄却することができたとき、アリストテレスが実際のところ少なくとも三つの異なる変化をここで区別していたということが見えてくるだろう。対立図式の解体そのものへと向かう前に、まずは『デ・アニマ』第二巻第十二章に関する私の理解を、テキスト全体を A から F に分けた上で示そう。

第3節 『デ・アニマ』第二巻第十二章

(A-1) ^{アイステーシス} 感覚の共通的规定と蜜蝋の例 < 424a17-21 > :

< 訳 > ところで、すべての ^{アイステーシス} 感覚について共通して理解すべきは、^{アイステーシス} 感覚が、感覚される形相を、その質料を伴わず受容しうるものである、という点である。例えば蜜蝋は、鉄や金を伴わず指輪の印形を受容する。蜜蝋は、金製の、または青銅製の印形を受け取るのであるが、しかし金や青銅として〔その印形を受け取るの〕ではない¹⁰。

< 注釈 > アリストテレスは全ての ^{アイステーシス} 感覚に共通する規定を「感覚される形相を、その質料を伴わず受容しうるもの」としてまず与える。続いて彼は、蜜蝋が鉄や金、青銅でできた指輪の印形を受容するという例を持ち出す。

すること)

3. 熱い物質を取り込むのではない仕方でも熱くなりながら、熱さを感じること(質料を伴わず形相を受容すること)

本文では直接論じられていない、2のような仕方でも熱くなることは、太陽光線を浴びることによって熱くなる、熱湯に浸かることによって熱くなるといった事例を考えれば、その存在を認めざるを得ないものであると思われる。問題は、これを認めた場合、感覚が成立する事例である3との区別をアリストテレスがどのようにつけるのかが不明になってしまうという点である。質料を伴わずに形相を受容すると述べるだけでは、感覚の成立を説明したことにはならないのである。これに関して Sorabji 1992, 217-9 では、アリストテレスはこの問題に気づいていたが、それに関する答えを DA II.12 では与えていない、と考える見解が述べられている。

上でも述べたとおり、これは、DA II.12 で述べられている「感覚される形相の受容」が、感覚が成立するための(必要条件ではあるが)十分条件ではなくなるという帰結を生じさせる。その場合、ソラブジの対立図式への参与は、対立図式がまさに必要十分な仕方でも感覚の成否を判定すると考えるパーニエトのそれとは異なる意味合いをもつことになる。しかし、(1)上でも述べられた通り、ソラブジにおいても「質料を伴わないこと」は感覚が成立するための非常に重要な要素である(少なくとも必要条件ではある)、(2)その内実をどのように理解するのであれ、「質料を伴わない形相の受容」と「質料を伴う形相の受容」の対立自体は認められている、という二点にもとづいて、本論ではソラブジも基本的にはこの対立図式に与しているものとみなす。なお、「形相の受容」を感覚の成立の十分条件とみなさない解釈の問題点に関しては、本章注 11 も参照せよ。

⁹この対立図式は純粹に形式的なものであり、対立するそれぞれの項にどのような内実を付与するかは解釈が分かれる問題である。リテラリストやスピリチュアリストだけでなく、本章第一節や本章注 6 でも述べられたように、第三の立場に立つ論者もまた対立図式に与することができる。私は対立図式に与することが第三の立場の存立を危うくすると考えるが、この点に関してはこれ以上論じない。

¹⁰καθόλου δὲ περὶ πάσης αἰσθήσεως δεῖ λαβεῖν ὅτι ἢ μὲν αἰσθησίς ἐστι τὸ δεκτικὸν τῶν αἰσθητῶν εἰδῶν ἄνευ τῆς ὕλης, οἷον ὁ κηρὸς τοῦ δακτυλίου ἄνευ τοῦ σιδήρου καὶ τοῦ χρυσοῦ δέχεται τὸ σημεῖον, λαμβάνει δὲ τὸ χρυσοῦν ἢ τὸ χαλκοῦν σημεῖον, ἀλλ' οὐχ ἢ χρυσὸς ἢ χαλκός·

- 質料を伴わず感覚される形相を受容すること
- 鉄や金、青銅を伴わず印形を受容すること

この例が何をどこまで説明しているのかを理解することが、まず問題となる。研究者の多くは、^{アイステーシス}感 覚の規定と蜜蝋の例が厳密な対応関係にあると捉え、鉄は質料の例、印形は感覚される形相の例であると考え。これに対して私は、鉄と質料に関しては対応関係がなりたつが、感覚される形相と印形に関してはそれがなりたないと考え。詳しくは本章第四節にて述べられるが、形としての印形は「感覚対象」に分類されるのに対して、「感覚される形相」はDで見られる「感覚対象の形相」に相当するものなので、両者を同じと考える必要はない。完全な対応関係を認めないもう一つの理由は、それを認めた場合、厳密に言えば蜜蝋は感覚しないため、どうしても感覚の説明に無理が生じてしまうという点にある（感覚しないものを用いて感覚を説明していることになってしまう）¹¹。印形と感覚される形相を区別することで、規定と例が厳密な対応関係にあることを否定する私は、感覚における「質料を伴わず」が何を意味するのかという点のみを説明するものとしてこの例が導入されていると解釈する。このような理解に立った場合、蜜蝋の例は、蜜蝋が指輪の印形を受容する際に、印形の形を構成している鉄や金、青銅の受容が生じないのと同様に、感覚が生じる場合にも対象の質料の受容は生じない、ということを示すために導入されたということになる¹²。

^{アイステーシス}(A-2) 感 覚と感覚対象による変化 < 424a21-4 > :

< 訳 > [「質料を伴わず」の場合と] 同じく¹³、それぞれ[の感覚対象]の^{アイステーシス}感 覚もま

¹¹この点と関連して、そもそも A-1 で与えられた^{アイステーシス}感 覚のすべてに共通する規定を、感覚の必要条件のみを示すものとして理解することが提案されている。しかし私は、Polansky 2007, 344n11, 345n14 や Grasso 2013 と同じく、これを単なる必要条件として解釈するのは非常に不自然であると考え。キャストン (Caston 2005, 307n121) を含む多くの解釈者たちは、例として出された蜜蝋がこの規定と厳密な対応関係にあると前提した上で、蜜蝋は感覚しないので、この規定は感覚するための十分条件ではありえないと主張する。本文で明らかにしたように、私は蜜蝋の例を、この規定と完全な対応関係にあるものとしては捉えず、規定の一部である「質料を伴わず」のみを説明するものとして考える。このように例を持ち出す意図を限定した場合、規定を感覚の必要十分条件を示すものとしてとらえたとともに、例の不適切さをも解消できる。

¹²DA には「質料の受容」という表現が直接使用されている箇所はないが、例えば「〔何が〕それから生成するところのもの」と「〔何がそれから〕生長するところのもの」は同じもの——それは栄養物なのだが——なので、諸部分のそれぞれは〔自らが〕受容することができるような質料や過剰物から作られるということになるだろう」(ὄντος δὲ τοῦ αὐτοῦ ἐξ οὗ τε γίννεται καὶ αὐξεται ——τοῦτο δ' ἐστὶν ἡ τροφή—— ἕκαστον ἀν γίννεται τῶν μορίων ἐκ τοιαύτης ὕλης ἧς δεκτικόν ἐστι καὶ τοιούτου περιττώματος.; GA IV.1, 766a10-3) といった箇所にそのような表現が見られる。何らかの物質を内部に取り込むという意味で「受容」が用いられる別の例としては、DA II.8, 420b14-6 など。

¹³私はここでの「同じく」を、「質料を伴わず」何かを受容するということが^{アイステーシス}感 覚と蜜蝋において等しく認められていたのと同じく、次の「作用を受ける」ということもまた両者に等しく認められる、ということの意味するものとして理解する。なお、後ほど詳細に議論されるように、両者はともに「作用を受ける」ものであるが、そ

た〔、蜜蝋がそうであるように、〕色や味、音をもつものによって作用を受ける。しかし、^{アイステーシス}〔感 覚 や蜜蝋は、色や味、音をもつものが〕それらの一例としてのそれ〔=色をもつものである、指輪、鉄、金、青銅などのうちの、例えば、指輪〕と呼ばれている限りにおいて〔それらから作用を受けるの〕ではなく、〔それらが〕「ある性質をもつもの」〔と呼ばれている〕限りにおいて〔それらから作用を受ける〕すなわち、その比に従って〔作用を受けるのである〕¹⁴。

<注釈> A-1 を受け継ぐ A-2 においてアリストテレスは、^{アイステーシス}感 覚 が、蜜蝋と同様に、色や味、音をもつものから作用を受ける (*πάσχειν*) と述べる。さらにアリストテレスは、色や味をもつものは、それらがそう呼ばれるところのものである指輪や鉄、金、青銅といったものとして作用するのではなく、例えば赤や冷といった「ある性質をもつもの (*τοιονδί*) として」作用する、と敷衍する¹⁵。この「ある性質をもつものとして」は、直後に「その比¹⁶に従って」と言い換えられるが、このような言い換えは、色や音といった感覚対象 (*αἰσθητόν*)¹⁷ を特定の比として理解するアリストテレスの立場を反映したものである。蜜

の作用の内実が区別されなければならない。この区別が明確になっていないことこそが、D から E-2 に至る議論を後ほど導入しなければならなかった理由である。

¹⁴ὁμοίως δὲ καὶ ἡ αἴσθησις ἐκάστου ὑπὸ τοῦ ἔχοντος χρώμα ἢ χυμὸν ἢ ψόφον πάσχει, ἀλλ' οὐχ ἢ ἕκαστον ἐκείνων λέγεται, ἀλλ' ἢ τοιονδί, καὶ κατὰ τὸν λόγον.

¹⁵これらの難解な「として」句 (*DA II.12, 424a21-4*) の構造と、特に *τοιονδί* の内実に関して、私は Hicks 1907, 416-7 や Hamlyn 1993, 113 及び Polansky 2007, 343-4 に従う。よって、何か「*τοιονδί* として」作用するという点に関しては、例えば熱いものである金が「熱いものとして」感覚器官に作用するという点を意味するものとしてこれを読み、「熱いもののようなもの (Caston 2005, 305-6, 306n120 に従えば、熱とは区別される「熱さを実現している比」をもつもの) として」とは読まない。私は、「熱いものによって作用を受けること」と「比に従って作用を受けること」がここでは置換可能なものとして扱われていると理解する。

¹⁶ここでは *λόγος* を比と訳出したが、この言葉はアリストテレスによって多義的に用いられる。その中から比という訳語を選択したことの正当化は、主に文脈に依存する。私は、直前の例で出された指輪における印形が、その質料が鉄や金、青銅であるという点によってではなく、その鉄や金、青銅がある特定のあり方をしているという点によって実現されていることから、色や味、音も、それを構成しているもの (白や黒など) のあり方によって実現されているものであり、そのあり方を *λόγος* という言葉で表していると考え。他に比の意味として *λόγος* が用いられていると思われる箇所としては *DA I.4, 408a13-28*; *I.5, 410a1-8* を、特に感覚と関連づけて用いられていると思われる箇所として *DA III.2, 426a27-b7*; *SS 3, 439b25-31*; *3, 440b13-23*; *4, 442a12-7* を挙げることができる。この箇所での「比」解釈に対する批判としては、Barker 1981 や Everson 1997, 96-102 及び浜岡 1992 などがある。なお、本論文で理解される *λόγος* のより中心的な意味は「説明規定」といったものであるが、感覚対象の *λόγος* を比と理解することは、感覚対象の説明規定が比に言及するものでありうる以上、説明規定としての *λόγος* の意味をまったく無視したものではない。説明規定の内実に関する私の理解は、本論文第六章第二節と第七章第二節でさらに示される。

¹⁷アリストテレスは、固有 (色や音)、共通 (形や大きさ)、付帯的 (白いものがディアレスの息子であった場合の「ディアレスの息子」) の三種の感覚対象を区別している (*DA II.6*)。彼が *DA II.12* で論じる感覚対象は基本的に固有または共通感覚対象なので、私はここで彼が念頭においているものはこの両者であると前提して議論を進める。しかし私は、「形相の受容」が固有感覚対象や共通感覚対象の感覚のみに関連するものなのかに関しては判断を留保する。感覚することの射程はどこまでなのか (思惟することとどこで区別されるのか) また、どのようにして複雑な感覚の内容が固有・共通感覚対象の感覚から構成されるのかといった問題は、本論では論じることができない (Stein 2009 及び Marmodoro 2011 を参照)。

蠟の例に即して考えれば、これらは次のことを意味する。蜜蠟に作用しうる特定の形をもつ指輪は、指輪またはその材料となっている鉄や金、青銅としてではなく、感覚対象（すなわち、特定の形）をもつものとして、さらに正確には、その感覚対象を実現している比に従って蜜蠟に作用している。

ここまでの議論から明らかになるのは、アリストテレスが A-1 と A-2 において少なくとも二種の変化の存在を想定し、両者を区別しているという点である。

- 変化 X (A-1): 感覚が生じない、物質の吸収といった変化 (δέχεσθαι, e.g., τοῦ σιδήρου)
- 変化 Y (A-2): 感覚が生じる、感覚対象の比に従った作用としての変化 (πάσχειν ὑπὸ τοῦ ἔχοντος, e.g., τὸ σημεῖον ἧ τοιονδί, καὶ κατὰ τὸν λόγον)

変化 X 及び Y と感覚的变化の関係を蜜蠟の例の助けを借りて分析した結果、変化 X は感覚することと無関係であるが、変化 Y は感覚することと関連しているということが明らかになった。感覚論をめぐる三つの立場の対立に関していえば、このような読解は、「質料を伴わず」によって感覚から排除される物的変化は限定的であり、すべての物的変化の否定をここに読み取る必要はないということを示している。

(B) 感覚器官と感覚 ^{アイステーシス} < 24-8 > :

< 訳 > そして、感覚器官とは、第一に、そのような能力〔= 質料を伴わず感覚される形相を受容する能力〕がそのうちにあるものである。すると、〔感覚器官とその能力の〕両者は同じではあるが、〔両者の〕「〔それぞれにとってそれで〕あること」は異なる。なぜなら、感覚するもの〔= 感覚器官〕はある大きさをもつものだが、「感覚能力にとってそれであること」も ^{アイステーシス} 感覚も、大きさをもたないからである。〔「感覚能力にとってそれであること」^{アイステーシス} や ^{アイステーシス} 感覚〕は、それ〔= 感覚器官〕のある種の比であり能力だからである¹⁸。

< 注釈 > アリストテレスは今度は感覚器官 (^{アイステーシス} αἰσθητήριον) と ^{アイステーシス} 感覚 の関係を論じる。それによれば、感覚器官とは A-1 の冒頭で述べたような能力がそのうちにあるものである。さらに、^{アイステーシス} 感覚 そのものは、感覚器官において実現される特定の比であるとされる。^{アイステーシス} 感覚 が対象から作用を受けるといふ A-2 での発言は、大きさをもたない ^{アイステーシス} 感覚 のみに注目する限りでは理解できないが、それが大きさをもつ感覚器官において成り立っている

¹⁸ αἰσθητήριον δὲ πρῶτον ἐν ᾧ ἡ τοιαύτη δύναμις. ἔστι μὲν οὖν ταῦτόν, τὸ δ' εἶναι ἕτερον· μέγεθος μὲν γὰρ ἂν τι εἴη τὸ αἰσθανόμενον, οὐ μὴν τό γε αἰσθητικῶς εἶναι οὐδ' ἡ αἴσθησις μέγεθος ἔστω, ἀλλὰ λόγος τις καὶ δύναμις ἐκείνου.

ものであるということを考えれば、不可解ではないということになる。

(C) 感覚器官と感覚対象 < 28-32 > :

< 訳 > これら〔 = A-1 から B において述べられた事柄〕から、なぜ過剰な感覚対象が感覚器官を破壊するのかが明らかになる。なぜなら、もし感覚器官の運動変化^{キーンネーシス}が強すぎた場合は、その比（これが感^{アイステーシス}覚であったのだが）が解体するからである。例えば、〔弦楽器の〕弦が激しく打たれたときに、調和や音程が〔崩れてしまう〕ように¹⁹。

< 注釈 > 上記の考察から、感覚器官がなぜ過剰な感覚対象によって破壊されるのかが説明される。上の蜜蝋の例では、比はある対象において特定の性質が実現されるために必要となる、構成要素にもとづく何らかのあり方を指すための表現だった。アリストテレスがここで与えている楽器の例は、B でもすでに述べられていたように、感^{アイステーシス}覚を可能にしている感覚器官もまた、感覚対象と同じく特定の比、すなわち物的なあり方によって実現されているということを示している。過剰な感覚対象は、感覚器官にそれが物的に許容することのできない比を生じさせ、それを破壊する。

(D) 感覚対象による非感覚的变化 < 32-b3 > :

< 訳 > 〔また、同じく A-1 から B において述べられたことから、〕なぜ植物が、プシューケーのある部分をもち、触覚の対象から何らかの作用を受けるにもかかわらず（というのは、冷たくなったり熱くなったりするので）感覚しないのかも〔明らかになる〕。それを説明するものは、〔植物が〕中間的状态をもたず < 理由 I >、また感覚対象の形相を受容するような原理ももたないが < II >、しかし質料を伴って作用を受けるということ < III > である²⁰。

< 注釈 > A-1 から B まで述べられた事柄は、植物が感覚はしないが冷たくなったり熱くなったりするということをも説明する。その理由は、植物は「中間的状态をもたず < 理由 I >、また感覚対象の形相を受容するような原理をもたないが < II >、しかし質料を伴って作用を受けるということ < III >」である。この表現に対する私の解釈は本章第五節において展開することにする。現時点で押さえておくべきは、アリストテレスが、感覚対象による変化ではあるが感覚的变化を伴わないようなものの存在を認めているという点である。

¹⁹ φανερόν δ' ἐκ τούτων καὶ διὰ τί ποτε τῶν αἰσθητῶν αἱ ὑπερβολαὶ φθείρουσι τὰ αἰσθητήρια· ἐὰν γὰρ ἢ ἰσχυροτέρα τοῦ αἰσθητηρίου ἢ κίνησις, λύεται ὁ λόγος (τοῦτο δ' ἦν ἡ αἴσθησις), ὥσπερ καὶ ἡ συμφωνία καὶ ὁ τόνος κρουομένων σφόδρα τῶν χορδῶν·

²⁰ καὶ διὰ τί ποτε τὰ φυτὰ οὐκ αἰσθάνεται, ἔχοντά τι μόριον ψυχικὸν καὶ πάσχοντά τι ὑπὸ τῶν ἀπτῶν (καὶ γὰρ ψύχεται καὶ θερμαίνεται)· αἴτιον γὰρ τὸ μὴ ἔχειν μεσότητά, μηδὲ τοιαύτην ἀρχὴν οἷαν τὰ εἶδη δέχεσθαι τῶν αἰσθητῶν, ἀλλὰ πάσχειν μετὰ τῆς ὕλης.

(E-1) D に対する反論 < 3-12 > :

< 訳 > しかし、人は次のような疑問を提起するかも知れない。匂いを嗅ぐことができないものが、匂いによって何らかの作用を受けることや、見ることができないものが、色によって〔何らかの作用を受けること〕がありうるだろうか、と。これは〔他の感覚についても〕同様である。もし、「嗅覚の対象」が匂いであり、それ〔= 嗅覚の対象〕が何らかの作用を与えるとすれば、嗅覚という作用を匂いは与えるのである。よって、嗅ぐ能力をもたないものは、いかなるものも匂いによって作用を受けることができない（他の感覚についても、同じ議論が〔なりたつ〕）。また、〔感覚〕できるものの〔すべてが、それぞれの感覚に対応する能力をもつものとして（例えば、見ることのできるものとして）匂いによって作用を受けるの〕ではなく、「それ〔= 匂い〕を感覚しうるもの」として〔匂いから作用を受けるのである〕。同時に、〔対応する感覚能力をもつもののみが対応する感覚対象から作用を受けるということは、〕次の仕方でも明らかである。というのは、光や闇も、音も、匂いも物体には作用せず、〔物体が作用を受ける場合には、〕それ〔= 音や匂い〕がそのなかにあるものが〔作用を与えるからである〕。例えば、音を伴った空気が木材を切り裂くように²¹。

< 注釈 > アリストテレスは、D で認定されたと思われた事柄、すなわち、感覚対象が非感覚的变化を生じさせることがあるという見解に対して、今度は予想される反論を考察する。D で認められた見解は、匂いを嗅ぐ能力がないものが匂いによって作用を受けることはないように思われるという考察によって疑問に付される。アリストテレスは匂いの例から、感覚能力のない者が感覚対象によって作用を受けることはないという（D での見解を否定する）主張にいったんは同意する。この主張は、光や闇、音、匂いは物体にはまったく作用せず、それが内在するもの（例えば、音が内在する空気）のみが物体に作用することができるという観察によって補強される。

(E-2) E-1 に対する再反論 < 12-6 > :

< 訳 > しかし、〔嗅覚の対象などとは違って、〕触覚の対象と味は〔物体に〕作用する。もしそうでなければ、プシューケーをもたないものはいったい何から作用を受け、変化する

²¹ ἀπορήσειε δ' ἂν τις εἰ πάθοι ἄν τι ὑπ' ὁσμῆς τὸ ἀδύνατον ὀσφρανθῆναι, ἢ ὑπὸ χρώματος τὸ μὴ δυνάμενον ἰδεῖν· ὁμοίως δὲ καὶ ἐπὶ τῶν ἄλλων. εἰ δὲ τὸ ὀσφραντὸν ὁσμῆ, εἴ τι ποιεῖ, τὴν ὀσφρησιῶν ἢ ὁσμῆ ποιεῖ· ὥστε τῶν ἀδυνάτων ὀσφρανθῆναι οὐθὲν οἷόν τε πάσχειν ὑπ' ὁσμῆς (ὁ δ' αὐτὸς λόγος καὶ ἐπὶ τῶν ἄλλων)· οὐδὲ τῶν δυνατῶν, ἀλλ' ἢ αἰσθητικὸν ἕκαστον. ἅμα δὲ δῆλον καὶ οὕτως· οὔτε γὰρ φῶς καὶ σκότος οὔτε ψόφος οὔτε ὁσμῆ οὐδὲν ποιεῖ τὰ σώματα, ἀλλ' ἐν οἷς ἐστίν, οἷον ἀήρ ὁ μετὰ βροντῆς δίστησι τὸ ξύλον.

というのか？ よって、あれら〔=光と闇、匂い、音〕も作用を生むということになるのではないか？あるいは、すべての物体が匂いと音によって作用を受けうるのではなく、〔匂いと音によって〕作用を受けるのは、空気のような、無規定で、留まらないものなのではなからうか（というのも、〔空気は、〕何らかの作用を受けると、匂うからである）？²²

<注釈>

E-1 でいったん合意された、感覚しないものが感覚対象から作用を受けることはなく、よって感覚対象が非感覚的变化を生じさせることはないという主張に関して、今度は、触覚の対象と味に着目すれば再反論が成り立つとアリストテレスは述べる。Dにおける植物の例でもすでに指摘されていたように、熱や冷といったものは対応する感覚能力をもたないものにも作用するよう見えるからである。この相異なる二つの観察結果は、感覚能力をもたないものが感覚対象から作用を受ける場合と、作用を受けない場合の両方がともに認められるということを示す。アリストテレスは、匂いのようなものも、対応する感覚能力をもたない物体すべてにまったく作用を与えないわけではなく、少なくとも空気のようなものには作用を与えるということを確認することで、E-1での主張を全面的に受け入れる必要はないということを示す。

DからE-2までの議論は、A-1とA-2で与えられていた変化の分類を、以下のものへと変更することを要求する。Aにおいては、感覚的变化を伴うような「感覚対象によって生じる変化」のみが扱われていた。しかしDからE2までの議論は、感覚対象によって生じる変化に、感覚的变化を伴わない場合があるということを示したのである。

- 変化 X：感覚対象によって生じたのではない変化
- 変化 Y1：感覚対象によって生じた変化で、感覚的变化を伴わないもの
- 変化 Y2 (Aでの分類では変化 Y)：感覚対象によって生じた変化で、感覚的变化を伴うもの

(F) 議論の整理 < 16-8 > :

<訳> だとすれば〔=空気が匂うものになるといったことが「作用を受けること」に分類されるならば〕、嗅ぐことは、何らかの作用を受けること以外の何かなのだろうか？あるいは〔そのようなことはなく〕、嗅ぐことは〔「作用を受けること」の一種である変化 Y2

²² ἀλλὰ τὰ ἀπτά καὶ οἱ χυμοὶ ποιοῦσιν· εἰ γὰρ μή, ὑπὸ τίνος ἂν πάσχοι τὰ ἄψυχα καὶ ἀλλοιοῖτο; ἀρ' οὖν κάκεῖνα ἐμποιεῖ; ἢ οὐ πᾶν σῶμα παθητικὸν ὑπ' ὁσμῆς καὶ ψόφου, καὶ τὰ πάσχοντα ἀόριστα, καὶ οὐ μένει, οἷον ἀήρ (ὄζει γὰρ ὥσπερ παθῶν τι);

に相当する) 感覚することなのだが、空気は作用を受けるとすぐに感覚されうる〔空気〕になる〔=すなわち、変化 Y2 ではなく変化 Y1 を被る〕ということではなからうか²³。

<注釈>より細やかなものになった変化の分類をもとにアリストテレスは、匂うものになること(感覚の対象になること)と匂いを感じることの関係を推察する。E-2の注釈で与えられた分類にもとづけば、両者はともに、「感覚対象によって作用を受けること(πάσχειν)」である。しかし、後者(嗅ぐこと、変化 Y2)はそこに感覚的变化が伴われるという点で前者(匂う空気になること、変化 Y1)から区別される²⁴。

第4節 感覚対象の形相と「質料を伴わず」

本章第二節において私は、「形相の受容」の解釈において、スピリチュアリストとリテラリストの対立が特に際立っていると述べた。『デ・アニマ』第二巻第十二章において「形相の受容」という表現は二度用いられている。最初は「質料を伴わず感覚される形相を受容しうるもの」として^{アイステーシス} 感覚を規定する箇所であり(A-1)、次は植物の事例を説明するために「感覚対象の形相を受容するような原理をもたない」という点を論じている箇所である(D)。両者における「形相の受容」は、どちらも感覚することの可能性に関するものなので、表現は「感覚される形相の受容」と「感覚対象の形相の受容」といった形でやや異なるが、内容的には同一と考えることにする。

この「形相の受容」の中身をどのように理解するかでスピリチュアリストとリテラリストが対立しているということはそのとおりだが、両者は等しく上で述べた「質料を伴った形相の受容」と「質料を伴わない形相の受容」からなる対立図式に与しており、よってこの図式に関連するいくつかの前提を共有している。両者はともに、「感覚対象の形相(または、感覚される形相)」を、例えば熱(物的に熱くない気づかれる対象としての熱、もしくは、物的な熱)として、ここでの「感覚対象」を、熱が内在する対象(例えば、空気)として理解する。さらに、両者は等しく「質料を伴って」熱を受容するか、それとも「質料を伴わず」熱を受容するかが、感覚の成否において重要な意味をもつと考える。

[対立図式の共通前提]

²³ τί οὖν ἐστὶ τὸ ὀσμᾶσθαι παρὰ τὸ πάσχειν τι; ἢ τὸ μὲν ὀσμᾶσθαι [καὶ] αἰσθάνεσθαι, ὁ δ' ἀπὸ παθῶν ταχέως αἰσθητὸς γίνεται;

²⁴ 私は、Fにおいて論争となっている DA II.12, 424b17 の καὶ の真偽問題には立ち入らない(訳文においては、削除している)。καὶ を残すかそれとも削除するかといった点が、スピリチュアリスト、リテラリストまたは第三の立場のどちらが正しいかという問題を解決するとは思えない(Polansky 2007, 355n29)。結局問題となるのは、「感じる」といった言葉をどのように理解するかという点であるように思われる。

1. 「感覚対象の形相の受容」に関して、「感覚対象の形相」は（気づかれるものとしての、もしくは物的な）熱であり、「感覚対象」はこの熱が何らかの仕方で内在するところの対象である。
2. 形相の受容が、質料の受容を伴うかそれとも伴わないかは、感覚の成否にとって重要な意味をもつ。

まず共通前提1に対しては、アリストテレスが『デ・アニマ』第二巻第六章などにおいて、感覚対象を色や音、味をもつものとしてではなく、色や音、味そのものとして理解しているという点が問題になる²⁵。『デ・アニマ』第二巻第十二章においても、アリストテレスが音とそれが内在する空気を区別していることからすれば（DA II.12, 424b10-2）感覚対象とそれをもつものの区別は維持されているといえる。また、アリストテレスが、匂うものになった空気を「感覚される〔空気〕」（*αἰσθητός*）²⁶と呼び「感覚対象」（*αἰσθητόν*）とは呼ばないことから（DA II.12, 424b17-8）「感覚対象」が色や匂いといったものを厳密に指示するために用いられているということがわかる。これらにもとづいて「感覚対象の形相の受容」を文字通り「色や音の形相の受容」として読むならば、これがすなわちその色になることを意味するかは検討を要する問題となる。私はこの箇所ではアリストテレスが「感覚対象の形相」という特殊な表現で指しているものは、『デ・アニマ』第三巻第二章425b26-6a26でアリストテレスが区別している、可能態にある色（見られていない色）と現実態にある色（実際に見られている色）のうちの、後者のみだと考える²⁷。「感覚対象の形相」が、感覚対象の現実態を意味するものならば、「感覚対象の形相の受容」は端的に感覚対象の気づきを指す表現であるということになる。その場合、少なくともこの表現においては、例えば熱いものになるか否かということはもともと問題にされていないということになるだろう²⁸。

²⁵他に DA III.13, 435b7-9; SS 6, 445b4-6; 6, 445b21-2 も参照せよ。

²⁶この *αἰσθητός* は、名詞として用いられている *αἰσθητόν* とは違って、空気を形容するための形容詞として用いられている。

²⁷この個所での感覚対象の現実態と可能態の区別を実際に感覚されているか否かに求める点に関して、Hicks 1907, 437-40 において私の理解と親和的な解釈が提示されている。また、このような区別は、SS 3, 439a13-6; 6, 445b29-6a7 にも認めることができる。

²⁸このような理解に対して、アリストテレスが「感覚器官は質料を伴わず感覚対象を受容する」（DA III.2, 425b23-4; III.13, 435a21-4）とも述べていることから、「感覚対象」と「感覚対象の形相」の区別は維持できないとする反論がありうる。これに関して重要なのは、感覚対象の受容が問題となっている場面では、受容する主体が、A-1 で問題となった「感^{アイステシス}覚」から「感覚器官」へとすり替わっているという点である。よって、この箇所をもとに「感覚対象」と「感覚対象の形相」の区別を維持不可能とすることは、少なくとも表面的には許されない。他に「感覚対象の形相」や「感覚される形相」に類似した表現が見られる箇所としては、DA III.2, 427a8-9;

「感覚対象の形相の受容」がそれだけで感覚対象の気づきとしての感覚的变化が生じていることを示すのに十分だとすれば、従来の解釈（共通前提2）において感覚の成否を判定するに際して重要だとされてきた「質料を伴わず」の位置づけはどのように理解すべきなのだろうか。その役割は、すでにA-1に関する上の注釈で明らかにされていた。この限定を用いることによってアリストテレスは、熱をもつ物体の質料の吸収といったものが熱を感覚する際に生じる感覚的变化と無関係であるということのみを述べている。すなわち、質料の吸収がなされないからといって、必ず感覚が成立する（もしくは、吸収がなされないことが感覚が成立するための必要条件となる）ということのアリストテレスが明確に主張しているわけではない。質料の吸収が生じないということは、感覚が成立する際に認められる非常に明瞭な特徴ではあるが²⁹、（たとえその特徴が感覚が成立するすべての事例において認められるようなものだとしても）それは感覚の成立の可否を決めるようなものとして提示されているわけではない。感覚の成否は、あくまで「感覚対象の形相の受容」が生じるか否かによって決まるのである。

第5節 質料を伴って作用を受けること

前節で私は、まず感覚対象と感覚対象の形相の内実を厳密に定めることで対立図式の共通前提1を否定した。さらに私は、A-1に見られる「感覚される形相の受容（すなわち、感覚対象の形相の受容）」を解釈することから、質料を伴うか否かが感覚の成否にとって重要な意味をもつとする、対立図式の共通前提2をこの箇所が受け入れていると考える必要もないと主張した。アリストテレスがそこで述べているのは、感覚対象の形相の受容が生じたか否かが感覚の成否を決めるということと、感覚が成立するときには、質料の受容は生じないということのみである。しかし、これだけではまだ対立図式を『デ・アニマ』第二巻第十二章から消し去るには不十分である。対立図式を読み込むことのもう一つの動機と

III.8, 431b24-2a6 を挙げることができる。これらにおいて、^{アイステネシス}「感覚」ではなく感覚器官に記述が関連づけられることはない。

「感覚器官による感覚対象の受容」に関して、私はこの表現を感覚器官に生じる（質料の受容とは異なる）物的変化を指すものとして理解する。DA II.7, 418b4-7; II.7, 418b26-9 では、「感覚対象の受容」は媒体が色を受容するといった場面において用いられている。ここで感覚対象の受容によって生じるとされている媒体における変化が、物的なものか否かに関しては議論がある。私は、DA III.12, 434b29-5a10 においてアリストテレスが空気による色や形の受容を蜜蝋による印形の受容に例えて説明していること、また、SS 3, 439b1-10 において彼が「感覚対象の受容」を空気、水と物体（ $\sigma\omega\mu\alpha$ ）に等しく適用していることから、この表現が感覚対象によって生じる物的な変化を指すと理解する。A-1 における蜜蝋による印形の受容も、これらに類比的に理解することができる。

²⁹このことは、なぜ DA III.12, 434a29-30 においてアリストテレスが「形相の受容」として感覚を説明する際に、「質料を伴わず」という表現を再度用いているのかを説明する。

なった、Dにおける「質料を伴って作用を受ける」という表現に関しても、そこから共通前提2を読みとる必要はないということを示す必要があるからである³⁰。

まず、「質料を伴って作用を受ける」という表現が現れる箇所、アリストテレスが何を問い、どのように答えたのかを以下に改めて記しておこう。

- 問い：なぜ植物は、(1) 感覚はしないが、(2) 冷たくなったり熱くなったりするのか？³¹
- 答え1：なぜなら、植物は中間的状态をもたないからである。
- 答え2：なぜなら、植物は感覚対象の形相を受容するような原理をもたないからである。
- 答え3：なぜなら、植物は質料を伴って作用を受けるからである。

アリストテレスは、二つの要素からなる問いに対して、三つの答えを組み合わせることで応答している。まず説明されなければならない問いは、植物が(例えば匂いによって作用を受けない鉄製の箱がそうであるように)感覚しないという点である(問いの要素1)。次に問題となるのは、なぜ感覚能力をもたない植物が、それにもかかわらず感覚対象である熱や冷によって作用を受けるのかという点である(問いの要素2)³²。この二つの要素が組み合わさって一つの問いをなしているということは、上の整理で問われている事柄が、D

³⁰例えば Hicks 1907, 419 では、A-1 と D における「質料を伴わず感覚される形相を受容する」と「質料を伴って作用を受ける」の対比をもとに対立図式に与するということが明言されている。

³¹問いは、原文では「なぜ植物が、プシューケーのある部分をもち、触覚の対象から何らかの作用を受けるにもかかわらず(というのは、冷たくなったり熱くなったりするので) 感覚しないのか」という形で与えられており、本文での整理では「プシューケーのある部分をもつ」に相当する部分が削除されている。私は、これは問いを構成する真正の部分ではないと考える。問題となっているのは、植物が、感覚能力をもたないのに感覚対象から作用を受けるという点であり、プシューケーの部分に関する言及は、このことの奇妙さをさらに際立たせるために導入されたものにすぎない。議論の進展を追えば明らかになることだが、アリストテレスは D の植物の事例への応答として理解すべき E-1 において、直ちにプシューケーをまったくもたないものを考慮に入れており、E-2 における総括においても、プシューケーの一部をもつが感覚能力はもたないものと、プシューケーをもたず感覚能力ももたないものを区別しないような議論を展開している。

³²熱や冷といったものが植物に作用を及ぼすということがそもそもなぜ問題になるのかが、一見した限りでは理解しがたいかも知れない。熱が対象を熱くするという事は、ほとんど自明に思えるからである。これがなぜ問題なのかを理解するために注目すべきは、熱が感覚対象としてまず理解されているという点である。感覚対象が感覚を引き起こすということは、トリヴィアルに真である。しかし、感覚対象が本当にそれ以外の作用を引き起こしうるのは必ずしも自明ではない。その点を踏まえた上でアリストテレスの問題意識を改めて述べるなら、それは「(熱であれ冷であれ、とりあえずは) 感覚対象として規定されるところのものが、感覚能力をもたないもの(よって、感覚がそこに生じ得ないところのもの) に対して、感覚的变化以外の何らかの作用を与えるということがいったいどうして可能なのか」というものになる。本章での私の解釈に従えば、これに対してアリストテレスは、感覚対象である熱を比として理解し、さらに比によって生じる作用を二つに分けることによって、(まさに感覚対象としての熱が引き起こしている) 感覚的变化と(熱くするものとしての熱が引き起こす) そうでない変化を、両方とも感覚対象である熱に関係づけることを目指しているということになる。

に至るまで問題となってきたものからさらに発展したものであるということを示している。「感覚能力がないにもかかわらず感覚対象から作用を受ける」という特殊な事例は、「感覚対象による感覚的变化」と「感覚対象によらない非感覚的变化」のみを区別していた A-1 と A-2 での図式では処理することができないものである。D 以降の議論の流れもまた、本当に D で導入されたような特殊な事例が成立するのかをまず批判的に検討し (E-1)、その批判を受けて A-1 と 2 で与えられた図式を細分化する (E-2)、というものになっている。

D で新しい事例を導入するために与えられた問いと、それに対する三つの答えの内実をめぐるやや複雑な議論へと入る前に、私の解釈の見通しを簡潔に示しておきたい。まず答え 1 に関しては、これは後ほど改めて論じることにして考察から外す。問題は、問いの要素 1 及び 2 と答え 2 及び 3 の関係である。私とは違って D に対立図式を読み込む論者たちは、答え 2 及び 3 を、実質的には互いから切り離せないものとして考える。以下で私は、この解釈に対して文法的な観点と文脈的な観点から疑問を提起し、そのような提案を採用する必然性がないということを示す。代わりに私は、答え 2 と 3 を、互いから切り離すことのできる、それぞれ異なる基準のもとで与えられたものとして理解することが可能であり、それが文脈的にも文法的にも自然であると主張する。答え 2 と 3 を切り離すこのような解釈は、結果的に、対立図式の束縛から逃れることを可能にするだろう。

それでは、問いと答えの内実と関係をめぐる解釈に入ろう。後ほど本章の結論部で論じられる答え 1 はとりあえず措くとして、答え 2 と 3 を理解することから始めたい。まず、私が反対する対立図式に与する論者は、次のような仕方で問いと答えを理解する。この論者たちは、A-1 においてアリストテレスが、「感覚される形相の受容」が生じているか否かによってではなく、「質料を伴った形相の受容」と「質料を伴わない形相の受容」の区別によって感覚の成否を判断していたと主張する。彼らは、D における答えからもこれと同じ基準を読み取ることができると考えているので、ここでの問答は結果的には次のような仕方で理解されることになる。

- 問い：なぜ植物は、(1) 感覚はしないが、(2) 冷たくなったり熱くなったりするのか？
- 答え：なぜなら、植物は、感覚対象の形相をその質料を伴わずに受容するような原理をもたないからである (植物は、感覚対象の形相をその質料を伴って受容するのである)。

上の解釈を擁護する論者たちは、答え2においては「質料を伴って」に対応する要素が見当たらないということから、答え3がまさにこの点において答え2を補うと考え、実質的に両者は組み合わせさせて一つの基準を与えていると理解する。

前節で私は、すでに「質料を伴うか否か」を感覚成立の判定要素とみなす読み込みが不要であることを示した。感覚の成否は「形相の受容」が生じているか否かによるのであり、質料を伴うか否かによるのではない。とはいえ多くの注釈者たちは、答え3の「質料を伴って作用を受けること」が、答え2と3を緊密に結びつけることを可能にする「対象の形相と質料をともに受容すること」へと端的に変換可能であると考えているようである³³。以下で私は、文法的、また文脈的な理由を検討することから、このような変換を避けることができるかと主張するだろう。

まず文法的な観点から上の変換がなんら必然的なものではないということを示すためには、「質料を伴って作用を受けること」における「質料を伴って (*μετὰ τῆς ὕλης*)」が副詞的に使われているのか、それとも形容詞的に使われているのかを考察することから始める必要がある。

1. 仮に「質料を伴って」が形容詞的に使われた場合（「質料を伴わない形相」）、
「質料を伴って作用を受ける」(*πάσχειν μετὰ τῆς ὕλης*)は、「質料を伴った形相によって作用を受ける」(例えば、*πάσχειν ὑπὸ τοῦ εἶδου τοῦ μετὰ τῆς ὕλης* または *πάσχειν ὑπὸ τοῦ μετὰ τῆς ὕλης εἶδου*)を短くしたものであるということになる(DA II.12の他の部分でアリストテレスは、作用を与えるものを*ὑπό*で示している)。これは不可能ではないかも知れないが、「形相によって」(*ὑπὸ τοῦ εἶδου*)の省略は、「質料を伴って作用を受ける」の一節を、大幅な推測を必要とするような難解なものにしてしまう。

2. 仮にこれが副詞的に用いられたとする場合、原文を補う形で推測することなくとも、「質料を伴って (*μετά*) 作用を受ける」は「手を用いて (*μετά*) 食べる」と類比的に理解することができる。

どちらの読解がギリシア語としてより妥当かをここで判定することはしないが、私は後者の読みを取る。ただし、後者の副詞的解釈をとったからといって、直ちに「対象の形相と

³³例えば、Hicks 1907, 419 や Ross 1961, 265-6 及び Sorabji 1992, 217 など。

質料の両者によって作用を受ける」という読解が否定されるわけではない。形容詞的解釈ほど明瞭ではないが、全体を「対象の質料を伴って（対象の形相から）作用を受ける」といった仕方で理解することも不可能ではなく、その限りでは、結果的には形容詞的解釈と同じことが述べられていると考える余地が残されるからである。しかし、副詞的解釈はこれから逃れることを可能にするもう一つの読み、すなわち、ピロポノス（Philoponus 1897, 440-1; 2005, 133-4）が与えたような、「質料を伴って」を「植物自らの質料を伴って」と理解する読みの可能性を与えてくれる（このような理解は、Burnyeat 1992, 24 と Polansky 2007, 353n27 にも見られる）³⁴。「植物が自らの質料を伴って作用を受けること」が文法的に「植物が対象の形相と質料をともに受容すること」を含意すると考えることの必然性は、低いと思われる。

文法的な観点から離れ、文脈的な観点から答え2と3が実質的には一つの基準のみを与えんとする主張を検討してみよう。アリストテレスがDでなさなければならないのは、「感覚対象による感覚的变化」と「感覚対象によらない非感覚的变化」を区別したA-1や2では検討されることがなかった、「感覚能力を持たないものが感覚対象によって作用を受けること」、すなわち「感覚対象による非感覚的变化」をいかに説明するかである。対立図式を読み込む論者に従って、答え2と3が一つの基準（「質料を伴って形相を受容するか否か」）のみを与えたと考えた場合、彼らの解釈によればそれはすでにA-1と2において感覚の成否を区別するために用いられていたものでもあるので、結果的に、Dでのより複雑な事例に対応する際に、アリストテレスは何一つ新しい基準を与えていないということが帰結する。私は、これは不自然であると考えます。

対立図式を読み込むために答え2と3を密接に関連づける解釈に対して、私は、答え2は問いの要素1のみに、答え3は問いの要素2のみに厳密に対応するし、それぞれ別の規準を用いて導入されたものとして理解されなければならないと考える。まず答え2に関しては、前節で述べたように「感覚対象の形相」を感覚対象の現実態として理解すれば、ここでの「感覚対象の形相を受容するような原理」の有無は感覚の成否と直結する。答え3の

³⁴この箇所のギリシア語の読解に関しては、Panagiotou 1975 と、それに対する応答として書かれた Andersen 1976 に最も多くを負っている。なお、パーニエトは、*μετὰ τῆς ὕλης* に関するピロポノスの理解を採用しているにもかかわらず、結果的には「質料を伴って作用を受ける」という一節が対象の質料と形相の両者を受容するということを意味し、両者がともに受容されるということが感覚の失敗を説明すると考えているようである（本章第二節での引用を参照せよ）。Polansky 2007, 352-3 ではよりニュアンスに配慮した解釈が与えられているように見えるが、彼もまた私の解釈とは違って、植物が感覚対象の形相から何らかの仕方で作用を受けるということがこの一節に含意されていると考えているようである（例えば、そこでポランスキーは「植物は、それに作用するものの形相を再質料化（reenmatter）するが、動物の感覚は〔中略〕感覚される形相を再質料化しない」と述べている）。

ほうは問いの要素2に対応するということになるのだが、そもそも「植物が自らの質料を伴って作用を受けること」は一体何を意味しているのだろうか。対立図式を擁護する論者たちは、ここでの「作用を受けること」を、直ちに「受容すること」に変換可能なものとしていた。これに対して私が注目するのは、A-1と2において、「受容」と「作用を受けること」が厳密に区別されていたという事実である。A-1と2においては、質料を吸収することを意味する質料の受容と区別されるような形で、「比に従って感覚対象によって作用を受ける」ことが理解されていた。後者は感覚と関連するが、前者は無関係であるとされる。

私は、Dにおける「植物が自らの質料を伴って作用を受けること」を、A-1での「受容」と関連づけず、A-2での「比に従って感覚対象によって作用を受けること」を意味するものとして理解する。A-2での作用は感覚対象による作用であり、これはDでの問いの要素2である「冷たくなったり熱くなったりする」こととまさに対応する。しかし、この解釈には、「感覚対象によって作用を受ける」がまさにA-2で述べられていたということから、直ちに次のような批判が提起される。——A-2において、「感覚対象によって作用を受ける」ことは、感覚が成立する場合に生じるものとされていた。それは、まさに感^{アイステーシス}覚が被るものであるとされていたのである。これに対して、答え3における「質料を伴って作用を受ける」は植物に適用される表現であり、植物は感覚しない。となると、A-2で論じられていた「感覚対象によって作用を受ける」をDでの答え3とつなげることはできないのではないか。

私の応答は次のようなものである。A-2において、「感覚対象によって作用を受けること」は確かに感^{アイステーシス}覚と関係づけられている。しかし、このことから、「感覚対象によって作用を受けること」が感覚の成立と必然的な関係をもつと考える必要はない。なぜなら、感覚の成立を必要十分な意味で規定するのは、あくまで「感覚対象の形相の受容」だからである。感覚が生じるときには「感覚対象の形相の受容」と「感覚対象によって作用を受けること」がともに認められる。だからといって、「感覚対象の形相の受容」は認められないが「感覚対象によって作用を受けること」は認められるという事例があることには、何の矛盾も問題もない³⁵。むしろ、植物の事例を説明する答え2と3は、両者を字義通りに合

³⁵実際には、これに相当するような例は、A-2で想定されていた「蜜蝋が印形によって作用を受ける」の事例によってすでに与えられていたといえる（感覚器官の破壊も実は同じように理解できる）。ただし、A-2においては、蜜蝋の例は感^{アイステーシス}覚の例を理解するための補助的な役割しか担っていなかったため、植物の例のように十分な注目を浴びることがなかったということになる。

実は植物の例に該当するものがすでに与えられていたということは、Cまでは明白に論じられていなかった特殊な事例がDにおいて導入されているにもかかわらず、「これらから」(ἐκ τούτων; DA II.12, 424a28)、すなわち、A-1からBまでに論じられたことから、植物の事例が説明されるというアリストテレスによるDの導入部の

わせれば、まさにそのような例があるということを示しているのである³⁶。

今までこのような解釈が提起されてこなかった理由の一つは、「感覚対象」と「感覚対象の形相（感覚される形相）」の内実を見誤ることによって、「感覚対象によって作用を受けること」と「感覚される形相を受容すること」を切り離すことができなかつたからである。両者を区別せず、感覚対象と感覚される形相を同じとみなせば、それから作用を受けることも、それを受容することも同じことを意味すると考えることが自然に見えてしまうだろう³⁷。

以上のような私の解釈に従った場合、A-1のみならずDにおいても、「質料を伴って」と「質料を伴わず」が感覚の成否に関する対立図式を提供していると考えする必要はなくなる³⁸。「質料を伴って作用を受ける」という答え3は、答え2とは違って感覚の成否を説明するものではないのである。このようにして、従来『デ・アニマ』第二巻第十二章を解釈するに際して前提されてきた、感覚の成否と関連して重要な意味をもつものとして「質料を伴う」と「質料を伴わない」を対立させる図式が、回避しうるものであるということが示された。感覚しない蜜蝋が鉄を吸収せず指輪によって刻印されるという変化を説明するために「感覚対象をもつもの（例えば、指輪）の質料を受容を伴わず、しかし作用を受けるもの（例えば、蜜蝋）の質料を伴って感覚対象の比に従って作用を受ける」と述べることには何の矛盾もなく、そこに「質料を伴わず」と「質料を伴って」から読み取るべき対比は存在しない³⁹。

言葉を理解可能にする。実際には、A-1とA-2で導入されている要素（形相の受容、質料の受容、比に従った感覚対象による作用）は、Dにおける植物の事例を説明するのに十分なものである。必要だったのは、形相の受容と比に従った変化を切り離すことが可能であるということを示すことだったのであり、これがまさにDにおいてなされたのである。

³⁶ 答え3が「質料を伴って」というものになっているのに対して、答え2が「形相のみ」とはなっていないという点も、両者が実質的に一つの規準のみを提示しているとする理解に加担しない解釈を支持するだろう。

³⁷ 例えば、Sorabji 1992, 211-2において、「受容する」と「作用を受ける」を区別しない旨が述べられているが、これも感覚対象と感覚対象の形相を区別していれば避けられた主張であると思われる。

³⁸ Dにおける「質料を伴って」を私が採用した読みに従って理解した場合、A-1とDで見られる「質料」が、それぞれ「作用するものの質料」と「作用を受けるものの質料」という異なるものを指しているという点が違和感を残すかも知れない。しかし、そもそも「質料を伴って」や「質料を伴わず」といった表現は、常に固定した意味をもっているものではない（例えば、DA III.8, 432a9-10; 本論文第七章第四節も参照）。仮に両者が同じ意味をもたなければならないということを認めた場合も、Dの *μετὰ τῆς ὕλης* に関する副詞的な読解を受け入れるならば、私の解釈に親和的な読みを提示することはできる。*μετὰ* は「～によって」や「～を用いて」の意味をもつことがあり（Liddell et al. 1996, 946, A-III-2）その場合この節は全体として「植物は作用する対象の質料によって作用を受ける」という意味になる。この場合も、「作用するものの質料と形相の両者が作用する、または受容される」といったことを読み込む必然性はないといえる。私は、植物の質料において変化が生じているということにより明確に表しているという点で、本文で述べられているような解釈を採用する（なお、Polansky 2007, 353n27も参照）。

³⁹ 本章で論じられていないが論理的には想定できる可能性としては、「作用する対象の質料を受容するとともにその形相を受容する」といったものを挙げることもできるかも知れない。私の理解に従えば、これが意味するところは「熱い物質を吸収することによって熱に気づく」といったものになるだろう。私には、こういった奇妙な事例にアリストテレスがここで興味を抱いているとは思えない。

これまでの議論のまとめとして、アリストテレスが『デ・アニマ』第二巻第十二章で提示している変化の分類を、以下のように示そう。

- 変化 X：感覚対象によって生じたのではない変化（鉄や金、青銅の吸収（A-1）、音が内在する空気による木の破壊（E-1））
- 変化 Y1：感覚対象の比に従って生じた変化（蜜蝋による印形の受容（A-1）、感覚対象の過剰による感覚器官の破壊（C）、植物が熱くなること（D）、空気が匂うものになること（E-2））
- 変化 Y2：感覚対象の比に従って生じた変化 + 感覚対象の形相（すなわち、感覚される形相）の受容

変化	非感覚的（物的）		感覚的（気づき）
	感覚対象によらない (e.g., δέχεσθαι τῆς ὕλης)	感覚対象による (πάσχειν ὑπὸ τοῦ αἰσθητοῦ κατὰ τὸν λόγον μετὰ τῆς ὕλης)	形相の受容 (δέχεσθαι τὰ εἶδη τῶν αἰσθητῶν)
X	O	-	-
Y1	-	O	-
Y2	-	O	O

上の表では、変化の分類のために二つの規準が用いられている。まず一つは、ある変化が感覚対象によって生じたものか否かという規準である（A-1 と 2）。これによって、変化 X と変化 Y が区別される。さらに変化 Y に関しては、その変化が感覚対象の形相の受容を含むか否かという規準によって、変化 Y1 と Y2 が区別される（D）。私はこの表が、質料を伴って形相を受容するか否かという一つの規準のみに従って変化を分類する対立図式とは異なって、『デ・アニマ』第二巻第十二章で見られる様々な変化の例をうまく分類することを可能にしていると考える。

第6節 第三の立場と形相の位置づけ

以上のような形で対立図式は崩れ去ったが、一つの重要な課題が依然として残っている。それは、感覚的变化に対応する物的変化はあるのか、また、それがあつた場合、その内実は何であるのかを、私の提示した新しい分類に即して明らかにするというものである。まず

感覚的变化に対応する物的変化の有無については、上の表において「感覚対象による変化」が変化 Y1 と Y2 に共通しているという点を見る必要がある。変化 Y1 において、この変化は熱くなるといった物的変化を明らかに意味している。その場合、感覚が生じている変化である変化 Y2 においても、物的変化の存在は否定されていないということになるだろう。よって、私の提示する分類にもとづけば、スピリチュアリストの立場は否定されることになる。しかし、「感覚対象によって、その比に従って作用を受けること」が、感覚が生じる場合と生じない場合の両方に等しく認められるということは、第三の立場を擁護するという企てに対して深刻な問題を引き起こす。熱を感覚する際に生じる物的変化も、熱くなる時に生じる物的変化も、等しく「その比に従って熱いものによって作用を受けること」であるならば、両者において生じている物的変化は、同じ「熱くなること」であるということになってしまうのではないだろうか。その場合、「形相の受容」といったテキストに見られる言い回しの理解においては異なれど、実質的にはリテラリストの主張に等しいものが私の読解からも導かれてしまう。

これに対抗し、本論が擁護する第三の立場を守るためには、D における答え 1 (植物は中間的状態をもたない) と B における比としての^{アイステーシス}感覚理解を再度思い起こす必要がある。中間的状態に関する他のアリストテレスの論述からは、それが (D における答え 2 で説明されていた原理がそうであったように) 感覚の成否に関わるものであるということが見て取れる⁴⁰。ここで中間的状態の詳細を検討する余裕はないが、次の幾つかの点は指摘することができる。まず、中間的状態は感覚器官において実現されている何らかの物的状態を指すものとして理解できる。また、感覚能力をもつか否かにかかわらずすべての物的対象は何らかの物的状態をもつため、中間的状態は物的対象がもちうる物的状態のすべてを指すわけではなく、感覚を可能にするような特定の物的状態を指すものでなければならない。

ここからまず帰結することは、感覚能力をもつものと感覚能力をもたないものの物的状態がそれぞれ異なりうるということである。その場合、感覚において生じる「比に従った作用」の内実も、感覚対象の比と作用を受けるものの比の組み合わせによって異なりうるということになる。だとすれば、変化 Y2 での「比に従った変化」の内実が、変化 Y1 のそれと同一でなければならないとすべき必然性はなくなる⁴¹。このようにして、リテラリ

⁴⁰ 中間的状態は、感覚能力をもつものともたないものを区別する場面において論じられる (DA II.11, 424a2-6; III.7, 431a10-1; III.13, 435a21-b3)。中間的状態が感覚と密接に関連するという点に関する最近の論考として、Ducharme 2014 など。

⁴¹ 感覚対象によって被作用者が具体的にどのような物的変化を被るのかに関するアリストテレスの記述は、非常に複雑である。両者の物的状態の相互関係が重要であるということを含意するように思われる箇所はいくつか

ストの立場もまた排除される。なお、このような主張に対して、「では第三の立場に立てば感覚的变化に対応する物的変化はどういうものなのか」という疑問が直ちに提起されるかもしれない。私は、『デ・アニマ』第二巻第十二章でアリストテレスがこれを明らかにするような手がかりを与えていないと考える。ただし、物的変化の内実が規定されていないということを、何らかの欠如として否定的な意味でのみ捉える必要はない。感覚器官において生じる物的変化に関する言及は、いわば感覚の質料的説明であり、本論文第二章と第三章で明らかになった質料的説明の理論の性格からすれば、これは（様々な仕方で探求されるだろうが）そもそも確定的な形で与えられてはならないものである。アリストテレスが『デ・アニマ』第二巻第十二章で物的変化の探求として達成したことは、感覚対象によって生じる物的変化が存在しないわけではないということと、感覚対象によって生じる物的変化が一種類ではないということを示すことであるが、これらは、感覚する際に感覚対象によって生じる変化をめぐる着実に議論が前進していることを示す。

次の章へと進むために、以上のような形でアリストテレスの感覚論をめぐる論争に参加したことが、形相を理解するという課題に対してどのような意義をもつのかを確認しておこう。実は、本章で示された三つの立場である、リテラリストとスピリチュアリスト、第三の立場が意見を異にするのは、感覚的变化に対応する物的変化の有無（及びその内実）のみではなく、形相の役割の理解でもある。本章で私が突き崩した対立図式に与するリテラリストは、質料抜きで、すなわちそれ単独で物的な生成変化を引き起こすものとして形相を捉えていた。彼らの解釈によれば、赤い林檎の形相である赤を受容する者は、まさにその形相の受容によって物的な仕方で字義通り赤くなる。これに対して、同じく対立図式に与するスピリチュアリストは、形相に物的な生成変化を引き起こす力を与えることはしないが、代わりにそれに単独で感覚的变化を引き起こす力を与えた⁴²。これら二つの立場は、形相がもつ役割の内実に関しては対立しているが、形相がそれ単独として何らかの生成変

あるが、そこで生じている物的変化が具体的にどのようなものであるかは判別しづらい（*Insom.* 2, 460b11-6; 3; *PA* II.2, 648b11-7 など）。*DA* II.12 においてアリストテレスが用いる *πάσχειν ὑπό* という表現が、作用するものは特定するが、作用の中身（比に従った作用が、具体的にどのような変化なのか）を規定してはいないということにも注意すべきである。なお、この点に関しては、この章でのアリストテレスが、そもそも物的変化を確定的な仕方で規定することを目指していたのかということが問題にされなければならない。これについては、本文でさらに述べる。

⁴²二つの立場が形相の役割の解釈に関してこのような仕方で対立しているということは、形相と質料が心的と物的に対応するか否かという点においても解釈者の間で対立があるということを示す。ソラブジを代表とするリテラリストたちが形相を物的な変化と関連するものとして理解するのに対して、パーニェトらスピリチュアリストたちは物的な変化とは関係しないものとしてそれを理解すべきであると主張しているからである。質料と形相の対比と、物的と心的の対比との関係については、本論文第一章と結びも参照。

化を引き起こしうるということを認めるという点では一致している。説明理論を構成するものとして形相概念を理解することを目指す私にとって、リテラリストとスピリチュアリストが与えるような、それ単独で何らかの生成変化を引き起こすことができるものとして形相を捉える解釈は退ける必要があるものである。

質料の場合、それを説明理論を構成するものとして理解すべきであるとする主張の強力な根拠の一つとなったのは、質料が（厳密に言えば）「何か（例えば、G）の質料」としてのみ把握可能であるということ、すなわち、何かとの関係なしに把握されることができないようなものであるという点であった。これに対して、「赤そのもの」として理解された場合の形相はどうだろうか？「赤そのもの」は、必ず「それが今赤くしているもの」との関連のもとで把握される必要をもたない。赤い林檎の「赤そのもの」がそれを受容する感覚器官といったものを（物的な仕方であれ、霊的な仕方であれ）赤くするとき、それはそれ自体でその変化を引き起こしうるものとして、すなわち、「赤い林檎」と関連を持たない形で同定されうるものとして理解されるのである。また、「赤そのもの」は、それを受容することによって「これから赤くなるだろうもの」とも必然的な関係をもたない。それを受容する感覚器官といったものが存在しなくても、「赤そのもの」は存在するし、よって同定もされうるだろう。かりに、赤い林檎なしには「赤そのもの」が存在しえないということがあったとしても、それはいわば「赤そのもの」が赤い林檎に寄生しているということの意味するに過ぎず、「赤そのもの」は、建築家が人間をその質料として必要とするのと同じ仕方赤い林檎を必要としているわけではない。このような形相理解のもとでは、形相は、何かとの関連のもとでのみ理解可能なものであるわけではないということになり、よって、それが「何かを説明すること」をその本質的な役割としてもつこともないということになる。

リテラリストやスピリチュアリストとは違って第三の立場は、形相の受容と比に従った質料的变化との堅い結びつきを強調する点で、何かとの関連のもとでのみ理解可能なものとして形相を捉える可能性を残す。問題は、このように第三の立場に与することを明言した場合も、結局のところ形相とは何であるのかということが直ちに明らかになるわけではないという点である。このような困難が生じる理由は様々だが、そのうちの一つは、私が提示した第三の立場が、リテラリストやスピリチュアリストのように明確な仕方形相の何であるかを明らかにしていないという点にある。「物的な赤そのもの」や「霊的な赤そのもの」という仕方（現代の人々にとっていかに不可解なものに見えようと）なんとか形相を規定しようとする二つの立場に対して、第三の立場は確かに形相の理解に関して明確

なものを与えておらず、そこには曖昧さが残っている。次章での私の目的は、まさにこのような批判に応えて、何かを説明するものとして形相を理解するという積極的な方針を与え、その内実を示すこと、さらに、そこで示された内実にもとづいて、本論で問題となった感覚における形相に関して、より積極的な仕方でリテラリストやスピリチュアリストが提示する理解を退けるような解釈を与えることである。

第6章 形相的説明と生成変化

前章において私は、アリストテレスの感覚論に関する三つの立場からなる論争に参入した上で、その論争が形相の位置づけをどのように理解するかをめぐるものでもあるということを確認した。私が否定した二つの立場によれば、形相はそれ自体として熱くなることや熱さを感じることといった変化を引き起こすとされる。これら二つの立場は、形相が引き起こすとされる変化の内実に関しては意見を異にするが、どちらも形相、例えば「(物的、または靈的な)赤そのもの」を、「それが今赤くしているところのもの」や、それを受容することによって「これから赤くなるだろうもの」との関連抜きにも理解しうるものとして考えるという点では一致している。これは、形相を常に「何かの形相」として理解される必要があるものとし、それをもとに「対象となるものを説明する」ことをその本質的な役割とみなすことを目指す本論文の方向性を真っ向から否定するものである。

前章で私は、形相の位置づけの理解の是非を直接論じるかわりに、感覚論としての妥当性やテキストの読解としての整合性に即して従来の二つの立場を退けた。従来の二つの立場のかわりに私が擁護した第三の立場は、形相をそれ自体で何らかの生成変化を引き起こす能力をもつものとしては考えない。すなわち、この立場は、ある対象との関連のもとでのみ把握されうるものとして形相を提示する方向性を初めから否定するものではないので、何かを説明するものとして形相を理解する可能性を残してくれるのである。しかし、このことは、形相を説明理論を構成するものとして理解するという主張の内実と妥当性が直ちに確保されたことを意味するわけではない。第三の立場を擁護することで与えられたそのような可能性にもとづいて、説明理論を構成するものとして形相を理解する解釈の内実と妥当性を明らかにするという課題は、まさにこれからはなされなければならない。この課題は、より簡潔には次のような仕方でも述べ直すことができるだろう。——質料から切り離された「物的な赤そのもの」や「靈的な赤そのもの」という形相理解が奇妙であり、感覚が論じられているアリストテレスのテキストからも必ずしもそのようなものへのコミットメントを読み取る必要がないということを取りあえず受け入れるとしてみよう。では「感覚対象による作用を受けながら、感覚対象の形相を受容すること」における形相の受容とはいったい何なのか？

私はこの問いに、本章の結論部において立ち戻ることになる。

第1節 導入

『自然学』第二巻第三章においてアリストテレスは、形相、質料、始動因、目的因からなる四種のアイティアー¹の概要を与えるに際して、それらが生成と消滅及びその他すべての自然的な転化、すなわち生成変化と関係しているということを明らかにしている（*Phys.* II.3, 194b20-3）。四種のアイティアーのそれぞれがどのような仕方で生成変化と関わるのかに関しては、多くの先行研究がこの問題を扱ったにもかかわらず、未だに不明な点が多い²。質料と始動因に関しては、アリストテレスが挙げている例に従って、例えばそこから像が生成するところのものである青銅を質料として、像の生成のための運動変化^{キネーシス}がそこから始まるところのものである彫刻家を始動因として考えれば、両者がどのような仕方で像の生成変化に関連するのかは、ほぼ直観的に理解できるように思われる³。像でないものが像になるという生成変化において、「まだ像ではないが像になりうるもの」として）これから像になるものである青銅と、青銅を実際に加工して像を作り出すものとしての彫像家の存在が必要であるということは、自明であるように思われるからである。

青銅と彫刻家の場合とは違って、像の目的因と像の形相が像の生成変化といかに関連しているのかを理解することははるかに難しい。像を作る目的を述べること自体は、さほど難しくない。像は、鑑賞や記念といった様々な目的のために制作される。問題は、これらを像の生成を引き起こすものとして青銅や彫刻家と並べたときに生じる。青銅や彫刻家が像の生成に先立つ形で存在するのに対して、像の目的は像の生成が完了した時点において初めて実現される（*APo.* II.11, 94b23-6）。像の生成に先立つ形で存在するものが「像でないものが像であるものになる」という像の生成に影響を及ぼしうることは明らかだが、まだ実現されていない、すなわちまだ存在しないものである目的が自らが存在する前の出来

¹ここからは、アイティアーを説明として理解する観点が形相に適用できるかがまさに問題になるので、説明と直ちに訳すことはせず、アイティアーという音訳を用いる。

²議論の現状に関しては、例えば Stein 2011b を参照。本論と特に関係があるのは、形相を何らかの生成変化を引き起こすものとして理解するか、それともそれを説明するものとして理解するかという対立である。何かがアイティアーと呼ばれるとき、それが生成変化を引き起こすものとして想定されているのかそれとも説明するものとして想定されているのかという問い自体は、プラトンの『パイドン』におけるイデア原因論にまで遡る。これに関しては Vlastos 1969 を、『パイドン』をアリストテレスがどう理解したかに関しては Annas 1982 を参照。また、アリストテレスが何かを引き起こすという役割と何かを説明するという役割を形相概念に同時に課していると指摘し、結果的に形相概念は破綻しているという悲観的な見通しを与えるものとしては、Bostock 2006 を挙げることができる。

³像の質料をこのような仕方で像の生成との関連を抜きにそのアイデンティティをもつものとして同定することは、本論文第二章から第四章までの議論からすれば限定的にのみ認められる。よって、像の質料を端的に青銅とすることには、実は様々な但し書きが付されなければならない。この点は、とりあえずここでは問わないでおく。

事である像の生成に影響を及ぼすと考えることは、時空を超えて生成変化に関与する力を想定するという点でオカルトに見える⁴。

形相がいかに生成変化と関わりうるのかもまた自明ではない。『自然学』第二巻第三章で形相を生成変化の四種のアイディアの一つとして提示する際に、アリストテレスは形相とは次のようなものであると述べる。

1. 「〔それで〕あるとはそもそもどういうことだったのか〔=本質〕」の説明規定
2. その〔=その説明規定に該当するものの〕類
(例えば、オクターヴの〔形相〕は「〔特定の比である〕一に対する二」であり、一般的には「数」である)
及び、
3. その説明規定に含まれる部分

(*Phys.* II.3, 194b26-9)⁵

この中で基本となるのは明らかに1なので、過度な単純化を恐れずにとりあえず形相は説明規定であるという主張を字義通り受け止めてみよう。その場合、像の形相は像の本質を示す「像であるとはそもそもどういうことだったのか」という問いへの答えとして表現されるものであるということになる。第一に問われることになるのは、文（もしくはそれを縮約したものとしての、句や語）の形で与えられる本質の説明規定を青銅や彫刻家といったものと並べることへの違和感である。青銅や彫刻家は、ある時空上の点にその位置を特定できるような物理的な存在者であり、時空上に存在するとは思われない説明規定とはまったく存在論的な身分を異にするように思われる。次に問題になるのは、像の本質の説明規定が、一体どのようにして「像でないものが像であるものになる」という生成変化に貢献

⁴彫刻家は像の目的を知るものであるという点から、像の目的が像の生成以前にも存在すると主張することは可能である。だとすれば、像の目的が像の生成に関与すると述べることは、自然に聞こえる。しかし、その場合も、像の目的がいかにして像の生成に作用するのかを具体的に説明しようとする問題が生じる。例えば、像の目的を彫刻家の脳状態に付随するようなものとして理解すれば、実際に彫刻家の彫刻活動を引き起こすのは脳状態であるということになるので、目的因は（真の）始動因に解消されてしまい独自の位置を失う。また、像の目的を、結果として生じるだろう像や脳状態から切り離されてそれ自体で存在しうるものとして考える場合、これが形而上学的に健全な立場なのかが問題になるだろう。

上の指摘からも分かるように、目的因をどのように位置づけるかはアリストテレス解釈の大きな争点の一つである。解釈の代表的な例に、目的因を特殊な始動因として理解することを目指す Gotthelf 1976 や、目的因は見せかけであり真の原因の発見を助ける道具にすぎないと考える Wieland 1975 など挙げることができる。また、これらとは異なる見解として、目的因を技術者などがもつ目的への感受性から理解することを試みる Charles 2012 などがある。

⁵ ἄλλον δὲ τὸ εἶδος καὶ τὸ παράδειγμα, τοῦτο δ' ἐστὶν ὁ λόγος ὁ τοῦ τί ἦν εἶναι καὶ τὰ τούτου γένη (οἶον τοῦ διὰ πασῶν τὰ δύο πρὸς ἓν, καὶ ὅλως ὁ ἀριθμὸς) καὶ τὰ μέρη τὰ ἐν τῷ λόγῳ.

するのかという点である。彫刻家が青銅を加工してゆく過程は、特定の生成が生じているということを知りやすく示してくれる。そこで彫刻家は、手や道具を使って青銅の形を徐々に変えてゆく。しかし、説明規定は「像になりうるもの」にも「像にするもの」にも見えない⁶。

このように、生成変化における形相の役割が不明であるという事態は、形相は単独で何らかの生成変化を引き起こしうるものなのか（また、引き起こす場合、その内実はどのようなものなのか）をめぐる議論が、感覚といった事例に限られないアリストテレスのアイティアー理解の根幹に立ち戻って問われるべきものであるということを示している。前章で与えられた、質料から切り離された形相がそれ単独で物的または感覚的な変化を引き起こしたと考えるべきか、それとも（私が支持する第三の立場にもとづいて）形相がそれ単独で何かを引き起こすといった発想を拒否するべきか（よって、それ自体質料と形相の結合体である「赤いもの」といったものが何かを引き起こしたと理解すべきか）という問いに対する答えは、生成変化における形相の役割をどのように理解するかに依存するからである。

本章において私は、形相とは何か、生成変化においてそれはどのような役割を担っているのかという点が、まったくもって明確ではないという事実を受け入れることから議論を始める。上で提起されたいくつかの問題のうち、青銅や彫刻家といった時空上にその位置が特定されうる存在者と、説明規定のような時空上にその位置を特定できないものが等しく時空上の出来事である生成変化のアイティアーとして並置されているというものに対して今までなされてきた代表的な対処法は、形相を単なる説明規定以上のものとして捉えることである。例えば、神や死後にも残る霊魂といったものに準じて、リテラリストやスピリチュアリストのように質料との関係を必要とせず、それ自体で何かを引き起こす「形相そのもの」の存在を自然界においても認めることが、その一例である⁷。私はこのような解釈に反対するが、本章の目的は霊魂といった神秘的な対象に準じて形相を理解することが不可能であるということを示すことではない。私が目標とするのは、質料形相論を説明理

⁶ いうまでもなく、アリストテレスは形相を始動因や質料と同じ意味でアイティアーとして考えているわけではない。形相と始動因（及び、目的因）が互いに重なる事例は幾度も考慮されるが、四種のアイティアーは一応概念的に相互に区別されうるものとして提示されている。問題は、質料や始動因と同じでないということは認めた上で、では形相がどのような独自の貢献を生成変化においてなしているのかを説明することが、限りなく難しいという点にある。

⁷ 感覚論とは異なる文脈から形相がそれ単独で何らかの効力をもつとする主張を擁護する解釈として、金子2007を挙げることができる。なお、本章は生成変化を引き起こすものとしてではなく、それを説明するものとして形相を理解することを目指すものだが、何かを引き起こすものとしての形相という発想と質料形相論がまったく相容れないものかどうかを検討する作業は、第七章での課題となる。

論として読解する本論文全体の方針により親和的なものである、本質を表す説明規定として形相を理解することをまず主軸においた上で、それが生成変化の説明とどのように関連するのかを示し、そこから帰結するいくつかの点をもとに、形相が単独で自然界における生成変化を引き起こすとする発想が、(その変化の内実がどのようなものであろうと)アリストテレスの自然学の構想に対して深刻な問題を突きつけるという点を明らかにすることである。

次節において私は、質料形相論を説明理論として理解する本論の立場からすれば、形相が時空上に存在しない説明規定として理解されていることは(同じく「Gになれるもの」として時空上の対象と同一視されることができないような形で質料を理解したことと類比的に考えれば)むしろ自然であると主張する。しかし、形相を生成変化を物理的に引き起こすものとしてではなく、それを説明するものとして理解する場合も、形相がどのように生成変化の説明と関連するのかを示す必要は依然として残される。本質を表す説明規定は、すでにGであるものがどのようなものかを説明するには役立つが、GでないものがGになることの説明とは関連をもちえないように見えるからである。この点に関して、本章第三節は、形相と関連する説明に「形相を示す説明」と「形相にもとづいた説明」の二種があるということを確認し、どちらも生成変化の説明と関連しうると主張する。

その過程で、アリストテレスが形相を生成変化と関連しない数学的な対象に対しても認めているという点が問題になる。数学の事例をもとに形相を論じるとき、アリストテレスはそれを運動変化キネーシスしないものと関係づけ、思惟において離存しうると述べる。こういった描写は、形相が生成変化と本当に何らかの関連をもちうるのかを改めて疑わしくする。このような疑義に答え、形相に帰されるこれらの特質の内実を明らかにし、自然学者が形相を探求する仕方を解明することが本章第四節の目的となる。第五節では、これらの議論をまとめた上で、形相が単独で生成変化を引き起こすとする発想がもつ問題点を改めて指摘し、感覚論における形相の位置づけの問題に立ち返る。

第2節 説明規定としての形相

本論文第二章から第三章において私は、形相と同じく生成変化のアイティアーであるとされる質料、すなわち「Gでありうるもの」を、問題となっている生成変化(例えば、像の生成)への言及を含まない仕方ですれ自体としてアイデンティティをもつ何らかの対象(例えば、青銅)と端的に同一視することはできないと論じた。「像でありうるもの」は、

関係性や無規定性と関連をもつ仕方で、かつ、ある奥行きのもとでのみ理解されうるものであり、「青銅」といったものは「像でありうるもの」を必要十分な仕方で表すものではないからである。このような考察にもとづいて私は、質料を説明理論を構成するものとして理解するという方針を明らかにし、それに内実を与えた。だとすれば、前節で私が質料を時空上にその位置を特定できるものとしていたことは正確ではないということになり、前節で与えられていた、時空上にその位置を特定できる質料と所在不明の形相という対比は、質料に関する誤った理解にもとづいていたということになる。かりに形相を、質料と同じ仕方で説明理論を構成するものとしてみなすことができれば、それが時空上にその位置を特定されえないようなものとして提示されていたということも、理解不可能ではなくなるだろう。

質料に対する上のような理解は、「G でありうるもの」が G の生成変化を説明するに際して欠かすことができないものであるという点に基盤をおくものであった。問題は、これと同じようなものを、形相理解の基盤としてもおくことができるのかという点である。「G でありうるもの」を理解することが、G の生成変化を理解するために必要であることは、おそらく自明である。「G でありうるもの」を理解することは、例えば青銅が「まだ像ではないが像になりうるもの」であることを知ることであり、これは像の生成変化を説明するに際して欠かすことのできないものだからである。これに対して、本質の説明規定が G の生成変化を説明する際に欠かすことのできないものなのかは疑わしい。「G であるとはそもそもどういうことだったのか」に答えても、そこから G の生成変化に関する情報、すなわち「まだ G ではないが G でありうるもの」や「何かを G にするもの」に関する情報が得られるようには思われなからである。本質と生成変化の関係が疑わしいものであるということは、本質が、例えば（上で引用された *Phys. II.3* における形相の導入においてまさにそうであったように）数学的対象といった生成変化しないものに対しても求めることのできるものであるという点からも、明らかであるように思われる。

生成変化の説明と本質の説明規定との距離を考えるために、ここではフェアジョンによる研究を参照することから始めよう（Ferejohn 2013）。フェアジョンは、知識や論証、科学的探求法といった様々な主題を扱う『分析論後書』において、アリストテレスが主に二つの種類の説明を使い分けしていると考え。その一つは、G の定義にもとづいて G がどのような性質をもつのかを明らかにするような説明である。その型となるものとして、フェア

ジョンは以下のものを与える⁸。

[形相的説明 (Formal *aitia*)]

- 前提 1 : すべての G は、G の定義を満たす。
- 前提 2 : G の定義を満たすものは、すべて性質 X を有する。
- 結論 : すべての G は、性質 X を有する。

フェアジョンは、このような説明を形相 (本質の説明規定・定義⁹) を用いた説明の代表例としている (Ferejohn 2013, 103)。上の定式化から明らかであるように、これは説明全体の中項に G の形相をおく「定義にもとづいた説明 (definition-based explanation)」である。これに該当するものをアリストテレスが完全な推論の形で展開している箇所は見当たらないが、フェアジョンは、『分析論後書』第一巻第四章や第五章における三角形の考察にもとづけば、次のような再構成が可能であると考ええる。

[三角形が二直角をもつことの、三角形の形相にもとづいた説明]

- 前提 1 : すべての三角形は、三角形の定義を満たす。
- 前提 2 : 三角形の定義を満たすものは、すべて二直角を有する。
- 結論 : すべての三角形は、二直角を有する¹⁰。

フェアジョンは、形相にもとづいたこのような説明モデルを「典型的説明 (canonical explanation)」と呼び、アリストテレスがこのような説明モデルを数学に限られない様々な文脈で用いていると主張する。一例として、同じ『分析論後書』第二巻第十六章 98a35-b4 から彼は次のような生物学的な説明を再構成する。

⁸本節の以下の部分で与えられる形式化された説明は、すべて Ferejohn 2013, 98-120 をもとに記号などを改変したものである。ただし、それぞれの説明の見出しは、(直後の「形相的説明 (Formal *aitia*)」を除き) すべて本論文の著者によるものである。なお、以下の本文でフェアジョンの議論を理解するために用いられる「G にもとづいた説明」と「G を示す説明」の区別は、内容上はフェアジョンの議論からもはっきりと読み取れるものではあるが、フェアジョン本人によって積極的に打ちだされているものではない。この区別に関しては、さらに本章注 11 を参照。

⁹G の定義は G の本質の説明規定であるといえるが、G の形相が、G を必要十分な仕方規定するような G の本質の説明規定・定義のみを指すとは思えない。オクターヴの形相は「〔特定の比である〕一に対する二」でもあるが、「数」でもある。「数」がオクターヴの形相であるとされる時、形相はオクターヴの必要十分条件を示すものとしては考えられていない。本論では、フェアジョンの議論と関連する箇所では「定義」という表現を、それ以外の箇所では「本質の説明規定」という表現を主に用いるが、形相は本質の説明規定で述べられるものの類や部分でもありうる。なお、正確には、本質の説明規定を表すのは完全な文章としての定義の全体 (例えば、「人間は理性的動物である」) ではなく、その一部である定義句 (defining phrase、人間の例では「理性的動物」) であると考えらるべきであろう (Ferejohn 2013, 102)。本論では、特に区別せず「定義」のみを用いる。

¹⁰フェアジョンが指摘するように、これが妥当な推論であるためには、前提 2 が真であることを示すための幾何学的な証明が追加される必要がある (Ferejohn 2013, 118-20)。

[落葉の、広葉樹の形相にもとづいた説明]

- 前提 1 : すべての広葉樹は、広葉樹の定義を満たす。
- 前提 2 : 広葉樹の定義を満たすものは、すべて落葉する。
- 結論 : すべての広葉樹は、落葉する。

これは、形としては三角形が二直角をもつことの説明と同じに見える。しかし、両者の間には大きな違いがある。前者が幾何学的な説明であり、そこに (*Phys.* とは性格を異にする著作である *APo.* でもその存在が認められている) 始動因が関与する余地がないようなものであるのに対して (二直角をもたない三角形を二直角をもつ三角形にする運動変化は存在しない) 後者の落葉に関しては、広葉樹がなぜ落葉するのかをきちんと理解するために、むしろ始動因に言及する説明が必要となるように思われるという点がそれである。実際にアリストテレスは、植物の落葉について以下の様な始動因にもとづいた説明も与えている (*APo.* II.16, 98b32-8)。

[落葉の、落葉の始動因にもとづいた説明]

- 前提 1 : 木々に、樹液の凝固が生じる。
- 前提 2 : 樹液の凝固が生じるものは、落葉する。
- 結論 : 木々は、落葉する。

結果的に、数学的な対象ではない落葉といった自然現象の探求に対しては、形相にもとづいた説明と始動因にもとづいた説明の二種の説明が与えられたことになる。これらのうちで、生成変化である落葉を説明するのにより適したのは、明らかに後者であるように思われる。始動因にもとづいた説明からは、樹液の凝固が「落葉が生じていない木々」を「落葉が生じている木々」にするという生成変化に関連する情報を読み取ることができる。これに対して、形相にもとづいた説明が「落葉が生じていない広葉樹が落葉が生じている広葉樹になる」という生成変化に関する有意義な説明を与えることができるかは疑わしい。形相にもとづいた説明は、三角形と二直角のように、G が必然的に性質 X をもつ (性質 X をもたないものは G ではない) ということを示すためには役立つが、これは落葉という生成変化が木々に生じること、すなわち「落葉が生じていない木々が落葉が生じている木々になる」ことを説明することとは異なるように思われる。

落葉に関する形相にもとづいた説明と始動因にもとづいた説明の関係を理解するために、フェアジョンは三つの選択肢を用意する (Ferejohn 2013, 147-55)。最初に提示されるが真

剣に考慮されない選択肢は、両者を端的に独立したものとみなすものである。より魅力的な二番目の選択肢は、次のような仕方で始動因にもとづいた説明と形相にもとづいた説明をつなげるものである。

[落葉の、広葉樹の形相及び落葉の始動因にもとづいた説明]

- 前提 1：すべての広葉樹は、広葉樹の定義を満たす。
- 前提 2：広葉樹の定義を満たすものは、すべて樹液の凝固を経験する。
- 前提 3：(前提 1 と 2 から) すべての広葉樹は、樹液の凝固を経験する。
- 前提 4：樹液の凝固が生じるものは、落葉する。
- 結論：すべての広葉樹は、落葉する。

上の説明においては、形相にもとづいた説明のみでは明らかにすることができなかった「なぜ落葉しない広葉樹が落葉する広葉樹になるのか」が、始動因が加わることによって示されている。その意味では、始動因にもとづいた説明は形相にもとづいた説明を補完しているといえる。この選択肢は一見有望なものに見えるが、問題は、これを支持するようなテキストが存在しないということである。落葉の事例についての二種の説明がともに現れる『分析論後書』第二卷第十六章においてすら、アリストテレスは両者をつなげるための努力をしていない。

フェアジョンが最終的に擁護する三番目の選択肢は、形相にもとづいた説明に取って代わるものとして、始動因にもとづいた説明を位置づけるものである。フェアジョンは、上の落葉の始動因にもとづいた説明が、いわば「因果的説明 (causal explanation)」であり、全体として落葉の因果的定義と呼べるものを与えていると考える。「始動因にもとづいた説明」が落葉の定義を与えることに成功したということは、落葉を説明するという試みが、実質的には「始動因にもとづいた説明」のみによって必要十分な形でなされうるということを示す。また、「始動因にもとづいた説明」が因果的定義を示すものであり、因果的定義もまた定義であるという点である種の形相とみなすことができるのだとすれば、そこでの「始動因にもとづいた説明」は、実質的には「形相を示す説明」でもあった、ということになる (Ferejohn 2013, 155; *APo.* II.8, 93a29-b14)¹¹。このことは、上のような仕方で与えら

¹¹ 形相をアイティアーとして述べるときに、アリストテレスが「形相を示す説明」と「形相にもとづいた説明」のどちらを念頭においていたのかは明らかではない。フェアジョンは、少なくとも *APo.* において形相をアイティアーとして挙げるときに問題になるのは「形相を示す説明」ではなく（これを典型的説明と呼ぶことから分かるように）「形相にもとづいた説明」であると考えている。これに対してレウニッセン (Leunissen 2010, 176-207) は、*APo.* II.11 においてアリストテレスが形相をアイティアーとして提示するとき彼が念頭においてい

れた因果的定義としての形相を中項とする「形相にもとづいた説明」に関してならば、それを、上で無用とされた数学をモデルとする「形相にもとづいた説明」から区別して、生成変化に関する有用な情報を与えるものとして認めることができるということを意味する。因果的定義を中項におく「形相にもとづいた説明」は、形式上は数学をモデルとするそれと同じに見えるかもしれないが、その内実となるものは、実は「始動因にもとづいた説明」なのである (Ferejohn 2013, 154)。

ただし、フェアジョン本人が指摘するように、この解釈もまた実はテキストから明確な支持を得ているわけではない。自然現象の探求における、「形相にもとづいた説明」と「始動因にもとづいた説明」の関係をいかに理解するかという問題をアリストテレスが『分析論後書』で表立って取り挙げず、よって数学をモデルとする形相にもとづいた説明を乗り越えるものとして始動因にもとづいた説明を提示するための積極的な努力をしていないこと理由として、フェアジョンは、『分析論後書』のアリストテレスには数学と自然現象の探求の距離をどのように理解するかに関する迷いがあったのではという推測を述べる。自然現象に関しては、多くの場合、形相にもとづいた説明を始動因にもとづいた説明に置き換えることは不可能ではないと思われるが、『分析論後書』では数学にもとづいた知識の探求が基本とされていたので、この可能性が真剣に追求されることがなかったというのが彼の理解である。フェアジョンは、『分析論後書』より後に書かれたと彼が考える自然学的著作においては、実際に始動因にもとづいた説明が優位を占めるようになったと主張する。これに加えてフェアジョンは、さらに後になって書かれたものと彼が考える『形而上学』においては、形相と始動因の位置づけが再度問い直されることになるという発展史的解釈を展開する¹²。——本論文ではフェアジョンの発展史的解釈を追うことはせず、形相にも

たものは「形相を示す説明」であったと考える。私には、少なくとも *Phys.* においてアリストテレスが形相をアイティアーの一つとして挙げる場面に関しては、数学的な事例が与えられているということからすれば、「(始動因にもとづいて) 形相を示す説明」をそこでアリストテレスが念頭においていると考えることは難しいと思われる。

なお、レウニッセンは、四種のアイティアーの一つとして形相を挙げるときにアリストテレスが念頭においているのは「(始動因にもとづいた説明を用いて) 形相を示す説明」であると考えている。このような主張の背景には、形相、質料、始動因、目的因のすべてを説明を構成する中項とみなす従来の解釈が苛まれてきた、目的因を中項とするような説明を組み立てることが難しいという問題を回避するという動機がある。レウニッセンは、アリストテレスが四種のアイティアーとして挙げるもののうち、形相と目的因を問題にするときに彼が念頭においているのは「(四種のアイティアーの他のものを中項において) 形相または目的因を示す説明」であり、よって目的が中項にくるような説明が見当たらないのは問題にならないと主張する。本論では、目的因を形式的にいかに処理すべきかといった問題は扱わない。

¹²フェアジョンは、アリストテレスがその人生の後期まで依然として残っていた形相にもとづいた説明と始動因にもとづいた説明の緊張を調整するために *Metaph.* でとった最後の立場は、定義や本質を(不可解な仕方)で始動因化するものであり、あまり実りあるものではなかったという悲観的な結論を述べている (Ferejohn 2013, 194-5)。

とづいた説明と生成変化の関係の問題に戻ることにしよう。

フェアジョンの議論を辿ることによって明らかになったのは、数学的なものをモデルとした場合の「形相にもとづいた説明」は確かに生成変化を説明するものとしてはあまり有効なものではないが、「始動因にもとづいた説明」によって示された形相を中項とするような「形相にもとづいた説明」は、生成変化の説明として有意義なものであるという点である。このことは、形相を生成変化を説明するものとして理解し、本章第一節で与えられた難点を回避するという試みが成功したということの意味するのだろうか？

第3節 諸学における形相

フェアジョンの解釈を評価する作業へと進む前に、まず議論を複雑にしている要因となっているものを一つ整理しておこう。それは、次の三つのものの区別である¹³。

- 形相（定義）
- 形相にもとづいた説明
- 形相を示す説明

これらの区別がアリストテレス本人によって明確に意識されていたかは明らかではないが、上のフェアジョンの議論を検討した際に、それぞれに該当するものはすでに登場していた。まず形相そのものは、論じられている対象の定義であり、これは「形相にもとづいた説明」の中項をなすものでも、「形相を示す説明」によって示されるものでもある。「形相にもとづいた説明」は、以下のようにまとめることができる。

[形相にもとづいた説明]

中項にあるものの定義をおき、そこからその定義を満たすものが必然的にもつ性質を導き出す説明

これに対して、形相を示す説明は以下のようなものである。

[形相を示す説明]

例えば、落葉とは何かという問いに対して「木々が樹液の凝固を経験することによって葉を落とすこと」という説明を与えることで、与えられた説明全体によって落葉

¹³以下で論じられる、アイティアーにおける文からなる説明と項の関係に関しては、本論文第二章注9及び22も参照せよ。

の「何であるか」を示すもの

形相（定義）を中項として用いて特定の性質をその定義を満たすものに帰する「形相にもとづいた説明」に対して、ここでの「形相を示す説明」で与えられるものは議論の対象となっているものの始動因を中項とするものなので、形式的には「始動因にもとづいた説明」である。しかし、これは説明全体としてその対象の定義を示しているという点で、「形相を示す説明」でもあるとされる。さらに、この「形相を示す説明」で示された形相は、当然「形相にもとづいた説明」の中項をなすことができる。

すでに明らかであるように、「始動因にもとづいた説明」によって示された形相を中項とするような「形相にもとづいた説明」は、確かに生成変化を説明するものとして形相を理解することを可能にする。これに対して問題となるのは、生成変化するものの形相には、このような仕方では「始動因にもとづいた説明」で示されることができないものがあるように思われるという点である。フェアジョンが上で論じた例は、落葉や雷といった出来事にもとづいたものだったが、例えば、人間の形相、すなわち人間の定義は「始動因にもとづいた説明」によって示されるようなものなのだろうか。人間の定義がかりに「理性的な動物」や「二本足の動物」であったとしてみよう。これは典型的な類と種差からなる定義であるが、ここには、理性的でない動物（もしくは、理性的な動物でないもの）を理性的な動物へと変化させるものとしての始動因に関する言及はまったく含まれない。その意味では、このような定義は「始動因にもとづいた説明」によって示されたものではない。

私は、「始動因にもとづいた説明」によって示されるような形相ではない形相をその中項とする、「形相にもとづいた説明」に関しても、アリストテレスがそれを生成変化を説明するために有効なものとして認めると考える。本論文第四章で私は、人間が特定の部分を伴って生成することの必然性を示すためのアリストテレスの説明を取り上げた（Leunissen 2010, 200-1, 201n57 も参照せよ）。そこでアリストテレスが与えた説明は、次のようなものであった。

人間であるということは云々のことなので、よってそれ〔＝人間〕はこれら〔＝部分〕を有する。なぜなら、これらの部分なしには〔何かが人間で〕あることはできないからである。

(PA I.1, 640a34-5)¹⁴

¹⁴ἐπειδὴ τοῦτ' ἦν τὸ ἀνθρώπων εἶναι, διὰ τοῦτο ταῦτ' ἔχει· οὐ γὰρ ἐνδέχεται εἶναι ἄνευ τῶν μορίων

上の説明は、形式的には人間の定義から人間がもつ必然的な性質（「特定の部分、例えば感覚器官をもつこと」）を導き出すものに見える。かつ、この説明の中項となっている人間の定義は、例えば「感覚するもの」といったものなので、始動因に関する言及を含むものではない。にもかかわらず、この説明は生成変化と関係しているといえる。なぜなら、アリストテレスがこの説明を用いていた文脈は、特定の部分（感覚器官）を伴って人間が生成することの必然性を示すというものだったからである。すなわち、この「形相にもとづいた説明」は、「始動因にもとづいた説明」が「形相を示す説明」であったのと同じ仕方で）全体として、生成変化と明らかに関連する「質料を示す説明」として機能しているのである。生成変化の説明と関連する「形相にもとづいた説明」を、このような仕方で「（始動因にもとづいた説明によって示された）形相にもとづいた説明」に限定しないという方向性は、形相と生成変化の説明との関係をより一般的な仕方で確保することを可能にするという点で望ましいものに思われる¹⁵。

しかし、アリストテレスが『自然学』で本当にこのようなもの（すなわち、なんらかの仕方で生成変化と関連する説明を与えうるようなもの）として形相を考えていたのかに関しては、疑問を呈する余地がある。本章第一節において私は、生成変化を説明することをその主題の一つとする『自然学』において、生成変化のアイディアとして形相を導入する際に、彼がどのような例を与えているのかを確認した。注目すべきは、そこで与えられていた形相の例がオクターヴに関するものであり、オクターヴは生成変化しない数学的な対象であるという点である。数学的なものを形相の例として挙げるのは、この箇所だけで

τούτων.

¹⁵結果的に、フェアジョンが提示した「形相にもとづいた説明」と「始動因にもとづいた説明」の関係をめぐる議論に対して、私は次のように答えたことになる。「始動因にもとづいた説明」によって「形相にもとづいた説明」が取って代わられたと主張することは、「始動因にもとづいた説明」が示しうるような形相を中項とする「形相にもとづいた説明」に関しては正しいといえる。しかし、このことは、形相にもとづいた説明が自然研究において全面的に始動因にもとづいた説明によって取って代わられたことを意味するわけではない。人間の定義といった形相は、始動因にもとづいた説明によって示されるものではないが、それでも生成変化の説明として有効に働いているのである。

なお、フェアジョンは、数学的なものでもなく、「始動因にもとづいた説明」をその内実とするわけでもない、この新しい「形相にもとづいた説明」をアリストテレスが用いているように思われる箇所があるということを見逃しているわけではない。フェアジョンは、この新しい「形相にもとづいた説明」をアリストテレスが *Phys.* 以後の著作において用いることがあるということを理解しているが、彼は、この新たな「形相にもとづいた説明」を、*APo.* で彼が生成変化の説明としては有効ではないとした、数学をモデルとする「形相にもとづいた説明」とはまったく異なるものとして処理する。フェアジョンの理解によれば、このような新しい「形相にもとづいた説明」は目的因という新たな要素を導入することによって可能になるのであり、目的因は *APo.* において（言及はかろうじてされていたものの）真剣に取り扱われてはいなかったのである（Ferejohn 2013, 160-8）。私は、*APo.* と *Phys.* における形相理解を切り離すような彼の解釈には根拠がないと考える。以下でさらに論じられるが、アリストテレスは *Phys.* においても数学的なものを形相の例として用いているからである。形相の理解を分裂させるフェアジョンに対して、私は以下でこれらを統合的に把握することを目指すことになる。

はない。『自然学』第二巻第七章においてアリストテレスは、「なぜ」という問いが対象とするものの数にアイティアーの数に対応するということを確認した上で、四種のアイティアーを列挙する。形相に対応するものは次のとおりである。

「なぜ」〔という問いが対象とするもの〕は、^{キネーシス}運動変化しないものにおいては、結局のところ「何であるか」¹⁶に帰せられる（例えば数学においては、〔「なぜ」という問いが対象とするものは、〕結局のところ直線や通約性、またはその他の何らかのもの¹⁷の定義に帰せられるからである）。

(*Phys.* II.7, 198a16-8)¹⁷

ここでアリストテレスは、形相が、^{キネーシス}運動変化しないものに関わる数学を対象とするということをはっきりと述べている。しかし、このことが、形相が生成変化と何の関連ももたないということの意味するわけではないということは、続くアリストテレスの記述をみればすぐに分かる。彼は、形相を含む四種のアイティアーがどのようなものかを確認した後に、それらをすべて知ることは（生成変化を研究の対象とする）自然学者の仕事であると述べているからである（*Phys.* II.7, 198a22）。アリストテレスが自然学の対象とは到底思われな¹⁸いものを自然学者の研究の対象として提示する箇所は、さらにある。例えば『自然学』第二巻第二章においてアリストテレスは、自然学者と形相の関係について、次のような仕方で両者の関連を肯定している。

自然学者は形相、すなわち「何であるか」をどこまで知る必要があるのか。あるいは、医者が腱を、銅細工職人が青銅を、それぞれが目的とするところのもの〔＝健康と銅製品〕に至るまで〔知っている〕ように、〔自然学者も〕形相においては離存しうるが質料のうちにあるところのものについて、〔医者や銅細工職人と同じような仕方で知るべきではないか〕。というのも、人間が人間を生むのであり、また太陽が〔人間を生むのである〕。離存しうるものがいかにあるか、またそれは何かを規定するのは、第一哲学の^{エルゴン}働きである。

(*Phys.* II.2, 194b9-13)¹⁸

¹⁶ここでは、「Gの何であるか」は「Gであるとはそもそもどうしたことだったのか」と置換可能な表現として用いられており、すなわち本質と同義である。

¹⁷εἰς τὸ τί ἐστὶν ἀνάγεται τὸ διὰ τί ἔσχατον, ἐν τοῖς ἀκινήτοις (οἷον ἐν τοῖς μαθήμασι· εἰς ὀρισμὸν γὰρ τοῦ εὐθέος ἢ συμμετρου ἢ ἄλλου τινὸς ἀνάγεται ἔσχατον)

¹⁸μέχρι δὴ πόσου τὸν φυσικὸν δεῖ εἶδέναι τὸ εἶδος καὶ τὸ τί ἐστίν; ἢ ὡς περὶ ἰατρὸν νεῦρον ἢ χαλκία χαλκόν, μέχρι τοῦ τίνος [γὰρ] ἔνεκα ἕκαστον, καὶ περὶ ταῦτα ἄ ἐστι χωριστὰ μὲν εἶδει, ἐν ὕλῃ δέ;

ここで問題となっている形相は質料から「離存しうる」とされているので、それは第一には自然学者ではなく（神や不動の動者を扱うと通常理解される）第一哲学者の探求の対象であるように思われる。にもかかわらずアリストテレスは、限定的な意味ではそれが自然学者の探求の対象でもあると明確に述べているように思われる。このような事態は、形相を生成変化を説明するものとして理解するという試みを危うくする。生成変化しない数や第一哲学の対象となるようなものが、本当に生成変化を説明する際に役に立つのかは疑わしいからである。形相は、やはりそれを説明するというものとはまったく違う仕方で生成変化と関わっているのではないか。だとすれば、フェアジョンの議論を確認しながら私が進めてきた形相解釈は、すべて無意味だったということになりかねない。

この点を明らかにするためには、結局自然学者が形相を理解するということがどういう営みなのかを解釈するしか方法はない。そのためには、節を改める必要がある。

第4節 形相の知り方

前節で私は、「始動因にもとづいた説明」が示すようなものに限られない様々な形相が、生成変化を説明するに際して有効なものとして理解されうるということを示した。しかし、このような解釈を推し進めることの当初の動機となる、説明理論を構成するものとして形相を捉えるという方針そのものに対して深刻な疑いを投げかけたのが、アリストテレスが『自然学』で度々与える、生成変化とは関係しえないと思えるような形相の例である。これらは、生成変化に関する説明を与えるようには到底思われぬ数学と第一哲学において論じられるようなものであり、これらが自然学においても意味をもっているということは、生成変化を説明するものとして形相を理解するという私の方針に、何か深刻な問題が内在していたということを示しているように思われる。

この批判に答えるためには、なぜアリストテレスがこのような形相を自然学者の探求の対象として提示しているのか、また、これらはどのような仕方で自然学者の探求の対象となっているのか、といった点を考察する必要がある。その際に手がかりとなるのは、上で引用した『自然学』第二巻第二章の一節でアリストテレスが与えていた、「自然学者は形相、すなわち「何であるか」をどこまで知る必要があるのか」という問いである（*Phys.* II.2, 194b9-10）。どうやら彼は、形相の知り方を単純なものとして理解してはいないようなので

ἄνθρωπος γὰρ ἄνθρωπον γεννᾷ καὶ ἥλιος. πῶς δ' ἔχει τὸ χωριστὸν καὶ τί ἐστὶ, φιλοσοφίας ἔργον διορίσασαι τῆς πρώτης.

ある。

この「どこまで」を理解する仕方として、次の二つのものを想定することができる。まず一つは、形相には様々なものがあるが、自然学者が理解すべきものとそうでないものが排他的に区別されるとするものである。その場合、それらのうちの片方の集合に属する形相を知ることが「どこまで」という問いに対する答えになる。次の理解の仕方は、同じ形相に対して二通りの理解の仕方がありうるというものである。私は、「どこまで」を問うたときにアリストテレスが念頭においていたのは後者の可能性であり、『自然学』第二卷第二章においてその点を明確に見て取ることができると思う。このことを示すことによって、生成変化と直接的な関連をもたない形相もまた、何らかの限定のもとでは自然学者によって探求されうるものであり、よって生成変化に対して何らかの説明を与えるものとして理解されうるという解釈を与えることを目指す¹⁹。

『自然学』第二卷第二章においてアリストテレスは、自然学者と数学者の違いを確認する必要があると述べることから議論を始める。アリストテレスは、自然学者が探求の対象とする自然的な物体に、面や線といった数学者の探求の対象が関連しているということをまず認め、月や太陽の本質を知るところをその仕事とする自然学者が、それらがもつ形状といったものを知らないことは奇妙であると指摘する。すなわち、自然学者と数学者は何らかの仕方で探求する対象を共有しているということになる。それでは自然学者と数学者の探求はどのように違うのかという点に関して、アリストテレスはまず以下のように述べる。

これら〔＝面や線〕については、数学者も取り扱うが、自然的な物体の限界としてそれぞれ〔＝面や線〕を取り扱うのではない。また、〔数学者は、自然的な物体に〕付帯しているところのもの〔＝自然的な物体の面や線〕を、そのようなもの〔＝自然的な物体〕に付帯するものとして考察するわけでもない。よって〔数学者は〕〔面や線を、それが付帯するところの自然的な物体から〕切り離しているのである。というのは、〔面や線は〕思惟において運動変化から離存しうるからであり、〔離存した場合にも〕何の違いも生じず、よって切り離すことによって間違いが生じることもないからである。

¹⁹この理解を採用した場合も、数学的な対象と自然学的な対象及び神や不動の動者といった第一哲学的な対象の関係が、すべてにおいて重なるのか、それとも部分的に重なるのかといった点を明らかにするという課題は残る。これは非常に複雑な問題であるが、私が本論で述べたいことは、一見排他的に見えるそれぞれの学問が対象とする形相が、(ある限定のもとでは)少なくとも部分的には重なりうるという点である。自然学と重ならない第一哲学の対象に関しては、本論文第七章で取り上げる。

(*Phys.* II.2, 193b31-5)²⁰

自然学者は自然的な物体に付帯するものとして線や面を探求し、数学者は線や面を思惟において切り離して、すなわち線や面そのものとして探求する。ここでの「思惟における切り離し」は、単にある対象を心で思い浮かべることとは区別されなければならない。心に思い浮かべることだけなら、それはどのような探求においても必要となることであり、数学者のみが行うこととはいえないからである。要点となるのはむしろ、それが付帯しているところの自然的な物体をともに思い浮かべることなしに、線や面だけを思い浮かべることができるという点にある。数学者は、このような仕方では、自然的な物体から完全に切り離された線や面のみを探求することができる。しかし、だからといって、数学者が探求している対象が、自然的な物体に属している線や面とは完全に異なる、または、それぞれの探求によって得られるものに違いが生じる、ということは帰結しない。アリストテレスはむしろ、切り離しても何の違いもないと述べている。本論にとって大事なのは、ここで述べられている数学者と自然学者の違いが、異なる対象を扱うという点にではなく、異なる仕方と同じ対象を扱うという点に求められているということである。これは、自然学者は「どこまで」形相を知るかという問いに対して与えた二通りの理解の仕方のうち、後者の選択肢を支持するものである。

上の点を確認した後、アリストテレスは今度は「アイデアを語る人々」に言及する²¹。

アイデアを語る人々は、これ〔＝思惟において切り離すこと〕をそうと知らずに行っている。というのも、〔アイデアを語る人々は〕数学的なものよりも離れづら自然的なものを切り離しているのである。

(*Phys.* II.2, 193b35-4a1)²²

上で述べられている「数学的なもの」は、直前で論じられた線や面とみなすことができる

²⁰ *περὶ τούτων μὲν οὖν πραγματεύεται καὶ ὁ μαθηματικός, ἀλλ' οὐχ ἢ φυσικοῦ σώματος πέρας ἕκαστον· οὐδὲ τὰ συμβεβηκότα θεωρεῖ ἢ τοιούτοις οὐσι συμβέβηκεν· διὸ καὶ χωρίζει· χωριστὰ γὰρ τῇ νοήσει κινήσεώς ἐστι, καὶ οὐδὲν διαφέρει, οὐδὲ γίνεται ψεῦδος χωρίζοντων.*

²¹ ここで言及されているプラトンのアイデアは、アリストテレスの形相とは異なる。ただし、アリストテレスの形相とプラトンのアイデアをどう区別するかという問題は、アリストテレスがアイデア論を幾度となく批判しているにもかかわらず簡単に答えられるものではない。両者が何らかの点で異なるということは明らかだが、思惟における離れ性が問題になっている本章の文脈においては、どちらも自然的な物体から切り離される可能性が考慮されるという点において、類比的に扱われていると思われる。

²² *λανθάνουσι δὲ τοῦτο ποιῶντες καὶ οἱ τὰς ἰδέας λέγοντες· τὰ γὰρ φυσικὰ χωρίζουσιν ἦττον ὄντα χωριστὰ τῶν μαθηματικῶν.*

だろう。「アイデアを語る人々」は線や面よりも切り離しづらいとされる「自然的なもの」を切り離すとされているので、彼らは切り離しの適用範囲を数学者よりも広く設定している人々であるということになる。では、アイデアを語る人々が切り離しているとされる「自然的なもの」とはなんだろうか。思惟における切り離しが問題となっている以上、これは個別の人間や肉をそのまま何かから切り離すといったことではなく、人間や肉のアイデアを個々の人間や肉から切り離すことであると考えべきである。よって、ここまでの議論からは、自然的な物体から切り離され得るものとして、(誰もが切り離しうると認めるだろう)線や面と(離れしづらいとアリストテレスが考える)人間や肉のアイデアという二つの異なる対象が提示されたことになる。

続けてアリストテレスは、人間や肉のアイデアを切り離すということが線や面を切り離すことよりも難しいという主張を補足するために、線や面は^{キネーシス}運動変化を伴わないのに、人間や肉は伴うと述べる(*Phys.* II.2, 194a3-6)。人間や肉は、獅子鼻²³のように語られるのであり、数学的な対象である「凹み」のように語られるのではない。このような対比は、一見思惟の上で人間や肉のアイデアを分離するということが不可能であるということを示すものに見える²⁴。しかし私は、少なくともこの箇所に関しては、人間や肉のアイデアといったものを、数学における線や面と同じような仕方で自然的な人間や肉から切り離して考察する可能性が完全に否定されているとは考えない。以下では、その理由を幾つか述べる。

まず一つ目の理由は、アリストテレスが自然的なもののアイデアを「離れしづら」と述べており、離れできないとは述べていないという点である。自然的なものに関しても離れの可能性が否定されていないということは、自然的なもののアイデアを切り離すことの難しさを確認するためにアリストテレス自身が与えるもう一つの対比である、幾何学と光学との対比からも確認できる。アリストテレスは、幾何学は自然的な線を自然的ではないものとして、すなわち切り離された線として探求すると述べ、光学は数学的な対象としての線を探求してはいるのだが、自然的な線としてそれを探求していると述べる。よって、前者は数学に、後者は自然学に類比的であるということが出来る。後者がその探求の対象とする「自然的な物体に付帯している線」は、このように理解された限りでは、確かに自然的な物体から切り離して探求することができるようなものには思えない。しかし、だからといって光学が対象とするものに分離可能な要素がまったくないということにはならない。「自然

²³これに関しては、本論文第四章注9を参照。

²⁴レノックス(Lennox 2008, 163-71)は、実際にここでの議論が自然物の形相を切り離すことの不可能性を示していると考え。私はこのような理解は文脈的に不自然であると考え。

的な物体に付帯している線」をそのようなものとして分離することは難しいと思われるが、線そのものは光学の対象（を構成するもの）であるにもかかわらず分離可能だからである。線や面の探求と人間の探求の対比で示したいことが幾何学と光学の対比からも見て取れるのだとすれば、人間の探求においても思惟において離存するものが認められる可能性は残されているといえる。

もう一つの理由は、人間や肉が、思惟において分離することの難しいもの、すなわち、^{キネーシス}運動変化と質料を伴う獅子鼻のようなものであるということを確認した後も、アリストテレスが依然として自然的な対象の形相と質料を個別的に探求する学が存在する可能性を考慮しているという点である（*Phys.* II.2, 194a12-8）。その可能性は、本論文第四章で論じた『*デ・アニマ*』第一巻第一章における、怒りの探求における問答家と（質料のみを探求する狭い意味での）自然学者との対比からも読み取ることができる（*DA* I.1, 403a30-b1）。問答家が怒りの形相のみを探求するとされていることは、自然現象の形相が思惟において離存可能なものとして扱われているということを示すように思われる²⁵。

以上の理由から私は、ここまでの議論から明らかになったのは、自然的な人間が（獅子鼻と同じく）質料抜きにあるものではないということのみであり、質料抜きの人間（例えば、人間のイデア）といったものを想定することがまったく不可能であるということがここで示されたわけではないと考える。このことは、さらに次のことを意味する。アリストテレスは、自然的な対象を、数学的な対象と類比的に扱っている。自然的な対象においても数学的な対象においても、形相が離存しうる可能性が（前者は消極的に、後者は積極的に）認められると同時に、離存しない形でそれが探求される可能性もまた認められているのである。これは、自然学者が探求すべき形相とそうでない形相が排他的な仕方で区別されると考える解釈にとっては不利な点である。数学的な対象であれ、自然的な対象であれ、両者はともに離存する可能性を認められると同時に、自然学者によって探求されうるようなものとして提示されているのである。

質料抜きの人間といったものを想定することの可能性を（それが難しいということを知った上で）認めつつも、アリストテレスはなぜ質料と形相を探求するのが一つの学問の仕事であるというべきなのを明らかにするために、いくつかの議論を与える。それは具体的には三つであり、技術と自然の類比、目的論、質料の関係性のそれぞれに依拠するものである。

²⁵この問題は、自然物の定義に質料に関する言及を含む必要があるのか否かという問いとして *Metaph.* Z.10 や 11 においても引き継がれることになる。本論文第四章注 10 も参照せよ。

質料の関係性と学問の一性に関しては、私は本論文第二章ですでに解釈を与えた。Gの質料は、正確には「Gでありうるもの」として理解されるのであり、これは「Gとは何か」ということを知るもののみが探求することができるものである。このように考えた場合、質料の学は、形相の学なしにはありえず、両者は奴隷の学と主人の学が一つの学であるのと同じ仕方で一つの学であるということになる。技術と自然の類比は、技術が自然を模倣するというアリストテレスの基本的テーゼにもとづき、医術や建築術といった技術が、健康と胆汁や粘液、あるいは家の形相と煉瓦や木材といった仕方で形相と質料をともに知るものであるなら、自然の学もまた同様でなければならぬと主張するものである。目的論は、手段と目的が一つの学に属するという根拠に、手段である質料を知ることと目的である形相を知ることが一つの学に属すると述べる。

本論において私が注目するのは、これらの議論の詳細ではなく、これらの議論が成功したと仮定した場合も、依然として自然学の対象となる形相が離存する可能性をアリストテレスが（まさにこれらの議論を与えた直後に）認めているという事実である。

自然学者は形相、すなわち「何であるか」をどこまで知る必要があるのか。あるいは、医者が腱を、銅細工職人が青銅を、それぞれが目的とするところのもの〔＝健康と銅製品〕に至るまで〔知っている〕ように、〔自然学者も〕形相においては離存しうるが質料のうちにあるところのものについて²⁶、〔医者や銅細工職人と同じような仕方で知るべきではないか〕。というのも、人間が人間を生むのであり、また太陽が〔人間を生むのである〕。離存しうるものがいかにあるか、またそれは何かを規定

²⁶ 「形相において離存しうる」が何を意味するのかは必ずしも明らかではないが、これを理解する手がかりは、*Metaph. Z.11, 1036a31-4* に与えられているように思われる（Peramatzis 2011, 115）。

形相において互いに異なるものどもに伴われるように見えるもの、例えば、青銅や石や木材のうちにある円に関しては、〔円がそのうちにあるところの〕青銅と石が、円の実体の〔部分〕ではないということは明らかである。〔円の実体〕はそれら〔＝青銅や石〕から切り離され得るからである。

ὅσα μὲν οὖν φαίνεται ἐπιγινόμενα ἐφ' ἐτέρων τῶ εἶδει, οἷον κύκλος ἐν χαλκῶ καὶ λίθῳ καὶ ξύλῳ, ταῦτα μὲν δῆλα εἶναι δοκεῖ ὅτι οὐδὲν τῆς τοῦ κύκλου οὐσίας ὁ χαλκὸς οὐδ' ὁ λίθος διὰ τὸ χωρίζεσθαι αὐτῶν.

(*Metaph. Z.11, 1036a31-4*)

上の引用では、青銅や木材、石が形相において異なるものとして述べられている。この一節は事物の定義を与えるときにその質料に言及する必要があるかという論点をめぐって書かれたものであり、そこで主張されるのは、青銅や木材は円の形相の部分ではない（円の定義を述べる際に、青銅や木材に言及する必要がない）という点である。上で述べられているように青銅や木材が形相において異なるものであり、かつ円の形相もまたこれらから分離されるのだとすれば、形相において異なるということは、それが互いに定義を異にする、すなわち片方を定義するために他方に言及する必要がないということの意味すると考えることができるだろう。結果的に、引用での「形相における離存性」は、（靈魂が死後に肉体から離れるといった事柄を意味するのではなく）「思惟における離存性」と同じことを意味すると理解することができる。

するのは、第一哲学の働きである。

(*Phys. II.2*, 194b9-13)²⁷

上で私が主張したように、アリストテレスが『自然学』第二巻第二章において、自然的な対象に関しても形相が分離する可能性を認めていたという点を踏まえれば、ここでアリストテレスが自然学の対象としている形相と第一哲学の対象としている形相は、同じものであると考えるほうが自然だろう²⁸。このことは、「どこまで」形相を知るかという点を理解するために与えられた二つの提案のうちの、自然学者が対象とすべき対象とそうでない対象が排他的な仕方では区別されるとする選択肢が、自然学と第一哲学の場合も受け入れることができないものであるということを示す。

二番目の提案を採用する場合にも依然として問題となるのは、自然学者が知るところのものを、第一哲学者が切り離されたものとして知ることが一体何を意味するのか、そもそもそのようなことが可能なのかという点である。質料と形相が同じ学に属するというを示すためにいくつもの議論を与えた直後に、形相を切り離しうるものとし、そのみを対象とする学があるということを知るアリストテレスの発言は、非常に奇妙に響く。これは、目的を手段から完全に切り離して考察することが可能であると述べることであり、胆汁や粘液といったものをまったく知らずに健康のみを知る者や材料をまったく知らずに家を知る者がいると述べることに等しいが、このようなことは本当に可能なのだろうか？

この難題に対してアリストテレスがどのような態度をとっていたのかを知る手がかりは、アリストテレスが自然学者による探求がどのようなものであるかを説明するために与えた医者や銅細工職人との類比にある。医術や銅細工職人による形相と質料の知り方に関しては、以下の点を指摘することができる。銅細工職人は、青銅を青銅として知ることを目指していない。銅細工職人にとって必要な青銅に関する知識は、あくまで何らかの目的（ここでは銅製品）に役立つ限りにおけるそれであり、その意味では、銅細工職人が青銅を知

²⁷μέχρι δὴ πόσου τὸν φυσικὸν δεῖ εἶδέναι τὸ εἶδος καὶ τὸ τί ἐστίν; ἢ ὡσπερ ἰατρὸν νεῦρον ἢ χαλκία χαλκόν, μέχρι τοῦ τίνος [γὰρ] ἕνεκα ἕκαστον, καὶ περὶ ταῦτα ἅ ἐστι χωριστὰ μὲν εἶδει, ἐν ὕλῃ δὲ ἄνθρωπος γὰρ ἄνθρωπον γεννᾷ καὶ ἥλιος. πῶς δ' ἔχει τὸ χωριστὸν καὶ τί ἐστίν, φιλοσοφίας ἔργον διορίσαι τῆς πρώτης.

²⁸自然的対象の形相が質料から離存可能であることを否定するレノックス(Lennox 2008, 182)は、ここで自然物の形相が離存する可能性が依然として考慮されていることに関しては「奇妙」と述べるに止め、解釈を *Metaph.* の課題として先送りしている。私は、自然物の形相が離存可能であるということが *Phys. II.2* で積極的に証明されているわけではないが、その可能性が留保されているので最後にこのような問いが提起されることになったと考える。私が目指しているのは、質料とともに一つの学の対象をなすとされている形相を、同時に離存しうるものとしても理解することが、いかにして可能であるのかを明らかにすることである。

る知り方はある限定のもとにおかれているといえる（医者による腱の知識も同様である。医者は生物学者とは異なる限定のもとで腱を理解する）。銅細工職人が青銅を知ると述べることは間違いではないが、銅細工職人は質料となる青銅を「ある程度まで」（*Phys.* II.2, 194a22-3）知るのである²⁹。これに対して、青銅を青銅として知ることを目指す者は、銅製品から切り離れた形で青銅を探求する。銅細工職人と青銅を青銅として知ることを目指す者は、このようにして同じ対象を異なる仕方で探求するのである。

これは質料に関する例だが、形相に関しても同じことを述べることができる。例えば、銅細工職人が青銅を用いて急須を作ろうとしていると想定してみよう。急須の形相は、いわば急須の機能であるということになるだろう（*Meteor.* IV.12, 390a10-3）。しかし、銅細工職人が関心をもつのは、青銅によって実現される限りにおける急須の機能に関する知識であり、青銅とは必ずしも関連しない急須の機能に関する知識、すなわち、急須と急須でないものを分ける厳密な基準といったものを求めるのは、彼の課題ではない。自然学者もまた、いわば質料と関連する限りでの形相と、形相と関連する限りでの質料を探求する。

このように、同じ対象に対して二通りの探求の仕方があるということが認められるならば、数学や第一哲学が扱うようなものが『自然学』において形相の例として与えられているということが、形相を生成変化の説明と関係づけるという試みを座礁させると考える必然性はなくなる。数学や第一哲学が扱うような対象が『自然学』において形相の例として導入されたのは、それらが、質料と関連する限りでという限定のもとでなら、自然現象を説明するために用いられ得るからなのである³⁰。

第5節 自然学の対象としての生成変化

本章冒頭で与えられた問いへと戻る前に、今まで論じられたことをまとめておこう。

まず私は、生成変化の四種のアイティアーの一つとして形相が挙げられる箇所、形相が本質の説明規定とされているということから、それを青銅や彫刻家と同じ仕方で、生成変

²⁹ 「青銅」と「銅製品と関連する限りでの青銅」という対比は、本論文第三章での非機能的質料と機能的質料の対比、及び本論文第四章での Charles 2009 と Caston 2009 の質料理解の対比から類比的に理解できる。なお、銅細工職人が「ある程度まで」青銅を知るということは、銅細工職人のもつ青銅の知識が青銅そのものを知る人の知識の一部のみであることを意味するわけではない。銅製品という目標を視野にいれた上で得られる青銅に関する知識は、青銅そのもののみを探求している人はもたないものでありうるからである。例えば、青銅そのものを探求の対象としている人が、どのような青銅が彫刻を作るのに適しているかという問いに答えることができないということはある。

³⁰ ではなぜアリストテレスは *Phys.* でアイティアーを列挙する場面で、一見する限りでは生成変化と簡単に結びつかないように見える数学の例をあえて用いているのかに関しては、上で述べたように、それが思惟において切り離しやすい、よって、他のアイティアーと区別しやすい、という点を理由として挙げることができるだろう。

化を引き起こすことに関わるものとして理解することは難しいと述べた。説明規定は、青銅や彫刻家とは違って時空上にその位置をもつものには思えない。この点に関しては、説明理論を構成するものとして本論文で理解された質料もまた、厳密に言えば時空上にその位置を特定することができないものなので、これと類比的に考えれば形相を奇妙と考える必要もなくなるということが示唆された。問題は、形相を質料と同じ仕方で生成変化を説明するものとして理解することができるのかという点である。明らかに生成変化の説明に欠かすことのできない質料とは違って、本質の説明規定である形相が生成変化を説明するために必要なかは必ずしも明らかではない。この点を論じるための手がかりとして、本論はフェアジョンによる研究を参照した。そこで明らかになったのは「始動因にもとづいた説明」によって示された形相に関しては、それを生成変化の説明を与えるものとして理解することができるという点であった。

私は、自然的な対象の形相がすべてこのような仕方で「始動因にもとづいた説明」によって示されるものではないという点から、「始動因にもとづいた説明」によって示されたもの以外の形相に対しても、それを生成変化の説明と関連づける必要があると主張し、その具体例を、「質料を示す説明」として機能するような「形相にもとづいた説明」に求めた。結果的に、形相を生成変化の説明と関連づけるという当初の目的は、かなりの程度達成されたことになる。

このような形相理解に対して深刻な疑問を提示するのが、『自然学』においてアリストテレスが形相の例として与えるものに、数学や第一哲学の対象となるものがあるという問題であった。これらは生成変化の説明を与えるようには思えないものであり、これらが『自然学』においても形相の代表例として扱われるべきものであるとすれば、上で私が与えた形相理解は根本的に不適切なものであるということが帰結してしまう。

これに答えるために私は、自然学者と（^{キーンネーシス}運動変化せず離存しうるものを対象とする）数学者の対比から始まり自然学者と第一哲学者の対比で終わる『自然学』第二巻第二章の文脈を確認した。そこで確認されたのは、数学者と自然学者が線や面といった同じ対象をしかし異なる仕方で探求するように、自然学者と第一哲学者もまた同じ対象を異なる仕方で探求する可能性が保持されているという点であった。自然学者は、数学者や第一哲学者が思惟において離存するものとして捉える対象を、思惟において離存しない限りにおいて、すなわちある質料と関連している限りにおいて探求する³¹。数学や第一哲学が扱う形相は、

³¹ ^{キーンネーシス}運動変化しないことと離存しうることの間には以下のようにまとめられることができる。何かのアイティ

確かに端的には生成変化と関連しないようなものとして映るかも知れない。しかし、これらは自然学者によって、生成変化と関連するような仕方を探求されることもできるものなのである。

以上の点を踏まえた上で、形相がそれ単独で何らかの生成変化を引き起こすとする解釈がもつ難点について言及したい。形相がそれ単独で何らかの生成変化を引き起こすという主張は、どのような仕方であれ、そこで問題となっている形相はそれ単独で把握されうるものであるという前提を必要とするだろう。それ単独で把握された形相は、上の区別で言えば質料から離存した形相である。問題は、このようなものを探求することを、自然学者の探求と呼べるのかという点である。形相を離存するものとして知ることが第一哲学者の仕事とされていたが、質料を抜きにして、すなわち、離存するものとしての形相を知らなければ熱くなることや熱さを感じることが理解できないのだとすれば、これらの生成変化はもはや自然学者の扱う対象ではなくなってしまう。生成変化のアイティアーを問う自然学者も「形相においては離存しうるが質料のうちにあるところのもの」として形相を知る必要があるということは、確かに明白に記されている。しかし、これが意味するのは「(質料と形相の結合体として述べられる)人間が人間を生む」ということを理解する際に、(イデア論者は離存しうると思うが必ずしもその点は明らかではない)人間の形相を、思惟において離存しない仕方、すなわちその質料と関連する限りにおいて知る必要があるということだけであり、人間の形相やイデアがそれ単独で何かを引き起こすといった事態ではない(*Metaph. A.3, 1070a26-30* 及び Judson 2000 も参照)³²。

それ自体で何らかの生成変化を引き起こすものとして形相を理解することが、アリストテレスの自然学の構想からして許容しがたい発想であるということを受け入れた上で、感覚を「感覚器官が、感覚器官自らの質料を伴って、感覚対象によって作用を受けながら、感覚対象の形相を受容すること」と述べるときにアリストテレスが一体何をしているのかを解釈するならば、それは以下のようなものになる。

キネーシス
 アーが運動変化しないものを対象にするということは、そのアイティアーが(少なくともそのままでは)生成変化の説明と関連しないことを意味する。また、何かを離存しうるということは、通常質料を伴って思い浮かべる対象の形相に関して、その形相を思惟において切り離して思い浮かべることができるということの意味する。生成変化の説明に関連するかという点と思惟において切り離すことができるかという点は、同じ論点ではないが密接に関連すると思われる。本論の理解では、アリストテレスは形相にこれらを適用することができるかに関して、どちらも限定的に肯定していたということになる。

³²本論とは異なる視点からではあるが、自然学が四種のアイティアーを必要とするものであるという点をもとに、どれか一つだけに負荷をかけるような解釈を批判するものとして、Bolton 2005 と 2011 を挙げることができる。

本章で私は、形相を本質の説明規定として理解することから自らの形相解釈を始めた。ここで直ちに問題となるのが、感覚対象の形相を受容する、すなわち、感覚対象の本質の説明規定を受容するという表現である。説明規定を時空上に位置するものとして理解しないことを明言した以上、それは例えば林檎を口を通して体内に受容といったことと類比的に捉えることはできない。説明規定に対しても適用できるような、何かを受容するという表現の例は、むしろ「知識と健康は、型式やある種の形相、または説明規定であり、いわば〔それらを〕受容するものの現実態である」(DA II.2, 414a8-10)³³と述べるアリストテレスの発言に見出すことができると思われる。ここでは、まさに今問題となっている説明規定と並んで、感覚の事例と同じく、形相の受容という表現が用いられている。その例として健康が挙げられているが、健康の受容は、外部から何らかの対象を取り込むといった仕方で理解される必要はない。ここで健康を受容するという表現が意味しているのは、単に健康になる、健康という述語が適用される対象になるということ以上のものではないのである³⁴。そして、誰かが健康なものになるという過程には、当然それに関連するような物的変化が認められるだろう。質料抜き形相そのものといった特殊な対象の存在や、それを我々は何らかの特殊な能力を用いて受容するのだといったことを前提する必要は、ここにはない。

結果的に私は、「感覚対象の形相を受容する」という表現は、「感覚対象を感覚する」ということを、感覚対象との関連を特に強調した形で表したものの以上何かではないと考える。すなわち私は、この表現を、何らかの仕方で存在している「質料から切り離された、物的・霊的な赤そのもの」を、感覚器官が何らかの特殊な力をもって取り込むといった、強い存在論的なコミットメントを要求する主張が述べられているものとしては理解しない。実際にアリストテレスは、感覚の説明を、「形相の受容」という言い方を一切用いない、よって外部から何かを取り込むといったことを連想させる可能性がより低いような、可能態と現実態の枠組みへと翻訳することもできるのである(DA II.5; III.2, 425b26-6a26)。

本論文第五章において私は、感覚が生じる際に認められる変化として次の二つを挙げた。

³³ τούτων δ' ἡ μὲν ἐπιστήμη τε καὶ ὑγίεια μορφή καὶ εἶδος τι καὶ λόγος καὶ οἶον ἐνέργεια τοῦ δεκτικοῦ

³⁴ これは、例えば英語の catch a cold といった表現と類比的に理解することができる。catch という動作が言及されているからといって、この表現が、この世界のどこかにつかむことのできる風邪と呼ばれる対象が存在しているということを含意するわけではない。医者が患者を治療するということが、「形相の受容」という表現を一切用いずに説明される例としては、*Metaph. Z.7*, 1032a25-b30 (患者が医者助けを借りず自ずから健康になることもあるという点に関しては、特に 1032b21-6)、「受容」という表現が外部から何らかの対象を取り込むことを意味していないと思われる箇所としては、他に *Cat. 5*, 4a10-21 (特に、4a20-21); 10, 12a29-31; *GC I.4*, 320a2-3; *Somn. 1*, 453b24-31 など。

- 感覚器官が感覚対象の形相を受容する
- 感覚器官の質料が感覚対象によって、その比に従って作用を受ける

これは、それぞれ感覚の形相的説明と質料的説明に相当するものであるといえる。「感覚の何であるか」を示す上の形相的説明を、「赤そのもの」を受容するといった特殊な意味合いをもつものとして理解しない場合、これらは次のように述べ直されることができる。

- 感覚器官に赤いものを感覚するという感覚的变化が生じる
- 感覚器官に赤いものによる物的変化が生じる

これらは、それ自体としてはほとんど情報量をもたない形式的な定式化に過ぎないように見える。にもかかわらず、このような定式化を与えることは、アリストテレスにとって以後の感覚に関する探求を進める上で欠かすことのできない重要な作業であったと思われる。ここで与えられたのは、いわば感覚という生成変化をさらに分析するための、説明の出発点となる文型だからである。本章第三節において私は、人間の定義がその質料を探求する際の出発点となりうるということを示す例を与えた。上の定式化もまた、感覚するとはどのようなことか、感覚対象とはどのようなものか、感覚器官とはどのようなものか、また、感覚対象が感覚器官に生じさせる変化とはどのようなものかを探求するに際して、いわば出発点となる。『デ・アニマ』第二巻第十二章でアリストテレスが行ったことは、感覚という生成変化を分析するための文型を与え、それに感覚対象や感覚器官がある比からなるといった彼の理解を当てはめながら、感覚の定式化を洗練していく作業だったのである³⁵。

以上、私は質料形相論を、質料から切り離された「物的な赤そのもの」や「霊的な赤そのもの」の存在にコミットすることを要求するような理論として提示する代わりに、「Gの本質の説明規定」と「Gになりうるもの」からなる、Gを説明するための型を与える説明理論として理解する可能性を示した。しかし、本当に質料形相論が、特に、形相が何らかの存在論的なコミットメントを要求しないようなものなのかに関しては、まだ乗り越えるべき問題が残されている。本論文最後の章となる次章で、私はこれらを取り上げながら、説明理論としての質料形相論理解をさらに擁護することを試みる。

³⁵説明の型とそれを拡張した説明の関係に関しては、本論文第四章における三つの説明の様式の考察を参照せよ。

第7章 存在における離存性と質料抜ききの形相

前章の後半部で私は、思惟において離存しうるような形相をいかに自然学者が扱うのかという問題を論じた。その際の「形相が思惟において離存する」ことは、例えば人間の形相である「人間の本質の説明規定」が、人間が経験しうる運動変化^{キネネーシス}や、人間を構成し人間が運動変化^{キネネーシス}することを可能にする肉や骨といった質料への言及なく与えられるということの意味していた。本質の説明規定が質料や運動変化^{キネネーシス}への言及を含むのか否かという問題は、(*Phys.* II.2 では含まない可能性がやや消極的に認められたが) アリストテレスにとって何度も論じ直されるに値する非常に大きな問題であり、最終的に彼がその問題を解決したのか、解決したならその解決はどのようなものであったのかをめぐっては論争が続いている。しかし、前章で確認したとおり、この点に決着をつけずとも、形相が生成変化の説明のために有用なものであるということを示すことはできる。形相が思惟において切り離され得るものであれそうでないものであれ、自然学者はそれを質料との関わりのもとで限定した形で探求することができるのである。

しかし、説明理論を構成するものとして形相を理解するという試みが成功するためには、まだいくつか答えなければならない問いが残っている。一つは次のものである。前章で論じられたのは、思惟において切り離されうる形相が、切り離されないものとしてならば、生成変化を説明するに際して役に立つという点であった。形相が思惟において切り離され得るということは、切り離された形相が実際にありうるということの意味すると思われるが、その場合の形相は一体何を説明しているのだろうか。この点に関しては、手短に次のような答えを返すことができる。切り離されたものとしての形相は、例えば数学的なものである。数学は、生成変化するものを扱うわけではないが、数学的説明(証明)というものは当然存在するので、切り離されたものとしての形相を、生成変化しないものの学を構成し、生成変化しないものに関する説明を提供するものとして理解することは可能である。これは、前章で確認したフェアジョンの議論において、形相にもとづいた説明の典型例が数学に求められていたことや、アリストテレス本人が形相の代表例として度々数学的な定義を挙げていることなどからも確認することができる。すなわち、思惟における離存性が問題になっている限り、離存していないものとしてそれを扱おうと、離存したものとしてそれを扱おうと、何かを説明するものとして形相を理解することは可能である。形相は生成変化するものを説明するか、もしくは生成変化しないものを説明する。

これに対して、次の問題は深刻である。形相に関連づけられることのある離存性には、思惟における離存性とは異なるもう一つの離存性である「存在における離存性」がある。存在における離存性が具体的に何を意味しているのかは問題だが、仮にこれを「私と目の前のテーブルは互いなしにも存在しうる」といった意味での、存在における非依存的な関係を指すものとして理解した場合、存在における離存性を形相に認めることは、いかなる具体的な自然物（及びその質料）にも依存することなく独立して存在する形相があることを認めることを意味する。その場合、形相は、ある対象を説明する限りにおいてそれと呼ばれるもの、すなわち、ある対象との関連においてのみ把握されうるようなものではなく、他の事物との関係に左右されない存在者、他の事物に関連づけられずにまさにそれ自体でアイデンティティを持つ何らかの存在者であったということになるだろう。これは、この世界に形相という種類に属することをその本質とする実体的存在者がいるとする存在論的な主張である。具体的に何がそのような存在者なのかを定めるのは難しいが、^{ヌース}知性（の一部）や神といったものを、その候補としてまず挙げることができるだろう。

本章ではこの存在における形相の離存性をどう理解するかが問題となるが、これと密接に関連するものとして、本論文第五章でも言及された「質料抜きき」という表現の解釈も取り上げる。何かが質料抜ききの存在者であるということは、形相のみからなる存在者があるということの意味するようになるので、この表現もまた、アリストテレスがまさに「形相」として同定される特定の種類の存在者があることを認めていたとする解釈を擁護するものであるように思われる。説明理論から離脱するものとして形相を理解することを強いるこれらの解釈に対抗し、説明理論の内部に形相を留まらせることが本章の目的となる。

第1節 導入

前章で私は、『自然学』第二巻第三章にもとづいて形相を「本質の説明規定」として理解することから出発し、それがどのような仕方で生成変化の説明を与えるのかを論じた。しかし、「本質の説明規定」が形相とは何かという問いに対する唯一の答えかという点に関しては、まさに上で問題となった存在における離存性の解釈の問題からも垣間見ることができるよう、様々な異論がありうる。このような複雑さが生じた第一の要因は、いうまでもなくアリストテレスがあまりにも雑多なものを形相という言葉で指しており、形相に関する記述には矛盾するよう見えるものが散見されるという事実である（Anscombe and Geach 1961, 75）。もう一つ要因として挙げることは、形相という概念がアリストテレ

スの純粋な発明ではないという点にある。形相を指す際にアリストテレスが用いるギリシア語 *εἶδος* は、プラトンのアイデアを指す際にもまったく同じ形で用いられることがある。単に言葉が同じというだけでなく、アリストテレスは自らの「形相」に近いものを実際に先人たちが、特にプラトンが考察していたことを認めている (*Metaph.* A.6; A.7, 988a34-b6)。しかし、一方ではそれを自らの形相と類似したものとして扱いながら、同時にアリストテレスはプラトンのアイデアを（ときに空疎な囀りにすぎないとすら述べながら）厳しく批判してもいる (*APo.* I.22, 83a32-4; *GC* II.9, 335b17-24; *Metaph.* A.9; Λ.3, 1070a26-30; M)。このような事態は、アリストテレスの形相であれプラトンのアイデアであれ、Gを理解するために用いられる「G そのもの」や「Gの本質の説明規定」といったものを何らかの仕方で想定することが全面的に間違っているわけではない、ということを示すと同時に、それをどのように捉えるかに対して様々な見解の相違がありうるということも示しているように思われる。

上の点と関連して、形相とは何かという問いを設定することを難しくするさらなる要因は、それを設定する際の参照軸となるような主張や論点がまったく定まらないという点にある。アリストテレス独自の概念である形相の特徴を明らかにするために比較の対象として持ちだされるのは往々にしてプラトンのアイデアだが、そもそもプラトンのアイデアとは何かという点に関して、解釈者の合意は得られていない¹。よって、現状として形相とは何か、すなわち、形相と形相でないものを分ける基準はどこにあるのかという問いは、この言葉が使われている様々な文脈に個別に対応した形で、かつ解釈者が恣意的な仕方で設定せざるをえない何らかの方針にもとづいてしか問われることができないようなものになっている²。本論もまた、形相とは何かという問いと関連するすべての文脈を考慮に入れ、問いうるすべての論点を網羅的に検討することを目標とはしない。本論で注目するのは、説明理論を構成するものとして形相を理解するという方針と、上で述べた存在における離存性及び「質料抜き」という表現の整合性のみである。

存在における離存性は様々な箇所やや異なった表現を用いて論じられるが、その内実

¹ アイデアはこの世ではない別の世界に存在する何らかの真の実体であるという説明がなされることはよくある（アイデアの二世界論）。しかし、このような解釈に対しても、例えば Fine 1984 などがアイデアの二世界論のようなものをプラトンに帰することの是非そのものに疑義を呈している（この点に関しては、納富 2015 も参照）。

² （あまりにも多くの問題を内包しているとされる *Metaph.* を排除した上で）アリストテレスの著作を幅広く考慮し、形相という概念は絶望的に混乱しているという結論を下すものとして Bostock 2006 を、*Metaph.* だけに注目して 20 を超える用例を列挙したものとして Studtmann 2008 を挙げることができる。なお、スコラ哲学を経由した実体形相に的を絞ったものではあるが、形相概念に対するより古典的な批判としては、Descartes 1642, 506 を挙げるができる。

は基本的には次のように定式化することができる³。

[存在における離存性]

X は、Y から独立して、すなわち Y が存在することなしに存在しうる場合、Y から存在において離存している。

例えば、私と目の前のテーブルは、お互いのどちらかが消滅した後にも存在することができる。一つの、またはすべてのテーブルがなくなったからといって、私が私以外の何か異なるものになることはないし、私が突如痕跡を残さず消えてなくなるということもない。その意味では、私とテーブルは存在において互いから離存しているといえる。私とテーブルといった例にも適用可能であることから分かるように、存在における離存性は形相のみに適用されるものではない。むしろ、アリストテレスにとって、存在における離存性は実体にこそ最も明白な形で帰されるものであり、形相に関連してこれが問題になるのは、形相が何らかの意味で実体であるということが認められるという前提のもとである (*Metaph.* Δ.11, 1019a1-4; Z.1, 1028a31-b2; Z.3, 1029a27-30; H.1, 1042a29-31)⁴。

存在における離存性をこのように理解し、形相を字義通りに「本質の説明規定」として取るならば、形相が存在において離存するということは基本的にはありえないことのように思われる。私は、この世界からすべてのテーブルが消滅した後にもそのまま存在することができる。しかし、テーブルの本質の説明規定は、テーブルがまったく存在しなかった場合にはあると認められることが難しいものに思われる。それが規定するところの対象がまったく存在しない説明規定は、「二倍であるところのものを持たない半分」と同じく理解不可能なものに聞こえる。にもかかわらず存在における離存性が帰される形相があるということは、やはり形相は単なる本質の説明規定以上の何か、例えば、死後にも残るとされる知性^{ヌース}の一部や神のようなものに準じて捉えるべき対象であったということの意味するのではないか。

³存在における離存性と特に関連する箇所としては、*Metaph.* Δ.11, 1019a1-4; Z.1, 1028a31-b2; H.1, 1042a28-32; M.2, 1077a36-b11 など。なお、アリストテレスの著作において、離存性は多義的に用いられる。離存性には、場所における離存性、時間における離存性、思惟における離存性（または、定義における離存性）及び本章で問題になる存在における離存性などが含まれる。これら相互の関係をどう理解するかは、論争になっている（これに関連する問題を論じた近年の論考として Fine 1984, Corkum 2008 や Miller 2012 など）。さらに、存在における離存性に密接に関連するものとして存在における優位性の問題があるが、これは本論文では扱わない。

⁴この場合、形相が何から存在において離存するとされているのかという点が問題になる。候補になるのは、(1) 問題となっている形相以外の形相、(2) それが形相であるところの結合体、(3) その結合体の質料、である。本論では、形相の存在における離存性としてまず 2 の事例を想定しているが、これが認められれば 3 もまた必然的に認められるだろう。1 に関しては、本論では考慮しない。

しかし、知性^{ヌース}の一部や神を形相の代表例として捉え、これに準じる形で他の形相をも理解しようとする試みには、アリストテレス哲学全体の整合性の観点からすれば大きな問題が残る。それは、知性^{ヌース}の一部や神に準じた形ですべての形相を理解した場合、アリストテレスがプラトンのアイデアに対して加えた手厳しい批判の多くが、そのまま彼自身の形相に対しても適用されてしまうことになるのではという懸念である⁵。このような問題があるにもかかわらず、存在における離存性や、本章で後ほど改めて論じられる「質料抜き」といった表現をもとに、結合体から切り離され得るような形相の存在を前面に押し出す解釈は、本論文第五章で確認したりテラリストやスピリチュアリストによる、形相を質料から切り離された物的もしくは霊的な赤そのものとみなす主張からもその影響力を垣間見ることができるよう、根強いものである。

知性^{ヌース}の一部や神が形相の代表例とされるとき、そこで認められているのは、伝統的な呼称に従えば、いわゆる「純粹形相」の存在である⁶。幾人かの研究者は、そもそもこのようなものを本当にアリストテレスに認めることができるのかに対して疑問を提起した（Ryan 1973 及び Brennan 1981）。純粹形相を否定する論者にとって最も有利な点は、アリストテレスがはっきりと「形相が存在において離存する」や「神やプシューケーは質料抜きの純粹形相である」と述べていると読み取れる箇所がほぼ存在しない、または、そのほとんどが何らかの仕方で（例えば私が本論文第五章で示したように）疑うことができる箇所であるという事実である。本論は、説明理論としての質料形相論理解を全面に出すことから出発しているという点でこれらの先行研究と立場を異にするが、純粹形相といったものを端的には認めないといった点においてはこれらと方向性を同じくする。結果的に私は、知性^{ヌース}の一部や神といったものを形相の代表例として考えてはいけないと本章で主張することになるだろう。

まず第二節において私は、形相に帰される存在における離存性と「質料抜き」という限定を理解するための準備として、前章で提示した本質の説明規定としての形相に、本論文第二章と第三章において質料を議論する際に示されたような多様性が認められるという点を確認する。本質という言葉が、通常は何か決定的で必要十分なものを示すように見えることから分かるように、本質の説明規定である形相に多様性が認められるという主張は一見異様に響く。しかし、『自然学』第二巻第三章では質料の場合と同じく形相に関してもそ

⁵ プラトン主義とアリストテレスとの複雑な関係については、Owen 1966。

⁶ アリストテレスを解釈したものではないが、純粹形相という発想を現代的な存在論として練り上げようと試みたものとしては、Lowe 1998 を挙げるができる。

れが認められており、よってその内実を理解することが必要とされる。第三節においては、この多様性の理解をもとに形相に帰される存在における離存性の問題を扱う。そこで私は、形相の存在における離存性を、形相の多様性の一端を担う付帯的な形相と関連づけて理解することを試みる。形相が付帯的にのみ存在において離存するという事は、形相の存在における離存性が、説明理論を構成するものとしての形相理解を破壊しないような仕方で、限定的にのみ認められるものであるということを示すと私は考える。存在における離存性に続いて第四節で問題となるのは、アリストテレスが度々用いる「質料抜きき」という表現である。これは、一見質料をもたず、形相のみからなるものが存在するとする主張を含意するように見える。本論で私は、それが用いられている文脈や表現に注目することから、そのような解釈を避けることを試みる。以上の議論が成功すれば、「存在における離存性」や「質料抜きき」といった表現をアリストテレスが用いているにもかかわらず、それらが、形相を説明理論を構成するものとする解釈を破棄するようなものではないということが示されるだろう。

第2節 形相的説明の多様性

アリストテレスのアイティアー論を現代的な原因論よりも広い射程をもつ説明の理論として理解することを試みた論文で、モラフチックはアリストテレス自身が与えている区別に依拠しながら、個別的と一般的、自体的と付帯的⁷、単純と複雑、可能的と現実的といった様々な基準を用いてアイティアーを分類した (Moravcsik 1974)⁸。これらの区分を四種のアイティアーに適用すれば、形式上アリストテレスは64種類の説明を与えることができたということになる。しかし、このような図式を提示したモラフチック本人も認めるように (15-6)、実際に64種類の説明すべての具体例を与えることはまったくもって簡単ではない。本章の主題となる形相は、彼の論文では「構造」として理解されている (8-9)。問題は、例えば像の始動因に関しては、自体的なそれである彫刻家に対応する付帯的なそれとしてポリュクレイトスを挙げることができるのに対して、形相に関しては、自体的な形相である「像の構造」に対応するような付帯的な何かを挙げるのが非常に難しいという点にある。ポリュクレイトスは、それ自体としては像と論理的な関連をもたないが、彫刻家

⁷モラフチックは essential-accidental という言葉を用いているので本来は「本質的と付帯的」と訳すべきだが、本論では第二章からの用語法との一貫性を保ち、「本質」を特に形相との関連で限定的に用いるために、「自体的と付帯的」と訳す。

⁸モラフチックと親和的な仕方で、アイティアー論を原因論ではなく説明論として読み解く論者に関しては、本論文第二章注 22 を参照。

でありうる。これに対応するものとして、像と論理的関連をもたないが付帯的に像の構造でありうるような何かを想定することはできるのだろうか⁹。

かといって像の付帯的な形相の存在を否定することは、付帯的と自体的といった区別がすべてのアイティアーに適用されるとするアリストテレスの言葉に真っ向から対立する (*Phys.* II.3, 195a26-b12; *Metaph.* Δ.2, 1013b28-4a15)。付帯的な形相を適切に位置づけるために、まず形相が四種のアイティアーの一つとしてどのように導入されていたのかを改めて確認しよう。アリストテレスは、形相は次のようなものであると述べていた。

1. 「〔それで〕あるとはそもそもどういうことだったのか〔=本質〕」の説明規定

2. その〔=その説明規定に該当するものの〕類

(例えば、オクターヴの〔形相〕は「〔特定の比である〕一に対する二」であり、一般的には「数」である)

及び、

3. その説明規定に含まれる部分

(*Phys.* II.3, 194b26-9)¹⁰

注目すべきは、ここですでに形相にある種の多様性が認められているという点である。さらにアリストテレスは、少し議論が進んだところで「一に対する二」が「数」よりもオクターヴの形相として近いと述べており (*Phys.* II.3, 195a29-32)、以下で説明するように、多様な形相の間に遠近の関係を認めている。

- 一に対する二
- 数

問題となるのは、異なる距離に位置するこの二つの形相の関係を具体的にどう理解するかという点である。ここで一つの対象に対して形相が二つ与えられているということが、「一に対する二」と「数」は(人間と犬のように)互いが存在において互いから離存する二

⁹この章での形相における自体的・付帯的の区別は、中世の哲学者たちが用いた、ある対象が本質的に有する実体形相 (*forma substantialis*) と、その対象が偶然的に有する色といった付帯形相 (*forma accidentalis*) の区別に対応するものではない。色といった付帯形相は、すでに生成した後の対象に対して偶然的に属するものであり、対象の生成に関しては役割をもたない。これに対して、本論における付帯的な形相は、(像の生成に対するポリュクレイトスがそうであるように)まさに対象の生成に関係するものでなければならない。この区別に関連するものとして、本論文第二章第五節でまとめた、自体的・付帯的の二種の区別を参照せよ。

¹⁰ ἄλλον δὲ τὸ εἶδος καὶ τὸ παράδειγμα, τοῦτο δ' ἐστὶν ὁ λόγος ὁ τοῦ τί ἦν εἶναι καὶ τὰ τούτου γένη (οἶον τοῦ διὰ πασῶν τὰ δύο πρὸς ἓν, καὶ ὅλως ὁ ἀριθμὸς) καὶ τὰ μέρη τὰ ἐν τῷ λόγῳ.

つの形相であり、このような形相二つがオクターヴに対してあるのだ、ということの意味しているようには思えない。前者を近い形相、後者を遠い形相として挙げる際、アリストテレスはここでの遠近を説明する例として、始動因における「医者」と「技術者」をとともに考慮に入れる。技術者はいわば医者が属する類であるが、ここで想定されているのは、健康が生じるために、医者と技術者という二つの互いに存在において離存する始動因が必要となるということではない。医者は、同時に技術者でなければならないのである。

私はここで、像の始動因として「技術者」を挙げることに、その「技術者」はどのような存在者なのか、すなわち、それは何らかの普遍としての実体なのか、それとも特定の实体において実現されている性質なのかといった問いを区別したい。前者は誰もが日常会話において問題なく用いることのできるものであるが、それを用いるからといって後者に関しても態度決定をしなければならないということはないからである。形相に関しても、それは実体なのかそれとも他の何かなのかといった存在論的な問いをいったん留保した場合、何かが形相であるための基準は以下のようなものになる。

[形相の基準]

X は、それが Y の何であるかを何らかの仕方で示す場合、Y の形相である¹¹

「一に対する二」は、オクターヴとは何であることを示す。その点においては、「数」もまた同様である。「数」と述べたからといって、オクターヴの何であるかが必要十分な仕方で示されるわけではないが、それは依然としてオクターヴとは何であることを知るに際して有用な情報を与えているといえる。

存在における形相の離存性は、上で与えた形相の基準とは異なるものを形相の基準として採用することを強いる。アリストテレスは、存在において離存するものは実体であると考えているので、形相にこの離存性が認められた場合、形相は必ずしも何かを説明している必要のない、存在論的に特定の位置を占めるものであるということになる。本論での私の目的は、形相の基準を何らかの存在論的な主張を含むものとして理解することを強いるように思われる「存在における離存性」や「質料抜きき」といった限定を検討することで、これらが実際は上で与えた形相の基準の変更を要求するようなものではないということを示すことである。付帯的な形相の位置づけを考えることは、そのための一歩である。

具体的に付帯的な形相の位置づけを考察する前に、自体的と付帯的の区別と遠近の関係

¹¹これに対応するものとして、本論文第三章で私が与えた様々な質料の基準を参照されたい。

に関して明らかにしておくべき点がまだ一つ残っている。アリストテレスは始動因の多様性を説明するために、『自然学』第二巻第三章 195a3-b6 において次のような様々な例を与えている。

始動因	結果	自体的・付带的	遠近における位置
医者	健康	自体的	近い
技術者		自体的に付带的	医者より遠い
彫刻家	像	自体的	近い
ポリュクレイトス		付带的	近い
人間		付带的	ポリュクレイトスより遠い
動物		付带的	人間より遠い
白いもの		付带的	動物より遠い
教養あるもの		付带的	動物より遠い

自体的と付带的の区別の内実に関してはすでに本論文第二章において、遠近に関しては第三章において議論したが、医者と技術者の関係と彫刻家とポリュクレイトスの関係との違いをどのように理解するかという点に関してはまだ説明の余地がある。技術者であることは必ずしも医者であることを保証しないので、「技術者」を健康の自体的な始動因を述べたものとして考えることはできないように思われる。問題は、技術者の例が、付带的な説明を解説する箇所の前で挙げられているので、それを付带的な始動因として考えることもできないように見えるという点である。実際に、医者と技術者の関係は、自体的な始動因と付带的な始動因の典型例となっている彫刻家とポリュクレイトスの関係と同じではない。自体的な始動因である彫刻家と付带的な始動因であるポリュクレイトスの関係は、互いに完全に偶然的である。彫刻家であるためにポリュクレイトスである必然性はまったくないし、その逆も同様である。しかし、医者と技術者の関係はこれとは異なる。技術者であるために医者であることは必要ではないが、医者であるためには、同時に技術者である必要がある。その意味では、技術者は像の厳密な自体的始動因ではないが、端的に付带的な始動因であるわけでもない。

これを正確にアリストテレスが何と呼ぶのかは問題だが、本論ではこの点をこれ以上追求することはしない¹²。本論文にとって大事なものは、いかなる仕方で医者に対する技術者

¹²自体的と付带的の複雑な関係を整理することを試みたものとして、Tierney 2001 を挙げることができる。

の例を表現しようと、そのようなものをもアリストテレスが遠近の中に含んでいるという点と¹³、厳密には技術者を健康の自体的な始動因と考えることはできないという点である。よって本論では、技術者に相当する例は付帯的な始動因であるポリュクレイトスなどに準じて扱うことにする。このような多様性が形相に対しても認められているという点に注意した上で、付帯的な形相と存在における離存性の問題を論じるために節を改めよう。

第3節 付帯的な形相と存在における離存性

上で述べられた形相の多様性は、形相に帰される存在における離存性を理解するに際してどのような意味をもつのだろうか。本論では、この点を考察するために、まず付帯的な形相に具体的に相当するものの例を模索することから始める。『自然学』第二巻第三章では、形相の例として、オクターヴにおける「一に対する二」と「数」というものが与えられたが、これは上で表として挙げた始動因の様々な区別でいえば、健康に対する医者と技術者に相当するものであると考えることができる。数でないような「一に対する二」は存在しえないので、「一に対する二」と「数」の関係は彫刻家とポリュクレイトスの関係としては理解することができない。それでは、彫刻家でないことがありうる付帯的な始動因であるポリュクレイトスに対応するような形相はあるのだろうか。残念ながらアリストテレスは、『自然学』第二巻第三章ではこれを考えるための手がかりをまったく残していない。しかし、ポリュクレイトスが像に対してもつ関係性を、必ずしも像の始動因としての彫刻家であることなく存在することができるという点にもとめるならば、これに類似したものを形相としてアリストテレスが挙げていると思われる箇所は少なくない。

キネーシス
運動変化を生じさせるものとして〔何かを〕説明するものは〔結果より〕先に生じて
アイテイオン
いるが、説明規定として〔何かを説明するもの〕は〔結果と〕同時にある。というのは、人間が健康であるときに健康があるのだし、青銅製の球の形は、青銅製の球と同時にあるからである。ただし、何らかのもの〔＝形相〕が後にも〔＝それが形相であるところのものが消滅したときにも〕残るかどうかは、考察されなければならない。というのも、いくつかのものに関しては、〔形相が残ることを〕妨げるものがないからである。例えば、もしプシューケーがそのようなものである場合〔がそうである〕(すべての〔プシューケー〕ではなく、知性^{ヌース}がそうである。というのも、す

¹³ *Phys.* II.3, 195b23-5 において、アリストテレスは人間と建築家をともに家の始動因とした上で、その遠近を論じている。

すべての〔プシューケー〕がそのようであること〔＝それが形相であるところのものが消滅した後にも残ること〕は恐らく不可能なので、

(*Metaph. A.3, 1070a21-6*)¹⁴

ここで説明規定として何かを説明するもの、すなわち形相であるとされている健康や青銅製の球の形は、それを形相とするところのもの（健康なものや青銅製の球）が存在する限りにおいてあると言われることができる。その意味では、健康や青銅製の球の形が、健康なものや青銅製の球と自体的な関係にあると述べることには何の問題もないように思われる。問題は、これらとは区別されているプシューケーの部分の例である。アリストテレスは、プシューケーの一部とされている知性^{ヌース}は、それが形相であるところのもの、すなわち人間が死んだ後にも恐らく残ると考えている。

健康や形からプシューケーを区別する上の一節に関して、形相として挙げられたものがそれを形相とするところのものが消滅した後にも残るか否かといった点以外に注目すべきは、それらの形相が何かの形相である仕方そのものの違いである。知性^{ヌース}が人間に対してもつ関係は、人間が消滅した後にも残るといった点以外にも、健康や青銅製の球の形が健康なものや青銅製の球に対してもつ関係と根本的に異なるように思われる。健康なものであることの本質がまさに健康によって、青銅製の球であることの本質が青銅製の球の形によって必要十分な仕方^{ヌース}で説明されているのに対して、知性^{ヌース}が人間の本質を必要十分な仕方^{ヌース}で示しているのかは疑わしい。知性^{ヌース}は人間のプシューケーの一部でしかなく、かつ人間よりも高貴なもの（かりにそのようなものの存在が認められた場合）に対しても認められうるとされている（*DA II.3, 414b16-9; EN X.7, 1177a12-8*）。

そもそも知性^{ヌース}は、前節で挙げられた三種のもの（本質の説明規定、そこで指示されているものの類または部分）のどれに相当する仕方^{ヌース}で、人間の形相となっているのだろうか。まず、上で既に述べたように、知性^{ヌース}は人間の本質の説明規定として必要十分なものではない。また、知性^{ヌース}は、「一に対する二」に対する「数」のように、何らかのものに対してその類となっているようにも思えない。恐らく候補として考えうるのは、知性^{ヌース}が人間の本質の説明規定で指示されるもの（すなわち、プシューケー）の部分であるという可能性である。『自然学』第二巻第三章では部分としての形相の詳細を考察するための例は挙がっていない

¹⁴τὰ μὲν οὖν κινούμενα αἴτια ὡς προγεγενημένα ὄντα, τὰ δ' ὡς ὁ λόγος ἅμα. ὅτε γὰρ ὑγιαίνει ὁ ἄνθρωπος, τότε καὶ ἡ ὑγίεια ἔστιν, καὶ τὸ σχῆμα τῆς χαλκῆς σφαίρας ἅμα καὶ ἡ χαλκῆ σφαῖρα (εἰ δὲ καὶ ὑστερόν τι ὑπομένει, σκεπτέον· ἐπ' ἐνίων γὰρ οὐδὲν κωλύει, οἷον εἰ ἡ ψυχὴ τοιοῦτον, μὴ πᾶσα ἀλλ' ὁ νοῦς· πᾶσαν γὰρ ἀδύνατον ἴσως).

が、『形而上学』Z巻第十章 1034b24-6 でアリストテレスは、^{ストイケイオン} 字^{シュラベ}母^{ストイケイオン}を音節の説明規定の部分であるとしている¹⁵。この例と音節及び^{シュラベ}字^{ストイケイオン}母に関するより辞書的な説明を与える『詩学』第二十章での記述をもとに、^{シュラベ}音節の形相を述べたものを幾つか再構成してみよう。

[^{シュラベ}音節の形相]

1. 音声をもたないものと音声をもつものから合成された、意味を持たない音声 (*Poet.* 20, 1456b34-6)¹⁶
2. ^{レクシス}語法と関連するもの (*Poet.* 20, 1456b20)
3. ^{ストイケイオン}字^{シュラベ}母 (*Metaph.* Z.10, 1034b24-6)

『詩学』第二十章においてアリストテレスは、^{レクシス}語法を構成する様々な要素の一例として、^{ストイケイオン}字^{シュラベ}母と^{ストイケイオン}音節を挙げている。字^{シュラベ}母は不可分音声とされており、これには現代の子音や母音が相当すると思われる。アリストテレスは子音を（動物の鳴き声のように）それだけでは判明に聞き分けることのできないものと考え、その意味でこれを（それだけでは）音声をもたないものと呼ぶ。これに対して、母音はそれ自体で聞き分けることのできるものとされており、音声をもつものと呼ばれる。^{シュラベ}音節はこれらが合わさったものだが、特に音声をもつものともたないものが、まだ語をなさない仕方で一緒になったものを指す。

すでに明らかであるように、1は^{シュラベ}音節とは何かを必要十分な仕方で説明したもの、2はそこで指示されたものの類、3はその部分に対応する。1に相当するものを自体的な形相と呼ぶならば、それ以外の2と3に相当するものは、付帯的な形相として考えることができるだろう。これらのうち、まず1に相当するものが^{ヌース}知性的のように存在において離存するということはあるに等しい。これは、健康なものが存在しないところに健康だけがあるという主張に等しいからである。「^{レクシス}語法と関連するもの」は、^{シュラベ}音節だけの形相ではないという点で、^{シュラベ}音節から離存しうるといえるように思われる。しかし、このような離存性は（人間や犬に対する）赤や白といった性質に対しても認められる程度のものであり、^{ヌース}知性的

¹⁵ 実際はアリストテレスは、この箇所では^{ストイケイオン}字^{シュラベ}母の説明規定が^{ストイケイオン}音節の説明規定に含まれるという表現を用いている。ただし、直後の*Metaph.* Z.10, 1035a11では^{ストイケイオン}字^{シュラベ}母が^{ストイケイオン}音節の形相の説明規定の部分であり、説明規定の部分である^{ストイケイオン}字^{ストイケイオン}母は質料としての^{ストイケイオン}字^{ストイケイオン}母ではないという表現がなされている（後者は、*Phys.* II.3, 195a16などで質料の例として挙げられる^{ストイケイオン}字^{ストイケイオン}母と同じであると思われる）。ここで「^{ストイケイオン}字^{ストイケイオン}母の説明規定」と「^{ストイケイオン}字^{ストイケイオン}母」という二つの表現がなされている理由は、説明規定の部分となるものを、結合体の質料となるものとしての^{ストイケイオン}字^{ストイケイオン}母から、「^{ストイケイオン}字^{ストイケイオン}母の説明規定」という表現を用いることで特に区別するためであると思われる。これらの区別は本論文でも維持されるが、質料としての^{ストイケイオン}字^{ストイケイオン}母は問題にされないの、煩雑をさけるために、「^{ストイケイオン}字^{ストイケイオン}母」と記すことで説明規定の部分となる「^{ストイケイオン}字^{ストイケイオン}母」のみを指すこととする。

¹⁶ συλλαβὴ δὲ ἐστὶν φωνὴ ἄσημος συνθετὴ ἐξ ἀφώνου καὶ φωνῆν ἔχοντος·

それとは異なる。恐らく知性^{ヌース}は、それを形相とする人間といったものがすべて滅んでも残ることが可能なものとして想定されていると思われる。しかし、「語法^{レクシス}と関連するもの」は何かの類である以上、その類に属するもののどれかには存在において依存する。

私が注目するのは3であるが、これにはやや込み入った説明が必要となる。アリストテレスは、^{ストイケイオン}字^{シュラベ}母は音節を構成するものであると述べた上で、動物もまた聞き分けることのできない音声を発するが、それは^{ストイケイオン}字^{シュラベ}母ではないと述べる (*Poet.* 20, 1456b23-5)。動物の発する聞き分けることのできない音声が(人間の発する聞き分けることのできない音声とは違って)^{ストイケイオン}字^{シュラベ}母ではないとされている理由は、それが音節を構成することがないという点に求められているので、そこからは、^{シュラベ}音節を構成しないような^{ストイケイオン}字^{シュラベ}母は存在しないということ、すなわち、^{ストイケイオン}字^{シュラベ}母が音節に存在において依存しているということが帰結する。これは、^{ストイケイオン}字^{シュラベ}母であるということが、^{シュラベ}音節を構成するという機能によって規定されていることを考慮すれば、当然の帰結であると言える。

このような状況から逃れ、^{シュラベ}音節が滅びた後にも残る形相を模索するための手がかりは、まさに動物と人間が共通して「聞き分けることのできない音声」を発するという点に見出すことができる。^{ストイケイオン}字^{シュラベ}母の一種であるとされる子音は、動物がそれと同じ音を発している以上、決してそれ単独で発音することが不可能な音ではない。だとすれば、アリストテレスが子音の例として挙げる音、すなわち Γ や Δ といった音は、^{シュラベ}音節が滅びるからといって共に滅びる必要がないということになるだろう。これに類比的に考えれば、人間の形相を述べたものとしては以下のようなものを想定することができる。

[人間の形相]

1. 栄養摂取し、感覚し、思惟する能力 = 栄養摂取のプシューケー、感覚のプシューケー、思惟のプシューケー
2. 生命活動を行う能力 = プシューケー
3. 思惟する能力 = 思惟のプシューケー
4. ^{ヌース}知性

最初のものは必要十分な形で述べられた形相に、二番目のものはそこで述べられたものの類に、三番目のものは部分に相当する。説明を要するのは、三番目のものと四番目のものが区別されているという点である。私は、この区別は^{ストイケイオン}字^{シュラベ}母とそれに属する個別の音の関係に対応すると考えている。上でも述べたように、^{ストイケイオン}字^{シュラベ}母は基本的にそれが^{シュラベ}音節に対

してもつ役割によって規定されるものなので、^{シュラベ}音節が存在しなければ当然それも存在することができない。これは、死後にも残るといった^{ヌース}知性の特質に反する。これに対して、^{ストイケイオン}字 母 の具体例である Γ や Δ といった音は、その存在を ^{シュラベ}音節 の存在に依存しない。具体的な例を多数もつ音とは違って、思惟のプシューケーに相当するものは^{ヌース}知性一つしかないかも知れない。それでも、両者の関係は基本的には ^{ストイケイオン}字 母 と個別の音との関係に等しい¹⁷。

これまでの議論から明らかになったのは、アリストテレスが明確に存在において離存しうる形相として挙げる例は、『自然学』第二巻第三章での形相の分類からすれば、付帯的な仕方では何かの形相であるとされるものに相当すると考えることができるという点である¹⁸。存在における離存性と形相の関係をこのように理解した場合、たとえ存在における離存性が形相と関連して述べられた場合も、そこには非常に大きな限定が付されなければならないということになる。正確に言えば、アリストテレスは端的に形相が存在において離存すると述べているのではなく、付帯的に Y の形相であるもの（すなわち、Y の本質を必要十分ではない仕方では説明する何か）が Y から（よって、Y の質料からも）存在において離存すると述べているのみである。だとすれば、^{ヌース}知性 の一部が存在において離存するといった事態は、まさに形相という種類に属することをその本質とする存在者があるということを含意しない。^{ヌース}知性は確かに特殊な存在者であると思われるが、それが形相と言われるのは、あくまで人間といったものとの関連においてのみなのである¹⁹。

第4節 質料抜ききの形相

アリストテレスの著作において、「質料抜きき」という表現は幾度も確認される²⁰。何かが「質料抜きき」にあると言われるとき、それは一見「ほとんどの事物は質料と形相からなるが、この事物は質料抜ききにあるもの、すなわち純粋に形相のみからなるものである」というこ

¹⁷このことは、人間が思惟する能力をもつということは認めるが、死後にも残る^{ヌース}知性の存在を認めないということが不可能ではないということからも示される。

¹⁸アリストテレスは決してすべての形相が存在において離存しうると考えているわけではない（*Metaph.* H.1, 1042a25-31; Λ.3, 1070a21-6）。

¹⁹私は、まさに Y の何であるかを明らかにするところのもの（Y の自体的形相）が自体的に存在において離存する可能性を認めるか否かが、プラトンとアリストテレスを分けると考えるが、この点は本論ではこれ以上論じない。なお、このことは、自体的な形相の離存可能性をアリストテレスが初めから問われるべき問題として取り扱わなかったということの意味するわけではない。

²⁰確認できた箇所としては、*Phys.* II.2, 194a14; *DC* I.9, 278a24; *GC* I.5, 322a28-9; I.10, 328b12; *DA* II.12, 424a18-9; III.2, 425b23-4; III.4, 429b14; III.4, 430a3; III.4, 430a7-8; III.6, 430b30; III.8, 432a10; III.12, 434a30; *PA* I.1, 640a31-2; I.1, 643a25; *Metaph.* E.1, 1025b34; E.1, 1026a6; Z.7, 1032b12; Z.7, 1032b14; Z.10, 1035a28; Z.10, 1036a22; Λ.3, 1070a16; Λ.6, 1071b21; Λ.9, 1075a1-2 を挙げるができる（*ἀνευ τῆς ὕλης* と *ἀνευ ὕλης* は区別していない）。ほとんどの用例が *DA* と *Metaph.* に集中している。

とを意味しているように聞こえる。質料抜ききにある形相、すなわちいかなる質料（及びそれを必要とする結合体）とも関係づけられず存在しうるような形相の存在が認められるとしたら、それは何らかの事物を説明することなく形相であるようなものが存在するということを意味するのではないだろうか。

この表現が使われる文脈は、実際は具体的に何が「質料抜きき」と言われるのかといった点で様々な仕方で異なっており、その意味を確定することはまったくもって簡単な作業ではない。一つの理解の仕方は、上で述べたものがまさにそうであるように、「質料抜きき」にありえるということ、存在における形相の離存性と実質的には同じものとして捉えることである²¹。その場合、Yの形相XがY（及びYの質料）から存在において離存することができるという事態が、ここでは「Xは（Yの）質料抜ききにありうる」という形で表現されているということになるだろう²²。

前節で私は、アリストテレスがYの形相Xに多様性を認めていたという点を確認し、存在において離存しうるものの候補として、付帯的な形相に相当するものを想定すべきであると述べた。付帯的な意味で形相と言われるものとの関連づけられた場合、「質料抜きき」は次のように理解することができる。

〔「質料抜きき」の解釈1〕

XはYの何であるかを付帯的に示すものである。Yは生成変化するものなので、質料をもつ。しかし、XはYの自体的な形相ではないので、Xの質料とは自体的な関係をもたない。「質料抜きき」は、まさにXがYの質料と自体的な関係をもたないということの意味する。

²¹この事例及び本節で後ほど論じられるもう一つの事例とはまったく異なる仕方で $\acute{\alpha}\nu\epsilon\upsilon\ \tau\eta\varsigma\ \acute{\upsilon}\lambda\eta\varsigma$ を理解することを要求するものとしては、本論文第五章で論じた、DA II.12における感覚対象の形相を受容するといった場面におけるそれを挙げることができる。そこで $\acute{\alpha}\nu\epsilon\upsilon\ \tau\eta\varsigma\ \acute{\upsilon}\lambda\eta\varsigma$ は「質料を伴わず」と訳されたが、私はこれを受容するという言葉との関連から解釈した。 $\acute{\alpha}\nu\epsilon\upsilon\ \tau\eta\varsigma\ \acute{\upsilon}\lambda\eta\varsigma$ という表現を網羅的に分析した近年の研究としては、Grasso 2013。

²²このような事例に該当すると思われる「質料抜きき」の用法は、例えば質料抜ききにはありえない^{アイステーシス}感覚と離存する^{ヌース}知性を対比する箇所に読み取ることができるかも知れない（DA III.4, 429b4-5）。ただし、かなり判明に存在における離存性が認められる^{ヌース}能動知性に対して、^{ヌース}知性の全体に対してもこれが認められるかに関しては異論の余地がある。さらにいえば、^{ヌース}能動知性が人間の知性の部分であるのかについても合意は存在しないし、これらと^{Metaph.}Λで主に論じられる^{ヌース}神の知性との関係についても議論は難航している。^{ヌース}能動知性が言及されるDA III.5は特に圧縮された形で書かれており、解釈における分岐点は多数ある（Hicks 1907, 507-10及びTricot 1934, 183-4n2, 184n3）。私は、少なくとも人間の^{ヌース}プシューケーの部分に相当する^{ヌース}知性の一部に関しては、それが存在において人間と人間の^{ヌース}ソーマから離存しうるということ認め、^{ヌース}知性と関連づけうると思われる「質料抜きき」がまさにそのことを意味するとする解釈する。^{ヌース}知性の離存性に関する近年の研究のまとめとしては、Miller 2012やCohoe 2014など。

このように「質料抜きき」を理解した場合、Xは確かに質料抜ききと言われ得る。しかし、このことは、まったくいかなる質料とも関連をもたずに形相であるようなものが存在するということを意味するわけではない。Xが形相と呼ばれるためには、少なくともY（及びその質料）と付帯的な関連を保ちうることが必要となるからである。すなわち、Xは質料抜ききでありうるが、Xが形相と呼ばれるのは、依然としてYとの関連においてのみなのである。「質料抜きき」という限定をこのように理解した場合、これは「存在において離存する、形相という種類に属することをその本質とする存在者」の存在を含意しない。^{ヌーヌ}知性の一部は確かに人間のソーマ抜ききに存在しうる。しかし、^{ヌーヌ}知性の一部が形相と呼ばれるのは、依然として人間（及びそのソーマ）との関連においてのみなのである。

しかしアリストテレスは、「質料抜きき」という限定を、転化しない永遠な事物に対して直接的に付す場合がある（*Metaph. Z.10, 1035a28-30; H.5, 1044b27-9; A.6, 1071b19-22*）。上で問題となった「質料抜きき」が、「付帯的にYの形相であるところのXがYの質料抜ききに存在する」という事例を問うものであったとすれば、この新たな「質料抜きき」は「Xがそれ自体として質料抜ききにある」という事例を扱うものとして考えることができる。このような仕方では質料抜ききにあるものの存在が認められているとしたら、ここで質料抜ききとされているものはまさに純粋な形相であるということになるのではなかろうか。この点に関してまず注目すべきは、アリストテレスがここで「質料抜きき」とされているもののあり方を説明するために用いている表現である。それ自体が不滅すなわち転化しないので生成変化しないものについて、アリストテレスは次のように述べる。

質料とともに理解されるのではなく、むしろ質料抜ききにあるものに関しては、その説明規定は形相についてのみあり、それは滅びない（まったく滅びないか、少なくともそのような仕方〔＝質料とともに理解されるものが滅びる仕方〕では〔滅びない〕）。

（*Metaph. Z.10, 1035a28-30*）²³

ここで注目すべきは、「質料抜ききにあるもの」が端的に形相であるとは言われず、「その説明規定²⁴が形相のみについてあるもの」と呼ばれているという点である。これを理解す

²³ ὅσα δὲ μὴ συνείληπται τῇ ὕλη ἀλλὰ ἄνευ ὕλης, ὧν οἱ λόγοι τοῦ εἶδους μόνον, ταῦτα δ' οὐ φθείρεται, ἢ ὅλως ἢ οὕτοι οὕτω γε·

²⁴ 注意すべきは、ここでの説明規定が、質料に関する言及を含まないような厳密な定義（または、本質の説明規定）としてではなく、形相と質料の両方を含みうる広い意味で用いられているという点である。DA I.1において、怒りに関して形相についての説明規定と質料についての説明規定があるということが認められていたという

一つの仕方は次のようなものである。まず、Gが「質料とともに理解されるのではなく、むしろ質料抜ききにある」ということは、上の引用で述べられているように、Gが滅びないもの、すなわち生成変化しないものであるということの意味する。Gは生成変化しないものであるので、「Gになりうるもの(Gの質料)」は存在しない。では、「その説明規定が形相のみについてある」ということはどのように理解すべきであるのか。これに関しては、Gの形相が「Gとは何かを示すもの」であったということ想起する必要がある。この点を踏まえれば、Gの説明規定がGの形相のみに関わるという一文は、Gとは、その説明規定が「Gとは何か」に関する言及を含みうるが、「Gになりうるもの」に関する言及は(そのようなものは存在しないので)含み得ないようなものである、ということの意味するものとして理解できる。Gは、「Gとは何か」を語ることはできるが、「何がGになりうるものなのか」を語ることはできないような存在者なのである。ここで要点となるのは、上のようにこの一文を理解した場合、そこから「Gは純粋な形相である」という主張は導かれないという点である。すなわち、ここでアリストテレスがGに質料がないと述べる時、彼は、Gが形相という種類に属することをその本質とする存在者であると主張しているわけではない。

[「質料抜きき」の解釈2]

Xが「質料抜きき」と言われる時、Xは、Xの形相をもつがXの質料をもたないような存在者である。ここでの「質料抜きき」はXが生成変化しないものなので、Xになりうるものが存在しないということの意味する。

このことは、本論文で度々使われてきた「(質料と形相の)結合体」という表現をどのように理解するかに関わる。この表現は、何かは質料と形相という、片方は物的で他方は何らかの特殊な種類に属する二つの部品からなるということの意味するものとして理解されるべきではない。上の提案に従えば、Gが質料と形相からなる(すなわち、Gは結合体である)ということ、Gが、「Gとは何か」及び「Gになりうるものとは何か」という二種類の説明を求めうる対象であるということの意味するだけである。「Gとは何か」を示すものと「Gになりうるもの」が何らかの特殊な仕方で結合しGが生成する、といった想定をそこに読み込むことには、細心の注意を払わなければならない。それは不可能ではないかも知れないが、直接意図されているものでもないのである。

点を想起せよ。この点に関しては、*Metaph. Z.4, 1030a14-8*、本論文第四章及び第六章第四節も参照。

結果的に、私が本節で与えた「質料抜きき」の二つの処理の仕方に従えば、その見かけとは違って、この表現は純粹形相の存在を支持するものではなかったということになる。^{ヌース}知性の一部は確かに人間のソーマの存在抜ききに存在しうるかも知れない。しかし、その時にはその知性^{ヌース}の一部を（人間の）形相と呼ぶ必要はもはやないだろう。また、生成変化しないものは確かに質料をもたない。しかし、このことが意味するのは、その対象について与えることができる唯一の説明が、その形相的説明であるということのみである。その対象がまさに純粹形相である、といったことを読み込む必要性は、ここにはないのである。

第5節 存在論抜ききの形相理解

本章において私は、アリストテレスが形相に対して与えた多様性を確認し、説明理論を構成するものとして形相を理解する立場から何かが形相であることの基準を定めることから出発した。それによれば、XはYの何であるかを示す限りにおいてYの形相であることができる。そこで一つ要点となったのは、XをYの形相であると認めることそれ自体からは、Xがどのような存在者であるかに関する存在論的な主張にコミットする必要は生まれえないという点である。形相は知性^{ヌース}といったそれ自体が実体の候補となりうるものを必ず指す訳ではなく、健康や特定の形といった、性質に属すると思われるものを指すこともできる。

続いて、形相とされるものに対して強い存在論的な主張（存在における離存性）が帰されることがあるという事実をどのように理解するかが問題となった。^{ヌース}知性は、人間の形相であるが人間（及びその質料）から存在において離存するとされている。この主張を、説明理論として質料形相論を理解する本論の解釈と整合的な仕方で処理するために、私は付帯的な形相のあり方を模索した。そこでの議論によれば、^{シュラベ}音節に対する^{ストイケイオン}字母の例などからも分かるように、存在において離存しうるものは、実際には付帯的に何かの形相と呼ばれるものである。だとすれば、それ単独で形相として存在しうるものがあるという主張にコミットする必要はなくなる。

存在における離存性と類似した問題を与えるものとして、さらに「質料抜きき」という表現の解釈を論じた。私は、Yの形相としてのXがYの質料に関して「質料抜きき」と言われる場合と、Xがそれ自体として質料をもたない、と言われている場合を分けて議論した。前者に関しては、Xが質料抜ききであるということはXがYの質料と自体的な関係をもたないということの意味するのみで、Yがなくなった後もXが形相として持続するということが

述べられているわけではないということが確認された。後者に関しては、まず X に直接付されている「質料抜き」という限定が、X が生成変化しないものであるということを確認するのみであることを確認し、アリストテレスは X を直ちに形相であると述べてはならず、その説明規定が形相のみに関わるというやや複雑な言い方をしており、その内実を確認する限り、質料抜きにある X を純粋な形相と考える必要はないということが論じられた。

これまでの議論から私は、「形相の存在における離存性」や「質料抜き」といった表現が、形相に関する強い存在論的主張を必ずしも含意しないということを示した。これは、本論文第二章から第四章において展開した質料の解釈と合わせれば、質料形相論を何らかの強い存在論的な主張として理解する必要がないということの意味する。何かが質料であるということだけからは、それがどのような存在者であるかに関する積極的な主張は導かれない²⁵。例えば像の質料があるということは、自体的には、何かが「像になりうるもの」であるということの意味するだけであり、「像になりうるもの」が具体的にどのような存在者であるかを知るためには、「青銅は像になりうるものである」といった付帯的な仕方で像の質料を特定する必要がある。

では、^{ヌース}知性や神といった生成変化しないものたちは、結局のところどのような存在者なのだろうか？ それは、人間や犬といったものと同じ仕方で存在するが、それらはもたないような何か特殊な性質をもつような存在者なのだろうか。私は、アリストテレスがこの問題に対して最終的な答えを得ることができたのかは疑わしいと考える。^{ヌース}知性や神、天体があるということとはともかく、それがどのようなものであったのかという点はアリストテレスにとって決して容易に知りうる事柄ではない²⁶。永遠な物事に関する知識は得難いものであり、その多くは感覚的に理解できるものではない (PA I.5, 644b24-8)。本章で私が目指したことは、形相とは何かを考察することは、必ずしもこういった存在論的な問いに苛まれることなく遂行できるということを示すことであり、それは、形相(と質料)が、事物を説明するという(どのような対象であれ、それが何らかの仕方で議論されうる限り必要となる)試みと関連する枠組みであるということにもとづく。神、天体、^{ヌース}知性、青銅、実体、性質といったものは、質料形相論が繰りなす説明に登場することができる。しかし、質

²⁵その意味するところは必ずしも定かではないが、質料は感覚的なものでも思惟的なものでもありうる (Metaph. Z.10, 1036a9-12; Z.11, 1037a4-5; H.6, 1045a33-b5)。

²⁶DA 以外のテキストも広く検討しながら、^{ヌース}知性とソーマの関係に関するアリストテレスの考察が簡単に割り切れるものではないということを示したものとして、van der Eijk 1997 及び 2000 を挙げるができる。^{ヌース}知性に限られない自然物の形相全般に存在における離存性が認められるかに関してアリストテレス自身が態度決定を保留していると思われる箇所としては、Metaph. H.3, 1043b18-9。

料形相論はそれらを体系的に分類するための理論ではない²⁷。

以上をもって、質料形相論を説明理論として理解するという本論文の目的は果たされた。

²⁷本章で論じたような形相理解及び全体としての質料形相論理解は、形相の存在論的身分をめぐって繰り広げられた激しい論争（例えば、形相は個体なのか普遍なのか、個体形相といったものはあるのか、質料形相論とカテゴリー論の関係はどういうものなのか）が、そもそも問題設定において妥当なものだったのかを再考することを促すだろう。

結び

本論文で私は、全七章に渡って様々なアリストテレスのテキストを検討しながら、質料形相論を説明理論として理解するための議論を展開してきた。結びでは、それらを振り返りつつ、序章で提起された問題にこれまでの論述がどのような答えを与えるのかを考察する。

第1節 説明理論としての質料形相論

第一章で私は、質料形相論にもとづいたプシューケー-ソーマ論を現代の心の哲学の一種として理解しようと試みた研究者たちが、機能主義的解釈の失敗から迷走してゆく過程を描いた。機能主義的解釈の失敗は何か別の新しい有力な解釈の誕生にはつながらず、論者たちは心身の一元論と二元論の間で位置を定めることができず分裂していった。その際に争点となった解釈上の問題を確認することから、私はこのような事態が生じた原因の一端を、質料形相論がそもそも何のための理論だったのかに関する適切な理解を論者たちがもたなかったことによって、結果的に質料形相論にもとづいたプシューケー-ソーマ論と現代の心身問題との距離を把握することに論者たちが失敗したことに求めた。本論文のほとんどの議論は、このような問題提起を受けてプシューケー-ソーマ論へとたどり着くために必要となる質料と形相の概念の読みなおしを行ったものであるといえる。

質料形相論に関する私の解釈の方針は、端的にまとめれば、Gの質料と形相を、それぞれ多様な仕方で述べられ得る「Gになりうるもの」及び「Gとは何かを示すもの」として捉え、両者をともにGに関する何らかの説明を与えるための概念的装置として理解することである。その際、「Gになりうるもの」はGとの関連抜きにそれ自体として同定されるような存在者を指すことができる。しかし、Gの質料を知るということは、例えば像の質料として一片の青銅やその集合を同定することによって完結するようなものではない。それらは、確かに像の質料とは何かという問いに対する答えの一つであり、その点において像の生成変化を説明しうる。問題は、そのような答えが、像の質料であるための必要条件を示したもので、十分条件を示したものでないという点にある。第二章で質料の関係性や無規定性、またエレア派の懐疑への応答といった様々な論点を参照しながら私が示したのは、青銅といった答えは像の質料とは何かという問いに対しては付帯的なものにすぎず、それが有意味なものであるためには、論理的な関係性を確保する自体的な質料的説明（「Gになりうるもの」）とともに考察される必要があるということであった。アリストテレ

スが質料概念を用いることで与える説明は、自体的説明と付帯的説明を組み合わせることによって有効なものとして成り立っているのである。Gの質料をこのような仕方での説明の理論を与えるものとして理解すれば、「青銅」や「四元素」といった像と関連づけられずにそれ自体でアイデンティティをもつ存在者を同定するためのものとしてそれを捉えることが、不正確な解釈であるということがわかる。

さらに第三章では、様々な仕方与えられる像の質料的説明が、奥行きをもつ一つの秩序のもとで俯瞰されるものであるということが主張された。アリストテレスは、像になる可能性が非常に高いものの詳細な描写から、広い意味で像になりうるものの一般的な描写に至る様々な記述を、像の質料の説明として与えることができる。この説明は、いかに詳細になろうと像に関する循環的な言及を排除するようなものにはなりえないので、よって非還元的な説明である。重要なのは、この説明理論が与える説明が、非還元的で循環的な要素を残すものではあるが、奥行きをもつことによって豊かな説明力を備えたものでもあるという点である。質料的説明の説明力という点に関して私は、さらに本論文の第四章において、Gの質料は何かという問いへの答えが、単に奥行きをもつだけでなく修正の可能性をもつものでもあるということを示した。アリストテレスは、何かが質料であるということを示すことを、それが質料であると述べることの根拠となる理由を挙げることに非常に密接に捉えており、理由を吟味することによって間違った説明を修正する可能性を常に開いている。

質料の対となる形相に関しては、上のように説明理論を与えるものとしてそれを理解するに際して、非常に大きな困難が伴う。アリストテレスが『デ・アニマ』で展開した感覚論における「形相を受容する」といった表現をめぐる論争は、その困難を如実に示すものの一つであり、私はまず第五章でこの論争に参加することから自らの形相理解を打ち立てる作業に着手した。この論争に関する従来の二つの立場は、感覚の対象となる形相を「物的な赤そのもの」や「霊的な赤そのもの」として捉え、さらに、それらがそれらを実現しているような質料から切り離されて何らかの結果を生じさせると主張してきた。このような主張は、どちらも形相をある対象との関連のもとでのみ捉えうるものとして理解することを拒むものであり、結果として、ある対象を説明するというその本質的な役割とするものとして質料と形相を理解することを難しくする。これに対して私は、まず第五章においては、主にテキスト解釈を通じて、質料から切り離された形相というものを導入する必要を認めない第三の立場に立つことが可能であるということを示した。

続く第六章において私は、第五章で確保された可能性をもとに、では形相が何かを説明するものであるということはどういうことなのか、自然学においてそれが質料とともに言及されなければならないとはどういうことなのかを明らかにし、説明理論を構成するものとしての形相理解を具体的に提示する作業に移った。私が出発点としたのは、アリストテレスが『自然学』第二巻第三章において、四種のアイディアの一つであるとされる形相を説明規定として導入しているという点である。このような形相理解にもとづいて私は、さらに『分析論後書』や『動物の諸部分について』における形相を用いた説明の内実を考察することから、それがどのような仕方で生成変化の説明に関与しうるのかという点を示した。形相は、Gの「何であるか」を示すものであり、それは生成変化しないものを扱う数学や第一哲学においても用いられるが、同時に生成変化するものを扱う自然学で何らかの説明を与える際にも不可欠の役割を果たす。アリストテレスは、形相を扱うにおける数学や第一哲学と自然学との密接な関連性を熟知しており、それらを統一的に見渡すことを可能にするような視点を『自然学』第二巻第二章で与えていた。

最後の第七章では、説明理論を構成するものとしての形相理解を推し進めるにあたって最も大きな困難となる、形相に帰されることのある「存在における離存性」や「質料抜き」という限定の解釈を行った。これらは、形相を「ある対象の何であるかを示すもの」としてではなく、「(自ら以外の何らかの対象と関係づけられることなく)それ自体のアイデンティティをもつ特定の存在者」を指すための概念として捉えることを強いる。このような形相理解は、第五章で感覚論を論じる際に問題となった、質料と切り離された形で何らかの結果を引き起こしうるものとして形相を理解する解釈と同じ方向を指しているように思われる。この問題はプラトン哲学との関連などから理解されなければならない複雑な背景をもつが、私は、存在において離存しうると思われる形相を付带的に形相であるものとして位置づけることで、形相が自体的に質料から存在において離存可能なものであるとする主張をアリストテレスに帰する解釈を退けた。能動知性^{ヌース}といった特殊な存在者は、それが形相であるところの人間(及び人間の質料)から存在において離存しうる。しかし、厳密に言えば能動知性^{ヌース}は付带的に人間の形相であるにすぎないのであり、人間の形相がそれ自体として人間から存在において離存しうるという主張を端的にアリストテレスが認めていたわけではない。「質料抜き」という限定もまた、文脈に配慮してこの表現を読み解けば、純粋な形相の存在を支持する根拠にはならない。

以上をもって、質料形相論は「Gになりうるもの」と「Gとは何かを示すもの」を用い

た様々な記述を組み合わせることで、Gに関する多彩な説明を与えるための理論であるという理解の全貌が示された。多彩な説明を可能にするものとして理解された質料形相論は、青銅と形が何らかの仕方では結合して像が生成するといったことを主張するものではもはやない。「青銅と形が結合して像が生成する」といった事柄が、経験的には説明できない形而上学的な問題を含むものに映るのに対して、「像とは何か」、「像になりうるものとは何か」という質問に向き合いよりよい答えを模索することには、このような難解さは伴わない¹。次節では、これまで示された質料形相論理解をもとに、序論で問題になった心身問題と質料形相論の距離に関する現時点での私の立場を示す。

第2節 心身問題と質料形相論

本論文の序論において私は、心身問題と質料形相論にもとづいたプシューケー-ソーマ論の関係を理解するに際して四つの選択肢がありうると述べた。それらを以下で改めて列挙しよう。

1. 質料形相論を心身の枠組みに相当するものとして理解することでアリストテレスにおける現代的な心の哲学の存在を認めた上で、その整合性も肯定する立場
2. 質料形相論を心身の枠組みに相当するものとして理解することでアリストテレスにおける現代的な心の哲学の存在を認めるが、その整合性は否定する立場
3. 質料形相論を心身の枠組みに相当するものとして理解することはできないと考えることで、アリストテレスにおける現代的な心の哲学の存在そのものを否定する立場
4. アリストテレス哲学に何らかの心身の枠組みや現代的な心の哲学として理解できるものがあるということを認めるが、質料形相論とそれらとの間には何らかの距離があると考える立場

序論において私は、質料形相論にもとづいたプシューケー-ソーマ論を整合的な、または不整合な現代の心の哲学の一種として理解しようとする1と2の立場、及び、そもそも質料形相論にもとづいたプシューケー-ソーマ論は心の哲学とは何の関係もないと主張する3の立場に対して、4の立場を支持するという旨を述べた。説明理論として質料形相論を理解

¹私は、青銅が形と結合する、または靈魂と身体が結合するといった難解な事態にアリストテレスがまったく関心をもたなかったと主張したいわけではない。ここで述べているのは、質料形相論の主眼点はあくまで「Gになりうるもの」と「Gとは何かを示すもの」にもとづいてGに関して様々な説明を与えることにあったという点であり、その場合、このような難解な事例は、質料形相論を用いて分析すべき事柄の(かなり特殊な)一部にすぎない、ということになるだろう。

するという方針のもとで様々な論点を検討してきた今、我々はここで言われている距離がどのようなものであるかを具体的にまとめることができる地点に来ている。

心身の枠組みに関連する問いは、基本的には物的なものと心的なものという二種類の存在者をめぐる問いであると理解することができる²。二元論者は物的なものに還元されない心的なものと呼べる存在者が実際に存在すると考えるが、一元論者はそのような存在者の存在を認めることを拒否し、一つの種類の存在者のみを認めることで心的と言われる事柄をどう理解するかという問題を解決することができる³と主張する。これらの問いと質料形相論の距離を考えるにあたって重要になるのは、第七章で論じられた、XがYの形相であるということと、Xはどのような存在者であるのかという二つの問いを区別することである。この区別を受け入れた場合、Xが二元論的に理解されなければならない存在者か否かという点は、XがYの形相であるという点からはいったん離れて考察されなければならない問題であるということになる。このように質料形相論が直接対象とする範囲を制限した場合、1と2の立場は質料形相論にもとづいたプシューケー-ソーマ論を心身問題に関わる特定の存在論的な主張に直接関係づけてしまっているために、間違っているということになる³。また、上で列挙した選択肢の3は、より正確には次のような主張として考えることができるだろう。

- 質料形相論にもとづいたプシューケー-ソーマ論は、心身の枠組みと関連しない何らかの存在論である。

私の質料形相論理解にもとづけば、これもまた質料形相論に（その内実がどのようなものであれ）何らかの存在論的な含意を直接もたせるような主張であるという点で、却下されることになる⁴。

²デカルトが与えた *res extensa* と *res cogitans* の対比は、まさにこのような仕方で問題を設定しているように思われる（Descartes 1641, 71-90）。

³アリストテレスのテキスト読解から離れ、質料形相論を特に現代科学と齟齬をきたさないような現代的な存在論として新たに読み解く試みは、今も（必ずしも心の哲学の場面に限られず）盛んに行われている。それらが成功した場合、従来論じられてきたものとは異なる仕方で1の立場に改めて立つことを可能にするような心の哲学をアリストテレスに見出すことができるかも知れない。しかし、アリストテレスのテキストから離れすぎているように見えるという点を措くとしても、これらの試みはまだ途上にあり論者の合意が得られたとは言いがたい状況なので、ここから1の立場を再度擁護することができるという見通しはまだ立っていない。現代的に理解された質料形相論の批判的なサーヴェイとして、Robinson 2014 を挙げるができる。

⁴結果的に、本論文第四章で論じた、心身に代わる存在論的な枠組みとして質料形相論を提示しようとした Charles 2009 の議論は、心身の枠組みの修正版を提出する試みである限りでは1を目指したものとして理解できるということになる。もしこの提案に何か不整合があるということが判明した場合は、これは実質的には2または3に値するものとして扱われることになるだろう。いずれにせよ、私の質料形相論理解からすればこれは受け入れることのできないものである。

私が擁護する4の選択肢の説明へと進む前に、次の点を考察しておく必要がある。全体としての質料形相論はともかく、まさに魂や靈魂及び身体と訳されてきたプシューケーとソーマが、直接的に心的なものと物的なものに関する存在論的な主張を含まないという指摘は非常に奇妙に響く。しかし、これはアリストテレスが『デ・アニマ』の冒頭で掲げた問題設定を確認すれば必ずしもありえないことではない。彼は、「〔プシューケーは〕ある・これなるもの、すなわち実体なのか、それとも性質なのか、それとも量なのか、それともすでに区別されたカテゴリーのうちの別の何かなのか」という問いを実際に与えており、それにどう答えるかに応じた「違いは小さいものではない」と述べることでその問いの重要性を確認した上で、さらには様々なプシューケーが類（ここでは、カテゴリー）において異なる可能性をも考慮に入れている（DA I.1, 402a23-b3⁵）。このような発言は、プシューケーが本当に何らかの明確な存在論的な限定を受けるようなものとして想定されていたのかを疑わしくする。この問いが最終的にどのように答えられたのかを知るためには、『デ・アニマ』の全体と、関連する著作を網羅的に調査する必要がある。しかし、その結果がどのようなものになるうとも、プシューケーという概念が、それがどのような存在者なのか、それがどのような概念として、さらには、カテゴリーを異にすることすらありうるものどもの集合を指すものとしてまず想定されていたという点は揺るがないだろう。この点は、プシューケーに関する議論が進展した後でも確認することができる。『デ・アニマ』第二巻第一章でプシューケーの定義に関して様々な考察を遂行した後に、第二巻第二章において改めてアリストテレスがプシューケーの探求の出発点とするのもまた、存在論的な含意をそれ自体としてもつようには思えない「プシューケーをもつものがプシューケーをもたないものから区別されるのは生きるということにおいてである」というものにすぎないのである（DA II.2, 413a21-2⁶）。

このことは、プシューケー及びその対概念となっているソーマが生物の形相と質料として導入されたということの意義を明らかにする。アリストテレスが生物を説明するために導入した形相としてのプシューケーと質料としてのソーマは、最初からそれ自体としてアイデンティティをもつような存在者として想定されていたわけではない。例えば生物のソーマは、現代の我々が考えるような身体、すなわち、それが死者のものであろうと生者の

⁵πρώτον δ' ἴσως ἀναγκαῖον διελεῖν ἐν τίνι τῶν γενῶν καὶ τί ἐστὶ, λέγω δὲ πότερον τόδε τι καὶ οὐσία ἢ ποιὸν ἢ ποσόν, ἢ καὶ τις ἄλλη τῶν διαιρεθειῶν κατηγοριῶν, ἔτι δὲ πότερον τῶν ἐν δυνάμει ὄντων ἢ μᾶλλον ἐντελέχειά τις· διαφέρει γὰρ οὐ τι μικρόν. σκεπτόν δὲ καὶ εἰ μεριστὴ ἢ ἀμερήσ, καὶ πότερον ὁμοειδῆς ἅπασα ψυχὴ ἢ οὐ· εἰ δὲ μὴ ὁμοειδῆς, πότερον εἶδει διαφέρουσα ἢ γένει.

⁶διωρίσθαι τὸ ἐμψυχον τοῦ ἀψύχου τῶ ζῆν.

ものであろうと、それ自体としてアイデンティティをもちうるようなものとして想定されているのではなく、あくまでも生者を可能にするものとして、生者との関係においてのみ理解されるものとして導入されている。ソーマとは何かという問いに対して、「(生物への循環的な言及を含まない仕方で規定された)云々の物質的構成をもつもの」という答えを与えることができないわけではない。しかし、それはソーマの記述としては不十分なものでしかないだろう。プシューケーに関して、生物の死後にも残りうる靈魂のようなものがプシューケーであるということはある。しかし、そのように記述された靈魂は、プシューケーとしては付帯的なものでしかないということになるだろう。靈魂や現代の身体とアリストテレスのプシューケーとソーマを同一線上において比較することは、そもそもそれらが導入された目的の異なる概念群を同一線上において比較することと同じようなものである。プシューケーとソーマは、靈魂(及びそれに準じたもの)と身体という存在論的に規定される概念に直接関係づけられるべきではなく、生物に関する学を構成する二種の異なる説明を可能にするものとして理解されなければならない。この学が与える説明には存在論的な主張が含まれるが、それ自体としてのこの学の第一の目的は、あくまでも説明を与えることにある。

それでは、私が擁護する4の選択肢はどのように理解されるのだろうか。まずは4の選択肢を改めて示しておこう。

- アリストテレス哲学に何らかの心身の枠組みや現代的な心の哲学として理解できるものがあるということを認めるが、質料形相論とそれらとの間には何らかの距離があると考える立場

まず、後半部の、質料形相論(及びそれにもとづいたプシューケー-ソーマ論)と心身の枠組みや心の哲学との間に距離があるという主張に関しては、その内実はもはや明白である。この距離は、いわば説明理論と存在論の距離である。では、前半部の、アリストテレスに何らかの心身の枠組みや心の哲学があるということを認めるということは、どのような根拠にもとづいて主張されているのだろうか。

序論において私は、プシューケー-ソーマ論と現代の心身の枠組みの間に様々な仕方で齟齬があると述べた。にもかかわらず4の選択肢において私が心身の枠組みに関連する存在論的な主張をアリストテレスに認めたのは、プシューケー-ソーマ論を厳密に現代の心身問題に対応する存在論的な主張として読むことから一端離れば、アリストテレスが知性と

いったものと関連づけて論じている事柄は、我々が心的と呼ぶ事柄に相当すると考えざるを得ないという理由による。そして、心的な事柄と関連する^{ヌース}知性が存在において離存するものとされていた以上、たとえそれがプシューケー-ソーマ論が直接含意するものではないとしても、アリストテレスに心身の枠組みに関連するいかなる存在論的な主張もないと考えることは難しい⁷。

このことは、質料形相論を説明理論として捉えることでそこに直接的な存在論的含意を認めないとしても、アリストテレス哲学がその全体としては1または2の選択肢が示すもの、すなわち、心身問題に関する整合的もしくは不整合な心の哲学のどちらかに落ち着くということの意味するのだろうか。これは質料形相論を再検討するという本論文の射程を超えた問いであるが、次の点を指摘することはできる。まず、この問題は、実質的には(プシューケーや^{ヌース}知性に関する記述に限られない)アリストテレスの実体論の成否と深く関連している。その場合さらに問題になるのは、彼が自らの実体論を最終的に完成させることができたのかという点である。このさらなる問いに答えるためには彼の形而上学的著作を全面的に再検討する必要があるが、これもまた本論文の射程を遥かに超える作業であり、ここでそれを論じることはできない⁸。

本論の立場にとって大事なのは、実体論の迷路がどのような出口(かりにそのようなものがあつたとして)をもつものであると、説明理論として理解された質料形相論は、実体論の成否に左右されずそれ自体の価値を保つことができるという点である。本論文第四章で確認したように、アリストテレスは質料や形相にもとづく説明を修正する可能性を幅広く認めていた。このことは、質料形相論がもつ役割が、ある存在論的な枠組みをもとに様々な説明を与えることだけではなく、それらの説明が基盤とする存在論的な枠組みを検証及び修正するという一連の作業にもあるということを示す。私が理解する限りでの質料形相論にもとづいたプシューケー-ソーマ論が与えるのは、基本的には「生物とは何かを示

⁷実際にはこれらを論じる際のアリストテレスの語り口は非常に複雑であり、^{ヌース}知性は人間のプシューケーの一部なのか、またその存在論的な身分はどのようなものかといった点は激しい論争になっている。

⁸心身問題やプシューケー-ソーマ論から離れれば、神や不動の動者、天界を構成するエーテルといったものもまた、すべて月下の世界にあるものとまったく異なる特殊な存在者として扱われているということが見えてくる。ただし、アリストテレスがこれらの事柄に関して何らかの最終的な結論を下していたのかという点は依然問題として残る。これもまたアリストテレスの実体論の帰趨を見届けることによってのみ明らかになる事柄であると思われるが、二千年の歳月を経た今に至っても彼の実体論の内実に関する解釈者の合意は得られていない。アリストテレスの実体論が最も詳細に論じられている *Metaph.* をめぐる 20 世紀後半の議論を俯瞰したものとしては、高橋 1991 や Gill 2005 など、「実体」という訳語の妥当性を検討したものとして、中畑 2015 を挙げるができる。アリストテレス解釈からは離れるが、特に心身問題に関連する現代形而上学における議論を対象に、それらに共通して見られる不可解さを取り出すことを試みたものとしては、Schwitzgebel 2014 がある。

すもの」及び「生物になりうるもの」とは何かという問答の枠組みであり、その役割は、答えとして与えられるだろうものの基盤となる存在論的な枠組みを検証し修正することにもあるのである。

続く本論文最後の節において私は、このような仕方でも質料形相論を理解することに対して提起されうる一つの批判を検討しそれに応答することで、私が本論文で示した、実体論から距離を置く説明理論としての質料形相論がもつ意義をさらに明らかにする。

第3節 実在と説明の間

最後に私が検討することになる批判は、まさに質料や形相といったアイティアーを説明と理解することの妥当性に関わるものである。アリストテレス哲学における因果と説明に関する近年の議論を概観した論文において、スタインはアイティアーを説明と捉える提案に対してなされうる批判として次のようなものを挙げる（Stein 2011b, 705）。

ある解釈においては、この提案〔＝アイティアーを説明と理解する提案〕は端的にありえない。アリストテレスがアイティアーとして引き合いに出す対象（構造や形、一片の青銅、建築家やその活動、目的や意図）は、言語による表象や言語の要素であるのではない⁹。

アリストテレスのアイティアーを知識の対象である「説明」、すなわち認識論的な概念として理解することは不適切であるとする上の批判の動機は、次のような仕方でも述べ直すことができるだろう。——ある説明が正しいのは、それが特定の生成変化を成り立たせている実在的な因果を正確に反映している限りにおいてである。すなわち、説明はまさに実在的な因果に対応するものを示すものでなければならず、実際にアリストテレスは、構造や青銅、建築家といったものを説明において引き合いに出すことで、生成変化と関連する実在を示しているのである。その場合、実在を映す指標にすぎないもの（すなわち、言語による表象や言語の要素からなる説明）よりも、実在そのものこそがまさにアイティアーであると考えべきではないか。

このような批判に応答するためにまず確認すべきは、本論文第六章で論じられた、アリストテレスが自然学者の仕事をどのように理解していたのかという点である。本論文第六

⁹なお、この文章が記されているスタインの論文はサーヴェイを目的としたものであり、このような批判に対するスタイン自身の態度表明は留保されている。この点に関するより踏み込んだ議論としては、Stein 2011a。

章において私は、自然学者は形相をどこまで知る必要があるのかというアリストテレス自身が設定した問題に対して、形相が（思惟において）切り離され得るか否かという点に拘らず質料と関連する限りで形相を探求することが、自然学者にとって必要な形相の知り方であり、自然の探求としては十分有用なものでもあるという答えを与えた。獅子鼻や人間の「何であるか」が、その質料となる鼻や骨肉の理解なしに知られ得るようなものであるのに関して、自然学者は答えることができない。その可能性を問うことは、端的に自然学者の課題ではないのである。結果的に自然学者は、鼻や骨肉から存在において切り離された「獅子鼻そのもの」や「人間そのもの」といったものが存在するのか、仮にそれがあるとした場合、それが（獅子鼻や人間に関してなされる様々な説明を基礎づける実在としての）真の実体であるのかといった問いに対しても、答えを与えることができないだろう。その限りにおいては、自然学者は人間や獅子鼻の生成変化の説明に対応するような実在を示す学問的知識を有しているわけではない。

しかし、実在の学を有していないからといって、自然学者の営みが無意味なものであるということにはならない。アリストテレスは、自然学者の仕事と第一哲学者の仕事を区別しているが、後者の探求が完成されなければ自然学者が有意味な探求を続けていくことができないとは述べていない。本論文が一貫して主張してきたように、形相（Gの何であるかを示すもの）と質料（Gでありうるもの）は様々な仕方で語られるのであり、それらに関するよりよい説明を求めるという作業は、実在をめぐる論点に決着をつけずとも、それを措定するという形で十分有意義な仕方で行われ得る。以下、この点を少し詳しく述べてみよう。

アリストテレスが青銅は像の生成変化を付帯的に説明するものであると述べる時、像と関連づけられることなしにそれ自体としてアイデンティティをもつ存在者である青銅が、像の生成変化の原因となる実在として認められることはない。像の生成変化の自体的な原因は、厳密に言えば「像でありうるものを、像の目的のために、像にしうるものが像にする」と述べることでしか近づくことができないものであり、それに対応する実在が、我々が青銅やポリュクレイトスを同定するのと同じような仕方で同定されることはない。にもかかわらず、このことは、青銅やポリュクレイトスがいかなる意味でも像の生成変化の原因となる実在と関連をもたないということの意味するわけではない。本論文第三章において私は、よりよい説明を与えることを遠近という発想のもとで理解しようと試みた。「像でありうるもの」としてのみ理解されうる像の自体的質料が像の質料の実在であるならば、

遠近という観点からすれば、「青銅」や「四元素」といったものを質料として提示する説明は、常に像の質料の実在を自指して与えられているものであると考えることができる。すなわち、説明を与えることは、これから探求されるべき原因となる実在を措定することによってのみ意味をもつ営みなのであり、実在から完全に切り離された形で言語のみに関心をもつ説明というものはありえない¹⁰。その意味では、上で想定された批判は、説明に注目することの内実を見誤ることから生じたものであるといえる。

実在に関する完成した理論をもたずに物事の説明を探求する論者は、諸々の説明の基礎となっていると思われる実在など存在しないと主張しているわけではない。その論者たちは、むしろこのような実在が人間にとって直接与えられたものではないという点から出発し、よりよい説明を求めることでそれに近づこうとする¹¹。本論で私が描いた説明理論としての質料形相論は、実在を軽視しないがその得難さを真剣に受け止めた上で、それでもそれに近づこうとする者のよき道具となるだろう。

『形而上学』Λ巻における、永遠なる物事に関する壮大な探求がいったん閉じられた後、続く M 巻は次のように始まる¹²。

感覚的なものの実体については、その何であるかが、自然的なものの研究〔 = *Phys. I* 〕においては質料に関して、その後〔 = 恐らく、*Metaph. Z, H, Θ* 〕では現実態におけるもの〔 = 形相 〕に関して語られた。次に、感覚的な実体に加えて、^{キーンネーシス}運動変化せず永遠なる何らか〔 の実体 〕があるか否か、もしあるならばそれは何かを探求するにあたって、まず他の者たちによって語られたことを考察する必要がある。そうすれば、彼らが〔物事を〕見事に語っていない場合に〔我々が〕それら〔 = 彼らが語っていること 〕に縛られることがなくなるだろうし、我々と彼らとに共通する〔見事でない〕教説があった場合に、これ〔 = この教説 〕をただ我々に関してのみ不快に思わなくてもよくなるだろう。というのは、もし誰かが〔他の人と比べて〕一方で

¹⁰説明と因果が相互依存的な概念であるということは、Anscombe 1971 を引き合いに出しながらパトナム (Putnam 1999, 137-50) によって論じられている (Strawson 1985 も参照せよ)。実在論に対してどのような態度を取るかという点に関しては、Rorty 1979 及び Putnam 2004 も参照されるべきであろう。

¹¹正確に言えば、上で引用された Stein 2011b において実在と対応すると考えられていたもの、すなわち、構造や形、一片の青銅、建築家やその活動、目的や意図は、あるものの形相、質料、始動因、目的因を指すものとしてはすべて不完全なものでしかないことがありうる。例えば像の質料を必要十分な仕方で規定することの困難さは、本論文第二章と第三章ですでに確認したとおりである。個別の建築物の原因となるものを、単に建築家という一般的な名称で指すこともまた十分ではない。現代哲学の文脈において、(自然科学ではない)存在論や形而上学に対してもよりよい説明を与えるという観点が必要であるということを押し出したものとして、Swoyer 1999 を挙げる事ができる。

¹²私は、アリストテレスが実際にこのような順序で書いたということを主張しているわけではない。

より優れたものを、他方で劣っていないものを語っているのなら、それが〔その人にとって〕満足すべきことだからである。

(*Metaph. M.1*, 1076a8-16)¹³

¹³Περὶ μὲν οὖν τῆς τῶν αἰσθητῶν οὐσίας εἴρηται τίς ἐστίν, ἐν μὲν τῇ μεθόδῳ τῇ τῶν φυσικῶν περὶ τῆς ὕλης, ὕστερον δὲ περὶ τῆς κατ' ἐνέργειαν· ἐπεὶ δ' ἡ σκέψις ἐστὶ πότερον ἔστι τις παρὰ τὰς αἰσθητὰς οὐσίας ἀκίνητος καὶ αἰδῖος ἢ οὐκ ἔστι, καὶ εἰ ἔστι τίς ἐστίν, πρῶτον τὰ παρὰ τῶν ἄλλων λεγόμενα θεωρητέον, ὅπως εἴτε τι μὴ καλῶς λέγουσι, μὴ τοῖς αὐτοῖς ἔνοχοι ὦμεν, καὶ εἴ τι δόγμα κοινὸν ἡμῖν κακείνοις, τοῦτ' ἰδίᾳ μὴ καθ' ἡμῶν δυσχεραίνωμεν· ἀγαπητὸν γὰρ εἴ τις τὰ μὲν κάλλιον λέγοι τὰ δὲ μὴ χεῖρον.

文献目録

* 欧語文献（アルファベット順）・日本語文献（五十音順）の順序で列挙した。

I. 一次文献

A. アリストテレスの著作の校訂、訳、注釈

- Ackrill, J. L. 1963. “*Categories*” and “*De interpretatione*.” Clarendon Aristotle Series. Oxford: Clarendon Press.
- Balme, D. M. 1992. “*De partibus animalium*” I and “*De generatione animalium*” I (with passages from II. 1-3). Clarendon Aristotle Series. Oxford: Clarendon Press.
- . 2002. *Historia animalium: Volume I: Books I-X: Text*. Prepared for Publication by Allan Gotthelf. Cambridge Classical Texts and Commentaries. Cambridge: Cambridge University Press.
- Barnes, Jonathan, ed. 1984. *The complete works of Aristotle: The revised Oxford translation*. 2 vols. Bollingen Series. Princeton, New Jersey: Princeton University Press.
- . 1994. *Posterior analytics*. Clarendon Aristotle Series. 2nd ed. Oxford: Clarendon Press.
- Bekker, Immanuel, ed. 1831. *Aristoteles: Graece*. Vol. I and II of *Aristotelis opera*. Edidit Academia regia Borussica. Berlin: Georg Reimer.
- Besso, Giuliana and Michele Curnis. 2011. *La politica : libro I*. Roma: «L’Erma» di Bretschneider.
- Bodéüs, Richard. 2001. *Catégories*. Collection des universités de France publiée sous le patronage de l’association Guillaume Budé. Paris: Les Belles Lettres.
- Bostock, David. 1994. *Metaphysics: Books Z and H*. Clarendon Aristotle Series. Oxford: Clarendon Press.
- Brunschwig, Jacques. 1967-2007. *Topiques*. Collection des universités de France publiée sous le patronage de l’association Guillaume Budé. 2 Tomes. Paris: Les Belles Lettres.
- Bywater, Ingram. 1894. *Ethica Nicomachea*. Scriptorum classicorum bibliotheca Oxoniensis. Oxford: Clarendon Press.
- Charlton, William. 1992. *Physics: Books I and II*. New Impression with Note on Recent Work and Revised Bibliography. Clarendon Aristotle Series. Oxford: Clarendon Press.
- Detel, Wolfgang. 1993. *Analytica posteriora*. Aristoteles Werke in deutscher Übersetzung. 2 halbb. Berlin: Akademie.
- Drossaart Lulofs, H. J. 1965. *De generatione animalium*. Scriptorum classicorum bibliotheca Oxoniensis. Oxford: Clarendon Press.
- Fobes, F. H. 1919. *Aristotelis Meteorologicorum libri quattuor*. Cambridge, Massachusetts:

- Harvard University Press.
- Frede, Michael and Günther Patzig. 1988. *Aristoteles „Metaphysik Z“: Text, Übersetzung und Kommentar*. 2 Bde. München: C. H. Beck.
- Hamlyn, D. W. 1993. *De anima: Books II and III (with passages from book I)*. With a report on recent work and a revised bibliography by Christopher Shields. Clarendon Aristotle Series. Oxford: Oxford University Press.
- Hicks, R. D. 1907. *Aristotle “De anima.”* With translation, introduction and notes. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hussey, Edward. 1983. *Physics: Books III and IV*. Clarendon Aristotle Series. Oxford: Clarendon Press.
- Jaeger, W. W. 1957. *Metaphysica*. Scriptorum classicorum bibliotheca Oxoniensis. Oxford: Clarendon Press.
- Jannone, Antonio and Edmond Barbotin. 1966. *De l’âme*. Collection des universités de France publiée sous le patronage de l’association Guillaume Budé. Paris: Les Belles Lettres.
- Kullmann, Wolfgang. 2007. *Über die Teile der Lebewesen*. Aristoteles Werke in deutscher Übersetzung. Berlin: Akademie.
- Lennox, J. G. 2001. *“On the parts of animals” I-IV*. Clarendon Aristotle Series. Oxford: Clarendon Press.
- Louis, Pierre. 1957. *Les parties des animaux*. Collection des universités de France publiée sous le patronage de l’association Guillaume Budé. Paris: Les Belles Lettres.
- Makin, Stephen. 2006. *Metaphysics: Book Θ*. Clarendon Aristotle Series. Oxford: Clarendon Press.
- Minio-Paluello, Lorenzo. 1949. *“Categoriae” et “Liber de interpretatione.”* Scriptorum classicorum bibliotheca Oxoniensis. Oxford: Clarendon Press.
- Moraux, Paul. 1965. *Du ciel*. Collection des universités de France publiée sous le patronage de l’association Guillaume Budé. Paris: Les Belles Lettres.
- Nussbaum, M. C. 1978. *Aristotle’s “De motu animalium.”* Text with translation, commentary, and interpretive essays. Princeton, New Jersey: Princeton University Press.
- Peck, A. L. and E. S. Forster. 1945. *Parts of animals. Movement of animals. Progression of animals*. Loeb Classical Library. Revised and reprinted ed. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- Polansky, Ronald. 2007. *Aristotle’s “De anima.”* New York: Cambridge University Press.
- Rashed, Marwan. 2005. *De la génération et la corruption*. Collection des universités de France publiée sous le patronage de l’association Guillaume Budé. Nouvelle édition. Paris: Les Belles Lettres.
- Ross, W. D. 1924. *Aristotle’s “Metaphysics.”* A revised text with introduction and commentary

-
- by W. D. Ross. Oxford: Clarendon Press.
- . 1936. *Aristotle's "Physics."* A revised text with introduction and commentary by W. D. Ross. Oxford: Clarendon Press.
- . 1949. *Aristotle's "Prior and posterior analytics."* A revised text with introduction and commentary by W. D. Ross. Oxford: Clarendon Press.
- . 1950. *Physica*. Scriptorum classicorum bibliotheca Oxoniensis. Oxford: Clarendon Press.
- . 1955. *Parva naturalia*. A revised text with introduction and commentary by Sir David Ross. Oxford: Clarendon Press.
- . 1956. *De anima*. Scriptorum classicorum bibliotheca Oxoniensis. Oxford: Clarendon Press.
- . 1958. *"Topica" et "Sophistici elenchi."* Scriptorum classicorum bibliotheca Oxoniensis. Oxford: Clarendon Press.
- . 1961. *Aristotle "De anima."* Edited, with introduction and commentary, by Sir David Ross. Oxford: Clarendon Press.
- Ross, W. D. and Lorenzo Minio-Paluello. 1964. *Analytica priora et posteriora*. Scriptorum classicorum bibliotheca Oxoniensis. Oxford: Clarendon Press.
- Siwek, Paul. 1963. *Parva naturalia, graece et latine*. Collectio Philosophica Lateranensis Cura Pontificae Universitatis Lateranensis 5. Romae: Desclée.
- . 1965. *Aristotelis tractatus de anima, graece et latine*. Collectio Philosophica Lateranensis Cura Pontificae Universitatis Lateranensis 7. Roma: Desclée.
- Taràn, Leonardo and Dimitri Gutas. 2012. *Aristotle "Poetics": Editio Maior of the Greek text with historical introductions and philological commentaries*. Mnemosyne, Supplements. Leiden: E. J. Brill.
- Tricot, Jules. 1934. *De l'âme*. Bibliothèque des textes philosophiques. Nouvelle édition. Paris: Vrin.
- Weidemann, Hermann. 2014. *De interpretatione*. Bibliotheca scriptorum Graecorum et Romanorum Teubneriana. Berlin: Walter de Gruyter.
- Williams, C. J. F. 1982. *De generatione et corruptione*. Clarendon Aristotle Series. Oxford: Clarendon Press.
- 出隆 (1968) 『形而上学』 アリストテレス全集 第 12 卷、岩波書店。
- 出隆 + 岩崎允胤 (1968) 『自然学』 アリストテレス全集 第 3 卷、岩波書店。
- 出隆 監修 + 山本光雄 編 (1968-73) 『アリストテレス全集』 全 17 卷、岩波書店。
- 牛田徳子 (2001) 『政治学』 西洋古典叢書、京都大学学術出版会。
- 内山勝利 + 神崎繁 + 中畑正志 編 (2013-) 『新版アリストテレス全集』、全 20 卷 (別巻 1)、岩波書店。

- 金山弥平 (2014) 「生成と消滅について」『天界について・生成と消滅について』新版アリストテレス全集 第5巻、岩波書店、203-350頁 (解説、371-88頁)。
- 神崎繁 (2014) 『ニコマコス倫理学』新版アリストテレス全集 第15巻、岩波書店。
- 坂下浩司 (2005) 『動物部分論・動物運動論・動物進行論』西洋古典叢書、京都大学学術出版会。
- . (2014) 「自然学小論集」『魂について・自然学小論集』新版アリストテレス全集 第7巻、岩波書店、191-436頁 (解説、505-18頁)。
- 島崎三郎 (1969) 「動物発生論」『動物運動論・動物進行論・動物発生論』アリストテレス全集 第8巻、岩波書店。
- . (1998) 『動物誌』岩波文庫、全2巻、岩波書店。
- 高橋久一郎 (2014) 「分析論後書」『分析論前書・分析論後書』新版アリストテレス全集 第2巻、岩波書店、327-528頁 (解説、575-608頁)。
- 中畑正志 (2013) 「カテゴリー論」『カテゴリー論・命題論』新版アリストテレス全集 第1巻、岩波書店、1-102頁 (解説、269-95頁)。
- . (2014) 「魂について」『魂について・自然学小論集』新版アリストテレス全集 第7巻、岩波書店、1-189頁 (解説、475-504頁)。
- 納富信留 (2014) 「ソフィスト的論駁について」『トポス論・ソフィスト的論駁について』新版アリストテレス全集 第3巻、岩波書店、369-477頁 (解説、503-24頁)。
- 早瀬篤 (2013) 「命題論」『カテゴリー論・命題論』新版アリストテレス全集 第1巻、岩波書店、103-84頁 (解説、297-322頁)。
- 三浦要 (2015) 「気象論」『気象論・宇宙について』新版アリストテレス全集 第6巻、岩波書店、1-237頁 (解説、319-46頁)。
- 山口義久 (2014) 「トポス論」『トポス論・ソフィスト的論駁について』新版アリストテレス全集 第3巻、岩波書店、1-356頁 (解説、479-502頁)。
- 山田道夫 (2014) 「天界について」『天界について・生成と消滅について』新版アリストテレス全集 第5巻、岩波書店、1-201頁 (解説、351-70頁)。

B. アリストテレスの著作に関する古典的注釈

- Philoponus, Johannes. 1887. *Ioannis Philoponi in Aristotelis physicorum libros tres priores commentaria*. Ed. Girolamo Vitelli. Vol. 16 of *Commentaria Graeca in Aristotelem*. Berlin: Georg Reimer.
- . 1897. *Ioannis Philoponi in Aristotelis De anima libros commentaria*. Ed. Michael Hayduck. Vol. XV of *Commentaria in Aristotelem graeca*. Consilio et auctoritate Academiae litterarum regiae Borussicae. Berlin: Georg Reimer.
- . 1993. *On Aristotle Physics 2*. Trans. A. R. Lacey. *Ancient Commentators on Aristotle*. London: Duckworth.
- . 2005. *On Aristotle On the soul 2.7-12*. Trans. William Charlton. *Ancient Commen-*

-
- tators on Aristotle. London: Duckworth.
- Simplicius. 1882. *Simplicii in libros Aristotelis physicorum libros quattuor priores commentaria*. Ed. Hermann Diels. Vol. 9 of *Commentaria Graeca in Aristotelem*. Berlin: Georg Reimer.
- . 1997. *On Aristotle Physics 2*. Trans. Barrie Fleet. Ancient Commentators on Aristotle. London: Duckworth.
- . 2002. *On Aristotle Physics 3*. Trans. James Opie Urmson and Peter Lautner. Ancient Commentators on Aristotle. London: Duckworth.
- Themistius. 1900. *Themistii in Aristotelis physica paraphrasis*. Ed. Heinrich Schenkl. Vol. 5.2 of *Commentaria in Aristotelem Graeca*. Berlin: Georg Reimer.
- . 2012. *On Aristotle Physics 1-3*. Translated by R. B. Todd. Ancient Commentators on Aristotle. Bristol: Bristol Classical Press.

II. 二次文献（現代の研究書・論文）

- Ackrill, J. L. 1972-3. Aristotle's definitions of *Psuche*. *Proceedings of the Aristotelian Society* 73: 119-33. Reprinted in *Psychology and aesthetics*. Vol. 4 of *Articles on Aristotle*, ed. Jonathan Barnes, Malcolm Schofield, and Richard Sorabji, 65-75. London: Duckworth, 1979.
- Anagnostopoulos, Andreas. 2010. Change in Aristotle's *Physics* 3. *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 39: 33-79.
- . 2011. Senses of *Dunamis* and the structure of Aristotle's *Metaphysics* Θ. *Phronesis* 56, no. 4: 388-425.
- . 2013. Aristotle's Parmenidean dilemma. *Archiv für Geschichte der Philosophie* 95, no. 3: 245-74.
- Andersen, Øivind. 1976. Aristotle on sense-perception in plants. *Symbolae Osloenses* 51, no. 1: 81-6.
- Annas, Julia. 1982. Aristotle on inefficient causes. *The Philosophical Quarterly* 32, no. 129: 311-26.
- Anscombe, G. E. M. 1971. *Causality and determination: An inaugural lecture*. Cambridge: Cambridge University Press. Reprinted in her *Metaphysics and the philosophy of mind*, Vol. 2 of *The collected philosophical papers of G. E. M. Anscombe*, 133-47. Minneapolis, Minnesota: University of Minnesota Press, 1981.
- Anscombe, G. E. M. and P. T. Geach. 1961. *Three philosophers: Aristotle, Aquinas, Frege*. Oxford: Basil Blackwell and Mott. [G. E. M. アンスコム + P. T. ギーチ 『哲学の三人：アリストテレス・トマス・フレーゲ』(野本和幸 + 藤澤郁夫 訳) 双書プロブレマタ、勁草書房、1992 年]

- Balme, David M. 1984. The snub. *Ancient Philosophy* 4, no. 1: 1-8. Reprinted in Gotthelf and Lennox (1987, 306-12). (page references are to the reprint edition).
- Barker, Andrew. 1981. Aristotle on perception and ratios. *Phronesis* 26: 248-66.
- Barnes, Jonathan. 1969. Aristotle's theory of demonstration. *Phronesis* 14, no. 2: 123-52. Reprinted in his *Proof, knowledge, and scepticism: Essays in ancient philosophy III*, ed. Maddalena Bonelli, 129-57. Oxford: Oxford University Press, 2014. (page references are to the reprint edition).
- . 1999. Review of *Aristotle on Perception*, by Stephen Everson. *The Classical Review*, n. s. 49: 120-2.
- Barrett, Lisa Feldman. 2006. Are emotions natural kinds? *Perspectives on Psychological Science* 1, no. 1: 28-58.
- Bechler, Zev. 1995. *Aristotle's theory of actuality*. SUNY Series in Ancient Greek Philosophy. Albany, New York: State University of New York Press.
- Beere, Jonathan. 2009. *Doing and being: An interpretation of Aristotle's "Metaphysics" Theta*. Oxford Aristotle Studies. Oxford: Oxford University Press.
- Bolton, Robert. 2005. Perception naturalized in Aristotle's *De Anima*. In Salles (2005, 209-44).
- . 2011. Why does Aristotle need four causes? In *La causalité chez Aristote*, ed. L. Couloubaritsis and S. Delcomminette, Études Aristotéliennes, 27-46. Paris: Vrin.
- Bonitz, Hermann. 1870. *Index Aristotelicus*. In Vol. 5 of *Aristotelis opera*, ed. Academia Regia Borussica. Berlin: Georg Reimer.
- Bostock, David. 2006. Aristotle's theory of form. In his *Space, time, matter, and form: Essays on Aristotle's physics*, 79-102. Oxford Aristotle Studies. Oxford: Oxford University Press.
- Bowin, John. 2011. Aristotle on various types of alteration in *De Anima* II 5. *Phronesis* 56: 138-61.
- . 2012a. *De anima* ii 5 on the activation of the senses. *Ancient Philosophy* 32, no. 1: 87-104.
- . 2012b. Aristotle on 'first transitions' in *De Anima* II 5. *Apeiron* 45, no. 3: 262-82.
- Bradshaw, David. 1997. Aristotle on perception: The dual-logos theory. *Apeiron* 30: 143-62.
- Brennan, Sheilah O'Flynn. 1981. Is Aristotle's prime mover a pure form? *Apeiron* 15, no. 2: 80-95.
- Burnyeat, M. F. 1992. Is an Aristotelian philosophy of mind still credible? A draft. In Nussbaum and Rorty (1992, 15-26).
- . 2001. Aquinas on 'spiritual change' in perception. In Perler (2001, 129-53).
- . 2002. *DE ANIMA* II 5. *Phronesis* 47: 28-90.
- . 2008. *Aristotle's divine intellect*. The Aquinas Lecture in Philosophy. Milwaukee,

-
- Wisconsin: Marquette University Press.
- Caston, Victor. 1999. Aristotle's two intellects: A modest proposal. *Phronesis* 44, no. 3: 199-227.
- . 2005. The spirit and the letter: Aristotle on perception. In Salles (2005, 245-320).
- . 2006. Aristotle's psychology. In *A companion to ancient philosophy*, ed. Mary Louise Gill and Pierre Pellegrin. Blackwell Companions to Philosophy, 316-46. Malden, Massachusetts: Blackwell.
- . 2009. Commentary on Charles. *Proceedings of the Boston Area Colloquium in Ancient Philosophy XXIV*: 30-49.
- Charles, David. 2004. Simple genesis and prime matter. In *Aristotle's On generation and corruption I*, ed. F. A. J. De Haas and Jaap Mansfeld, 15th Symposium Aristotelicum, 151-69. Oxford: Oxford University Press.
- . 2009. Aristotle's psychological theory. *Proceedings of the Boston Area Colloquium in Ancient Philosophy XXIV*: 1-29.
- . 2010. *Metaphysics* Θ .7 and 8: Some issues concerning actuality and potentiality. In *Being, Nature, and Life in Aristotle: Essays in Honor of Allan Gotthelf*, ed. James G. Lennox and Robert Bolton, 168-97. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 2012. Teleological causation. In Shields (2012, 227-66).
- Code, Alan. 1976. The persistence of Aristotelian matter. *Philosophical Studies* 29, no. 6: 357-67.
- Code, Alan and Julius Moravcsik. 1992. Explaining various forms of living. In Nussbaum and Rorty (1992, 129-45).
- Cohen, S. Marc. 1992. Hylomorphism and functionalism. In Nussbaum and Rorty (1992, 57-73).
- . 2012. Alteration and persistence: Form and matter in the *Physics* and *De generatione et corruptione*. In Shields (2012, 205-26).
- Cohoe, Caleb Murray. 2014. *Nous* in Aristotle's *De Anima*. *Philosophy Compass* 9, no. 9: 594-604.
- Corkum, Phil. 2008. Aristotle on ontological dependence. *Phronesis* 53, no. 1: 65-92.
- . 2013. Critical notice for Michail Peramatzis's *Priority in Aristotle's Metaphysics*. *Canadian Journal of Philosophy* 43, no. 1: 136-56.
- Descartes, René. 1641. *Meditationes de prima philosophia*. In Vol. 7 of *Œuvres de Descartes*, 11 vols., ed. Charles Adam and Paul Tannery. Paris: Vrin, 1964-1974. [R. デカルト 『デカルト 『省察』 訳解』 (所雄章 訳) 岩波書店、2004 年]
- . 1642. Descartes à Regius, Endegeest, janvier 1642. In Vol. 3 of *Œuvres de Descartes*, 11 vols., ed. Charles Adam and Paul Tannery, 491-520. Paris: Vrin, 1964-1974. [R. デ

- カルト「デカルトからレギウスへ エンデヘスト 1642 年 1 月末」『デカルト全書簡集』
第 5 巻 (持田辰郎 + 山田弘明 + 古田知章 + 吉田健太郎 + C. フォヴェルグ 訳) 知泉書
簡、2013 年、100-119 頁)
- Detel, Wolfgang. 1997. Why all animals have a stomach. Demonstration and axiomatization
in Aristotle's *Parts of Animals*. In Kullmann and Föllinger (1997, 63-84).
- Ducharme, Alain. 2014. Aristotle's mark of sentience. *Apeiron* 47, no. 3: 293-309.
- Everson, Stephen. 1997. *Aristotle on perception*. Oxford: Oxford University Press.
- Ferejohn, Michael T. 2013. *Formal causes: Definition, explanation, and primacy in Socratic
and Aristotelian thought*. Oxford: Oxford University Press.
- Fine, Gail. 1984. Separation. *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 2: 31-87.
- Fine, Kit. 1992. Aristotle on matter. *Mind, n. s.* 101, no. 401: 35-57.
- Frede, Michael. 1980. The original notion of cause. In *Doubt and dogmatism: Studies in
Hellenistic epistemology*, ed. Malcolm Schofield, Myles Burnyeat and Jonathan Barnes.
217-49. Oxford: Clarendon Press.
- Freeland, Cynthia. 1991. Accidental causes and real explanations. In *Aristotle's Physics: A
collection of essays*, ed. Lindsay Judson, 49-72. Oxford: Clarendon Press.
- Frey, Christopher. 2007. Organic unity and the matter of man. *Oxford Studies in Ancient Phi-
losophy* 32: 167-204.
- Gill, M. L. 2005. Aristotle's *Metaphysics* reconsidered. *Journal of the History of Philosophy*
43, no. 3: 223-41.
- Gotthelf, Allan. 1976. Aristotle's Conception of Final Causality. *The Review of Metaphysics*
30, no. 2: 226-54. Reprinted with additional notes and a postscript in Gotthelf and
Lennox (1987, 204-42).
- . 1987. First principles in Aristotle's *Parts of Animals*. In Gotthelf and Lennox (1987,
167-98). Reprinted in his *Teleology, first principles, and scientific method in Aristotle's
biology*, Oxford Aristotle Studies, 153-85. Oxford: Oxford University Press, 2012.
- Gotthelf, Allan and James G. Lennox, eds. 1987. *Philosophical issues in Aristotle's biology*.
Cambridge: Cambridge University Press.
- Grasso, Roberto. 2013. De anima. *Philosophical Inquiry* 37, no. 1/2: 23-44.
- Heinaman, Robert. 1990. Aristotle and the mind-body problem. *Phronesis* 35, no. 1: 83-102.
- . 1994. Is Aristotle's definition of change circular? *Apeiron* 27, no. 1: 25-37.
- . 2007. Actuality, potentiality and *De Anima* II.5. *Phronesis* 52: 139-87.
- Hocutt, Max. 1974. Aristotle's four because. *Philosophy* 49, no. 190: 385-99.
- Johansen, T. K. 2012. *The powers of Aristotle's soul*. Oxford Aristotle Studies. Oxford: Oxford
University Press.
- Jones, Barrington. 1974. Aristotle's introduction of matter. *The Philosophical Review* 83, no.

-
- 4: 474-500.
- Judson, Lindsay. 2000. Formlessness and the priority of form: *Metaphysics*: Z 7-9 and Λ 3. In *Aristotle's "Metaphysics" Lambda*, ed. Michael Frede and David Charles, Symposium Aristotelicum, 111-35. Oxford: Clarendon Press.
- Kahn, C. H. 1992. Aristotle on thinking. In Nussbaum and Rorty (1992, 359-79).
- Keeling, Evan. 2012. Unity in Aristotle's *Metaphysics* H 6. *Apeiron* 45, no. 3: 238-61.
- Kelsey, Sean. 2006. Aristotle *Physics* I 8. *Phronesis* 51, no. 4: 330-61.
- . 2008. The place of I 7 in the argument of *Physics* I. *Phronesis* 53, no. 2: 180-208.
- . 2010. Hylomorphism in Aristotle's *Physics*. *Ancient Philosophy* 30, no. 1: 107-24.
- Kosman, L. A. 1969. Aristotle's definition of motion. *Phronesis* 14, no. 1: 40-62.
- Kullmann, Wolfgang and Sabine Föllinger, eds. 1997. *Aristotelische Biologie: Intentionen, Methoden, Ergebnisse*, Philosophie der Antike. Stuttgart: Franz Steiner.
- Lennox, J. G. 2008. "As if we were investigating snubness": Aristotle on the prospects for a single science of nature. *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 35: 149-86.
- Leunissen, Mariska. 2010. *Explanation and teleology in Aristotle's science of nature*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lewis, F. A. 1994. Aristotle on the relation between a thing and its matter. In *Unity, identity, and explanation in Aristotle's Metaphysics*, ed. Theodore Scaltsas, David Charles and Mary Louise Gill, 247-77. Oxford: Oxford University Press.
- . 2008. What's the matter with prime matter? *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 34: 123-46.
- . 2009. Form and matter. In *A companion to Aristotle*, ed. Georgios Anagnostopoulos, 162-85. Blackwell Companions to Philosophy. Malden, Massachusetts: Wiley-Blackwell.
- Liddell, Henry George, Robert Scott and Henry Stuart Jones. 1996. *A Greek-English lexicon*. 9th with a Revised Supplement. Oxford: Clarendon Press.
- Loux, M. J. 1993. Aristotle and Parmenides: An interpretation of *Physics* A 8. *Proceedings of the Boston Area Colloquium in Ancient Philosophy* 8: 281-319.
- . 2012. Substances, coincidentals, and Aristotle's constituent ontology. In Shields (2012, 372-99).
- Lowe, E. J. 1998. Form without matter. *Ratio* 11, no. 3: 214-34.
- . 2012. A neo-Aristotelian substance ontology: Neither relational nor constituent. In *Contemporary Aristotelian Metaphysics*, ed. T. E. Tahko, 229-48. Cambridge: Cambridge University Press.
- Magee, J. M. 2000. Sense organs and the activity of sensation in Aristotle. *Phronesis* 45, no. 4: 306-30.

- Makin, Stephen. 2012. *Energeia* and *dunamis*. In Shields (2012, 400-21).
- Manning, Gideon. 2013. The history of “Hylomorphism”. *Journal of the History of Ideas* 74, no. 2: 173-87.
- Marmodoro, Anna. 2011. Aristotle on complex perceptual content: The metaphysics of the common sense. *Philosophical Inquiry* 34, no. 1/2: 15-65.
- Matson, W. I. 1966. Why isn't the mind-body problem ancient?. In *Mind, matter, and method: Essays in philosophy and science in honor of Herbert Feigl*, ed. Paul K. Feyerabend and Grover Maxwell, 92-102. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- McLaughlin, Brian, Ansgar Beckermann and Sven Walter, eds. 2009. *The Oxford handbook of philosophy of mind*, Oxford Handbooks in Philosophy. Oxford: Oxford University Press.
- Miller, Fred D., Jr. 2012. Aristotle on the separability of mind. In Shields (2012, 343-71).
- Mirus, C. V. 2001. Homonymy and the matter of a living body. *Ancient Philosophy* 21: 357-73.
- Molière. 2010. Le malade imaginaire. In Vol. 2 of *Œuvres complètes*. Ed. Georges Forestier and Claude Bourqui. Bibliothèque de la Pléiade. Paris: Gallimard.
- Montero, Barbara. 2009. What is the physical? In McLaughlin et al. (2009, 173-88).
- Moravcsik, Julius. 1974. Aristotle on adequate explanations. *Synthese* 28, no. 1: 3-17.
- Nelson, J. O. 1990. Was Aristotle a functionalist? *The Review of Metaphysics* 43: 791-802.
- Nummenmaa, Lauri et al. 2014. Bodily maps of emotions. *Proceedings of the National Academy of Sciences* 111, no. 2: 646-51.
- Nussbaum, M. C. and A. O. Rorty, eds. 1992. *Essays on Aristotle's "De anima."* Oxford: Clarendon Press.
- Nussbaum, M. C. and Hilary Putnam. 1992. Changing Aristotle's mind. In Nussbaum and Rorty (1992, 27-56).
- O'Connor, Scott. 2015. The subjects of natural generations in Aristotle's *Physics* I.7. *Apeiron* 48, no. 1: 45-75.
- Owen, G. E. L. 1961. *Τιθέναι τὰ φαινόμενα*. In *Aristote et les problèmes de method*, ed. Suzanne Mansion, 83-103. Louvain: Éditions de l'Institut supérieur de philosophie. Reprinted in Owen (1986, 239-51).
- . 1966. The Platonism of Aristotle. *Proceedings of the British Academy* 51: 125-50. Reprinted in Owen (1986, 200-20).
- . 1986. *Logic, science, and dialectic: Collected papers in Greek philosophy*. Ed. M. C. Nussbaum. Ithaca, New York: Cornell University Press.
- Pakaluk, Michael. 2001. Commentary on Sisko. *Proceedings of the Boston Area Colloquium in Ancient Philosophy* XVI: 199-206.
- Panagiotou, Spiro. 1975. Aristotle's *De anima*, 424 b3. *Symbolae Osloenses* 50, no. 1: 47-53.
- Peramatzis, Michail. 2011. *Priority in Aristotle's metaphysics*. Oxford Aristotle Studies. Ox-

-
- ford: Oxford University Press.
- Perler, Dominik, ed. 2001. *Ancient and medieval theories of intentionality*. Studien und Texte zur Geistesgeschichte des Mittelalters. Leiden: E. J. Brill.
- Putnam, Hilary. 1999. *The threefold cord: Mind, body, and world*. The John Dewey Essays in Philosophy. New York: Columbia University Press, 1999. [H. パトナム 『心・身体・世界：三つ撚りの綱/自然な実在論』(野本和幸 監訳、関口浩喜 + 渡辺大地 + 入江さつき + 岩沢宏和 訳) 叢書・ユニベルシタス、法政大学出版局、2005 年]
- . 2004. *Ethics without ontology*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press. [H. パトナム 『存在論抜き倫理』(関口浩喜 + 渡辺大地 + 岩沢宏和 + 入江さつき 訳) 叢書・ユニベルシタス、法政大学出版局、2007 年]
- Robinson, Howard. 2014. Modern hylomorphism and the reality and causal power of structure: A skeptical investigation. *Res philosophica* 91, no. 2: 203-14.
- Rorty, Richard. 1979. *Philosophy and the mirror of nature*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press. [R. ローティ 『哲学と自然の鏡』(野家啓一 監訳、伊藤春樹 + 須藤訓任 + 野家伸也 + 柴田正良 訳) 産業図書、1993 年]
- Ryan, E. E. 1973. Pure form in Aristotle. *Phronesis* 18, no. 3: 209-24.
- Salles, Ricardo, ed. 2005. *Metaphysics, soul, and ethics in ancient thought: Themes from the work of Richard Sorabji*. Oxford: Oxford University Press.
- Schwitzgebel, Eric. 2014. The crazyist metaphysics of mind. *Australasian Journal of Philosophy* 92, no. 4: 665-82.
- Sedley, David. 1991. Is Aristotle's teleology anthropocentric? *Phronesis* 36, no. 2: 179-96.
- Shields, Christopher. 1990. The first functionalist. In *Historical foundations of cognitive science*, ed. J.-C. Smith, Philosophical Studies Series 46, 19-33. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- . 1993a. The homonymy of the body in Aristotle. *Archiv für Geschichte der Philosophie* 75, no. 1: 1-30. Reprinted and revised in his *Order in multiplicity: Homonymy in the philosophy of Aristotle*. Oxford Aristotle Studies. Oxford: Oxford University Press, 1999. (page references are to the reprint edition).
- . 1993b. Some recent approaches to Aristotle's *De anima*. In *De anima: Books II and III (with passages from book I)*, by D. W. Hamlyn. Clarendon Aristotle Series. 157-81. Oxford: Clarendon Press.
- , ed. 2012. *The Oxford handbook of Aristotle*. Oxford Handbooks in Philosophy. Oxford: Oxford University Press.
- . 2014. *Aristotle*. Routledge Philosophers. 2nd ed. New York: Routledge.
- Silverman, Allan. 1989. Color and color-perception in Aristotle's *De anima*. *Ancient Philosophy* 9: 271-92.

- Sisko, John. 2001. Aristotle's ΝΟΥΣ and the modern mind. *Proceedings of the Boston Area Colloquium in Ancient Philosophy XVI*: 177-98.
- Smith, J. A. 1921. Τόδε τι in Aristotle. *The Classical Review* 35: 19.
- Sokolowski, Robert. 1970. Matter, elements and substance in Aristotle. *Journal of the History of Philosophy* 8, no. 3: 263-88.
- Sorabji, Richard. 1992. Intentionality and physiological processes: Aristotle's theory of sense-perception. In Nussbaum and Rorty (1992, 195-225).
- . 2001. Aristotle on sensory processes and intentionality: A reply to Myles Burnyeat. In Perler (2001, 49-61).
- Sprague, R. K. 1968. The four causes: Aristotle's exposition and ours. *The Monist* 52: 298-300.
- Stein, Nathanael. 2009. After literalism and spiritualism: The plasticity of Aristotelian perception. In *Ancient Perspectives on Aristotle's De anima*, ed. Gerd van Riel and Pierre Destrée, *Ancient and Medieval Philosophy*, 17-33. Leuven: Leuven University Press.
- . 2011a. Aristotle's causal pluralism. *Archiv für Geschichte der Philosophie* 93, no. 2: 121-47.
- . 2011b. Causation and explanation in Aristotle. *Philosophy Compass* 6, no. 10: 699-707.
- Strawson, P. F. 1985. Causation and explanation. In *Essays on Davidson: Actions and events*, ed. Bruce Vermazen and Merrill B. Hintikka, 115-36. Oxford: Oxford University Press. Reprinted in his *Analysis and metaphysics: An introduction to philosophy*, 109-31. Oxford: Oxford University Press, 1992.
- Studtmann, Paul. 2008. On the several senses of 'form' in Aristotle. *Apeiron* 41: 1-26.
- Suppes, Patrick. 1974. Aristotle's concept of matter and its relation to modern concepts of matter. *Synthese* 28, no. 1: 27-50.
- Swoyer, Chris. 1999. How ontology might be possible: Explanation and inference in metaphysics. *Midwest Studies in Philosophy* 23: 100-31.
- Tierney, Richard. 2001. On the senses of 'Symbebēkos' in Aristotle. *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 21: 61-82.
- Todd, R. B. 1976. The four causes: Aristotle's exposition and the ancients. *Journal of the History of Ideas* 37, no. 2: 319-22.
- Turabian, Kate L. 2013. *A manual for writers of research papers, theses, and dissertations: Chicago style for students and researchers*. Revised by Wayne C. Booth, Gregory G. Colomb, Joseph M. Williams, and the University of Chicago Press Editorial Staff. Chicago Guides to Writing, Editing, and Publishing. 8th ed. Chicago, Illinois: The University of Chicago Press.

-
- Van der Eijk, Philip J. 1997. The matter of mind: Aristotle on the biology of 'psychic' processes and the bodily aspects of thinking. In Kullmann and Föllinger (1997, 231-58).
- . 2000. Aristotle's psycho-physiological account of the soul-body relationship. In *Psyche and soma: Physicians and metaphysicians on the mind-body problem from antiquity to Enlightenment*, ed. John P. Wright and Paul Potter, 57-77. Oxford: Clarendon Press.
- Van Gulick, Robert. 2009. Functionalism. In McLaughlin, Beckermann and Walter (2009, 128-51).
- Vlastos, Gregory. 1969. Reasons and causes in the *Phaedo*. *The Philosophical Review* 78, no. 3: 291-325. Reprinted in his *Platonic studies*, 2nd ed. 76-110. Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1981.
- Ward, J. K. 1988. Perception and Λόγος in *De anima* ii 12. *Ancient Philosophy* 8: 217-33.
- Waterlow, Sarah. 1982. *Nature, change, and agency in Aristotle's "Physics": A philosophical study*. Oxford: Clarendon Press.
- Wedin, M. V. 1988. *Mind and imagination in Aristotle*. New Haven: Yale University Press.
- Whiting, Jennifer. 1992. Living bodies. In Nussbaum and Rorty (1992, 75-91).
- Wieland, Wolfgang. 1975. The problem of teleology. Trans. Malcolm Schofield. In *Science*. Vol. 1 of *Articles on Aristotle*, ed. Jonathan Barnes, Malcolm Schofield and Richard Sorabji, 141-60. London: Duckworth.
- Wilkes, K. V. 1992. *Psuchē* versus the mind. In Nussbaum and Rorty (1992, 109-27).
- Williams, Bernard. 1986. Hylomorphism. *Oxford Studies in Ancient Philosophy* 4: 189-99. Reprinted in his *The sense of the past: Essays in the history of philosophy*, ed. Myles Burnyeat, 218-27. Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 2006.
- 伊藤克巳 (1990) 「アリストテレスと「第一の質料」」『西洋古典研究会論集』第 1 号、3-14 頁。
- . (2006) 「『形而上学』Z 卷における「第一の実有」としての「エイドス」の解釈について」『西洋古典研究会論集』第 15 号、33-77 頁。
- 井上忠 (1980) 『哲学の現場：アリストテレスよ語れ』勁草書房。
- 今井知正 (2001) 「自然学第一巻」『哲學雑誌』第 116 卷、第 788 号、23-40 頁。
- . (2004) 「自然主義と質料形相論」「他者」の哲学の総合的研究』平成 14 年度～平成 15 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C)(2)) 研究成果報告書 (研究代表者：今井知正) 85-98 頁。
- 金子善彦 (2007) 「アリストテレスにおける起動因としての魂：『動物運動論』にみる形相原因論の展開」『西洋古典学研究』Vol. LV、88-100 頁。
- 河谷淳 (1998) 「原因と説明との間：アリストテレスにおけるアイディア論研究のための序説」『駒沢大学文化』第 18 号、98-83 (1-16) 頁。
- 下條信輔 (1996) 『サブプリミナル・マインド：潜在的人間観のゆくえ』中公新書、中央公論新社。

- . (1999)『意識とはなんだろうか：脳の来歴、知覚の錯誤』講談社現代新書、講談社.
- 高橋久一郎 (1991)「個体と形相」『千葉大学人文研究』第20号、1-25頁.
- 茶谷直人(2012)「アリストテレス心身論における心物相即説(psycho-physical interpretation)をめぐって」『神戸大学文学部紀要』第39号、1-17頁.
- 土橋茂樹 (1993)「ロゴスとヌースをめぐる一試論：アリストテレス『靈魂論』に即して」『倫理學年報』第42集、3-20頁.
- 中畑正志 (2015)「移植、接ぎ木、異種交配：「実体」の迷路へ」『越境する哲学：体系と方法を求めて』(村上勝三+東洋大学国際哲学研究センター編)春風社、221-66頁.
- 納富信留 (2015)「アイデアの超越：魂の変容と現実の開示」『思想』No. 1097: 41-9頁.
- 浜岡剛 (1992)「感覚とロゴス：アリストテレス『デ・アニマ』II. 12, 424a17-28」『古代哲学研究：METHODOS』第24号、49-54頁.
- 三浦洋 (1998)「生命の定義と質料形相論：アリストテレス『デ・アニマ』B巻第一、二章の問題」『哲學』第49号、169-79頁.
- ムンキョソナミ
文景楠 (2011)「アリストテレスと心の統一理論：心の哲学からのアプローチに対する批判と展望」『哲学・科学史論叢』第13号、169-96頁.
- . (2012)「質料を伴わず形相を受容することについて：『デ・アニマ』第2巻12章におけるアリストテレスの感覚論」『西洋古典学研究』Vol. LX、76-86頁.
- 渡辺邦夫 (2012)『アリストテレス哲学における人間理解の研究』東海大学出版会.

訳語対応表

・日本語—ギリシア語

ある・これなるもの	τόδε (τι)
可能態 (能力、可能的に)	δύναμις
感覚器官	αἰσθητήριον
感覚対象	αἰσθητόν
感覚内容	αἴσθημα
器官的	ὀργανικόν
型式	μορφή
形相	εἶδος
原理	ἀρχή
差別相	διαφορά
作用を受ける (なされる、被る)	πάσχειν
思惟内容	νόημα
獅子鼻	σιμόν
自然	φύσις
自体的	καθ' αὐτά
質料	ὑλη
実体	οὐσία
受容する	δέχεσθαι
説明規定、比	λόγος
それ製の、それ的な	ἐκεῖνινον
適した	οἰκείον
転化	μεταβολή

付帶的	<i>κατὰ συμβεβηκός</i>
無規定	<i>ἀόριστον</i>
基に措定されたもの	<i>ὑποκείμενον</i>
欲求	<i>ὄρεξις</i>

・ギリシア語—日本語

<i>αἴσθημα</i>	感覚内容
<i>αἰσθητήριον</i>	感覚器官
<i>αἰσθητόν</i>	感覚対象
<i>ἀόριστον</i>	無規定
<i>ἀρχή</i>	原理
<i>δέχεσθαι</i>	受容する
<i>διαφορά</i>	差別相
<i>δύναμις</i>	可能態（能力、可能的に）
<i>εἶδος</i>	形相
<i>ἐκείνινον</i>	それ製の、それ的な
<i>καθ' αὐτά</i>	自体的
<i>κατὰ συμβεβηκός</i>	付帶的
<i>λόγος</i>	説明規定、比
<i>μεταβολή</i>	転化
<i>μορφή</i>	型式
<i>νόημα</i>	思惟内容
<i>οἰκείον</i>	適した
<i>ὀργανικόν</i>	器官的
<i>ὄρεξις</i>	欲求
<i>οὐσία</i>	実体

πάσχειν	作用を受ける（なされる、被る）
σιμόν	獅子鼻
τόδε (τι)	ある・これなるもの
ὑλη	質料
ὑποκείμενον	基に措定されたもの
φύσις	自然

一般索引

- Ackrill 26, 27, 83
Anagnostopoulos 40, 48, 49, 55, 58, 60, 61
Andersen 155
Annas 164
Anscombe 190, 219
- Balme 76, 86, 91, 92, 107, 117–120, 122, 124, 126, 128
Barker 144
Barnes 32, 47, 57, 61
Barrett 108
Bechler 69
Beere 44, 79, 82
Bolton 186
Bonitz 107, 130
Bostock 91, 93–95, 164, 191
Bowin 139
Bradshaw 138
Brennan 193
Burnyeat 5, 25–29, 103–105, 137–142, 155, 160
- Caston .. 14, 24, 28, 109, 111–113, 115, 134, 138, 139,
143, 144, 184
Charles .. 5, 9, 14, 70, 82, 92, 109–113, 115, 134, 165,
184
Code 5, 23, 46
Cohen 28, 70
Cohoe 203
Corkum 112, 192
- Descartes 136, 191, 213
Detel 125
Ducharme 159
- Empedocles 120, 121
Everson 144
- Ferejohn 60, 168–173, 175, 185, 189
Fine 192
Fine, G. 191
Fine, K. 94
Frede 44, 47
Freeland 47
Frey 87
- Geach 190
Gill 216
Gott helf 165
Grasso 143, 203
- Hamlyn 5, 18, 36, 144
- Heinaman 25, 62, 139
Hicks 108, 130, 144, 150, 152, 154, 203
Hocutt 47, 57
Hussey 59
- Johansen 69
Jones 46
Judson 186
- Kahn 28
Keeling 95
Kelsey 40, 48
Kosman 58
Kullmann 117–120, 122, 124, 126, 128
- Lennox 91, 180, 183
Leunissen 47, 118, 171, 172, 174
Lewis 8, 70, 83, 89
Liddell 157
Loux 40, 48, 55
Lowe 83, 102, 193
- Magee 138
Makin 43, 44, 58
Manning 3
Marmodoro 144
Matson 34
Miller 192, 203
Mirus 101
Molière 69
Montero 1
Moravcsik 5, 23, 47, 57, 194
- Nelson 24
Nummenmaa 108
Nussbaum 19, 25
- O'Connor 46
Owen 130, 193
- Pakaluk 34
Panagiotou 155
Patzig 44
Peck 117
Philoponus 79, 155
Plato 34, 164, 179, 191, 193, 202, 211
Polansky .. 130, 132, 138, 139, 143, 144, 149, 155, 157
Putnam 4, 25, 219
- Robinson 213

Rorty	18, 219	金子	166
Ross	40, 44, 62, 94, 130, 154	河谷	10
Ryan	193	<small>アイステーション</small> 感覚	25, 130, 131, 140, 142–146, 149–151, 156, 159, 203
Schwitzgebel	216	感覚内容	34
Sedley	9	関係的なもの	12, 41–43, 75, 98, 101, 113
Shields	19–25, 83, 85, 87, 88, 91, 102	機能主義	4, 5, 12, 18–29, 34–36, 38, 107, 209
Silverman	138	キャストン → Caston	
Simplicius	59, 70, 79	クルマン → Kullmann	
Sisko	28, 34	型式	94, 187
Smith	44	形相	
Sokolowski	8	実体—	191, 195
Sorabji	138, 139, 141, 142, 154, 160	付帯—	195
Sprague	57	ケルシー → Kelsey	
Stein	47, 144, 164, 217, 219	現実態	
Strawson	219	第一—	31–35, 83
Studtmann	7, 191	第二—	32–35, 83
Suppes	8	原理	72, 122–126, 129, 131, 133, 146, 149, 152, 153, 155, 159
Swoyer	219	差別相	75, 80, 91, 92, 95–99, 103, 106
Themistius	59	思惟内容	34
Tierney	130, 197	シールズ → Shields	
Todd	57	獅子鼻	112, 180, 181
Tricot	203	シスコ → Sisko	
van der Eijk	207	実体 3, 28, 30, 31, 39, 40, 46, 79, 83, 97, 101, 129, 130, 132, 182, 190–192, 196, 206, 207, 214, 216–219	
Van Gulick	5	質料	
Vlastos	164	機能的—	80, 81, 87–90, 92, 94–96, 100–103, 105, 106, 115, 184
Ward	138	形容詞的用法	76, 79, 81, 89, 90, 95, 101
Waterlow	46	第一—	3, 8–10, 44, 70, 93
Wedin	28, 34	非機能的—	80, 81, 87–92, 94, 95, 98–106, 115, 184
Whiting	90, 101	下條	33
Wieland	165	受容	27, 137–162, 163, 186–188, 203, 210
Wilkes	28	スタイン → Stein	
Williams	30, 105	<small>アイティアー</small> 説明 → アイティアー	
アイティアー	9, 11, 13, 47, 64, 66, 72, 73, 78, 88, 93, 129, 164–167, 171–173, 175, 176, 184, 186, 194, 195, 211, 217	説明規定	16, 58, 59, 83, 107, 130, 165–169, 184, 185, 187–193, 195, 198–200, 204, 205, 207, 211
アクリル → Ackrill		<small>アイティオン</small> 説明するもの	47, 63, 146, 198
<small>パンタシア</small> 現れ → パンタシア		<small>パンタシア</small> 想像 → パンタシア	
ある・これなるもの	44, 50, 79, 214	ソーマ	3, 4, 6, 7, 21, 24–38, 82, 83, 85, 87, 89, 91, 103, 104, 107, 108, 203, 204, 206, 207, 209, 212–216
異質部分	97, 127		
伊藤	93, 94		
井上	33		
今井	73, 105		
遠近	14, 74, 80, 81, 93–96, 98, 99, 106, 115, 195–198, 218, 219		
エンペドクレス → Empedocles			

一般索引

- ソラブジ → Sorabji
- 高橋 216
- ヌース
知性 6, 7, 9, 15, 16, 26–28, 34, 190, 192, 193, 198–204,
206, 207, 215, 216
能動— 4, 8, 28, 203, 211
- チャールズ → Charles
- 茶谷 109
- 中間的状态 146, 152, 159
- 土橋 28
- デカルト 28, 110
転化 63, 82, 90, 164, 204
- 同質部分 97, 101, 127
- 中畑 40, 42, 44, 50, 216
- ヌスバウム → Nussbaum
- 納富 191
- バーニェト → Burnyeat
- バーム → Balme
- パカラック → Pakaluk
- エルゴン
働き 19, 20, 97, 130, 131, 176, 183
- パトス 4, 14, 21–24, 107, 110, 112, 115, 116, 130, 131,
133, 134
- パトナム → Putnam
- 浜岡 144
- パンタシア 31, 129, 130, 132
- ビーア → Beere
- ピロポノス → Philoponus
- フェアジョン → Ferejohn
- プシューケー 3, 4, 6, 7, 14, 21–27, 29–39, 83, 103,
107, 108, 110, 112, 115, 116, 129–134, 140,
146, 147, 152, 193, 198, 199, 201–203, 209,
212–216
- プラトン → Plato
- ペック → Peck
- ポランスキー → Polansky
- 三浦 (要) 20
三浦 (洋) 84
- 無規定 . 12, 13, 38, 40, 41, 43, 44, 75–77, 92, 135, 148,
168, 209
- ムン
文 18, 137
- 基に指定されたもの . 12, 39, 40, 44, 45, 48, 49, 72, 73,
79, 95
- モラフチーク → Moravcsik
- ルイス → Lewis
- レウニッセン → Leunissen
- レノックス → Lennox
- ロウ → Lowe
- 渡辺 46

引用索引

- Cat.*
- 5, 4a10-21 187
- 7 75, 113
- 7, 6a36-7 42
- 7, 8a12-b24 101
- 7, 8a23 43
- 7, 8a35-7 42
- 10, 12a29-31 187
- DI*
- 13, 23a7-20 103
- APo.*
- I.4 169
- I.5 169
- I.22, 83a32-4 191
- II.2 60
- II.8, 93a29-b14 171
- II.11 171
- II.11, 94b23-6 164
- II.14 117
- II.16 171
- II.16, 98a35-b4 169
- II.16, 98b32-8 170
- II.17 61
- II.17, 99a1-5 75
- Top.*
- I.1, 100b26-9 130
- I.5, 102a7-17 60
- SE*
- 4, 165b25-6 130
- Phys.*
- I 39, 55
- I.1 73
- I.1, 184a14-5 47
- I.2, 184b25-5a1 73
- I.2, 185a3 72
- I.2, 186a3 55
- I.5, 188a36-b1 70
- I.7 7, 40, 44, 48, 52, 55, 73, 87
- I.7, 190a24-6 45
- I.7, 190b1-10 90
- I.7, 190b24-5 39
- I.7, 190b25-6 79
- I.7, 191a7-12 79
- I.8 40, 54-58, 60, 64-68, 73
- I.8, 191a23-4 48
- I.8, 191a32 73
- I.8, 191a35-6 50
- I.8, 191b1-2 50
- I.8, 191b4-6 50
- I.8, 191b5 70
- I.8, 191b6-8 67
- I.8, 191b13-5 52
- I.8, 191b23-4 50
- I.8, 191b25-6 57
- I.8, 191b26-7 64
- I.8, 191b27-9 55, 64
- I.8, 191b30-3 48
- I.9, 192a27-8 55
- I.9, 192a31-2 61
- II.2 107, 183, 189, 211
- II.2, 193b31-5 179
- II.2, 193b35-4a1 179
- II.2, 194a3-6 180
- II.2, 194a3-7 112
- II.2, 194a12-8 181
- II.2, 194a14 202
- II.2, 194a21-7 41
- II.2, 194a22-3 184
- II.2, 194a36-b19 76
- II.2, 194b8-9 42, 113
- II.2, 194b9-10 177
- II.2, 194b9-13 176, 183
- II.3 40, 55, 60, 63, 64, 66, 67, 73, 211
- II.3, 194b20-3 164
- II.3, 194b23-6 79
- II.3, 194b26-9 165, 195
- II.3, 195a3-8 63
- II.3, 195a3-b6 197
- II.3, 195a16 200
- II.3, 195a26-b6 56
- II.3, 195a26-b12 195
- II.3, 195a29-32 93, 195
- II.3, 195a32-5 56
- II.3, 195a32-b1 79
- II.3, 195b2-3 77
- II.3, 195b3-6 103
- II.3, 195b10-21 88
- II.3, 195b15 68
- II.3, 195b23-5 198
- II.3, 195b25-7 48
- II.5, 196b27-9 75
- II.7, 198a16-8 176
- II.7, 198a22 176
- II.8, 198b34-9a5 124
- III.1 55, 61, 64
- III.1, 201a10-5 59

引用索引

- III.1, 201a27-34 58, 60
 III.1, 201b10-2 61
 V.1 63
 VIII.1, 251a9-10 59
- DC*
- I.9, 278a24 202
 II.3, 286a7-12 33
 II.13, 294a7 130
- GC*
- I.4, 320a2-3 187
 I.5, 320b11-2 43
 I.5, 322a28-9 202
 I.10, 327b22-6 96
 I.10, 328b12 202
 II.9, 335b17-24 191
- Meteor.*
- IV 20
 IV.12, 390a10-3 19, 23, 184
 IV.12, 390a10-5 85
- DA*
- I.1 14, 107, 204
 I.1, 402a1-4 4
 I.1, 402a8 131
 I.1, 402a23-b3 214
 I.1, 402b16-3a2 129
 I.1, 402b26-3a2 131
 I.1, 403a3-10 131
 I.1, 403a16-8 131
 I.1, 403a26-7 4, 21, 23, 107
 I.1, 403a30-b1 107, 181
 I.2, 403b24-5 131
 I.4, 408a13-28 144
 I.4, 408b21-2 20, 23
 I.4, 409a21-5 131
 I.5, 409b2-4 131
 I.5, 409b13-8 131
 I.5, 410a1-8 144
 I.5, 411b8-9 33
 II.1 7, 92, 214
 II.1, 412a11-2 4
 II.1, 412a19-21 31
 II.1, 412a20-1 89
 II.1, 412a27-8 31
 II.1, 412b5-6 32
 II.1, 412b6-8 4, 108
 II.1, 412b6-9 84
 II.1, 412b18-22 83
 II.1, 412b25-6 89
 II.1, 413a2-3 83
 II.2 87, 214
 II.2, 414a8-10 187
- II.2, 413a21-2 33, 214
 II.3, 414b16-9 199
 II.4, 415b8-10 9
 II.5 139, 187
 II.6 144, 150
 II.7, 418b4-7 151
 II.7, 418b26-9 151
 II.8, 420a3-7 129
 II.8, 420b14-6 143
 II.8, 420b27-9 33
 II.11, 424a2-6 159
 II.12 15, 138, 142, 144, 160
 II.12, 424a17-21 142
 II.12, 424a18-9 202
 II.12, 424a21-4 143, 144
 II.12, 424a24-8 145
 II.12, 424a28 156
 II.12, 424a28-32 60, 146
 II.12, 424a32-b3 146
 II.12, 424b3-12 147
 II.12, 424b10-2 114, 150
 II.12, 424b12-6 147
 II.12, 424b16-8 148
 II.12, 424b17 149
 II.12, 424b17-8 150
 III.2, 425b23-4 150, 202
 III.2, 425b26-6a26 187
 III.2, 426a27-b7 144
 III.2, 427a8-9 150
 III.3 130
 III.4, 429a24-5 27
 III.4, 429b4-5 203
 III.4, 429b14 202
 III.4, 430a3 202
 III.4, 430a7-8 202
 III.5 4, 7, 28, 203
 III.6, 430b30 202
 III.7, 431a10-1 159
 III.8, 431b24-2a6 151
 III.8, 432a9-10 157
 III.8, 432a10 202
 III.11, 434a4-5 76
 III.12, 434a29-30 151
 III.12, 434a30 202
 III.12, 434b29-5a10 151
 III.13, 435a21-4 150
 III.13, 435a21-b3 159
 III.13, 435b7-9 150
- SS*
- 3, 439a13-6 150
 3, 439b1-10 151

3, 439b6	130	II.1	126
3, 439b25-31	144	II.1, 734a17-5a26	120
3, 440b13-23	144	IV.1, 766a10-3	143
4, 442a12-7	144	IV.10, 778a4-9	92
6, 445b4-6	150	IV.10, 778a6	76
6, 445b21-2	150		
6, 445b29-6a7	60, 150	<i>Metaph.</i>	
<i>Somn.</i>		A.6	191
1, 453b24-31	187	A.7, 988a34-b6	191
<i>Insom.</i>		A.9	191
2, 460b11-6	160	B.2, 996b6-7	9
2, 460b18	130	Γ.4, 1006a5-8	73
3	160	Δ.2	56
<i>HA</i>		Δ.2, 1013a24-6	79
I.1	117	Δ.2, 1013a35-b3	87
IX.40, 626a22-3	107	Δ.2, 1013b3-9	63
<i>PA</i>		Δ.2, 1013b28-4a15	195
I.1	14	Δ.2, 1013b30-4	93
I.1, 639b26-30	127	Δ.2, 1014a1-3	79
I.1, 639b27-30	90	Δ.2, 1014a13-25	88
I.1, 640a31-2	202	Δ.2, 1014a15-20	56
I.1, 640a33-b3	117	Δ.4, 1015a7-10	93
I.1, 640a34-5	174	Δ.6, 1016a19-24	93
I.1, 641b1-4	42	Δ.11, 1019a1-4	192
I.1, 640b17-29	70, 91	Δ.28	79
I.1, 642a9-11	69, 71, 115	Δ.30, 1025a30-4	130
I.1, 643a25	202	E.1, 1025b30-4	112
I.5, 644b24-8	207	E.1, 1025b34	202
I.5, 645b14	87	E.1, 1026a6	202
II.1	117	E.2	56
II.1, 646b2-3	62	Z.1, 1028a31-b2	192
II.1, 646b5-8	127	Z.2, 1028b8-13	4
II.2	117	Z.3	39
II.2, 647b29-31	118	Z.3, 1029a20-1	76
II.2, 647b29-8a4	97	Z.3, 1029a26-8	79
II.2, 648a13-9	97, 100, 125	Z.3, 1029a27-30	192
II.2, 648b11-7	160	Z.4, 1030a14-8	205
II.3, 650b2-3	118	Z.7, 1032a25-b30	187
III.4, 665b11-2	123, 124	Z.7, 1032b12	202
III.4, 666a22-3	123	Z.7, 1032b14	202
III.4, 666a22-4	123	Z.7, 1032b21-6	187
III.4, 666a23-4	123, 124	Z.7, 1033a5-23	45, 90
III.4, 666a24-5	124	Z.7, 1033a13-23	80
III.4, 666b17-21	98	Z.7, 1033a21	90
III.7, 670a22-9	118	Z.8	7
III.7, 670a29-31	117, 119	Z.10	181
III.7, 670b23-7	118	Z.10, 1034b24-6	200
III.9, 672a26-28	98	Z.10, 1035a7-9	79
<i>MA</i>	19	Z.10, 1035a11	200
<i>GA</i>		Z.10, 1035a28	202
I.1, 715a8-11	117	Z.10, 1035a28-30	204
		Z.10, 1035b30-1	95

Z.10, 1036a8-9	76	Λ.6, 1071b19-22	204
Z.10, 1036a9-12	207	Λ.6, 1071b21	202
Z.10, 1036a22	202	Λ.6-10	7
Z.11	44, 181	Λ.9, 1075a1-2	202
Z.11, 1036a31-4	182	M	191
Z.11, 1036a31-b7	20, 23	M.1, 1076a8-16	220
Z.11, 1037a4-5	207	M.2, 1077a36-b11	192
Z.11, 1037a27	43, 92	<i>EN</i>	
Z.12, 1038a25-6	7	I.1, 1094a4-6	20
Z.16, 1040b5-8	101	I.13, 1102a30-1	59
H.1, 1042a25-31	202	IV.5, 1125b31-6a1	107
H.1, 1042a28-32	192	X.7, 1177a12-8	199
H.1, 1042a29-31	192	<i>Pol.</i>	
H.1, 1042a32-b8	39	I.3, 1253b27-33	87
H.2, 1042b9-3a12	75, 91	<i>Poet.</i>	
H.2, 1042b25-3a11	91	20, 1456b20	200
H.2, 1042b28-31	91	20, 1456b23-5	201
H.2, 1043a4-7	91	20, 1456b34-6	200
H.2, 1043a14-6	80		
H.2, 1043a19-20	91		
H.3, 1043b2-4	23		
H.3, 1043b18-9	207		
H.4, 1044a17-25	43, 93		
H.4, 1044a25-7	75, 80		
H.4, 1044a27-9	69, 71, 115		
H.4, 1044b1-3	93		
H.5, 1044b27-9	204		
H.6	92		
H.6, 1045a33-b5	207		
H.6, 1045b17-22	84		
H.6, 1045b18-9	94		
Θ.6	61		
Θ.6, 1048a32-b4	102		
Θ.6, 1048a36-7	61		
Θ.7	44		
Θ.7, 1049a8-11	59, 82		
Θ.7, 1049a18-23	45, 89		
Θ.7, 1049a18-24	80		
Θ.7, 1049a18-25	39		
Θ.7, 1049a18-36	93, 95		
Θ.7, 1049a21	90		
Θ.7, 1049a36-b2	76		
Θ.7, 1049b1-2	44, 92		
K.6, 1063a28	76		
Λ	203		
Λ.2, 1069b7-15	39		
Λ.2, 1069b15-20	55, 64		
Λ.3, 1070a9-10	79		
Λ.3, 1070a16	202		
Λ.3, 1070a21-6	199, 202		
Λ.3, 1070a26-30	186, 191		